五味康祐

真田残党奔る

文春文庫

著者紹介

五味康祐(ごみ・こうすけ)
大正10(1921)年大阪市に生れる。早稲田第二高等学院、明治大学をいずれも中退。昭和28年「喪神」にて第28回芥川賞受賞。一世を風靡した大河長篇「柳生武芸帳」を始め、「柳生連也斎」「薄桜記」等多数の時代小説と共に、「西方の音」「天の聲」を代表作とする音楽評論も世評が高い。55年4月没。「五味康祐代表作集」全十巻がある。

五味康祐

真田残党奔る

文春文庫

真田残党奔る
五味康祐
文春文庫
335-4
580

豊臣家滅亡後、徳川の世は安泰かと見えたが、猿飛佐助、三好清海、くの一霧隠才蔵ら真田十勇士の残党が突如現れ、「太陽の使者」と名乗り蠢動し始めた。一方、幕閣の要人本多正純は宇都宮城に釣天井を仕かけ、将軍暗殺を企む。柳生宗矩、紀伊頼宣、伊達政宗らがそれぞれの思惑を秘めて織り成す謀略と非情の剣戟。解説・真鍋呉夫

文春文庫

ISBN4-16-733504-2 C0193 ¥580E 定価580円

文春文庫
五味康祐の本

柳生宗矩と十兵衛
剣法奥儀
十二人の剣豪
真田残党奔る

写真・秋山廣行
AD・須藤久美

今月の新刊

徳川の天下を護る謀略
と非情の剣に、必敗を
知りつつもなお挑んだ
十勇士残党の悲愴美!

文春文庫 ●定価580円

剣豪、忍者、幕閣の要人らが
織り成す謀略と非情の剣戟

文春文庫
335-4
580

今月の新刊

書名	著者	価格
寝台急行「銀河」殺人事件	西村京太郎	360
こちら殺人現場ですが	山村美紗	360
骨よ笑え	有明夏夫	380
真田残党奔る	五味康祐	580
旅芝居殺人事件	皆川博子	420
女の幕ノ内弁当	田辺聖子	360
ショージ君の南国たまご騒動	東海林さだお	380
不思議の国のエリコ	楠田枝里子	340
歴史のなかの愛 —万葉・戦国の女たち	田中澄江	340
がん病棟の隣人	中島みち	360
レッド・ストーム作戦発動(ライジング)上・下	T・クランシー 井坂 清訳	各680
決定版沖縄の誘惑	文藝春秋編	550

ISBN4-16-733504-2 C0193 ¥580E

真田残党奔る

文春文庫

真田残党奔る

五味康祐

文藝春秋

真田残党奔る

五味康祐

文春文庫

文春文庫

真田残党奔(はし)る

五味康祐

文藝春秋

目次

美女誕生 9
弦　月 49
御遺金 70
根来衆 103
愁　眉 135
ふしぎな男 159
盟　約 183
暗　躍 209
薫　香 247
遊行女婦(さぶるこ) 279
唐竹割り 320
道の者 340
みかん 375
無　惨 416
太陽昇る 465
天女の舞い 505
帰去来 534
解説　真鍋呉夫 551

真田残党奔る

美女誕生

一

「然ればそれがしよりたずね申すが」
家士の一人が膝をのり出し
「紀州日高郡にて温泉の涌く土地あるをご承知か？」
「存じておる。竜神村よ」
「他に、その竜神村にて著名なものは？」
「さよう、後家かの」
こともなげに老人は言い放った。一同もう呆っ気にとられ、驚くのを通りこして溜め息をつく者さえいる。
　奇怪な老人である。
白髪鬼さながらな風貌で、鉤鼻は尖り、眼光は人を射る如く、痩せ細った身に山伏ふうの白衣を着ているが、兜巾も笈も負うていない。わずかに錫杖ににた細い杖を携行するのみ。それで全国津々浦々、およそ足跡を印さぬ土地はない様子なのが、さいぜんよりの問答でわかるのであ

る。

「な、ならば貴公――」

膝をのり出した士は、主君の手前もあることとて顔を紅潮させ、声を高めて、

「彼地に後家の多いいわれは？」

「――」

「土地に伝わるその由縁はご存じなきか？」

「ふん。……知らいでか」

老人は言った。土地の者さえこのことを実は隠しているのだが、むかし、熊野詣りの比丘尼がひとり此の土地（日高郡竜神村大字竜神）に来て宿をとった。彼女が大枚の金子を所持しているのを知った宿のあるじは、徒党を組んで、鶏小屋に竹をさし入れこれに湯を通し、夜中に鳴かせてもはや夜明けなりといつわり、尼を出立させたうえ、途中に待ち伏せて彼女を殺し所持金を奪い取った。そのとき、尼は怨んで、未来永劫、この土地の男が妻をめとるならかならず早死するよう呪うてやる、そう叫んで絶命した。死んだ場所を、

比丘尼剝

と土地の者らは呼んでいるが、果してその後、竜神村の家ごとに夫は若死し、後家世帯ばかりになって今に至っている。

近世になってから、尼の祟りを怖れた村民ら小祠を建てて彼女の霊をとむらったが今もって男の早死はやまない。十年ほど前、自分（老人）が東牟婁郡高池町から船で有名な一枚岩を観におもむいたとき、古座川を、鳶口で筏を曳いて寒中も辛苦して労賃をかせぐ船頭らを見たが、あまりにその労働は酷しく体に障らぬかと訊くと、自分らは竜神村の者でほとんど五十以下で死ぬの

が常であるが、故郷離れ難く、他に職とてなく已むをえずこれを渡世にしていると答えた。してみれば、あながち比丘尼の怨霊の祟りによるのではなく、極貧のため過労が理由の早死かも知れぬがしかし、由来、其所はむかしの熊野街道すじにあたり、いろいろ旅客に村民が不正や、むごい仕打ちをかさねて来たとおもわれる――その報いもあるのであろう、老人はそう言って、

「おぬし――」

膝をのり出した武士へ、

「見うけるところ同じ竜神村付近の出身のようじゃが……気をつけいよ、いかに今は上野介どの家来なればとて、祟りは祟り……早う死ぬるぞ」

言われてさすがにハッと家士の顔色は変った。彼ははるか上座の主君を一瞬、仰ぎ見ると、無言で平伏し、後しざって元の席にもどった。

もう半ば恐怖して老人に糺問する家臣はない。

越中の子撫川に関して問うた者があった。老人は即座に答えた。むかし東国より越中に来た僧が、或る民家で茶をもらって飲んだ。その家の娘がこの僧の美貌に心を動かし、僧の去ったあとで茶碗の余滴を飲んで懐妊した。子が生まれてから三年目に、かの僧が再びこの家に立寄った。子の母は事情を明かして子を僧に抱かせると、僧は少しも驚く風は見せずに、児の頭から踵まで呪誦しつつ摩擦していると、児の身体はたちまち泡のようになった。それを北川へ流したから川の名を子撫川というのであると。

磐城の絹谷富士（別名福島富士）の伝説を問うた家来がいた。老人は答えた――むかし磐城に火の雨が降った。それゆえあの付近の山林中に大小二十余の横穴がある。穴に入って火を避けたのである。またおたずねの絹谷富士が突然涌き出したとき、或る婦人が見て、「山が高くなる」

と叫んだので止まった。

もし叫ばなかったら天に届いたかも知れぬと福島の土民は言っておる。これが伝説よと。

ほかにも南は九州から、北は津軽まで、家臣らが幼時に聞き知った、あるいは父祖の談話で記憶するふるさとの伝承を糺して、何ひとつ、老人の答えられぬものはなかったのである。

「ふしぎな者よ――」

列座の一同沈黙する中で、はじめて、上野介正純が口をきった。

「さいごに、では一つ予がたずねるが――」

二

「何なりとおたずねあれ」

「その方、歳は幾つに相成る？」

「――」

「いくつじゃ？」

「いくつとおぼしめされる？」

すい、と背すじをのばし、老人は上座の上野介に目をやった。射るごとき眼光はかわらぬが、心なし、謎めいたわらいを口辺に浮かべている。

「見当がつかぬゆえ問うておる」

上野介正純も口もとをほころばせたが、目は笑っていなかった。

「およそのところを、申されてみてはいかがでござるな？」

「七十か？」

くびをふる。

「八十に相成るか？」

やはり、くびをふった。

「九十歳か」

すると一本前歯の欠けた口でニヤッとわらい、

「見そこなわれては困る――。愚僧、今もって婦女子を孕ませる能力はござるゾ」

「？」

「六十に未だとどかぬ齢と申しておる……なんなら、御息女綾姫を身ごもらせ申そうか？」

列座の家臣がざわめいた。なんとも傍若無人、ひとを喰った放言である。

綾姫はまだ六歳の童女なのである。

「フ、フ、フ」

家来たちのざわめきには目もくれず、

「たわごとを申すと思いめされるようじゃが……上野介どの」

ヒタと上段の正純を見て、

「八坂神社の氏子が話をご存じか？」

「――うじ子？」

「さよう」

老人はこう言った。

大坂難波の八坂神社の氏子にかぎって、ほかの社の氏子とかわったところが、身体に一個所ある。それは男根のまがっていることである。むかし京都祇園の氏子は、男根まがらざれども小便

がまがって出ると言いつたえられたが、自分の見たところ、その放尿の有様は常人とかわらない。しかるに難波八坂神社の氏子のみはまさしくヘノコ（男根）のまがっているのを目撃した。

彼らは為に交合に際して、正常位をなし得ない。もっぱら『横取り』である。そのかわり精力絶倫、一夜に七人の女子を喜悦させると言いつたえる——

「一夜に七人？　それは大したものじゃが」

ふと正純は面を赤らめ、

「逸物がまがるとは実体、いかように相成り申すな？」

「横に上下いたすので」

さしづめ今なら遮断機のように、横向きに上ったり下ったりする、けっして真っすぐに男根は勃起しない、それで正常位をなし得ない。

勃起すると誰人も放尿し難いものであるが、かの氏子にかぎって、そんなとき放尿も前へは飛ばず横ざまに傍へとぶので、彼らはヘノコが立って放尿するときは衣服を濡らさぬよう、片足の裾をすべてまくりあげるのが慣例である。

ほかに、堺の天神の氏子にもそのような風説があり、堺市中央の大小路から南北に分けて、南は大寺（開口神社）北は天満宮の氏子であるが、往昔、子供が喧嘩をすると、よく大寺の氏子らは、

「天神のチンポいがみ」

と、あざけったそうな。しかし自分が彼地を訪ねて確かめたところ、土地の男のどれも曲ってはおらなんだ。——よって全国広しといえども、男根のまがりたるは難波八坂の氏子のみであろうが、彼らはまた異常に早熟で、十歳にして近隣の女子へ夜這いせぬものはないという。夜這い

して七人の婦人を慰めるので、何をかくそう、この身も難波の氏子なれば精力いまだ衰えず、こころみに綾姫どのの夜這いつかまつろうか？——そう老人は言い放ったのだ。

「おのれ……言葉が過ぎよう」

さすがに堪りかねて気色ばむ家臣もいたが、そんなのには目もくれず、

「どうでござるの、上野介どの」

平然、正純を見上げる。

ここは宇都宮城内・評定の間。

神君家康亡きあと、駿府城代を兼ねて徳川幕府の知恵袋と称せられ、飛ぶ鳥おとす勢いの本多上野介正純の居城である。

御前の左右には列臣ら居並んでいるが、はじめから、白髪鬼さながらな老人は家臣など眼中にないらしい。

どうかと問われても、あまりに奇怪な言を吐く相手とて、さすがの正純もとっさには返答をしかねていた。

——そのとき、

「との」

末座から一人の武士が進み出た。

三

ひざを進めたのは鈴木新八郎といって、お側衆をつとめ、かねて正純に目をかけられている近侍である。

歳は二十四。

新八郎ははるか末座で平伏すると、

「この場の始末それがしにおまかせを願いとう存じまする」

そう言っておそる怖るかおをあげた。

「まかせと？……そちは、いかように始末をいたす？」

内心ホッとしたおもいもあったろうか、正純は嬉しそうに目を細め、

「存念を申してみよ」

「――べつに」

主君に詞をたまわると新八郎は畳に両手をつき、恭しく平伏して、

「この場にてそれがしとそれなる老人、ふたりきりにさせていただきますれば」

「この場にてか？」

「はっ」

ジロッと老人がはじめて、銀白の総髪をなびかせ、はるか末座の新八郎をにらみつけて、

「ことわる」

「との」

新八郎は主君だけに目をあげ、

「かさねてお願いつかまつる。われら二人のみにて」

「ことわる」

「との」

声は低いがただならぬ決意がその眉宇にうかがえた。正純はじっとはるかな新八郎のその面貌

を見まもった。

上野介正純このとき五十四歳。一代の傑物本多正信の子にうまれ、幼少より徳川家康に仕えて日夜側近に侍し、天正十年（十八歳）ごろには早くも奉行として政治に参与した。関ヶ原の天下分け目の合戦には家康の麾下に属して功あり、敵将石田三成が捕縛されるやその身柄を家康は正純に預けたほどである。

慶長六年五月、従五位下・上野介に叙せられ、十二年家康が駿河城に移ったとき、父正信は土井利勝や酒井忠世らと将軍秀忠に付けられたが正純は家康にしたがって駿府に在り、その恩寵をこうむってほとんど独断で諸事をつかさどった。大坂城攻略に際しては、種々策略したのも又、正純で、冬の陣で和睦なるや大坂城の外濠のみか、内濠をも和議に反して埋めたのも正純の才覚だった。

ために豊臣氏が夏の陣でついに滅亡したのは人の知る通りである。

元和二年、家康が死去するや、その枕頭にあって遺言を受け、歿後はこの遺言にしたがうのであると言って、葬礼以下の諸事を取りしきり、余人に口をはさませなかった。亡き大御所さまの遺命とあれば、三河以来の部将はむろん、将軍秀忠さえ異見をさしはさむ余地がなく、正純の権勢はならぶものなしと評判をとった。それだけ、実は本多正純の専横をうらむ大名も多かったのが、のちの『宇都宮釣天井』騒動の伏線となる。

その宇都宮城へは、元和五年、これまた大御所さまの遺言なりと称して、それまでの下野国小山城三万三千石を改め、十五万五千石の領主となって移った。一挙に約五倍の封地の殿様になったので、土井利勝らはひそかにその横暴をにくんだろうが、さて宇都宮城主となって、困ったことが一つある。

十五万石の大名ともなれば、当然、その封地に見合う数の家来を有たねばならない。三万三千石時代の家臣だけでは、万事に宇都宮城主の格式を保てない。——といって、有象無象をかり集めるわけにもゆかない。やはり相応の人物を抱える必要がある。

そこで、名ある浪人者を募り、吟味のすえ新規に採用することになって、土井利勝ら他の譜代大名にわらわれぬよう密に人物試験をすることとなった。続々、応募者は宇都宮城下に集まった。

奇怪な老人——白髪の修験者も実はその一人なのである。ただ彼が他の応募者と異なったところは、面接の役人に対して、姓名も名乗らず、

「採否の如何は上野介どのご自身が器量による。その方ら小わっぱ役人の詮議は受けぬわ」

傲然、言って、何を問われても口を緘して語らず、困り果てた役人が仔細を上役に言上して、特別に、この日の評定とはなったのである。そして全国津々浦々、知らぬ土地はないことを実証した上で、今、精力絶倫ぶりを披瀝いたそうかとまで、尊大にも言い出したのだ。

四

「新八郎——」

少時して上野介正純は言った。

「そち一人をこの場に残せばよいのか」

「はっ」

「われらは不満でござるぞ」

老人がさえぎるのは黙殺し、

「監物、そちはどう思うの？」

傍らの老臣小田島監物をかえり見た。キレ者の多い列臣の中にあって、「重きこと石のごとし」と陰口される監物は慎重居士である。

「さよう……われら推察つかまつるに——」

監物は鬢に白いものの混ったかおを、やおら正純に向け、

「新八郎めが才覚に委細おまかせあるが、よろしきかと」

「さようか。そちもそう思うか」

正純は笑を含むと、ことさら列座の家士を眺めわたすように万遍なく目をくばって、

「監物があよう申すことじゃ。本日の評定は新八郎めにまかせ」

「上、上野介どの……」

「審議はこれにて中止いたす」

言うやパッと座を立つと、

「新八郎。あとはまかせるぞ」

鶴の一声。

そのまま児小姓を随え奥へ消えた。あっという間の遁走だった。

家臣らは、ふたたびざわめいたが、肝腎の主君不在では評定のしようがない。或る者はまだ不安げに、ある者はザマを見ろと言いたげに白髪の老修験者を見やって、めいめい裃のすそをさばいて座を起ち、

「新八郎、とのもあよう仰せじゃ。なにぶんともあとは頼むぞ」

わざと高声に言って、

「参ろうか」

朋輩(ほうばい)を語らい出て行く者もいる。

にが虫をかみつぶしたように、無視される憤まんをこらえてか老人は目を閉じ、平然となおも主の去った御前に正坐(せいざ)しつづけている。

どれほどか時が過ぎた。

老人の背後にスルスルと近寄った足音が、数歩うしろにピタッと着坐すると、

「卒爾(そつじ)ながら」

「――」

「ご老体、とのの御諚(ごじょう)なれば不肖鈴木新八郎これにてお相手をつかまつる」

「――」

「モシ」

まだ日の高い時刻である。ここ本丸評定の間は広廂(ひろびさし)をへだてて内庭に面し、庭には初夏の日差をうけて処々につつじが咲いている。まだ去りやらぬ家臣らの足音が遠く、潮騒(しおさい)の引くに似たざわめきを庭の彼方でひびかせている。――それほど実はもう評定の間に他の人影はなく、森閑と静まり返っているのだが、

「――モシ」

もう一度声をかけても、老人は知らんふりで目もあけなかった。わずかに、傍らの古木の錫(しゃく)杖(じょう)をそっと引寄せていた。

新八郎は裃姿である。脇差(わきざし)のみをさしている。

不機嫌(きげん)に老人が黙りつづけるのも意にとめぬ口ぶりで、

「先刻来あれにて拝見いたしておりましたが、ご老齢とは到底おもえぬ腰のすわりよう……それに隙(すき)のない身構え。よほど武術に堪能(かんのう)とお見受けつかまつるが、いったい、何流にて左迄(さまで)に修業めされたか、後学のためうけたまわりとうござる」

「――」

「申しおくれました。それがしいささか鹿島(かしま)の太刀(たち)を修めてござるが」

「フン、おぬしにこの身は斬(き)れんわ」

「！」

「始末などと申し、これにてわれらを斬る存念であろう。それも相討ちを覚悟と見た。若いに似ずあっぱれなる心意気とほめてやりたいがの、めくら蛇(へび)に怖じずよ……無謀な奴、汝(うぬ)には斬れんぞ」

「何を仰せられます……拙者あくまで」

言いながら新八郎は脇差を、鞘(さや)ごと腰からはずし、

「ご覧あれ。拙者かくの通り――」

パッと脇差を後ろへ抛(ほうりな)げてスルスルと無手で近寄り、

「武術がこともさりながら実は、先刻お話あった男根のまがりたること、なにをかくし申そう此のそれがしも――」

「何？」

意外だったらしい。カッと眼をあいて老人は身をうしろへ反らした。

その前へ、

「この通り……イザ、ご覧下されよ」

カミシモの片足を下からからげ新八郎は老人の鼻さきへ立った。

五

一瞬の油断というべきか。

徒手空拳。たしかに新八郎は両手でおのが裃（かみしも）のすそをまくりあげ、股間（こかん）の一物をとり出さんとした。

ふつう、武士は犢鼻褌（ふんどし）を緊（し）めている。今様の白い晒（さらし）ではなく、練羽二重（ねりはぶたえ）の、はば広のものを六尺あまりの長さで腰にまわしたので、ちょうど角力（すもう）取りのそれと想えばよい。

手をやっても、とっさにはつまみ出せぬ道理である。ましてや裃姿で、いかにすそをからげても披露するには手間がかかる。新八郎は片肢（あし）の毛脛（けずね）を露呈し、手を奥へさし込んでモサモサしていた。

だらりと垂れたままでは判じ難い。まがっているかどうかは、勃起してはじめて、遮断機のごとく横に上下するのを見届け得る。

なまじそれを知っていたところに老人の油断があったというべきだろう。

新八郎は、

「少々臭うござろうが、お許しあれ」

そんな挨拶（あいさつ）まで、まじめな顔で言って股間をまさぐっていた。老人はおのずと、その股間へ注意を集注した――一瞬のその虚に、

「ごめん」

叫ぶや身を躍らせ新八郎は老人に組み付いた。新八郎は怪力の持ち主だった。死物狂いで老人を抱き締め、

「出ませい。勘兵衛（かんべえ）、今じゃ、くせ者を捕えたぞ。出ませい」

大音に喚（おめ）いた。

それと同時に、控えの間との唐紙がサッと開いて、長身の槍（やり）をたずさえた今一人の若侍が姿を現わした。謀（しめ）し合わせていた駒井（こまい）勘兵衛という気鋭の士だった。

「おのれ小童（こわっぱ）が……は、はかりおったな」

老人は白髪をふり乱し、必死に抵抗し、せめて畳の錫杖（しゃくじょう）をつかまんと藻掻（もが）いたが、新八郎また必死である。

「勘兵衛、容赦はいらぬ。今じゃ、この新八郎もろとも、芋刺しにせい」

揉（も）み合いながらもここを先途（せんど）とわめく。腹の底からしぼり出した悲壮な声である。

駒井勘兵衛は、裃の片袖（そで）をはずし槍をしごいて、少時（しばらく）、ためらった。だが彼も武士であった。

「新八郎、ゆるせ」

一声すると涙をのんで、裂帛（れっぱく）の気合もろとも颯（さつ）と槍をくり出した。

大身十文字槍である。

いかに手加減しようにも新八郎を無疵（きず）で救うことはできない。

「ぬ。……」

背すじを刺し通され、新八郎はガックリ首（こうべ）をうしろへ反らしたが、それでも抱擁を解かなかった。穂先はその胸板を貫通して怪老人の臓腑（ぞうふ）を、したたかに田楽（でんがく）刺しにしていた。

「お、おのれ、うつけ者が。……この玄覚坊（げんかくぼう）を刺して汝（うぬ）ら、ぶ、ぶじに済むと思うかッ」

雄叫（おたけ）んで、

「はなせ……新八郎。このわしを、誰（だれ）と思う。……は、早う。離（はな）、はな……」

白鬼の形相凄まじく眦を決して、勘兵衛をにらみつけ、ズルズルと新八郎に抱き付かれたまま後ろにさがった。恐るべき力、生への執念である。

だが、駒井勘兵衛は容赦しない。

力をこめて穂先を引きぬくとパアッと新八郎の背すじから血がほとばしるのへ、一瞬、瞑目ののち気合するどく二の槍をくり出した。これは見事玄覚坊の脾腹を、刺し抜いていた。

「ギアッ」

宇都宮城本丸のすみずみまで、この絶叫はきこえたという。

「おろか者が……。わ、わしを大炊（土井利勝）あたりの差し回し者と思うて刺したのであろうが、今に、悔いを千載に残すぞ。末期の際に言うてやろう、この玄覚坊、上野介どのが行く末を思えばこそ参上したわ。それを知らいで……美女を、献上いたさんとしたも知らいで……見ておれ。今に宇都宮に、美女が、妙齢の美女が」

そう口走ったのを最期に、うしろ様にどうと倒れ、謎の老人——玄覚坊はついに息絶えた。炯々たる眼は虚空をにらんだままで。

そんな死体にすがり付くかっこうでうつ伏せに新八郎は倒れていた。新八郎はもう虫の息であった。

勘兵衛は槍をなげ捨てるやそばへ走り寄り、

「新八郎ゆるしてくれい……傷は浅いぞ。コリャ、しっかりせい」

声を励まして親友の肩をゆすり、何とか抱き起こそうとしたが、無駄であった。新八郎は老人を抱擁しつついつの間にか死んでいた。

それでも、あきらめかね、

「新八郎、しっかりせい」

なおも上体をゆすって勘兵衛は男泣きする。この時である、老人と新八郎のあいだから、コロリと、転がり落ちたものがあった。

六

赤い、ふしぎな玉だ。

瑪瑙に似ているが、婦人のかんざしなどに見るそれよりは、だいぶ大きい。

梅干を一まわり大きくした程度で、あたかも枇杷の果実の丸いのににている。

玄覚坊が所持していたのか、新八郎の懐中よりころがり出たか、そこのところは不明だが、お城に登る武士が裃姿でそんなものを所持するわけはなく、まして勘兵衛は新八郎とは竹馬の友、日頃、新八郎がそんな玉を持っているのを見たことも聞いたこともない。

よって玄覚坊の持参していたものだろうということになった。

ところで、玄覚坊はともかく、あたら新八郎をも田楽刺しにした理由を糺されて、駒井勘兵衛はこんなことを言った——

自分は以前、漢書で、ふしぎな咄を読んだことがある。『簷曝雑記』なる中国の書物に載っていたのであるが、何でも、徽州という処に一人の妖僧あり、童女の玉門の精髄を吸っては余生を長らえていた。彼は四、五歳の童女を誘拐すると薬を鼻孔に吹き入れて昏迷させてのち、銀管を用いてその陰をさぐってほしいままに精髄を吸うのである。童女はなにも知らず昏睡して、まだ死なずにいるのを抱いて妖僧は其の家に送り還す。すると数日または数十日後、突如として、ほとんどの童女は落命した。人みなその理由を知らずにいた。

しかるに一日、陰門をさぐられるうち昏睡より醒めた童女あり、悲鳴をあげて妖僧の吸わんとするをこばんだ。たまたま寺のそばを通りがかった里人がこの悲鳴を聞いて何事かと怪しんで寺内に駆け入り、はじめて真相を知って村人ら協力してこの妖僧をなぐり殺したという。

件の僧は、歳は八十叟をすぎているはずなのが眉のみ白く、皮膚などツヤツヤと光沢あり、面貌は三、四十の壮者に見えたという。

——自分は、この咄を読んだときはまさかとおもい、白髪三千丈しきの彼国人特有の誇張でもあろうと、新八郎にも話して一笑に付したことだった。

しかるに今日、玄覚坊の登城あり、さまざまな問答を傍観するに彼は尋常の修験者にあらず。ましてや六歳の綾姫さまを妊娠させんと放言するに至っては、彼こそ妖僧のたぐいに相違ないと判断した。そこで、ひそかに隣席の新八郎と打ち合わせ、何としても彼を斃さねばお家に累が及ぶは必定と考え、自分がおぼえの槍で刺さんと決意したら、

「待て勘兵衛」

新八郎が制して言うのに、彼の老人が身構えまことに武芸の達人か、兎の毛で突くほどの隙もない、尋常に立ち合ったのではとてもおぬしには討ち果たせまい。

「よいわ、わしに考えがある、先ずわしが老人を油断させよう。おぬしはその機をとらえ、隙を見てひと思いに刺すがよい。よいか、どんなことがあろうとひと思いにやるのじゃぞ」

そんな二人の示し合わせがしてあったので、あの際、血涙をのんで田楽刺しにしたしだいである。無念千万ながら、そうでもしなければとても討ち果たせる相手ではなかった。むろん、自分の武辺未熟のせいであり、あたら新八郎ほどの武士を若死させたお咎めは、いかようにもお受けする。ねがわくばこの場にてお詫びの切腹をお許しいただきたいとおもう——駒井勘兵衛は従容と正坐して、そう言ったのである。

「……なるほど、さような示し合わせがあったのか……」

聞いてさすがの正純も、目頭をうるませ、しばし言葉もなかった。

ここは評定の間とは庭をへだたった中奥の正純の座所で、御前には小田島監物以下、重臣数名がさいぜんの裃姿で左右に居並んでいる。勘兵衛は敷居ぎわの末席に平伏している。

「それに致しても、との」

やがて、監物が重い口をきって、

「死にぎわに美女を献上とやら申したは、いかような意味あいにござりましょう」

「予にわかるわけがないわ」

正純は吐き出すように言ってから、

「庄左衛門」

監物とともに政務を補佐する家老の早川庄左衛門に、

「そちは何と見る、……アノ、赤い玉をじゃ」

「——は」

「勘兵衛が申す妖僧のたぐいに相違ないとしても、あれだけの物知りが所持いたしおったのなら、何ぞ仔細がのうてはかなうまい……どうじゃ、そちの悴は病弱なれど故実にくわしい。その玉さっそく持ち帰って悴に見せてみよ、何と申すか……」

七

早川庄左衛門の悴は、生まれつきの病体ではなかった。足萎えであった。それも鉄炮の傷がも

とで萎えたのである。

本多上野介正純が、

「大御所さまの遺命なり」

と称して為した専横のなかに、鉄炮鋳造がある。

三万石が一挙に宇都宮十五万五千石になったので、家士の人数を補なうのと同様、武具も十五万石の格式にふさわしい数をそろえる必要があった。

正純は家康亡きあと、将軍秀忠の老中職にも就いていたから、老中の名で堺の鉄炮商人に鋳造を命じることはできる。しかし諸大名に対し、もっぱら軍備縮小を命じその城郭の修理にさえ、監視の目を走らせる幕府の老職にある身として、諸大名へのしめしをつける意味でも、みだりに鉄炮をふやすわけにはいかぬ——そう判断して、内密に、鋳造をさせたと後に正純は申しひらきをしている。

それにしては、鉄炮の射程距離ならびに破壊力を従前のものより増すよう、ひそかに試験・研究させたふしがあるのは奇怪だが、何にせよ、早川庄左衛門のせがれ大学は主君の密命をうけて、鉄炮の実験中、火薬が爆発し足に大やけどをした。それがもとで病いに臥し、以来、出仕を遠慮してひたすら学問に身を入れている。

二十八歳になる。

父の庄左衛門が持ち帰ったふしぎな美玉を、しげしげ打ち眺めたのち、

「父上」

大学のやせて青白いかおに興奮の赤味がさし、

「いったいこれをどのように入手なされました？」

ふしぎな妖僧の懐中より出たものだと庄左衛門は説明した。庄左衛門は下城したままの裃姿だった。

「ふしぎな妖僧とは？」

「さればよ」

年齢もつまびらかならず、およそ諸州に足跡をとどめざる土地はなさそうな奇怪な修験者と見えたと、ありのままを庄左衛門は話したのである。

聞いて、今一度、しげしげ玉を凝視し、

「……まさか。……このようなことが、まさか」

二度つぶやいた。その眼はキラキラ異様なかがやきを見せていた。

「いかがいたした？」

「信じられませんので」

「何がじゃ？」

「——」

「大学、申してみよ」

庄左衛門にせかされ、大学の語ったところはこうである——

信濃の伊奈郡、平井手という村に、大きな槻の巨木があり、或る年、させる風雨でもないのに此の木が倒れた。その穴の中に、一個の石の櫃があらわれたことが『剪灯夜話』という古書に載っている。

その記述によると、村人らがいぶかって立寄って見たら、この石櫃のうちから鈴の音が、読経の声とともに幽かに洩れてくるではないか。

人々は大いに驚き怪しんで、協議のすえ代官所に訴えた。そのとき、たまたま代官所に居合わせた古老が言うには、

「むかし——そう今から百五十年ほど前、天竜法印とか申される山伏が、生きながら土定（僧が自ら土に埋もれて死ぬこと）された話を、おらがじいさまに聞いたことがある。じいさまは嘘を言うお人ではなかったで、きっと、その山伏がまだ死なず生きておるんではあるまいか」

そこで代官みずから平井手村に出向いたところ、村人らは巨木の根の横たわるわきで、櫃の上の土をはらい、にわかに注連などめぐらし、近在の老若男女らその前に群がってしきりに合掌礼拝している。なるほど代官が櫃に近づき耳を澄ますと、石の中から幽かに人声と、時折、鈴の音がきこえる。

おどろいたことに、石櫃の側面には

弘和二壬戌歳六月二日　天竜海喜法印

ここに土定

と彫られてある。弘和二年といえば、およその計算でも百六十年以前になる。

代官は神仏崇拝の念あつい武士だったが、なおも信じかね、仔細に櫃をしらべると、側面の隅に息ぬきの穴三つあり、網をはってあって、読経の声はこの穴から洩れてくる。

石櫃の高さは四尺ばかり、幅三尺ほどの長い櫃で、二重造りになっているらしいとわかった。しかし密封されているので容易に石蓋は開かない。

が、中より人声の聞こえる以上捨ておくわけにいかない。

代官は蓋を開ける決意をした。

先ず里人を督励して人夫をつのり、太綱を掛けて多数で穴より石櫃を平地に移させ、石工に命じ、ふたの合わせ目と思えるところに鑿を挿し入れて徐々に打たせてのち、数人、力を合わせてようやくに蓋を開いた。

中には四方に木綿の如きものを張り、内に、もう一つ木の櫃がある。そのふたにも、

南無大師遍照金剛

と筆太に大書され、年月日を明記して、

天竜海喜法印　土定

と記されてあり、心なしか一きわ読経と鈴の音があきらかに聞こえていた。

村人らは畏怖と驚きの目で代官をふり仰いだ。

代官は少時、沈思ののち言った。

「かまわぬ。皆して、さ、その蓋をあけよ」

八

百姓らは、すぐには代官の命令に従おうとしなかった。

木棺のふたを開けるには、石櫃を先ず毀さねばならない。それにはさきにめぐらしたシメナワを、切らねばならない。それがおそろしい様子なのである。

そこで代官は腰の脇差を抜くとツカツカと石櫃の前に進み寄って、

「祟りがあるなればこの身がいっさいを受けようぞ。南無三宝」

言うやパッとシメナワを截った。

そして、

「これでよいであろう。いざ、開けてみよ」

ようやく人夫たちは互いに顔を見合い、うながし合って、おそる怖るそばに寄り、先ず石工が四隅に鑿を入れて隙間をつくってから一同、力を合わせてそれぞれ四枚の石を側面の四方に倒した。それから木綿を取り払うと信じられぬ木目の新しさで、木棺が露呈する。

折から、初秋の季節だったというが、さわやかな秋の陽光が射し、木棺は何か神々しいもののように光に映えて四辺をはらう趣きあり、思わず人々は土下座して合掌したという。

代官は気丈だった。

「なにを致しおる。この期におよんで戸迷うて何になる。早う開けい」

脇差を未だ手に、叱咤した。

目前の代官さまの方がこわかったのだろう。やがて人夫らは再び互いにはげましあい、怖るおそる石工がこんどは木棺のふたの分け目にノミをさし入れ、石槌で打って、

キイーッ

木を軋ませ、半ば蓋を開けた。それきり畏怖してとびさがった。一同、息をのんで代官を見上げる。

さすがに一瞬、代官も逡巡したが意を決し、脇差を腰におさめると棺に寄って、蓋をひらいたのである。

こわいもの見たさで土下坐した老若男女ら、一斉に、長くくびを伸ばした。

棺の中には、綿のようなものに埋まって、ちょうど猿のように面の赤い、皺だらけの痩せ細った、白髪の老人が片手に鈴を、片手に何やら丸い玉をにぎりしめ、半死半生で目を瞑じ、ゆめ現のごとく低声に経文を唱えつづけていたという。

その時の玉が、ちょうど今見るような瑪瑙に似た玉だったというのである。

「まことか、その話――」

聴きおわって、信じきれぬ面持ちで庄左衛門は病床の大学を見すえた。

「まことも何も『剪灯夜話』にそう書かれておりますので」

大学は病床に起きなおり、脇息にもたれ、妹から肩へ羽織を蔽いかけられて、なおも熟々掌の美玉を眺めていた。

「それで、その、棺の中の老人はいかが致したの?」

「は、記述によれば――」

とてもそのままに放置するわけにはゆかず、ともかく、呼吸していることゆえ、急いで大籠を編ませ、中に綿を敷きつめて一同して棺から、そろりと老人を籠に移し、これを担いで代官所に運んだ。このときの老人は、

「まことに猿を日に干したるが如きなりしが、早速に医師を呼び寄せ、また寺僧を招きて相談するに、和尚言いけるは、これはまさしく入定の僧なり、よくよく養生して薬を与えなば蘇生せんと。

そこで医師は口中に薬をふくみ、口づけして老人に呑ましけるに、はじめのほどは呑まざりけれども、両三度これを試みたるにようよう呑むように見えければ、代官、悦びてひたすら薬を与えたり。

二三日の内に、かくて老人蘇生しければ、これよりは薬より飯をカユにして試みる。十日ばかりして老人少し目を開き、十四、五日して手足も少しずつ動きければ、もはや全快に間もあるまじとて大病人を看病するごとくにいたわりければ、三十日がほどのうちに物言うまでに快癒しけり。」

と記されてあると大学は言った。

「──それで？」

「は」

更に五十日ばかりしてほとんど常人とかわらぬまでに元気になって、老人が告白するのには、自分は山城の国の農民の子に御座候ところ、縁あって仏門に入り、修行回国の途次この伊奈郡に立ち寄った。ちょうど足利将軍義満公のころであるが、当地に時疫あり、村民の殪れるもの数知れず、よっていけにえにならんと、村名主に申し出て自ら土定したのであるが、その後のことは一向なにごとも覚え申さず、今に至ると。

さらに、その掌中にいたせる玉は？　と問うと、土定の際、通りすがりの旅僧が、老人のこころざし奇特なり、この玉は弥勒のさずかりものなればつかわすべし。そう言って与えてくれたので、有難く鈴とともに携えて棺に入ったと打明けたという。

また老人の土定のときには、一丈ばかりの深さに土を掘って埋められたが、槻の木が生えたのは、その後の百数十年の間のことらしい。自分の埋められたときには、まだ、そんな苗木も植えられたようにはおぼえぬと。

「うそではござりませぬぞ、いま、その『剪灯夜話』をお目にかけ申そう」

大学はそう言って、

「妙」

かたわらの妹をふり向き、

「書庫の北の隅の戸棚の、二段目にあるはずじゃっ、あれをとって来てくれよ」

「……ハイ」

妙はうなずいて座を起った。

九

妙が、縁側づたいに、書庫から、古ぼけた冊子をかかえてもどって来た。

妙は十八で、庄左衛門には妾腹の末娘になる。気立てのやさしい、容姿もまあ人並みな双眸のつぶらな娘で、兄大学の身のまわりの世話を一手に引受けている。

その点では、ふびんもかかり内心、庄左衛門はいとしく思ってはいるが、夫人の手前もあって、表面ことさら婢のごとく頤使するのを常としていた。

──が、今はそのためではなく、書物など見せられても昔の出来事で、言ってみればどうでもよいことゆえ、妙のほうには目もくれず、

「土定いたしおった老僧が話はあいわかった。じゃが大学、石櫃の老人が掌中にいたせし玉と、その」

「ですから父上」

大学は、「ご苦労であったな」やさしく妹に声をかけて手にとった冊子のページをひらき示すと、

「その土定よりよみがえった老人が、じつは、殺されておるのです」

「なんじゃと？」

「この『剪灯夜話』の書かれたは天文十四年──いまより八十年以前ですが、この記述によれば──」

代官のはからいで蘇生した老人が、たしかに百六十年も土中にあったことがわかって、大いに

近在のうわさとなり、これを聴いた武田信玄が引見しようと使者を伊奈の簑輪城に差し向けた。そこで件の老僧は、信玄のもとへ出仕することになった前夜、風雨はげしい夜だったというが、代官所に忍び入った賊あり、老人が目ざとくこの曲者に気づいて起きあがり、仄かな燭台の灯をたよりに賊の風貌を見て、

「や、お前さまは？……」

驚きの声をあげた。すかさず、賊は抜身をふりかざし一刀に老人を斬り伏せて逃げ出した。

この物音に家人らは目をさまし、駆け寄ってみれば老人は早や虫の息で、

「……これで、よい、これで、よい……」

そう絶えだえにつぶやくのみ。賊の面体に見おぼえがあるのか、いったい賊は何者であったのか？――代官が声をはげましてたずねても老人はこたえず、やがて、

「南無大師遍照金剛」

そう唱えてコト切れた。

賊の正体はついにわからず、代官はあらためてねんごろに老人をほうむったが、このとき、しらべてみると老人の掌中にあった美玉は何処にも見当らなかった。

賊が奪い去ったものか――まことにふしぎなことである、そう『剪灯夜話』には書かれてあると大学は語ったのである。

「ふーん……」

聞いて庄左衛門は、さすがに血色ばみ、

「すりゃ、おぬし、この玉がその老人より奪いとられたものじゃと申すのか？」

「いえ、そうと断定いたすわけではございませぬ……が、ほかに思いあたるものがござらんので」

「……」

「それに、父上――」

土中に埋もれていて、掘り出され蘇生した人の話は、実はほかにもある。中国でも、十年間、塚中に在って生存していた者、十二年間、同じく塚の中に埋められながら生きていた者のことが、それぞれ唐人の書物に記されている。はなはだしきに至っては釈迦が入定した年から七百年後に、掘り出されて生きていた僧の話が印度の仏経本に記されているそうである。

してみれば、土中に信じがたい歳月をうずもれて、しかも生存しつづけた者がいたのは間違いない。

しかし、それら奇跡の生存者のどの話にも美玉を抱いていたことは記載がない。したがって、もし仮説がゆるされるなら、城中で駒井勘兵衛に刺殺されたという謎の老修験者は、あるいは土定より蘇生した老僧の玉を盗んだ賊だったのではあるまいか？　なにぶん、『剪灯夜話』の書かれたのは八十年前であって、当時すでに代官所へ忍び入るなどの曲者なら、どう若く見ても二十歳をすぎていたろう。したがって今は百歳を超える怪人物ということになり、はなはだ信憑性はあやしくなるが、でも主君より美玉の由縁をただせと言われれば、拙者にはこれより他に答えようがない。

かりに、謎の老修験者が玉を盗んだ本人でないにしても、玉そのものは天竜海喜法印の掌中にしていた美玉ではなかったろうか？

そんなふうに大学は父へ答えたのである。こたえる大学のかおも、心なしか興奮していた。

「……なるほど、そう言われてみると……フム」

いささか気味わるい玉である。

庄左衛門はせがれから再び、美玉を手にうけとり、あらためて又しげしげ眺めやって、

「妙」

むすめに目をあげた。

「なんぞ、布を持参いたせ。すぐじゃぞ」

「どうなされます?」

大学がたずねるのへ、

「知れたこと、今いちど城へ登り、とのにお渡し申すわ。おぬしが話を聞いてみると、この玉、どうにも気色がわるい」

妙が、

「これでようございましょうか?」

紫のふくさを用意してもどって来た。

「よい。かせ」

庄左衛門は早速、それで玉をつつみ、裃のいでたちのままなのをよいことに、再び、お城へと屋敷を出た。

謎めく事件が、さらに待っているとも知らずに……

十

早川庄左衛門が、再びお城に登ったのはもう申ノ刻（午後四時）まえだった。

勤番（当直）の者をのぞいて、あらかた、家士らは下城して各自に侍屋敷へ帰宅した頃である。

城内は閑散としているのが普通である。

ところが、二の丸から石垣ぞいに本丸への坂道をいそぐうち、すれ違う藩士らが、いつもは老臣早川庄左衛門と見て黙礼し、あるいは道をわきへよけ、立ちどまって会釈をしたり、顔見知りであれば、

「これはご老体。かような時刻にご登城でござりますか」

「お役目ご苦労に存じます」

お世辞のひとつも口にするのに、この時にかぎって、何やらしきりに朋輩と私語し合い、庄左衛門のやって来るのも目に入らぬ様子である。中には話に熱中し、横ざまに蟹のように歩いている若侍さえいる。

はじめは気にも留めなかったが、

「角之進」

かねてじっこんの松田弥太夫のせがれ角之進までが、チラと庄左衛門に視線をはしらせながら知らんふりで行き過ぎようとするのへ、ふと、不審をいだき、

「なにを左様に話しこんでおる?」

「お。これは早川のご老体」

いたって礼儀正しいいつもの角之進のかおになると、

「つい話に夢中になっておりましたこととて」

「されば、何の話をいたしおる?」

「今朝ほどのうわさにござる」

「?」

「ご存じないのですか」

「なんのうわさじゃ」

「野沢の寺内にて石棺の発掘され申したはなし――」

「石棺じゃと？」

「本当にご存じないので？」

むしろ心外そうに角之進は、一瞬、となりの同役と顔を見合ってから、

「土中より掘り起され申した石棺の中より、人の話し声がいたしたとかで、それで」

庄左衛門には初耳である。しかしせがれ大学から聞いてきたばかりの昔咄と、あまりに似かよったことなので、

「そ、その石棺が何とした？　む？　くわしゅうに、申してみよ」

思わず語気が上ずっていた。

角之進はまた朋輩と顔を見合った。庄左衛門が何も知らぬようなのが、よほど意外だったらしい。だが老人はとぼけているのでないとわかると、

「今朝五ツ半（午前九時）だそうにござる。野沢の寺内村にて――」

話しだした。

寺内村は宇都宮城下から一里ばかり北――ちょうど日光山への往還より百歩ばかり西へ入ったところで、太古はなんでもこの辺に古い寺があったとか、それで地名になっているが、その寺内村の村道わきに、由縁の知れぬ、高さ二丈ほどのこんもりした塚があり、塚の上に五重の古びた石塔が建っている。

さて今朝がたのことだそうである。旅の身と見える白髪の老人が錫杖を手に、どこからともなくやって来て、付近で野良仕事をしている百姓に、

「異な音がきこえるが、おぬしらには聞こえんか」

と話しかけた。

なにも聞こえぬと百姓がくびをふると、

「いいや、たしかに物音……それも人声がいたす。さよう、女の声のように聞こえる……」

「？――」

「愚僧の耳にまちがいはない。おそらくこの塚の中に、人が埋められておろう」

そう言って、やがて此処へ池辺村の庄屋が通りがかるであろうが、もし庄屋が何ぞ悩みごとに困っているようなら、この塚を掘り起すように教えてやるとよい、そうすれば悩み事は解消するだろう――そう言いのこして白髪の老人は又、どことも知れず立ち去ってしまった。

百姓はポカンと、あっけにとられて不思議な老人のうしろ姿を見送ったが、気をとりなおして野良仕事に励んでいた。

しばらくすると、果して池辺村の庄屋が村道をやって来た。いかにも悩みごとに打ち沈んだ様子だった。

百姓はそうと知っておどろいて、

「庄屋さま」

まことに奇体なことを申上げるようでござりまするが、さきほどここを通られた髪の白い旅のお年寄がと、老人の話したことを告げたのである。

「なに？　わしが悩みごとでここへ来るのを知っておいでじゃった？」

「ハイ。……」

十一

庄屋はびっくりした。

たしかに庄屋は悩みごとをもっていた。もちろんそんな、白髪の修験者ふうな老人に庄屋は会ったこともない。胸の悩みを誰にもまだ打ち明けたことがない。

それが懊悩を指摘されるさえあるに、塚を掘れば、悩みは解決するという。塚の中に人が埋められているともいう。

まことに摩訶ふしぎな話である。

だが、少しも早く悩みから庄屋は解放されたかったのであろう。おぼれる者が藁にもすがる心境だったのであろう、早速、庄屋は寺内村の小作人らを督励して、くだんの塚を掘らせることにしたという。

先ず五重の石塔をわきへはずし、その基石も皆で持ちあげてわきへ運び置いてから、その下を、手ん手に鍬で掘りおこしにかかったのだ。

百姓らは半信半疑であった。庄屋も内心は疑念を抱きつづけていたろう。

ところが、ものの一尺も掘り下げぬうちに、

カチリ、

と鍬先が何かにあたり、その周りを丹念に掘っていると、穴の底から石棺があらわれてきたという。

石塔の古ぼけて苔むした有様からもわかるように、もう十年来、だれもそんな所へ棺を埋めた者はない。

きっと、大昔から其処に在ったものにちがいないので、勝手に発掘してよいものかどうか、さすがの庄屋も、村役人へことわらねばと不安になったらしい。

さっそく下男を庄屋は村役人のもとへ報告に走らせた。役人から指図があるまでそうして一同なんとなく穴のまわりにむらがって石棺を覗いていたら、

突如、

「……」

うら若い女の声が、たしかに石棺の中からきこえてきたのである。

信じがたいことである。

鍬を手にした百姓らは、なかば恐怖し、なかばすがるような目で一斉に庄屋を見た。

不安のおもいは庄屋とてかわりはなかった。皆はいきをのんで、ただ、石棺を凝視するばかりだったという。

すると、しばらくして、

「……たもれ。あけて、たもれ……」

あきらかに棺の中の声は、そう言ったのである。

そら耳ではない。何人もが、はっきり聞いたのである。

「庄屋さま」

「ど、どげんしますだ？」

気の弱い百姓は、もう、小きざみにふるえている。

どうしてよいか庄屋にわかるわけがない。

しかし、

「……早う、あけて、たもれ……」

また、微かな声がきこえたのを耳にして、庄屋は、

「あれは娘の声じゃゾ……ほっておくわけにはいかん」

とりあえず穴の底から、石棺を持ち出すべきだと決意し、

「皆の衆……おとがめがあればわしがこの身で受けますだ、ともかく、さ」

石棺を外に出すようにと言った。おそるおそる、そこで百姓らは石棺に縄を掛け、突っかい棒をさしこんで皆で力を合わせ、穴から外へ石棺を担ぎ出したのである。

棺の中の声は、もう何もきこえなかった。長さ六尺ちかい、人ひとりがちょうど横たわれるほどの棺である。ずいぶん長いあいだ土中にあった証拠に、石の側面の所々に土がこびり付いていて、百足(むかで)に似た虫が這(は)いまわっていた。

「どうしますだ?」

一同あらためて石棺のまわりを取り巻き、かたずをのんで、何ぞ声が聞こえぬかと耳を澄ますのに何の物音もしない。死人の棺を横たえた感じで、うす気味わるくなるばかりである。

庄屋は六十ちかい年だが、気味わるさ、怖ろしさは皆と変りなかった。

ただ、庄屋には人に言えぬ悩みがある。それをはらしたい一念で、掘りはじめたことである。

そうして此の棺が発掘されたのである。

棺には石のふたがかぶさっているが、はめ込みになっているらしく、こじ明ければ容易に開きそうである。

少時(しばらく)、庄屋は瞳(ひとみ)をこらして石蓋を凝視していた。

それから、

「あけてみて下され、ふたを」

と言った。

なにぶんにも、中から女の声がしたのは事実なのである。誰が中に横たわっているのか、生きた者なら当然、助け出すべきだ——庄屋はそう判断したので、

「さ、開けなされ、早う」

と、又言った。

そこで、皆の中でも大胆な吾作(ごさく)という百姓が、鍬の刃の先を石蓋の隙間に挿しこんで、ぐい、と持ちあげた。

十二

何たることか。

こわいもの見たさで、石棺を取りかこんでいた百姓たちは、吾作が石蓋をこじあけるにつれて鶴(つる)のように首をのばし、人の背後にいる者は背のびして棺の中を覗(のぞ)きこんで、

「アッ」

一様に驚愕(きょうがく)の声をあげ、目をみはった。

狐(きつね)につままれたようだった。

なにもない。

棺の中は、空なのである。

「庄、庄屋さま!……」

吾作が最初に驚倒し、あっけにとられて庄屋を見上げた。

そんなことがあり得るのか？

たしかにこの棺の中で、早くあけてと女の声が訴えたのである。だから皆で穴からかつぎ出したのである。それが、中はからっぽなのだ。

金襴に似た布地が、蛇のぬけがらのように棺の底に残っていた。また高貴な婦人の挿していたとおもえる美しい櫛、こうがいが、片隅にころがり、守り袋と匂い袋らしいものが双、いずれも、たった今そこへ置き忘れられたように新鮮な色彩で、捨てられている。

それに梨子地蒔絵の手鏡ひとつ。

この鏡面は曇っていたが、蓋の蒔絵の金泥のあざやかさも又、たったいま其処へ置かれたようで、とても何年間も土中の棺に納められていた品々とは考えられぬきれいな状態である。

棺の底には少々色のあせた鬱金の布地が敷きつめられ、さすがにこれには所々、古びた汚点がついていて、心なしか死体の横たわっていたらしい跡が見える。でも遺体はおろか、あの、

「早うあけて……」

と訴えた声の主は、どこにもいないのである。

世の中にこんな摩訶ふしぎなことがあるものか？……

百姓の或る者は思わず、おのが指でほっぺたをつねっていた。ある者は目ばかりパチパチまばたいた。

――そのうち、

「あ、庄、庄屋さま……」

吾作があわてて手をのばし扶け起こそうとした。

庄屋は失神してその場に倒れてしまったのだ。

単に、棺の中がからっぽだったからではない。このとき蓋のあいた棺のまわりに群がって、信じかねる様子で、なおも空の棺をのぞき込んでいる人々の後方に、一人の、土地では見かけぬ若い乙女が立っていた。乙女は黒髪を背になびかせ、武家娘ふうな扮身で、この世の人とは思えぬほどの美貌であったが、ふと見ると、彼女の結んでいる帯は棺の中の金襴の布地と、まったく同じ物だったのである。まるで彼女が、さいぜんまで棺の中にいて、今、其処へ立っていると見えたのである。

庄屋でなくとも失神しそうな、それは、奇妙な出現であり、彼女はしかも目をみはる百姓たちに、

「……ありがとう」

かるく会釈すると、クルッと踵を返し、村道をあの先刻なぞの白髪の老人が錫杖を突いて去った同じ方向――宇都宮城下へ向って、静かに立ち去ったという。

素足にわらじばき、着物の裾を風にひるがえして。落着いた足どりで。

「さ、さようなわけにござれば」

角之進は言いついだ。

「郡奉行はご老体も存じ寄りの佐野安兵衛にござれば、村吏をともない早速に寺内村へまかり越したるところ、いかさま石棺が発掘され、ふたも開けられたるわきに、庄屋はすでにコト切れておったよしにて」

「死んだ？……庄屋がか？」

「は。気を失ったとばかり百姓共ら思いおりましたら、どうやらそのまま冷たくなっておったとか」

「娘は？……娘はどうしたの？」
「城中にござる」
「なに？」
「評定の間にて先刻、駒井勘兵衛が槍に刺殺されたとか申す白髪の修験僧……拙者そのみぎり、評定の間には出仕いたしおりませぬゆえ、老僧が刺されたる模様は存じませんが、娘は、なんでも老人の死んだのを承知いたしおるとかで、老人の遺体を引取りに参ったとか」
「なになに、あの怪僧が死を、知っておった？……死体を引取りに参ったじゃと？」
——その通りで、
「で、今は？」
「御城代監物どのへ直に申し入れをいたしております」
「何の申し入れじゃ」
「亡き者が所持した玉を返せとか」
「な、なんと?!」
とびあがらんばかりに庄左衛門おどろいた。玉は庄左衛門が今もしっかり懐中にしている。
「城内か。監物どのと対面いたしおるのじゃな？　しかと、間違いはないな？」
念をおすのももどかしげに早や、駆け出して、
「退け退けい……ご城代にわれら、急用がある。そこ退けい」
城をさがってくる者らを蹴散らす勢いでまっしぐらに本丸へ走りこみ、
「監物どの……城代は、いずれにおわす。早川庄左衛門、火急の用にてまかり越してござるぞ」
大音に呼ばわった。

弦月

一

ふつう、旅人は糒（ほし飯）二合五勺を一日分にあて、十日路を行く用意に二升五合を背に負うて旅をする。
駅舎に着けば、湯をわかし糒を食って寝るだけなので、湯の木の代（木賃）を支払うから安旅籠を木賃宿といった。
宇都宮明神山の西に在る『池上や』もそんな一軒——
もともと屋号となった池上は、のちに池上町といい、奥州路、日光山路、江戸路の交会する宇都宮城下の要路で、『池上や』は道路に面してわらじを売る棚（店）があり、棚を入った土間の奥が、中二階もふくめて木賃宿となっている。はじめは普通の民家だったのを、本多正純が城主となって、にわかに人の往還が賑々しくなり、宿を乞う者が多いので売店を兼ねての旅籠になった。
投宿客はたいてい、一、二泊で旅立つが、中に、五日以上も滞在している者があり、滞在客は、個室などないから中二階の大部屋に合宿で、むろん、客席に食膳は出ない。しかし自前の糒よ

り炊きたてのめしが旨いにきまっているので、滞在客の大方は宿の亭主に話をつけ、食事の面倒をみてもらう。そんなのは夕餉時になると台所へ集められ、皆で一緒に膳をかこむ。おのずと団欒のおもむきを呈することになる。

——今も。

滞在客四人ばかりが亭主の家族ともども、かまどから湯気の立つ汁を女房に注いでもらっておいしそうに夕餉の箸をつかっている。或る者はカリカリ大根の漬物を奥歯で齧み、ある者は近在の釜川で獲れた魚の塩焼をせせるのに余念がない。旅の身には家族同様のあつかいをうけるのが、何よりのもてなしで、亭主は、ひまがあると今でも野良仕事をやめぬ百姓あがりの実直な男である。滞在客にはいわば夫婦そろって、損得ぬきのサービスをしてくれる。

「きょう、お城で、えらいことがあったそうにごぜえますだが、お客人らは知っておいでですかいのう」

団欒がはじまって間なしに亭主が言った。

「えらいこととは？」

魚の骨をせせっている人物がきいた。坊主頭の髪が少しのびているが、容貌魁偉。眼玉が大きく、眉が太くて、達磨さながらの髯面。三好清雲入道と此の宿では名乗っている。

「なんでも、墓から生き返った娘御がおって、ご城代さまをやりこめたそうで」

「墓から生きた？」

「んだ。寺内村ではもうそれで村中えらい騒ぎじゃそうでのう」

「その娘、年はいくつくらいか？」

訊いたのは奥歯で大根をかんでいた牢人者である。不精ひげを生やし、たっつけ袴は日焼けして色あせ、初夏というのに厚地の袷を着ているが、目は涼しげに澄んで、わらうと歯が皓い。ここでは由利鎌之助と名乗っている。

亭主は、となりにいる子供がひざにメシ粒を落しているのを、

「もったいないことするでねえ」

叱って、つまみあげ、わが口にいれながら、

「歳なんぞは、ようわからんですがのう……なんせ、お墓のカンオケに死んどったんが生きかえったちゅうで」

「かんおけから生きた？　墓の中の？　ハ、ハ、そんな馬鹿な」

別の客が一笑するのを、

「うんにゃ。うそではねえですだ。うそならご城代さまが言い負けなさるわけがありますかいの」

「なにを負けたのだな？」

「お城で、年とった修験者が無礼討ちにあいなされたそうでのう……それが息を引きとるときに、ご城下にきれいな娘がやって来る、そう言うて死んだそうで、それで、墓から生き返ったんがその娘かいなと、ご城代さまはいろいろ問われたすえ、言い負かされなされたそうで……」

あまり要領を得ない。

「おっ父」

飯つぶをこんどは頰っぺに付けた子が、

「おらも聞いたけんど、そのねえちゃん、お殿さまのお気に入ったたちうでねえけ？」

「ませたこと言うでねえ。だれにそげんこと聞いた？」

「西原を帰んなさるおさむらいが言うとったわ」

「そんならお前さん、やっぱり、話は本当なんかいのう」

女房までが膝をのり出し、それからは他の客を混じえ、うわさ話に一しきり。かえって清雲入道と鎌之助が黙って皆の言うのを聞いていた。

やがて食事がおわった。

魁偉の風貌に似ず三好清雲入道が、

「ご馳走さん……うまかったゾ」

ニッコリ、人なつっこい笑顔で夫婦に礼をのべて、鎌之助ともども一足さきに二階部屋へあがる。

――と、そこに、もう一人、畳へ直かに肘枕で横になった武士がいた。

二

「や。小天狗、いつ戻った?」

部屋へあがった二人へ背を向けた肘まくらのゴロ寝姿へ、清雲入道が目をむくと、

「今すこし眠らせてくれ。疲れたわ」

武士は二人を見向きもせず言って、早やスヤスヤ気持よさそうな寝息を立てている。

「あきれたものよ。三日もわれらを待たせおって……寝業師とは、まこと、おぬしがことじゃて」

いや味を言ったが効く相手でないのはわかっているから、武士から畳ひとつ離れた後方に、清雲入道こと実は三好清海入道、どっかと胡坐になった。

由利鎌之助はまだ立っている。鞘の塗りの剝げた差料を左手に、ニヤニヤ相手を見おろしながら、

「おぬしのことじゃ、眠りながらでも聞こえよう……いま、宿の亭主が話では、才はどうやら上野介に取り入ったそうだぞ」

「――」

「なら……おぬし、もう知っておったか」

あきれた奴……そんな目でニヤッと又しろい歯を見せ、これはゆっくり清雲入道のとなりへ坐った。

ねむりつづけているのは猿飛小天狗。又の名を佐助という。伊賀の忍者である。

真田幸村の麾下にあって六年前、大坂夏の陣に活躍したが勝機すでに豊臣方になく、幸村は嫡男大助ともども討死し、豊臣の滅亡と命運をともにした。真田の勇士海野六郎、根津甚八、望月六郎、それに三好伊三入道ら四名も茶臼山の合戦で主君幸村の馬前に枕をならべて討死した。

幸村には遺姫があった。お万阿といった。

お万阿は大坂城攻防の最中に、天守閣の火中で主君秀頼公らにはぐれ、他の奥女中に紛れて城中を逃げ迷うところを、伊達政宗の武将片倉小十郎に捕えられた。時にお万阿十五歳だった。

お万阿は父幸村の討死を知っていさぎよく自害しようとするが、小十郎に制せられる。敗れた敵将の子女を引取り、しかるべき相手に縁組ませるのは、敵将への武士の情として当時は間々見られたことで、小十郎はお万阿の気品と容色を賞揚して自ら娶ろうとしたのである。

そこで夏の陣の終ったのち、二条城で、家康にお万阿を引き会わせ、あらためて伊達政宗とももどこの許しを乞うた。家康は許可した。なにぶんにも大坂方の猛将・後藤又兵衛、薄田隼人正(岩見重太郎)の軍を攻め破って両人の首級を挙げたのがこの小十郎重綱では、家康も許可せ

ざるを得なかったろう。

かくてお万阿は陸奥に引きとられ、今は小十郎重綱（白石城主）の夫人となって陸奥刈田郡白石にいるという。

由利鎌之助ら真田の遺臣が、こうしていま宇都宮城下にやって来たのは、そんなお万阿さまの近況をたずねるのも旅の目的の一つだった。少なくとも力はあるが無類のお人好し——三好清海入道はそう信じている。大坂の役後六年、世はまったく徳川の天下となったが、大坂方の残党を逮捕せんとの幕府の詮議は今なお諸州で厳しいので、真田十勇士の中でもいささか名の知れ渡った猿飛佐助らは、小天狗、清雲入道などと変名している。

ちなみに、才と鎌之助が呼んだのは霧隠才女——世間では霧隠才蔵なる男の忍者と思いこんでいるが実は『くの一』である。

「もう蚊が出くさるわ。くそッ」

パチン、と清海入道、おのが髯面の首すじを叩いて、

「退屈じゃのう……鎌之助、八兵衛でもからかいに出てみんかい」

ことさら大声に言ったのは、合宿の滞在客二人があがって来たからだろう。

八兵衛とは出女のことである。道中駅舎の軒先に立って、通行人を呼びながら、あるいは街路まで出て旅客の袖を引いて宿泊を強要するのを「出女」といった。むろん娼婦である。旅客が宿に引き入れられると、酌もすれば飯も盛るが、

「四べい四べい」

と春を売りたがるので、合わせて八兵衛という。

『池上や』のような木賃宿には、もちろん、そんな下女は傭われてもいないが、ちかごろ頓に宇

都宮城下に旅人の往還にぎやかなのを当てこんで、いかがわしいのが出没しはじめた。

古い句に、

「出女の七つ下りや更衣」

「出女や昼すぎまでは麦の秋」

とあるように、昼間は畑仕事をする貧農の娘や子持ち後家が多かったというが。

「そうだの」

鎌之助のほうは気がすすまぬのか、坐りこんであごを撫し、いっこうに起とうとはしない。まだ背を向けたままの猿飛佐助へチラと目をやって、

「のう清雲入道」

「なんじゃ？」

「おもしろいことを致そうか」

三

「出女をいたぶる以上に、おもしろいことが、あるかい」

「——あるな」

「そりゃ何じゃ？」

目をむいた。

清海入道は一応、雲水のいでたちゆえ、墨染の衣に、いつも大きな数珠を頸へ下げている。

「——ここの仁よ」

あごで、鎌之助は猿飛小天狗の寝姿を、しゃくって示した。

「小天狗をどうする？」

「あの抱き寝の刀――」

鎌之助はあごを撫でるのをやめない。

「とくと見てみい」

「？……」

「拵えが変っておるわ。三日前ここを出るときは拙者と同様、塗りのはげたんであったろう。それが、見い」

「な、なあるほど……」

中腰で首を伸ばし、のぞき込んだ髯面を清海入道、うしろの鎌之助へ向きかえ、

「どういうわけじゃい？」

「きまっておる。当宇都宮に仕官がかのうたのよ」

「何？」

「――と、拙者はおもうが……」

いつの間にか他の滞在客も目を光らせていた。

滞在しているのは江戸からやって来たらしい官吏ふうな武士に、その伴とも思われる職人である。

大部屋ゆえ各自の携帯品はめいめい寝る位置の傍らや、壁ぎわの、そこを枕にする場所へ置いてある。職人はその置いた道具箱で大工とわかる。

そろそろ蚊が出ようかという季節柄もあって、木賃宿のことでもあり、蒲団はいっさい出されない。各人が携行する振り分け荷から適当な布地や合羽など出し、それを引っ担いで寝るのである。

しかるに小天狗のみは、投宿した時から糒の包みさえ所持せず、たっつけ袴に大小の軽装だった。雲水行脚の清海入道でも喜捨を乞う用意の頭陀袋に大きな網代笠、それに杖がわりの金棒を壁へたて掛けてあるのに。

「本当かいの鎌之助、ほんまに仕官しよったと？」

「そうとでも思わねばこ奴が刀のこしらえなど替えるか？」

「そ、それもそうじゃが……しかしのう」

三日前には、江戸表で内偵することが急に出来たといって、単身、『池上や』をとび出したのである。

通常なら、宇都宮から江戸表まで、岩槻あたりに一泊し、どんなに急いでも往復に四日はかかる。まして江戸表で調べの用があると言って出掛けたのである。忍者のことゆえ想像外の早駆けなのは知っているが、刀のこしらえを替えるだけで数日は要するだろう。

忍者ゆえ、鍔は大小とも独特な大鍔でなければならず、事実、小天狗が抱いて寝ているのは拵えは新しいが鍔は丸くて大きな鉄鍔である。そのくせ、柄糸の巻き様まで三日前とは変わっている。

「どういうことじゃい」

わけがわからず清海入道、チトかんしゃくをおこしそうな濁声でつぶやいたら、

「本人にきくことよ」

「……」

「かまわん」

鎌之助はニヤリとして、

「頭を蹴り起してやれ」

「やってよいかい？」

「やれ、やれ」

「よおし」

ほかの滞在客がさすがに案じ顔で見まもるうち、ぬっと仁王立ちに清海入道、

「オイ小天狗、ちとたずねることあるわ、起」

寝ている小天狗の後頭部へ爪先を当てようとした、途端、

「冗談にもせよ、ゆるさんぞ」

クルッと寝返りの一回転で、彼は、部屋の端の窓ぎわに早や立ちあがり、素早く刀を腰へ落し差すと、

「坊主。武士に向かって頭を足蹴にいたすとは不届きにも程がある。ゆるさん。表へ出ろ」

と言った。身丈はそう高くないが、きりりと緊まった口もと、眉目秀麗、肌は存外に色白く、貴公子然とした小天狗はなかなかの美男子である。年は三十前と見える。

本気で怒る道理がないのははじめからわかっている。だが、いかにも激怒した形相でこちらをにらむので清海入道、いよいよわけがわからず、ポカンと猿飛佐助の表情を見返していたら、

「なるほど怒るも無理はないか、よし、こうなれば拙者にも責はある。……よかろう、かわりに拙者が相手になろう」

言うと鎌之助が、これも差料をつかんでゆっくり、立ちあがった。どうやら二人は芝居をしているらしい……ようやく、清海入道もそう気がついた。

「そうか、よいわい。おれも出てやるわ」

かれは壁ぎわの金棒を把ってわめく。

四

外は、くら闇で、おぼろに八幡山の端に弦月が懸かっていた。

近来、にぎわいを見せる城下とはいえ、五ツ（午後八時）前ともなれば民家はすっかり戸を卸し、灯を消して、閑寂な片田舎の夜のたたずまいに異ならない。

出女の徘徊する様子もない。

そんな暗い、無人の街道を東へゆっくり小天狗は歩き出した。

無言である。

鎌之助も清海入道も黙ってついて行く。

東方には黒い森のように、夜空に宇都宮城の天守が聳えている。

「わるい奴に会うたのだ」

しばらくして小天狗が言った。

「だれだ？」

鎌之助がたずねた。三つの影の中では清海入道がいちばん幅太く、丈も高い。ついで長身の鎌之助で、中央の猿飛佐助が並んだうちでは稍小柄に見える。だがこれとて常人に比すればすらりと逞しい身長だ。

「服部半蔵の、妹よ」

「半蔵？……あの伊賀者のか？」

「うん」
「この城下で？」
「そうだ」
「だれの差し金で来よったのじゃ？」
清海入道がきいた。
「わからんが……ついておった者がわるい」
「？」
「古陰流の柳生新太郎――」
「ふーん」
三好清海入道は、幼少のころ南都興福寺に預けられて成人したから、柳生一族のことは誰よりも知っている。
細川家の守護代に三好筑前守之長という者もあり、この末裔に三好三人衆というのがいた。日向入道仁斎、三好下野守、為三入道の三人で、日向入道の孫が清海入道である。もちろん、歴とした武家の生まれである。それが故あって興福寺に預けられたが、もって生まれた怪力に物を言わせて暴れ回り、ついに寺を飛び出した。そんな強力でも一目置かざるを得なんだのが、同じ興福寺の僧だった柳生徳斎である。徳斎は清海入道より年少にもかかわらず、体術の妙を会得していて、手もなく清海入道を投げ飛ばす。金棒を揮って打ってかかると今度は武芸の早業でヒラリと体をかわしざま、したたかに頭蓋を一撃されたことがある。
新太郎は、そんな徳斎の兄貴だった。彼らの父柳生石舟斎は子沢山で、いま尾張の兵法指南をしている兵庫介の父親の新次郎厳勝（この人は戦場の鉄炮疵がもとでチンバだという）や、五

郎右衛門（伯耆の合戦で華々しい討死を遂げ大いに柳生者の名をあげた）それに又右衛門宗矩と、剣術の達者がそろっているが、中で群を抜いて強いのが長男新太郎厳綱で、
「この兄者にかかったら、わしらはもとより弟宗矩や、おやじどの（石舟斎）さえ三本に二本は取られなさる」
と徳斎が言ったのを清海入道は聞いたことがある。おもしろいことに、石舟斎は、剣聖上泉信綱について新陰流を会得したが、新太郎のみは、なぜか古陰流というのを唱えているそうな。それも上泉信綱じきじきに、新太郎には古陰流を唱えよと告げたという。
いったい、新陰流と古陰流はどう違うのか、剣術のことにうとい清海入道にはわからないが、小天狗の言うところによると、陰流とは忍びの異唱で、忍びの業から表芸の剣術になったのを新陰流、忍びのままのを古陰流と呼びわけているそうな。古陰流はいま伊達政宗のお抱え忍者狭川古弥太に継がれているともいう。
古弥太は、旧くは柳生石舟斎と同格ともいうべき大和国狭川城主・狭川甲斐守の孫で、甲斐守が亡んでのち狭川氏は石舟斎の属将となり、古弥太は新太郎厳綱ともども、もっぱら古陰流の奥旨をきわめたという。歳は、新太郎のほうが年長という。
そんな柳生新太郎が、表芸の剣術でも弟宗矩より強いのでは、古弥太のほうも達人に相違なく、
「だいじょうぶかいな？」
清海入道は猿飛佐助に念をおしたことがあった。江戸を発つ前である。これからお万阿さまの消息をたずねに伊達藩へ潜入するが、そんな古弥太がいて、目的を果たせようかと。
「往ってみないことにはわからんが……まあ、何とかなろう」
さして気にもとめぬ口ぶりで小天狗はこたえたが、この時ほど忍びの天才――彼、猿飛小天狗

を清海入道、頼もしく思ったことはなかったのである。

――だが、今、もう一人の、更に恐るべき柳生新太郎までが、この宇都宮に来ているというのだ。

やっぱり清海入道、この暗い夜道で、小天狗の顔色をうかがい見た。

「おぬし、だいじょうぶか？」

五

「だいじょうぶ？……何がじゃ」

「きまっとろう、その、柳生新太郎めよ」

「――わからん」

「おぬし何処で逢うたのだ？」

由利鎌之助がきいた。清海入道ほどでないにしても、彼もいくらか不安そうである。

「雀の宮であった」

「服部半蔵の妹と、二人づれで？」

「さよう」

「できておるのか二人は？」

「わからん」

「忍びのおぬしでも？」

「ふっふ、ふ……忍びとは関わりあるまい」

しばらく夜道を歩いていて、

「何処へ行く気じゃ」

また鎌之助が問うた。

「わし一人で仙台に行く」

「なに？」

「柳生が現われたのでは宇都宮で、うろついておるわけにはいかん、というて、おぬしらを同道では足手まとい……だい一、日数がかかりすぎる……それでわし一人とりあえずお万阿さまのご様子を見に行くことにした」

「われらを置いてか、む？」

清海入道が大きな声をあげるのへ、

「まあ聞け。わしとて柳生が現われた今、おぬしらを残して行くは心もとないが、じつは宇都宮でやってもらいたいことがある。それを話しておきとうて、こうして一緒に来てもろうた……今宵のうち少しでもわしは足をのばしておきたいのだ」

「――」

「話というのは、城内の動静よ。城普請をはじめたのはおぬしらも知っての通りだが、どうにも、くさい」

「む？」

「本多上野介、なにを心底たくらんでおるか……ただの普請とは思えんのだ、それをさぐりに江戸へ戻ってみたが、大工の人数の集めようにも疑えば気になるふしがある――」

「佐助」

トンと手の金棒を杖がわりに路面へ突いて、

「一度おぬしにたずねようと思っておったが、なんで本多はにわかに普請をはじめよったんじゃ」

「おもてむきは、城郭を堅牢にするためとの理由があるが、実は明年四月、将軍秀忠は家康の七回忌で、日光へ社参の途次、宇都宮城に一泊の予定がある。そのとき疎漏のないよう将軍家を迎える準備と申すのだが……それにしては大工のえらび方に不審がある」

「どんな？」

「普請が出来あがれば、殺すのではあるまいか」

「なんじゃと？」

「仕掛けよ。天井を釣るか、床下をハズすか……わしのまだ想像で言うことだが――」

上野介が宇都宮城主となって、当地は野州の首府であり、奥州路を扼して関東要害の地を守るためにもと、城郭の堅牢を期し、城普請にかかったのは此の年の春であった。城の修築に手をつけるには、たとえ老中なりとも微細にその修築個所を明記して幕府に上願し、その許可を得なければならぬ建て前になっているが、本多正純から提出された修築個所は、二の丸、三の丸の普請と石垣修理のみであった。

しかるにどうやら本丸にも手をつけ、城中殿舎の新築をも意図する様子である。これさえ他の大名なら、謀反の企てありと見られても仕方がないのに更に、正純は外堀に菱を入れ、秀忠を迎える殿舎新築にあたって係り大工、指物師の募集を身軽な独り者ばかりに限定している。それも仕事の腕は立つが遊び好きな、気っぷの荒いのを望み、ただし賃金は並みの倍以上出すと言っているという。

「将軍家を迎えるための殿舎だ、わけても鄭重で万事粗相のない扱いをいたさねばならんのに、

気性の荒い職人ばかりそろえるとは理に合わん。深い裏があるはず、とわしはにらんだ……それで、おぬしらに探りを入れてもらいたいと」

「ふーん。そんなことがあるんかい」

清海入道、鼻孔から太い息を吐いたが、

「さぐると申しても小天狗」

鎌之助が苦笑いで、

「忍び者でない拙者らに」

「わかっている、さればこそ、才に委細を頼んでおいた……おぬしらはただ」

「や。すりゃ才が城へ登ったというは、おぬしが差配してのことかい」

「まあな」

「呆れた男よ。たった三日で江戸を往復するさえあるに、もう才と逢うておるとは」

「シッ」

この時まで、夜道を同じ速度で歩いてきた猿飛佐助が突如、闇の前方を透かし視て、左右の二人を両手で、制止した。

「出よったわ……さすがは柳生新太郎……もう早回りしておるワ」

「な、何じゃと？……」

六

ちょうど八幡山のふもと近くにさしかかっていた。

鎌之助と清海入道は瞳を凝らして前方をすかし見るが、一面の暗闇で、なにも見えない。

「……佐助、いったい奴めは、どこにおるんじゃ」

佐助は「シッ」と又そんな清海入道を制し、少時、闇の一点を凝視してのち、

「おぬしらは此処を動くでない。よいな」

言うと、単身、ゆっくり歩き出した。

のこった二人は全身を耳にし、暗がりに消えて行く背姿を見まもるほかない。

「……鎌之助」

「ん？」

「ひとりでやって、大丈夫かのう」

「わからん」

「おぬし投げ玉は？」

「それは、持っておる」

由利鎌之助は丹波天田郡の生まれだが、むかし、出羽の豪族に由利八郎なる者あり、自分はその末裔といっている。まだ真田幸村が九度山にひそみかくれていたころ、いちど、源義経から賜わったという由利家重代の鎧透しを主君幸村に披露するのを清海入道は側近にあって、見たことがあった。

そのとき何やら古めかしい系図も鎌之助は披露していたが、生い立ちはともかく、火薬を仕込んだ握り飯ほどな投げ玉を製するのが鎌之助の得意で、且つはこれを投げるのが彼の『奥の手』である。

ずいぶん炸裂範囲が広いのも他の追従をゆるさぬところで、常時、そんな火薬玉一個を網嚢におさめて彼は携行している。

不意に、前方で捷い足音が駆けめぐった。何処をどう走っているのか見当もつかないが、あきらかに、足音は二人。

草むらを駆け、大地を蹴り暗い虚空を跳ぶ感じの、そんな絡みが少時、闇夜に繰りひろげられたあと、

「——さすがは伊賀の小天狗……見事な業よ」

「おぬしこそ」

「どうじゃ、この場は相別れにいたそうか」

「そちらで望むなら、当方、異存はない」

「そうか」

それからしばらくして、

「伊達へ潜入いたすのか」

「そうだ」

「ふ、ふ、ふ、古弥太が喜ぼう……かねて其許との立合いを、あれは待ちのぞんでおった」

「——」

「ところで仙台はよいが、あの髯の小父さまらと当地を徘徊いたす真意は、何だ」

「おぬしこそどうして宇都宮へ来た？」

「きまっておろう、埋蔵金よ」

「ぬ？」

「とぼけるな。伊賀の小天狗が本多の心底さぐるだけに、ここらをうろつきはすまい」

「——」

「もう一つ申しておこう、今日、城中へ登った白髪の修験者、身共と謀(しめ)し合わせた上のことであったが、果敢(はか)ない仕儀と相成った……この始末は当方でつける。かならず、つけてみせるが、それに邪魔立てさえいたさんのであればおぬしらのすることにも、当方、いっさい手出しはせん。このこと刀にかけて誓うが、どうだ」

「いいだろう。才のいたすことに目をつぶってもらえるのなら」

「才か。ふ、ふ、ふ……霧隠才蔵が『くの一』とは、いかな身共も今日まで知らなんだ……いや、よい女子(おなご)よ。ハ、ハ、ハ、ただし、上野介に取り入ったは申さば修験者が死のたまもの……これは佐助、おぬしへの貸しじゃぞ」

「――」

「それと埋蔵金……ありかを其許さきに見つけたら一応は当方に報らせてもらうこと。その上で、始末はいかようにも其許の胸三寸にまかせるが――」

「わかった。わしがもし早う見つけたら、必ず、しらせる」

「そうか」

それから一時の沈黙があって、

「では仙台への、ご無事を祈ろう」

ついでに、髯のオジサマにもご挨拶(あいさつ)しておこうか――そんなつぶやきが聞こえた瞬間、闇のどこからともなく手が伸び、清海入道のあごひげが毟(むし)られていた。

「たはっ。痛、て、て、……おのれ何をする」

ハ、ハ、ハ……哄笑(こうしょう)ばかりが風のごとく側(そば)を通りぬけ、ついに柳生新太郎の面貌さえ窺(うかが)い見ることはかなわなかった。

小天狗がいつの間にか目の前に現われ来て、立っていた。可笑(おか)しいらしい。

「ヒゲの小父さま……では、参ろうか」

「おぬしまでからかうんかい。糞(くそ)ッ、……じゃが佐助、今の、埋蔵金というのは一体、なんじや？」

「本多正純がかくしたのよ、久能山(くのうざん)にあった十万両をな」

「本多が？」

「ま、歩きながら話そう――」

御遺金

一

本多上野介正純は、前にも述べたように、大御所家康が駿府城内で薨じたとき、寵臣としては唯一人その枕頭にいた。そうして遺言なるものを聴いた。

二代将軍秀忠をはじめ三河以来の、徳川の名臣――酒井忠世、井伊直孝、土井利勝、大久保忠教らは、いずれも江戸にいて臨終に立会っていなかったし、徳川幕府創成に大功あった本多平八郎（槍）忠勝、榊原式部大輔康政、井伊兵部少輔直政らはすでに世を去っている。家康の薨じた時点で、幕府第一の重臣は、したがって『徳川の知恵袋』といわれた正純の父・本多佐渡守正信であり、しかも正信は家康薨去の二か月後、神君の跡を追うように江戸邸で世を去ってしまった。

そうなればもう、正純にこわい者はなかったといっていい。

正純は元来が父におとらぬキレ者である。こんな話がある。

江戸城下で夜毎、辻斬りが徘徊し、民衆大いに動揺して不穏の気配があるとのうわさが駿府に伝わって来た。

家康は、どうせ気の荒い旗本どもの致すことであろうが、武道奨励のおりから、いちがいに叱ることもならず、どうしたものかと対策に苦慮していたら、当時まだ弥八郎といった近侍の正純が、

「辻斬りをやめさせるだけなら造作もないことでございます。それがしにお委せをねがいまする」

「士気を損なわずにやれるか？」

「御意」

家康は、ならばその方往って止めてみよと言った。弥八郎は早速、江戸城におもむいた。そうして全旗本を城内大広間に集め、こういうことを言った。

「ちかごろ当江戸市中にて、辻斬りが徘徊いたすよし。大御所さまの仰せには、江戸の旗本が腰抜けぞろいにも困ったものよ、腰抜けでなくば何条、浪藉者を放置いたすことがあろう。辻斬りなどいたすは、いずれ浪人者の仕業に相違ない。将軍家お膝もとにありながら、誰一人、さような浪人者を成敗いたす勇者もないとは、嘆かわしいしだいである――そう申され、いたくお嘆きあそばされてでござる」

聞くなり、その夜から辻斬りを働く旗本はいなくなった。

又――

名古屋城を構築の際、さる大名の運んだ石垣用の巨岩が、人夫の人数足らず路上に置き去りにされて、他の者らの通行をさまたげ大いに迷惑していた時に、通りがかった弥八郎が、この岩を始末するには人夫五人程度もあれば足るべしと言った。聞いて別な大名の家士が、

「たった五人にてこの岩の始末、もしつかずば何と召される？」

食ってかかると弥八郎は、

「お手前より人夫五名かし下さるなれば、明朝までに通りやすく致すこと造作もなし」

と。

「武士に二言はござるまいの？」

念をおして、くだんの家士は弥八郎に五名の人夫をかし与えた。すでに日は沈もうとしていた。

翌朝、家士が出向いてみると何と跡方もなく巨岩は始末され、人々はもっこなど担いでその場を往反している。家士はあっ気にとられ、ようやく真相をさとった。路の左右は築いたばかりの高い石垣で、巨岩を積みあげられるわけはない、それで忽然と岩が消えているのは、地中に埋めてしまったのである。人夫五人で穴を掘れば岩を埋没させるのは造作もないことだった。今更に家士は、弥八郎の頓智にしてやられたのをさとったという。

そんな、奇略縦横の正純で、大坂冬の陣に、和議成るや外濠のみか内濠をも埋め、夏の陣を有利にしたのは人の知るところだが、さて家康薨去のあと、正純の取った処置に謎の行為が一つあった。

御遺金の始末である。

家康が亡くなって、駿府城での跡片付けを正純ひとりが取りしきったことは前にも述べたが、正純は、駿府にあった宝物や金銀の類を、尾張の義直、紀州の頼宣、水戸の頼房に『形見分け』として分与したあと、かんじんの将軍秀忠には何ひとつ与えず残りを全部、久能山へ納めてしまったのである。

これを〝御遺金〟といい——申さば家康のへそくりで、金額にしてほぼ五十万両あったという——それを江戸城へは運ばず、独断で（正純自身は「大御所さまのご遺言なり」と称して）久能山に納めてしまった。そうして正純は新たに将軍秀忠の老中職となって江戸城に移ったが、御遺金のことは猫をかぶり、知らんふりで通そうとしたのである。だが御遺金の一部はすでに尾、紀、水のご三家に分けられている。猫をかぶりおおせるわけがなく、土井利勝らが追求して、あらためて久能山へ御遺金がとどこおりなく納められているかどうかの、検使が差し向けられた。

結果、たしかに其処には千両箱が山と積まれていたが……

二

「その千両箱の山、どうなったのでござる？」

ここは宇都宮城下のはずれ——

とある古びた寺の境内に建つ観音堂の中である。

蔀戸は閉ざされ、小さな灯が一つ、今にも消えそうに三つ叉の燭台でゆれている傍らで、二つの影が対坐していた。

ちょうど猿飛小天狗が埋蔵金のいわれを、清海入道らに説明していたように、柳生新太郎もあらましを語っていたのだ。

聞いているのは忍び装束に身を固めた黒覆面の忍士。年かっこうは装束に包まれて定かでないが、さびた声に若さがみなぎっている。仙台藩のお抱え忍者狭川古弥太である。

対する柳生新太郎は、これも忍び装束ながら古弥太のように刀を背に負うてはいない。わりと小さな脇差を帯するのみ。ただし肌には鎖帷子を着込み覆面のままで胡坐している。体つきは、やや新太郎が大兵である。

「いまの話よ……千両箱はべつにどうもなりはいたさなんだがの」

新太郎の声が言った。「果して、そこに納めたままであったかどうか――」
「？……」
「わからんか。御遺金がはじめは何十万両あったのやら、じつのところ上野介のほかに誰も知らぬ……神君を除いては。尾張、紀州、水戸ご三家に、形見として分けられた額は〆て十一万両と申す。つまり尾張に五万両、紀州と水戸家にそれぞれ三万両……とすれば、久能山に納めてあったのと合せたのが御遺金の総額と相成るが」
「いかほどあったのでございますか。その、検使がしらべ申した千両箱――」
「〆て二十八万両じゃそうな」
「すると合計三十九万両が？」
「それよ。神君が御遺金は、ほぼ六十万両――少なく見積もっても五十万両は下るまいと見られておった。これは井上主計頭が駿府へご機嫌うかがいにまかり上った節、直に神君より確認つかまつったと後日、主計頭より秀忠公へ言上しておる。他にも久能山に千両箱を運んだ役人が証言にても、その数四百はくだらなんだ……してみれば形見分けののち、なお四十万両が久能山には納められたはず。しかるに検使が勘定の時それは二十八万両になっておった……」
「十二万両を、つまり上野介どのが着服めされたと？」
「思うほかはあるまい……が、証拠が、ない」
「何と申されます。千両箱をはこんだ役人が見届けた――」
「死んだのよ、割腹いたしての」
「！」
「四百を数えたは自分の計算ちがいであった、そう申して、お詫びに」

「しかし数えるくらいは、子供でも出来ることではござらぬか」
大きい影が、くびをふった。灯はこの時もう消えてしまっていた。
「何と申そうと今となっては証拠がない。役人を自害に追いやった者、あるいは真田の残党ではあるまいか――そう思われるふしもあり、こうして実は奴らを尾けて当宇都宮までまかり下って参ったが……先程、小天狗との話し合いにてどうやら彼等の仕業ではないとわかった」
「ではいったい、誰が？……」
「わからん。こうなれば隠匿された十万両が埋蔵場所を突きとめるほかない。――そこで、わざわざおぬしにこれまで来てもろうたが、いまも申す通り、猿飛小天狗、単身、仙台領内に潜入いたすとあいわかった……何をしに参るのか、お万阿さまが消息をたずねるのみと彼は申すが、心底のほど未だ判じ難い、そこで折角ではあるがおぬし再び仙台領へ引きかえしてもらいたい……それも出来るなれば小天狗が動静を監視しつつな。さいわいあれはまだ、おぬしがこれまで参っておるとは知らぬ。多分は、まだ顔も知るまい」
「われらも会うたことござらぬが、猿飛佐助を相手とならば術を競う上にても本望。お申しつけの儀はこの古弥太いのちに代えても達しましょう」
「そうしてくれよ、おぬしが引受けてくれるなればわれらも心丈夫。当座は、この地にあって上野介が意中ならびに埋蔵場所をわしは探る。あれだけのキレ者じゃ、いずれは城普請を理由に十万両、宇都宮城のどこぞにかくしておるに相違ないが」
「ひとつ、おたずね致してようござりまするか」
「何じゃ？」
「本多上野介が意中――と今申されましたが、それそも幕府老中でもある上野介どのが何ゆえ、

御三家にのみ形見分けをなされ、将軍家には一文だにお渡しなくて御遺金を、ごっそり久能山などへ？」

「それよ、話せば長いことになるが、つづめて申さば越前宰相どの――」

「えちぜん？……あの、ご乱心の忠直卿がこのことに？」

「そうよ」

黒い影は重々しくうなずいた。

三

将軍秀忠には、上に二人の兄があった。

長兄を岡崎次郎三郎信康といい、家康の正夫人（築山殿）が生んだ唯一の嫡子である。幼名を竹千代といい、織田信長の女を娶って岡崎城主となったが、生母築山殿が今川氏の一族である関係から、たえず信長に猜疑の目で見られ、天正七年、ついに十二の罪状をその妻が父信長に告げたことから、大いに信長の怒りをかって死に追いやられた。

武田勝頼と協力して信長を滅ぼそうとしたというのがその罪状の第一である。

信康は死に臨んで、

「自分に過失はあったかも知れないが織田殿へ叛逆のことは断じて身におぼえなし、無実の罪に問われるは無念である」

と。

だが家康は当時はまだ信長への遠慮もあって、敢て信康を見殺しにした。時に信康二十一歳であった。

次兄が、越前の秀康である。

秀康は兄信康の自害する五年前に生まれた。生母は築山殿の召使った女中お万の方（小督の局ともいう）で、双子だった一方が死に秀康のみが生き残ったのである。のちに豊臣秀吉の養子となり、秀吉の一字を与えられ父家康の字とあわせて、秀康と名乗ったわけだが、しだいに昇進して天正十八年には、下総の国結城の城主・結城晴朝の養子となったので世に結城中将秀康という。関ヶ原合戦に際しては、宇都宮に陣し会津の上杉景勝の西上を押えたのが秀康である。この功で天下平定後は、越前一国ならびに若狭、信濃の一部を併せて七十五万石を与えられ、慶長十四年四月、越前北ノ庄で歿した。歳三十四だった。

秀康は、天性英邁で、大志あり、人倫の道に志あつく、智勇抜群、戦場に臨んでは英断果毅、鬼秀康と怖れられた。広く人材を用い、深く士卒を愛し、治国の主となっては士庶の風儀を正し人民を撫育して、農桑の業を励まし、一代の名君とたたえられた。

にもかかわらず、弟秀忠に将軍職を奪われたのである。

内心それが不満らしくて、将軍職が決まってからは女歌舞伎の出雲の於国などを招いて酒宴に明け暮れ、じつは密かに豊臣方に誼を通じて、大坂城の秀頼を弟として、万一の場合は生死をともにする決意を秘めていたといわれる。

忠直卿はこの秀康の嫡男である。父の死によって越前一国六十七万石を領し、大坂両度の合戦には家康の馬前にあって、奮戦し、大功を立てた。その軍功に対し家康より当座の賞として初花の肩衝を与えられ、追って領地を加えるべしと約されたので、忠直はこのことを家臣らにも告げ、追っての御沙汰ありしだいに何某には何千石の加増、何某には千石をと言い渡していた。

しかるにその後、家康からは何の賞与もなかったから、戦功の誇りを傷つけられまた家臣にも

面目も立たず、大いに不平懊悩して、しだいに乱心の振舞いをあらわすようになった。侍女を容赦なく手討ちにしたり家士の鼻を削ぐなどしたのはこの時である。本来なら、父秀康こそ弟秀忠を措いて将軍職を襲ぐべしとの思いは、忠直にもあったわけで、家康なき昨今は病いと称してほとんど江戸に参勤せず、将軍家に対しても不遜の行ないが目に余っている。

ところで、さきに秀忠が二代将軍と決められたとき、天下人にも長幼の序あり、当然、将軍職は結城秀康どのこそ然るべしと正論を吐いたのが本多正純だった。

寵臣の正純のこの正論には、一時、家康も手を焼いたらしいがまだ弥八郎時代の弱輩でもあったので、弥八郎の正純をやりこめてこう家康は言ったという。

「そちの申すところは道理であるが、併し弥八郎、武家には惣領庶子と、庶子の惣領と申すことがあるぞ」

「それは、どのような意味にござりまするか？」

「つまりじゃ、秀康はなるほど岡崎次郎三郎亡きいまは、最年長ではあるが、秀康には同腹の兄弟がない。しかるに秀忠は三男ながら同腹の忠吉（秀忠より一年下の弟）がある。同腹の兄弟があれば、万一、将軍家に事あった場合も世継ぎは円満にはかどるであろうが、兄弟なくば御家騒動の因となるものよ。されば天下は乱れる。よって弟とても惣領たる秀忠を将軍にあい定めるのじゃ。何事も後顧の憂いを絶つが深慮と申すものよ」

多少、詭弁のきらいはあっても父たる家康にそう言われては臣たる身で正純に駁しようはない。

かくて二代将軍は秀忠と決まったわけだが、自分が将軍職をつぐのに猛反対した正純を、内心、秀忠が快くおもわないのは人情であろうが、同様に正純もまた、将軍家をうとんじる心のあったのは自然のなりゆきとでも言おうか。

——それが、御遺金をことさら久能山に納めて秀忠には渡そうとしなかった一つの理由だと、柳生新太郎は言うのである。

「かえって越前忠直卿に、ひそかに誼を通じているふしがあるのよ」

と。

四

「なるほど」

聞いてみれば気の重くなる話である。

いわば天下を平定しながら、同じ徳川に血のつながる身でお家相続を争っている。それに譜代の重臣・本多上野介正純が一枚かんでいる……

「若」

古弥太はしばし沈思ののちに、

「話のおもむきはあらかた了承つかまつってござり申すが……それで、真田の残党らは上野介どのにいったい何を？」

「それはまだわからん……おぬしに来てもろうたもその辺を共にさぐるつもりであった。埋蔵金十万両と上野介の真意——それに越前忠直どのの乱心がどこぞで真田の残党と結びついておりはせぬか、すみやかにしらべてくれよとの月の依頼をうけたでの」

「月とは？」

「ふ、ふ、ふ、それはまだおぬしにも明かすわけには参らん……が、時節が来れば、いずれおぬしの前に月殿みずから姿を現わされよう。——今は、これ以上はきかずにおいてくれんか」

「わかり申した」
一刻、暗やみの中で二つの影は無言のうちに対峙して、やがて、
「ではそれがし、猿飛を追うて奥州路を疾り申すが」
「そうしてくれよ」
「その前に、若」
今ひとつおたずねを仕りたい、と古弥太の影が言った。
「何なりと訊いてくれ」
「玄覚坊が死骸の始末は何となされます？」
「復讐の意味か？」
「――御意」
「無理もない、あの老人、おぬしには祖父であったな」
「は、……」
「わしとても手塩にかけてもろうたこともあり、妖術のいくばくかはあの白髪頭に教えてもろうた……おぬしが言わずとも、このままで捨ておくつもりはない。だがの古弥太」
「？」
「朋友ともども田楽刺しにいたすとは、刺される方も忠臣ながらよくぞ心を鬼にして刺したものよ……敵ながらその心底、天っ晴れとわしは思う……武士の身として、どうもな、さような忠義の士にはわしは弱い……すぐ痛めつける気にはなれんのよ」
「それで布由どのに始末を？」
「それもある。服部半蔵の妹とてあれは腹ちがいの末娘……歳はまだ十九じゃ、忍びの業も身についてはおるまい……駒井勘兵衛と申したか、玄覚坊を刺した藩士に、ハテどこまでせまれるか……強敵もいることであれば」

「――強敵？」
「霧隠才蔵よ」
「な、なんと申されます？」
「そう目の色を変えるな。は、は、は……いかにもおぬしが言うていた通り、才蔵まことは女子であった、それもみめうるわしい、佳いおなごよ」
「――」
「だがな古弥太、いまは布由にまかせておかんか。布由にはいわばはじめての相手じゃ。いずれ、おぬしには戻ってもらわねばならぬ時が参る、その上にて、女と存分に男女の秘術を尽くし合うがよい、そうであろう？　当座は、布由にまかせてやれ」
声は、どちらも闇に溶けてしまいそうな低いやり取りである。忍び者には充分すぎる声量だったろう。
「わかり申した……」
やがて小さい方の影が言って、
「それでは、それがし」
「そうしてくれ。猿飛の足じゃ、こんな話のあいだにも随分もう遠く往っておろう。追いつくまでは古弥太、精いっぱい走るのじゃ」
「心得申した」
言って二つの影は、ほとんど同時に床板をしずかに蹴立ち、蔀戸を開けた。

先ず狭川古弥太がパッと闇の外に飛び出した。

ついで古陰流の達人柳生新太郎が、これは音もなく観音堂の屋根の上に跳びあがって、立っている。古びた瓦の一枚がわずかにメリッ、と軋んだ程度、恐るべき軽捷さであった。

「ではこれにて」

「おう、心して行けよ」

言って、

「あ、待て」

「？」

「知らせることがあった、猿飛佐助、目縛りの術というを、つかうぞ」

「？」

「よくはわしにもわからんが、ひと睨みで当方が手足の自由を奪う、ふしぎの術よ。さいぜんわしも危くそれに懸りそうになったワ……気をつけいよ」

五

忍者はいったい、どれ程の早さで走るものか？

石川県小松市の養老院に一老人がいた。あだ名を韋駄天の勇松、本名北出亀松老といった。

この老人のもっとも代表的なものとして伝えられる記録は、明治二十七年六月二十五日、奥州二本松から芸州広島まで、三百二十五里（約千三百キロ）を三十六時間で走破したのと、明治三十五年十一月十九日、東京不忍池の池畔一周（一里三間の）コースで行なわれた午前四時から午後四時まで十二時間の耐久競走で、約百二十周して全国から集まった韋駄天どもを瞠目させたこ

とである。世界マラソン選手が、当時、二十六マイルのコースに約二時間半を要したことで見ても、平均時速十里（約四十キロ）の勇松の早足は信じられない程だ。

彼の早い理由としては、心臓が滅法つよかったこと、全国の地理にくわしかったこと、近道を知っていたこと、わきめもふらず真っすぐ走ることなどが彼自身の口述で挙げられているが、小松の料亭『小六庵』の女将の言葉に、

「見ている時はそんなに早いとも思いませんが、いつの間にやら遠方に走り去っているので、その恐ろしい早足はけっして嘘いつわりじゃありません」

と述懐していることで見ても、とにかく日本一の早駆けであったことは確かである。

この老人が述べている「全国の地理にくわしく」「近道を知り」「真っすぐ突っ走る」ことの出来たのは、まぎれもなく忍者の特技だろう。しかも老人は勇松の名のように実は忍者ではなくて、若いころ角力取りだった。それで忍者の特技に通じればこれだけ超人的な早駆けができたのである。

本物の忍者が、いかに想像を絶する疾走を為し得たかを、うかがうに足るこれは挿話だろう。

二本松から広島まで勇松の足で三十六時間なら、夜のしらじら明けに、猿飛佐助はもう仙台城下を疾駆していてもあやしむにあたらない。そんな佐助を追って、どれほど狭川古弥太が力走しても追いつき得なんだとしても。

つまり柳生新太郎と観音堂の前でわかれたこの夜、ついに古弥太と佐助が目見えることはなかったのである。

ところで。

御遺金の真相を新太郎が古弥太に語っていた同じ時刻——

駒井勘兵衛に、夜中、城中からのお召しがあった。

勘兵衛はいかに妖僧を仆すためとはいえ、竹馬の友を芋刺しにしたことで、心暗く、せめては鈴木新八郎の冥福を祈らんものと、斎戒沐浴のあと、書院に経机を据え、それに小壺を載せ線香を立てて、静坐瞑目していた。

武士なれば涙は見せなかった。

勘兵衛は老母ひとり子ひとりの二人暮らしである。老母は、城中で何があったかをもう知っていたが、そのことで息子に何も問わなかった。もともと彼女は以前は将軍秀忠の御台所（夫人）江与の方に仕えた老女だったが、江与の方がたいへんな焼きもちやきで、将軍のお手のついた女中が妊娠したと知ると、欺いて彼女を一室に招き寄せ、焼火箸で女中の腹を刺して殺してしまった。それを目撃して、いっぺんに嫌気がさし、お暇をもらって勘兵衛の父駒井外記に嫁いだのである。すでに二十八だったという。そして二年目に勘兵衛が生まれたが、同じ年、外記は急逝した。以来、女手ひとつで彼女は勘兵衛を並以上に厳しく育てた。

城中からお召しの使いが来たとき、彼女は先ず別室へこの使者を通し、

「お召しのおもむきは？」

と問うたそうである。

使者は近習の児小姓で、

「存じませぬ。ただ殿より、勘兵衛どのを呼んで参れと」

「殿は奥に入られましたのか？」

「いえ、今宵は中奥にて御寝あそばすよしにござりまする」

それを聞くと、鉄漿の歯でわらって目を細め、

「お役目大儀。待っていて下されや」

いったん奥へ消えて、何やら衣裳の支度を整えてから、はじめて静坐瞑目する息子の後方に坐り、

「勘兵衛どの。城中よりお召しじゃぞえ。支度をめされ」

その支度というのが下着は白無垢の死装束なのに、一瞬、勘兵衛は顔色を変えた。

老母は何も言わなかった。

むすこも黙ってそんな母を少時、見返したきり、

「心得ました」

起って身支度にかかった。やがて登城のいでたちになると、更めて経机の壺に一本、線香を立ててから、

「母上。では行って参ります」

六

老母は玄関まで勘兵衛を送り出した。

式台わきに端坐して、

「気をつけてお行きなされや」

「新八郎どのが冥福はこの母がねんごろにとむらいまする。よいか、殿がいかようなこと仰せあろうと、未練な振舞いせぬように、駒井の家名を汚さぬよう頼みまするぞえ」

「心得ております」

勘兵衛は言って、目礼すると、それより使者の近習と連れ立ち、中間の提灯に足もとを照ら

させて城へ登った。

侍屋敷は同じ宇都宮城内の外郭にある。朧ろの弦月がここでも夜空に懸かっていた。黙々と石垣沿いの道を勘兵衛は登った。所々に城普請の工事中の土が道のわきに盛られていた。

元来、鈴木新八郎のほうが主君上野介にはお気に入りであった。当座は妖僧を刺したことでお褒めを賜わったものの、時間が経てば、これが新八郎と勘兵衛が入れかわっていたらと未練のおもいが、殿の胸中にきざさぬものでもない。新八郎を惜しむあまり、いっそ勘兵衛の生存を憎悪あそばすこともあろう――そう母は考えて、自分に死装束を着せたと勘兵衛は思っていた。もちろん、いかなるお仕打ちにもいさぎよく勘兵衛は服する覚悟でいた。

本丸の殿中に入った。

さすが夜ともなれば城内は森閑として、大廊下の長押の諸処にほのかな網行燈の灯が揺れているばかり。四囲は暗い。茶坊主がそんな大廊下の片隅で居眠りしていて、勘兵衛の足音にあわてて坐りなおり、出迎えの平伏をした。

「こちらでござります」

使者になった近習が、廊下を幾まがりかした中奥の、灯のもれる座所の手前で、

「――どうぞ」

と道をゆずった。

そこは、正純の、ふだん、休息の間で、いわば私室である。さすがに勘兵衛は緊張し、

「駒井勘兵衛ただ今参着つかまつってござる。――御免」

廊下の外で声をかけてスルスルと伏し目で進み入り、程よいあたりで平伏した。

「おォ参ったか。待ちかねておったゾ」

意外にも正純は上機嫌だった。

「苦しゅうない。勘兵衛、近う」

「はっ」

応えて、さらに数歩すすみ入り御前ちかくに着座すると、正純は酒盃を手に、脇息にもたれてお側の女性に酌をされていた。

その女性は黒髪を背に垂らし、百姓娘のような鄙びた着物に、帯だけは華美な錦帯を前結びにして、城中では見たこともない姿ながら双眸はつぶらで、黒燿石のごとく、鼻すじ通って、どこか神秘的な微笑を口もとにうかべた絶世の美女である。

主君の手前、彼女をジロジロ見るような勘兵衛ではなかったが、チラとその美眸と目が合ったとき、何故だろう、めまいがしたのを後に勘兵衛は思い出す……

「一献とらせる。才、酌をいたしてやってくれよ」

正純は声まで明るかった。一気に飲み干した酒盃を勘兵衛へつき出して、

「受けるがよい」

勘兵衛はうやうやしく両手で取り、美女は一段高いお側を勘兵衛の前にさがって来て、瓶子を傾け、なみなみと注いでくれた。その白い指が容姿ににず節くれて、霜やけの跡のようなうす痣があるのを勘兵衛は見のがさなかった。やはり農家の娘であろうかとおもった。

「勘兵衛」

正純はヒク、と眉をあげ、

「どうじゃ、それなる女、当地近辺では見かけぬ美形であろうが」

「……」

「その女子はの、そちを敵と悪んでおるぞ」

ハッと目をあげ、主君から傍の美女へ視線をもどすと、

「ハ、ハ、ハ……うそではない。それなるは名を才と申してそちが今朝がた刺殺いたしたあの修験者の孫娘じゃ」

「何と仰せられます？」

「それも墓から生き返って参った」

「？」

「うそではない。城下寺内村あたりで大騒ぎいたしておるぞ。小田島監物までが、問答のすえ、そちが刺した老人の孫に相違ないこと得心いたしたわ」

「御城代が、でござりますか」

「そうよ」

とっさには、まだそれでも信じかね、半信半疑で娘を見詰めるのへ、彼女は、神秘的な笑みを口に湛えたまま、じいっと勘兵衛を見返す。

又、くらくらと目まいしそうになった。

「勘兵衛」

その様子を眺めて、満足そうに正純は、

「夜中、そちを召し出した用件じゃが――」

七

「そちはまだ独り身であったの？」

「――は」

「嫁をさずけようか」

「？……」

「ハ、ハ、何というかおをいたす。本心で申しておるぞ」

「――」

「そちは、予にとってかけがえのない家来……新八郎も愛い奴であったが、そちとて予の股肱の臣であることに変りはない。予はそう思うている。さようの家来を、ムザと死なせとうはないでの。いっそ、仲直りが致せるならと――」

「仲直り……？」

「これなる女よ、名を才と申すがの、そちは祖父が仇ゆえ、いのちを貰いうけると申しおる、まことじゃ。か弱い女の身でそちほどの丈夫を討てるかどうか……予は鼻さきで笑うてやった。――すると、予の許しさえあるならば必ず討ち取ってみせると申しおった。――そうであったな？」

正純は瓶子を持って、そばへ戻った女に視線を向けた。

彼女は、妖しい笑みを口もとにうかべ、勘兵衛を見詰めながら、コックリをする。

「そこでじゃ勘兵衛」

正純は何故か薄笑いをうかべて、

「いちがいに空威張りしておるとは思えぬふしもあり、いっそ、そちと夫婦にすればまさか亭主を殺しもすまい、そう存じての、今宵これにてそちと娶そうと思うが、どうじゃ」

「おことばを返すようながら」

しばらく、じいっと主君の顔を見まもりつづけて、
「そのため、夜中それがしをお召しなされたのでござりまするか？」
「そうよ」
「それだけで？」
勘兵衛の目にはただならぬ光があった。
「との」
ゴクン、と咽喉ぼとけで何かをのみこむと、
「それがし、たとえ討たれるとも夫婦になることいやでござる――と申しあげましたら？」
「ハ、ハ、ハ」
突然、正純は声を立てて笑い、
「やはり、いやか。ハ、ハ……そう言うであろうと予も想うていたわ。ハ、ハ、ハ」
ひとしきり、閑寂な城内の夜気にこだまする笑い声をひびかせて、
「じゃがな勘兵衛」
にわかに笑いやむと、
「されば此の場にて、この女と真剣勝負せよと申したら、受けるか？」
「！……」
「そちは負くるぞ。それでも、よいか」
「――本望にござる」
勘兵衛は即座に、
こんどは正純がじいっと勘兵衛の面を凝視した。

「よし。ならば勝負をいたしてみよ」
「武器は？」
「無手じゃ」
「？……」
「そちは腰の脇差をつかえ。なれど女は無手で立合う――いや、玉じゃ、そちが刺した修験者の所持したあの玉で、女は立合うと申しておる」
勘兵衛は信じられぬ目つきで、女を見た。
口辺の妖しい微笑をそのまま、彼女はまたコックリをしている。
武士の意地がムラムラと勘兵衛の胸に燃えたのであろう。
「心得申した」
言って、
「――場所は？」
女をにらみつけた。
「お前さまの望まれる所なら、どこでも」
「――ぬ」
「さればじゃ勘兵衛、この場にてせい。広うはないが女子を相手には充分であろう」
鶴の一声である。
「――心得ました」
こうして勘兵衛はふしぎな女と立合うことになった。彼女が真田の残党――『くの一』の霧隠才蔵とは知るわけがない。ただのふしぎな田舎娘と思っているから、御前を数歩後退して、おも

むろに腰の脇差へ手をかけ、肩衣は脱がず女をにらみつけて、

「イザ。どこからなりと懸って参れ」

彼女は、ゆっくり正純のそばを起った。存外すらりと背は高かった。勘兵衛には聞こえなかったが、二言、三言、なにか正純と会話してから、黒髪をなびかせ裾をひるがえしてヒラリとお側を離れたと思うと、

「あっ。……」

勘兵衛が瞠目する面前へ、まるで、幻が飛ぶように移り来て、立っている。わが目を勘兵衛は疑った。虚空を躍るはずみに裾が乱れ、白い脛が見えたのは確かだった。それはだが、幻覚としか思えない。第一、虚空を飛来してピタッと立った彼女に、呼吸のみだれも、畳をふむ足音もしなかった。

人間業ではなかった。

「いったいこの女、何者？……」

八

勝負は、対き合った時すでについていたというべきである。

駒井勘兵衛も馬鹿ではない。

女の身軽さ、彼と対決してあくまで微笑を消さぬ涼やかな双眸。たしかに武器はたずさえないがいつの間にか、その右手に載せている瑪瑙にたあの赤い玉を見たとき並はずれた武芸の心得のある女性なのを察した。

何よりも、そんな勘兵衛と彼女との対決を主君正純は、まるで楽しい見世物を眺めるように、

目を細め、酒盃を傾けて見物している。場所はお座所の次の間にあたる十畳余の座敷である。片側は、さいぜん勘兵衛がはいって来た廊下。天井は、城中だから、かなり高いが、それでも襖を開放した上に、透し彫りの欄間がある。

脇息にもたれる主君のお側から、身を躍らせ、次の間の勘兵衛の面前に飛来して立つのに、異常の人間なら欄間に頭をぶつけるだろう。女はそれを、一瞬に虚空を躍って、立っている。

あきらかに、そんな女の早業を満悦そうに主君はご覧になっていたのだ。

「どう致した勘兵衛……挑まんのか？」

御座所から声がかかった。

脇差にかけていた手をはなしパッとその場で勘兵衛は主君に向って平伏した。

「との」

それがしの到底およぶところではござり申さぬ……お咎めは、いかようにもお受け仕りまする……勘兵衛は言って、畳へ額をすりつけた。

幕府の知恵袋といわれた本多正純である。正純も又、凡器ではない。

いっ時、平伏する勘兵衛を見やって、

「そちは勘兵衛、まだ女に勝てるつもりでおるな？」

「……」

「いいや、勝てはせずとも相討ちの覚悟は決めたであろう。それを、かなわぬと申すは何故じゃ？　その女、生かしておけば予のため、お家のために役立つ。死なせては惜しい……そう思うて、わざと負けたと申したな？」

「との！」

「――そうか。それほどまでに、そちは予に忠誠を尽してくれるか」

勘兵衛の両眼にうるむものが光っていた。

「あいわかった勘兵衛、その心底いまこそ見届けたぞ」

言って、これまでとは打って変ったキビしい表情でカラリと酒盃を捨てると、

「勘兵衛、近う。あらためてそちに頼み入れる儀がある。――近う」

「ハッ」

応えて、スルスルと中腰でふたたび御前近くに進み入り、かしこまった。このとき勘兵衛の衿もとが開き、下着の白無垢が正純の目にとまった。

「それは」

正純は、ひと膝のり出し、「死ぬるための装束か？　誰がそれを、そちに？」

「母にござりまする……」

「婆が？」

「はっ」

「――そうか」

ふかく正純はうなずいた。

「予はよい家来とその母を持った」

「……」

「勘兵衛、あらためて申す、予の書状をたずさえ、その方、越前におもむいてくれよ。書状はすでにしたためてある。越前忠直卿へ直に、手渡すのじゃ」

「！」

「よいか。出立は早いがよい、明早朝この宇都宮をたて。念を入れるまでもあるまいがの、予の親書じゃ、いかなることあろうと、かならず忠直卿へ直々に手渡すこと。余人に見せるはまかりならん……確と、この儀は含みおけ」

「はいっ。誓って――」

「それから」

いつの間にか女も次の間から再び正純の側へ立ちもどっていた。主従のこうした対話は、いささか彼女には見込みちがいな進展だったらしい。さいぜんまでの微笑はその双眸から消え、案外真剣な、探るような目で正純の横顔を見まもっている。

そんな女へ、やおら顔を向けた正純の表情は、もう、無性に明るかった。

「いま聞いた通りよ、そもじには当てはずれであろうがの、勘兵衛を討たせることはやめる。そのかわり、あらためて申しつける。たった今、そもじ勘兵衛と夫婦の交わりをいたせ。奥の間にてじゃ。予が媒酌の労をとる」

アッと女の瞳孔が大きくなったが正純は介意しなかった。

「勘兵衛、そちもじゃぞ。否やは言わさん。奥座敷にて即刻、夫婦の契りをせい。予の命令じゃ」

九

またまた鶴のひと声である。

死装束のつもりが、なんと祝言の白無垢となった。

深謀家正純の真骨頂だろうか？

主命とて勘兵衛は観念して、なるべく女の方は見ないように、児小姓に案内され一たん廊下に出て、御座所から更に奥まった一室に入ると、何と其処には夜具が敷きのべられ、括り枕が、雙。

枕もとには金糸銀糸で飾りつけられた瓶子と、白木の三方に床盃の土器までが用意され、燭台には明々と灯がともって、金泥の枕屏風をたてめぐらした前に、家老小田島監物が麻かみしもで白扇を膝に着座していた。

これにはさすがの勘兵衛も驚いて、

「ご、ご家老……」

思わず膝を折るのへ、

「たかさごを謡うてくれるわ」

背後から、女だけが跟いて来ていると思ったら、正純自身が単身ツカツカとふみこんで来て、

「監物。えらい手間取ったがの、どうやら見込み通りことははこんだ――」

言って勘兵衛のわきを通りこし金屏風の前に来ると、座をゆずる監物のあとに、どっかと坐って、

「さ、祝言を始める」

こともなげに言い放つと、

「女――」

まだ廊下にたたずんでいる彼女へ、心なしか小気味よさそうな目を注いで、

「はいれ。予はせっかちでの。めでたいことには気がせく。直ぐ始めるぞ」

彼女のかおはいくらか青ざめ、怕い目でじっと正純を見つめていた。

正純はかまわなかった。こう言った。

「よいか、めでたき祝言なればとて尋常の婚姻にあらず。勘兵衛は予の家来。そもじは棺の中より蘇生したと申す不可思議な女。されば身もとも定かならず親兄弟また知れず……ましてや祖父の仇に娶らすとあれば、当方とて慎重を期さいでは相成らん。そうであろう？　よって祝言には、その方、生まれたままの姿になれ」

「！……」

「わからぬか。衣類はいっさい身につけることまかり成らず、裸にて床盃を交せと申す。――よいな」

言うと、

「勘兵衛」

「はっ」

「そちとて、同然、下帯は許すが、丸裸にて祝言するのじゃ。早速に支度をせい」

主命であれば勘兵衛に駁しようはない。

「心得ました」

その場で、先ず脇差をはずし、肩衣半袴を脱ぎにかかった。

彼女は、観念したようだった。

ふっと、複雑な笑いを唇にうかべると、これももう正純の御前をはばからず、廊下から中に入って、前結びの帯を解く。悪びれず、そうして腰紐を解き、さらりと、肌着ごと衣類を脱ぎ捨てた。

『くの一』霧隠才蔵こと、才。乙女と見えたがまことは二十七の大年増であった。女忍者だけに

鍛錬していて、体は引き緊まり、贅肉はついていない。だが、肌は雪のように白く、乳房は豊満、胴はくびれ撫で肩を蔽う黒髪は尻のあたりまで垂れ、妖精のようにその半裸は美しかった。

さすがに湯文字だけは、まだ彼女は腰にまとっていた。処女ではない。

女の忍び者なれば時に敵将の枕頭に侍って情報を盗む。これまでにも、そういう役目を彼女は見事につとめて来た。むろん男装で敵城の石垣を登ったこともある。火遁の術を使ったことも白刃の包囲を脱出したこともある。さればこそ世人は真田の勇士——霧隠才蔵と呼んだのだ。

本多正純は、一瞬、いきをのみ、予想以上に妖艶な彼女の肉体を凝視した。女は裸にすれば正体が解ける——そう進言する小田島監物の意見をいれて、かくは祝言の場を演出したのだが、この謀は或意味で裏切られ或意味で効果はあった。

彼女の裸身に危惧したような刀創の疵あとはなく、忍者の女装でないことが乳房のふくらみでわかったが、同時に（いかに彼女が忍びの天才女でも）年齢はいつわれない。乳首の大きさやその色はごまかせない。すでに男を知った体であるのをあらわしている。

チラと、正純は傍の監物と顔を見合わせた。

それから、

「支度はできたな。ならば床入りの祝儀をいたす。——さ、二人揃うて夜具へ、ならべ」

ひときわ高声に言った。

十

異様な床入りの祝言が、こうして始まった。

勘兵衛は練絹の下帯ひとつ。角力取りを想わせるあのまわしである。

彼女は鴇色の湯文字一枚。

ふつう、床盃は夜具の上では交さない。むろん新郎新婦とも白無垢の寝衣でする。

だが慣習は最初からいっさい無視して、二人に夜具の上に並べと正純は言った。

両人はそうした。

座高は、やはり勘兵衛の方が高く、皮膚は浅黒くて筋骨隆々たる美丈夫である。

肩をならべて彼女は静坐し、ひざに手をおいていた。枕の方へ向いているので、互いの肘が触れる。こころもち勘兵衛は身を固くし、両肘を張り気味に、胸をそらしている。

「監物」

そんな両人を金屏風を背にして見やって、

「はじめるがよい」

正純が言った。小田島監物が軽く一礼して、物蔭にひかえる小姓を呼んだ。まだ前髪の小姓が二人、しずしずとやって来て主君のわきの三方を一人が取る、一人は瓶子を把る。そうして新郎新婦の前へ進み出、先ず勘兵衛に献盃した。

高砂や　このうらふねに帆をあげてえ……

「重きこと石の如き」監物がさびた音声で、朗々と『相生』を謡い出す。献盃は勘兵衛から才へさされる。悪びれる様子もなく彼女は両手に土器を持って、一拝ののち、そのくちびるへ運んだ。平然と見えたが彼女の内心で実は、小さな嵐がおこっていた。

忍者は、陰の存在である。

武家階級より卑賤の者と見なされ、常にさげすまれてきた。この差別はきびしく、武家社会を支配していた。

それが、たとえ湯文字一枚のあられもない姿にせよ、いま儀式通りそれも十五万石の城主の前で、ひとかどの士と、夫婦の盃をさされる……忍者の中で「女心」があやしく動揺したのは、やむを得ないことであった。目を瞑って、ひと口、ふた口……三度に盃をのみほした。

そうして又、勘兵衛へさし戻した。

かくすること三度、献盃の儀はおわった。

「めでたい」

正純は言った。

「これにて勘兵衛、そちは、その女子と夫婦に相成ったぞ」

「――はっ」

「才」

「？……」

「かりそめごとと思うなよ。勘兵衛は見る通りの一徹者じゃ。本気で、爾後、そもじを妻と思うであろう……されば祖父が旧怨はこれにて捨てい。以後は彼めを何事にもあれ、扶けてやってくれい」

言って、にわかに語気をやわらげ、

「さ、予がこれにて見届けてくれる……遠慮はいらん。もはや天下晴れての夫婦なれば恥じる要なし、存分に媾合せい」

謡曲は低声にうたいつがれていた。小姓は退出した。勘兵衛はもうためらわなかった。主君へ

黙礼のあとそばの彼女をかえり見ておもむろに練絹のふんどしを解く。

彼女の心懐は多少まだ複雑である。

でもこのたまゆらばかりは『霧隠才蔵』ではない――ただの大年増――才でありたかったろう。

彼女はすなおに、そのまま身を横たえ括り枕にこめかみをあずけた。なまじ男女の交わりを体験しているだけに、まだ平静で醒めた部分と、歓喜への期待が交錯するのかその頬は皮膚の下層で火照っていた。

勘兵衛は真率の士である。彼女より二歳年少である。男女が閨房でどうするか位は知識として知っている。

戦場で農家の婦や、娘を、おそい、強姦凌辱した思い出を戦国生き残りの老武士らが呵々哄笑して語っているのを、幾度か耳にもしてきた。

彼自身はしかし童貞であった。

「――ごめん」

主君に一礼ののち、やおら起ちあがり、おのずから既に勃起怒脹したものを突っ立て、彼女の湯文字をかき開けた上へ、馬乗りになった。

前戯など知るわけがないのだ。

一瞬、彼女は狼狽した。

「……」

小さく何か口走った。しかし彼女も心情では既に勘兵衛を受けいれていた。巧みに両肢を彼女はひらいた。なめらかに二人は結合した。

一時、さすがの監物も沈黙する。

「エヘン」
空咳（からぜき）を発して、一段と声を張りあげ謡いつづける。瞳（ひとみ）を凝らし呼吸（いき）をのんで、眼前の、若い男女の交わりを正純は見まもっている。
——実は、もう一人、ふたりの媾合図を見おろしている男がいた。天井裏で。
忍び装束の柳生新太郎だった。独り言を新太郎はつぶやいていた。
「えらいことをしよるわ……さすがは知恵者か……それにしても本多めの肚（はら）が、読めん……いったい何を企んでおるのだ……御遺金を二人に、はこばせるのか……それとも？……」

根来衆

一

「気になることがある……鎌之助、オイ、起きてくれ」
梅雨（つゆ）でもないのに、もう十日あまりシトシト雨が降りついで鬱陶（うっとう）しい昼さがりを、屋根裏の大部屋で午睡する由利鎌之助。
その肩をしきりに清海入道が揺すった。
もともと、民家をにわか造りの木賃宿だから、長雨で、天井からは雨漏りがし、部屋の処々に受けたたらいへ、ポト、ポト、しずくが落ちている。
「……なんじゃい、京女のよい夢をみておるに……今しばし眠らせろ」
「そうはいかん。えらいことじゃぞ」
「——」
「おい、起きろよ」
猿飛佐助が仙台領へ去ってから、もう半月は経つ。ナシのつぶてで何の連絡もない上に、城内へ入ったはずの霧隠才蔵まで、あの夜以来、ついぞ姿も見せないので、このところ『池上や』の

人の好い女房が奉仕してくれるめしや、菜を、たら腹食う以外することもない清海入道。ホトホト暇を持てあまし鼻ひげなど抜いていたら、中二階のこの大部屋の窓から、街道すじを数人の菅笠に蓑をまとった一団がやって来て、向い側のちかごろ店はじめをした旅籠に投宿するのが見えた。

『八幡や』という宿である。

『池上や』の繁昌を見て開業したもので、家の構えも大きく、新築の別棟もあって万事に見てくれは立派だが、かんじんの亭主が小狡そうな男ゆえ、清海入道、

「われらにはここが御殿じゃ。のう鎌之助。されば亭主どの、今後ともわしら当家に厄介に相成るで、『八幡や』なんぞ放っておけ、見てくれのよいのに投宿いたすがさような奴に、ろくなのはおらんわい。のう鎌之助」

まんざらお世辞でなく清海入道は言ってきた。ためにいっそう女房の心をこめた持てなしにあずかって来たわけであるが、人情のおもむくところ、『八幡や』に泊る者に好感を抱けなんだのは事実である。

さてそういう下地があるものだから、蓑をまとった一行にも、

「ふン、いずれ新規召抱えをあてに参った、あぶれ者どもであろう」

思いながらもそれとなく向いの窓を注視していたら、新築の廂の下へヒョイと顔を出した武士、

「誰と思う？……穴山小介じゃ。あの小介めが——」

穴山小介も、真田十勇士の一人だった。でも、てっきり大坂夏の陣に、主君ともども彼は戦死したと思いこんでいたし、猿飛佐助もそう言っていた。

それが、

「あろうことか、立派な身扮をしよって月代まで剃ってのう……見違えるばかりの美々しい容姿じゃ。しかもじゃ」

街道をへだてて、窓と窓で、はっきり目を見合わしたのに穴山小介の方は知らん顔。

「や、おぬし穴山ではないか」

驚きの叫びを清海入道があげると、うさん臭そうにジロッとこちらを見て、すぐピシッと障子窓を閉めてしまったという。

「いったいこりゃどういうことじゃい。これが鎌之助、驚かずにおれるかい」

「ふーん」

起きあがって大きなあくびと伸びを一度したが、話を聞いているうち鎌之助も真顔になった。

「どれどれ」

窓に寄って小雨の降る向う軒へ目をやったが、障子は閉ざされていて人影はない。

「何人ぐらいで来たんじゃ？」

「ようは数えんが、八人はおった」

「みな武士か？」

「いや、半分は大小を差しておらんように見えたわ」

「すると、城普請に江戸からかき集められた大工どもかの」

「わしもそう思わんではない。じゃがの、そんなら何で穴山のやつ、わしが呼びかけに知らんふりしよったんじゃろ？」

「拙者にわかるわけがないだろ」

言って窓ぎわを離れ、

「いつごろじゃ、彼等が着いたは」
「ほんのちょっと前……なにさま、すぐおぬしを起こしたでの」
「――わかった」
鎌之助は、清海入道にこのまま様子を見ていてくれるように――そう言って階下へ降りていった。
ずいぶんたってから戻って来ると、
「わかったぞ」
入道の前へどっかと坐って、
「根来衆らしいわ」

二

「根来衆？　そら何者じゃ」
「公儀御用の軽輩よ、忍び者ではないがの、伊賀、甲賀衆とともに、根来百人組ともいうて、まあ、公儀雑用をつとめる者らじゃ」
「どうして、さような輩に穴山めが？」
「そこまではわからん」
穴山小介は、前歴のあまり定かでない者の多い真田十勇士の中にあって、もっとも由緒ある家系の出であった。
小介の祖父は武田一族で隠れなき勇将で、その始祖を武田信武という。祖父は幼名を勝千代、名を信君といい、武田三将の一とうたわれた梅雪斎不白である。

信玄亡きあと、その子勝頼の代になって、梅雪斎は勝頼との折合いわるく、勝頼が天下を取る器量人にあらざるを悟って武田家を退身し、京にあった時に本能寺の変が起った。
これで再び天下を窺う好機到来と、わずかな郎党を率いて急遽、領国の甲斐国穴山へ赴こうとした途中、伊賀と大和の国境にちかい大河原という土地で土民の竹槍に襲われ、恨みをのんで果てたというが、じつは穴山梅雪を刺したは土民にあらず、柳生の手のもの――それも徳川家康と誼を通じた者の仕業という説あり。もっとも本能寺の変のあったとき、家康自身がかろうじて伊賀越えをして三河へ逃げ帰っているので（そのとき道案内をつとめたのが伊賀者服部半蔵だったことは知られている）いかに穴山梅雪が武田の勇将であったにせよ、家康が梅雪ごときにかまっていられるはずはない、と見るべきだろう。
でも、この風説を幼な心に聞かされて以来、穴山小介の徳川氏と柳生をにくむ心情は異常なほどで、
「わしの眼の黒いうちは、いつかは徳川と柳生のやつらに、ひと泡ふかせてやるゾ」
大坂の陣がはじまる前から常々小介は言っていた。梅雪亡きあと、父の玄蕃信正は縁あって真田家に仕え、関ヶ原の役には、中仙道を進む秀忠の大軍を信州上田城で撃破して大いに玄蕃は溜飲をさげた。
その後、小介も弱年ながら九度山に蟄居する幸村の近習として仕え、のち大坂両度の合戦に臨んだのである。てっきりそして、夏の陣で主君真田幸村と運命をともにしたと思われていた。
それが、あろうことか、生きていてしかも宿敵徳川幕府の、根来百人衆に加わっているという。
信じられようか？
「解せんのうわしには」

雨は相変らず小やみなく降りついでいる。

狭い窓から、そんな外を清海入道は時おり横眼でにらんで、

「おぬしの言うようにじゃ、鎌之助、小介めがその根来衆とやらに加わっておると、まあしよう……いったい根来衆は何をしにこの宇都宮へ来よった？」

「城普請の使役にであろう」

「しえき？」

「手伝いのようなものよ」

「じゃが鎌之助、それは妙ではないか。城主上野介は、猿飛が話の通りであれば将軍秀忠とは仲がわるいはず……ましてや御遺金とやらも隠匿いたしておるに何で手伝いなどを？」

由利鎌之助、どうも清海入道には物事をいちいち、説明しなければならんのがわずらわしいか、もう答えず、刀を抱えゴロッと肘枕の横になった。

そして、

「その御遺金よ、もしかすれば城内の何処ぞにかくしてある、と幕府では見て、使役を口実に根来衆を差し向けたとも考えられる」

「すりゃ穴山小介めも、狙いは御遺金か？」

「——」

「ちがうんか？」

「うるさいのう、それほど気がかかりならおぬし『八幡や』へ出向いて、じかに小介に確かめてみい。拙者は、眠い」

くるっと寝返って背を向ける。

「ふん……つれない男よ」

うらめしげににらんだが、尻を向けられては為様がない。

「猿飛め……、いったい何処で何をしておるんじゃ」

そんな独り言で、それでも気になるから時々、小雨の向う軒へ目をやって窓のそばを動かなかった。

どれほどか時がたった。

「や」

素っ頓狂な声を清海入道はあげ、

「鎌、鎌之助見い……女じゃ、女が、『八幡や』へまた入って行きよったぞ」

「——」

「見てみい……軒下で待っておるあの侍……おぬしなら、誰か、見当がつくんではないか？」

藺笠に蓑を着た屈強の武士一人、たしかに軒下に佇んで雨にけぶる街道の左右へ、しきりに鋭い目をくばっている……

三

鎌之助が寄って来て、面をならべ、雨に煙る向う家の軒下を少時、見まもってから、

「なるほど……あれは、恐ろしいやつかも知れん」

「恐ろしい？」

「ただ者ではあるまい。もしかいたすと……」

「？」

「清海」
「む？」
「おぬし、あたってみんか」
「？……」
「あれへ降りて行って、あ奴の前へ立つのよ。さすればわかる」
「何がじゃ」
「あれの正体……ここからでは今ひとつ見分けにくいが、あの腰の大小……鍔の拵えに星がはいっておるのではないかと」
「星じゃと？」
「まあ行って当ってみい。――いやか？」
「いやとは言わんが……」
　藺笠を目深かに、相変らず街道の左右へ目をくばっている武士の様子は、なるほど、隙がなく、相当な人物らしいとは清海入道にも見当はつくが、それにしても、チラとではあったが、『八幡や』の広い間口を入るとき、手甲をはめた華奢な手で菅笠を脱いだ女性の白い貌は格別で、じつはそれで清海入道、奇声をあげたのである。
　ましてや、同じ『八幡や』に穴山小介が居るのだ。
「行ってみよう」
　おのれを励ますようにつぶやいて、ようやく窓ぎわを離れ、壁の隅に置いた鉄棒をとると、
「あやつの前へ立てばよいんだな鎌之助」
「そう。それで奴の正体は、わかるはずよ」

　鎌之助はまだ窓辺で向う側を見おろしていたが、清海入道をふり返って、
「用心いたすに越したことはない……気をつけて行けよ」
「わかっておるわ。ふン」
　われらとて怪力無双をうたわれた三好清海入道……なんの、この鉄棒さえあるなればあ奴ごときの一人や二人……そんな面構えで鼻孔から太い息をはいて、やおら、鉄棒を小脇に狭い梯子を降りて行こうとした。
　――その時。
「！……」
　一瞬、鎌之助は絶句して、
「待て、清海」
「？……」
「こ、これを見い」
　低い天井に斜に刺さった小束を、抜き取っていた。小束には結び文がしてあった。雨中を飛来したに相違ない証拠には、結ばれた紙片に点々と雨のしずくがにじんでいる。
「どこからそれが？」
「きまっておろう……軒下の、あ奴よ」
　言う間ももどかしげに紙片をひらいて、
「たはっ」
　二度、鎌之助は絶句した。
　こう書かれてあった――

「降りておいでなさること無用に候。ヒゲどのへ――」
鎌之助のそばへ戻って、ともに走り書きをのぞき込むなり、
「や、や。すりゃあ奴は？……」
どんぐり眼を思いきり見ひらいた。
いつぞやの夜道で、立ち去りざまに清海入道のヒゲを抜いたあの柳生新太郎だ。
それにしても、こちらの窓から終始、様子を二人で見おろしている間、彼は、目深かな藺笠を持ちあげもしなかった。しかも小歇みなく雨は降りつづいている。庇や道の水たまりに雨だれの音は絶え間ないのに、どうしてこちらの会話に利き耳が立てられるのか？
そもそも腰の筆立てを取って、いつの間にこれを走り書きしたのか？
清海入道と鎌之助は、もう度胆をぬかれ、顔を見合わすばかりである。
聞きしにまさる凄い奴である。
「……どうする」
そうろと、今度は鶴のように、窓の下から首をのばし向う軒下を、のぞき見た。まるでこちらのことなど関知せぬ様子で、相変らず道の左右へ目をくばっている。誰ぞ、よほど手ごわい相手が来るのを待ち受けているとも見える。
「どうと申して……もう、こうなってはのう」
あわててみても追っつくまい……そう言いたげに鎌之助は首をふる。
せめてこんなとき猿飛佐助がいてくれたら。口にこそ出さね二人はそう思っていた。
少時して清海入道が言った。
「おぬしさいぜん、鍔の星と言うたが、ありゃ何じゃ？」

「柳生のしるしよ。柳生者が鍔には二星というて、星を透かしてあると聞いたで」
「すりゃはじめからおぬし、あれを柳生新太郎と――？」
「およそはの」
「では先に『八幡や』へはいった女、見当はつかんかい」
「そこまではわからん」
言ったとき、にわかに軒下の武士が雨の街道へ躍り出た。
どうやら目差す相手が来たらしい。
彼は蓑の両手をひろげ、雨中で、仁王立ちに立ちはだかっていた。

四

何者がやって来たのか、こちらの窓からは角度のかげんで、鎌之助らには見えないが、雨の中に仁王立ちとなった柳生新太郎の蓑を纏う全身からは異様な気魄がみなぎっている。
「見ろ、鎌之助」
清海入道が又々、奇声を発したのはこの時、それまで閉ざされていた向う家の二階窓が開いて、三、四人が身をのり出すように街道の一方へ目をやっている、その中に、まぎれもない穴山小介の顔が混っていたからだが、由利鎌之助は鎌之助で、
「あれを……見ろ」
と叫んでいた。
ようやく街道のはずれ――宇都宮城の方角から、雨中を驀地に駆けてくるのは騎馬の武士と判明したのだ。

雨合羽に陣笠。

鞭を入れるそのはるか後方を、おくれまいと必死にお供の中間（多分は馬の口取りであろう）が走ってくるので見れば、本多家の家臣でもかなりな身分の者に相違ない。

それを、街道の中央に立ちはだかり新太郎は一歩も退かず、大手をひろげて、

「停まれい岡村角左……この道通すことかなわぬわ、おぬしに用がある。停止せい」

大音に呼ばわる。

見る見る水たまりを蹴って騎馬は接近し、行く手にさえぎり立つ柳生新太郎の姿を馬上でも認めたらしい。

ぐ、ぐッ……

手綱を引きしめ、鞍上にのびあがるように身を反らせて立って、

「何者じゃ。われらは江戸表へ至急の所用あってまかり越す、そこ退け」

「いいや。これ以上の殺生見すごしには出来んわ」

「殺生と？」

「おう、片田舎とてここは天下の公道……この場にてその理由、喚いてよいか」

この言葉はきいたらしい。

更に強く、手綱を、武士は引いた。

白い歯をむき出し轡を鳴らして、馬は停止した。……ブルンと、そして荒い鼻息を吐いた。

ちょうど、陣笠が清海入道らの見おろす窓の下に見える。二度、三度、ひずめで馬は地面を掻いている。

「その方、姓名は？」

「――」

「まずは名乗れ。さもなくてわれらの行く手をさえぎるとは無礼であろう」

「名乗ってよいか、公儀隠密と」

「ぬ？」

「それ見ろ……わるいことは言わん。早々城中へ引き返し、根来衆ならびに大工殺害の方針、以後はあらためるよう上野介どのに意見せい。さもないと宇都宮十五万石、いまにお取りつぶしに相成るぞ」

「！……」

「まだわからんか。……ならば、証拠を見せようか」

言って、新太郎は『八幡や』の二階窓から顔をのぞかせている面々を屹乎と見上げ、

「これにあるは宇都宮藩作事奉行岡村角左衛門……こう申せばおぬしらにはあいわかろう、さきに根来同心桐島伊兵衛を斬った張本人よ」

「な、なにを無礼者……なにを根拠にさようのタワ言を」

あきらかに陣笠は狼狽していた。

手綱をにぎり、ゆら、ゆら鞍上でその上体を泳がせると、

「身におぼえなき暴言……こととしだいではその方、そのままでは済まんぞ」

新太郎は無視した。

「おのおの」

更に二階窓へ声をあげ、「不審ならばおぬしらこれへ降りて参って、じかに作事奉行へたしかめてみるがよい、……さもないと、よいか、こんどはおぬしらが桐島の二の舞いを、みるぞ」

雨が急に激しく降り出してきた。
それが隙を生んだのだろうか？
一瞬、馬上で陣笠はピシッと鞭を入れ、新太郎を蹴ちらさんばかりに馬を攻めたのである。
突然の、駆け出しである。
「たわけ」
パッと横っとびに身をかわしざま、新太郎は蓑の袖をひるがえすやヒラリとそんな陣笠の真うしろに乗り移ると、
「死にたいか角左……われら少々気が短い、当方の言う通りいたさぬとその方、この場にて死ぬるぞ。さ、馬をとめい」
岡村角左衛門の首すじへ、いつの間に手にしたか、ヒタと短刀を突きつけていた。

五

雨があがったのは八ツ（午後二時）すぎである。
ひとしきり激しく降ったあとだけに、八幡山の上空に青空が見えはじめ、明るさを取りもどした路上の水たまりに空が映って、ポツリ、ポツリ、軒のしずくがしたたるころになると一番に、はしゃいで戸外にとび出したのは近在の児童たちであった。
ついで彼方此方の民家から、雨やどりしていたらしい旅客や行商人が、いっせいに姿を見せ、街道を往反しはじめる。そんな者の中には、先刻、雨中で陣笠役人をついに落馬させた柳生新太郎の荒々しい振舞いを見ていた者もいるにちがいないが、後難をおそれて誰ひとり落馬の場所へ目をやるでなく、かえって其処からにげるような急ぎ足で通過して行く。

――そんなころ。
『八幡や』からかなり離れた街道わきの、とある雑木林の中で、葉ずえから雨滴のしたたるのもいとわず清海入道と鎌之助が、穴山小介と鼎談していた。
「まことかその話？」
清海入道が手のひらで坊主頭の雨滴を、ぶるんと払いながら言った。
「おぬしらへ今更うそ言うて何になる。まことも何も、事実よ」
「ふーん……すると十万両の隠匿場所とは別のわけでか……」
「穴山」
鎌之助のほうは幾らか慎重である。
「そのこと江戸を出るまでは？」
「知らなんだ」
「ほかの大工どもも？」
「きまっていよう。死ぬと承知で稼ぎに来る者がおるか」
穴山小介は仕立ておろしと見えるま新しいぶっさき羽織に、りゅうとした野袴。月代も青々と剃って、大小には鍔袋をはめ、どこから見ても立派な家臣の旅姿である。暑さとともに少々異臭を放つ清海入道らのむさい身なりとは、雲泥の差だ。
どうしてそういう変身ぶりをとげたかは小介はまだ明かさないが、以前から、目から鼻へぬける才気煥発の男である。大坂落城後も無事生きのびていたのであれば、うまく前歴をいつわり、幕府の要人に取り入って仕官するくらい彼なら朝飯まえであろう。
うらむらくは穴山小介、背が低い。眼はギョロッと大きく、さいづち頭で、鼻が馬鹿に大きい

のも特徴である。

鼻の大きいのはへのこも大なりというが、確かに彼は『小男の大魔羅』で、豪傑ぞろいの真田十勇士の中にあっても逸物の見事なことでは最右翼だった。

「小介だけは、どのような時世になろうと婦女子に取り入って食うには困るまい。ありゃまさに女殺し……後家殺しじゃ」

口のわるい根津甚八がよく言ったことだった。

してみればりゅうとした今の身なりも、どこぞの高貴な未亡人を籠絡して手に入れたのかも知れん……清海入道、また頭の雫を撫でおろして思っていた。多少、羨望の視線で小介の大きな鼻を見やって。

「だがの穴山――」

鎌之助が言った。

「江戸を立つまでおぬしらも知らぬことを、なんであの柳生新太郎は知っておったろう……あいつはもう十日あまり、この宇都宮城下に拙者ら同様、滞在しておるはずじゃ。忍びの達人なはわかっておるが、それにしても……」

「忍びの達人？」

大きなどんぐり眼がはじめて、真剣な底光りを放った。

「誰がさようなことを」

「佐助よ」

「そうじゃ佐助じゃ。わしは、あ奴めにこのヒゲを抜か……」

「猿飛もすりゃこの城下に？」

「来ておる。今はお万阿さまの消息をたずねに仙台へ出向いているがな」

「ふーん……変だな」

「？……」

「佐助に拙者逢うたばかりよ」

「なに？」

「昨夜であった、壬生の宿で」

「本当かい」

清海入道、素っ頓狂な声をあげたが穴山小介はむつかしい表情になると、

「あれが忍び者――とすると……」

何やら独り言のあと、

「鎌之助、三好も聞いてくれ……これは根来同心の殺されたのにも関わりがあるが、えらいことになるかも知れん……それも案外早い時機に――」

「何があるんじゃ？」

「謀叛よ。本多上野介が幕府転覆を、ねらっている」

「けっ」

「うそではない。証拠がある。こうなれば何もかも言おう――」

六

「ひと月ほど前であった――」

穴山小介は話し出した。

江戸の大工で与三郎という者が、城普請の当初に、根来衆に引率されてこの宇都宮に来た。そうして普請にかかる前に、城下で待機中、領内池辺村の庄屋の藤左衛門という者が、茶席をこしらえるにあたって、ぜひ江戸の腕のいい大工に造作をたのみたいと、これを与三郎に依頼した。

与三郎は根来衆の許可を得て引受けることになり、以後、庄屋の処に入りきりになって働くうちに、庄屋の娘で十七になるお志乃というのが、江戸前の与三郎の気っぷと男前に一目惚れをし、とうとう二人は深い仲になった。

さて茶室が完成せぬうちに、城普請の召集があり、茶室の造作はそのままに与三郎も城内の普請場に入ったが、それきり、二十日すぎても与三郎は城内から一歩も外へ姿を見せない。お志乃の待ちこがれる池辺村へは勿論やって来ない。

お志乃は、彼と二人きりで実はおそくとも十日目には、逢いに来てくれるよう固い約束をしてあった。それがいっこうに姿を見せないので、さては捨てられたのであろうかと歎き悲しみ、でも与三郎さんにかぎってそんな人じゃないとも思い直し、千々に心を乱していたが、とうとうたまりかねて、下女に手引きを頼み、城外で彼と密会できるような段取りをつけた。

彼はひそかに城を脱け出して逢いに来てくれた。野天の媾合ではあったが、夜陰に紛れなつかしい彼の強い腕に抱かれてお志乃は久々の欲求不満を満たすことができたが、折わるくこの晩、城内では大工の点検があり、十人いるはずの者が一人足らないこと、それが与三郎であることが宇都宮藩に知れてしまったという。

そうとは知らず、門番に鼻薬をきかせたこととて、深夜に彼も満足して帰って来たら、突然、藩役人に捕縛され、どこへ行っていたかを詰問された。

かくしきれずありのままを与三郎は白状したら、その場で、他の大工への見せしめの為もあってか、一刀のもとに彼は斬り殺されてしまった。禁を犯した罪というわけで、普請のあいだ、大工らは一歩も城外に出ることまかりならずと申し渡されていたのである。

目前に与三郎の斬られるのを見て大工らは恐怖し、以後、必死で仕事に励むようになったが、何も知らぬのはお志乃である。

彼女は次の十日目を千秋の想いで待った。でも彼は終に来なかった。そこで不審におもい、又々鼻薬をきかせてそれとなく門番に城内の彼の様子を聞き出そうとすると、何と、与三郎はあの晩、お手討ちになったとわかったのである。

志乃の驚きと、悲しみは非常であった。彼女は自分の恋慕が激しすぎたため彼をそんな目にあわせてしまったと思い、もう生きる気力も失って、彼の跡を追うように翌日の晩、書置きをして自害してしまったというが、問題はその書置きである。

こんなことが書かれていた——

あの晩、二十日間もどうして逢いに来て下さらなかったのかと自分がたずねると、与三郎さまの申されるには、今度の普請はまことに不思議なもので、御湯殿の天井が上へ釣ってある。その紐を切れば入浴中の者は、湯の中に圧しつぶされ必ず死ぬように仕組まれている。

いったい何故そんな御湯殿を、わざわざ御領主はお造りなされるのか自分たちにはわけがわからないが、御命令とあれば仕事をするほかはない。でもこれが完成するまでは、外にもれるのを用心されるのと、隠す上にもこの仕組みを隠しておかれる必要があって、自分たちは普請のおわるまで城内に引き留められるのだろうと思う。

それにしても、いったい誰を圧殺するため天井を釣られるんだろう——そう与三郎さんは語っておいでだった。

その与三郎さんが禁を破ったからとてお手討ちになったのは、本当は釣天井の秘密が自分に洩れたのを怒られたからではあるまいか。もしそうなら、いずれ自分も無事では済まないだろう、それならいっそ他人の手にかかるよりは、我から与三郎さまの跡を追う方がましだと思い、自殺する決心をした。

でも、万一、このことが天下の変事を招くようでは一大事だから、どうぞお父上から御公儀へありのままを申上げ、御裁可を仰いでほしい、それが与三郎さまの霊を慰めることにもなるでしょうから――そう書かれていたのである。

「本当か？」

きいて清海入道、もうとびあがらんばかりに仰天した。

七

「おぬしは知るまいがの、穴山」

鎌之助が口をきった。さすがに顔はこわばっている。

「その自害した志乃とやらの父親――庄屋の藤左衛門はすでに卒中にて死亡しておるが」

「親が死んだ？」

「領内寺内村と申す土地へ行けばわかる。そこに由緒知れぬ古い石塔があって、下の土を掘り起こすと棺から美女が現われた――」

「？……」

「うそではない。その美女を一目みて、庄屋は卒倒し、それきりにあいなったが」

「それで女は？」

「それじゃ小介――」

清海入道がニヤニヤ顔で何か言いかけるのを、鎌之助が制し、

「拙者の気になるはその、娘の遺書よ。庄屋が死んだあとどうなったか」

まだ庄屋屋敷のどこぞにあるなら、本多正純謀叛のあきらかな証拠物件になる。むざむざそんなものを宇都宮藩で放置するわけはないとおもうが、その辺はどうなっているのかと、たずねたのだ。

「その場に身共はおったわけではないゆえ、はっきりとは言いきれんが……紛失したときいている」

「失せた？」

「さよう。それで責を負わされ、大工与三郎を監督不行届きの廉を以て根来同心一人、切腹させられた……先刻、雨中で柳生新太郎の喚いたはそのことじゃ」

「！……」

「だがの、根来同心切腹の真因は、そのことではなく、ほかにあったと申す者もあり、拙者らはその辺の真相糺明も兼ねて江戸表よりつかわされて参ったが……」

「真因とは何じゃ？」

「石垣修復よ」

城普請には微細にわたるまですべて幕府に届け出て許可を得なければならないが、当初に届けられた計画とちがい、本丸の石垣と、大工与三郎らの取り掛かった御殿新築のこともふくまれていた。

それで根来衆の責任者某が、これでは話がちがう、自分たちが公儀より聞いてきたのは二の丸、

三の丸の修復のみ。本丸御殿の件は普請の対象に入っていないゆえ仕事にかかるわけにはゆかぬ、と突っぱねたら、本多家では、明年、将軍秀忠公は日光御社参の途次、この宇都宮城に御宿泊の予定である。その際、おもてなしに遺漏なきよう建物修築の上願をして、普請にかかるので、申すなれば上様の御為に始める工事であり、根来同心輩がこれに異見を申し立てるとはいわば上様の御威光にさからうことで、以てのほかの僭越である、と叱りつけた。

何を言っても城主本多上野介は幕府老中職である、根来衆の最上官にもあたる、それが本多正純の私事ではなく将軍家の御為にする工事であると言われては、さからいようがない。しぶしぶ大工らを督励して普請にかかっていたら、大工与三郎が点検の晩に居ない事件がおこった。すなわち監督不行届きの責任を負って、大工与三郎を成敗ののちに、某も切腹させられたのだが、問題は切腹の日時である。はじめは監督不行届きのお叱りだけで済んでいたのに、娘志乃の書置きが庄屋屋敷から紛失したとわかった直後——その日のうちに、にわかに切腹の沙汰あり、じつは切腹ではなく宇都宮藩士の何者かに殺されたらしいという。

それも単に遺書紛失の責任ばかりではなく、じつは本丸の石垣改築の際に、ひそかに宇都宮藩の手で内濠に菱を入れた形跡のあるのを、根来同心が発見した、それで彼は暗殺されたと、江戸表へ伝えた者があり、そこで、大工の増員を名目に自分（穴山小介）は根来同心と大工を引率して江戸を発ち、先程『八幡や』にわらじを解いたら、あの雨中を衝いた作事奉行の疾駆と、柳生新太郎の争いがあったが、実のところ、いったい何のための争いか、また紛失した志乃の書置きはどうなっているのか……その辺のところは何も拙者にはわかっておらん……そう穴山は言うのである。

「ふーん……濠へ菱をのう」

聞いて腕組みする鎌之助のわきから、

「小介」

清海入道が言った。

「お前らがところへ新太郎めのつれて参った女性がおろう？　あれは何者じゃ？　何をしに行きよったのじゃ？」

「根来同心を暗殺した下手人のことよ。つい先ごろ、城内にて祝言をあげたばかりの藩士が同心を斬ったからと、それを告げに——」

八

「城内にて祝言をあげたじゃと？」

鎌之助と入道は顔を見合わした。

「おぬしら、その者を知っておるのか？」

と小介。

「知らん。知らんが……」

霧隠才が城中に入ったきり、杳として消息が知れないので、猿飛佐助との約束の手前、『池上や』にごろごろしているようでもひそかに実は様子をさぐってみたところ、あの白髪鬼をいも刺しにした駒井勘兵衛なる藩士と、才は、夫婦の祝言を交したという。二人は真意を疑った。

本来、猿飛佐助らの大望は、徳川幕府の転覆である。秀頼公なきあと、豊臣恩顧の武将の手に天下を取りもどすことは到底不可能なことぐらい、人の好い清海入道にもわかっている。

だがせめて、徳川の治世を乱し、将軍秀忠を累卵の危きにおけば仙台に伊達政宗あり、加賀に前田利常、薩摩に島津あり、いずれも戦国乱世に天下制定を企図した武将で、一波瀾おこらぬわけはないだろう、そんな動乱に乗じて幕府にひと泡ふかせようというのが佐助たちの狙いだった。

そこで、徳川幕府列臣の中でももっとも重さをなし、且つはキレ者といわれる本多正純を先ず失脚せしめるか、正純と他の幕閣の間に確執を生ぜしめて幕府中枢に動揺を来たさせるのを狙いに、宇都宮城下へは来たのである。これには御遺金の在所を探り、成ろうことならそれを軍資金に当てようという下心もあった。

しかるに事態は、真田の残党である鎌之助たちが予想した以上に、はるかに複雑怪奇な進展をみせている。失脚させるはずであった当の本多正純自身が、釣天井などを仕組み、ひそかに将軍家の政権交替を策しているらしいとわかって来たのだ。

しかも、もう一方では、誰のため何の意図かは不明ながら、柳生新太郎一派の暗躍がある。

いったい事態はどう動いているのか、血のめぐりの余りよくない清海入道には、さっぱり見当がつかぬところへ、今また、同志であるはずの霧隠才が本多正純の家来と何と夫婦になったという。

新郎の駒井勘兵衛はそして、幕府直属の根来衆を斬ったという。

「わけがわからん……いったい佐助めは……」

入道が太い腕組みをするそばで、

「佐助といえばおぬし――」

鎌之助が小介へ言った。

「壬生の宿で逢うたと申したが、やつ一人でか?」

「そうじゃ」

「おなごはおらなんだか」

「女?」

「たとえばお万阿さまのような……」

「知らん。拙者が逢うた時は、たしかに仙台領白石城、お万阿さまのご消息をたずねての帰りであるとは話してくれたが、ほかに伴はおらなんだようにおもう」

「ちえっ……つれはおらんじゃと?」

清海入道が歯がみして口惜しがり、

「猿飛めはつれない男よ、のう鎌之助……壬生といえばここより江戸に近いではないか。お万阿さまがご消息知れたのであれば、われらに先ず告げてくれるが順序であろうに……ほったらかしにしよって、何処へ行きくさったか……糞ったれ。今度逢うたら、ただではすまさ――」

此の時、鎌之助が清海入道の口をおさえた。

三人のいる雑木林のすぐ下を細い道が通っている。街道すじから此処は傍へそれているので、めったに人通りはないはずのその小道を、小きざみな足どりでやってくる者がいたのだ。

女性である。

雨はあがっているが、時おり風がつよくなり、木々の葉ずえを騒がせるとバラバラと雫が落ちてくる。それから身をかばうため女は被衣を頭上に蔽っているが、身なりの淑やかさ、内またに泥濘を避けて歩く、草鞋ばきのその脚絆の白さといい、農家の娘でないのはあきらかである。

(鄙にはまれな……)

そんな目で清海入道と鎌之助が息をつめて、近寄るのを見まもっていたら、

「岬どのよ」
穴山小介がつぶやいた。鎌之助がふり返った。
「みさき?……おぬしの知り合いか?」
「いや、知り合いとまでは申せんが……さきほど、宿へ会いに参られた」
「すりゃ」
清海入道が叫んだ。
「あの柳生新太郎めが同伴した女性じゃな。服部半蔵の、妹ではないのかい?」
「――ちがう」
「なら、誰じゃ?」

九

女性は、雑木林の中に立つ三人に気がついた。
被衣を両手で持ちあげ、三人のなかに穴山小介がいるのにホッと安堵の表情で、
「こちらでございましたか……お出かけなされたままゆえ、どうあそばしたかと……」
「では拙者の身を案じて?」
「ハイ」
にくらしいほど穴山小介、女性には相変らずモテモテのようである。
「それはわざわざどうも――」
小介は、悪い気はしないのだろう、大きな鼻をうごめかせ稍得意の表情で、
「お引き会わせいたそう……拙者が家の旧郎党、由利鎌之助と同じく破戒僧三好清海にござる。

――コリャ、その方らつつしんでお目もじいたせ、あれにおいでなのは加納殿の御使者岬どのじゃ」
清海と鎌之助は顔を見合わせた。
加納殿といえば将軍秀忠には実の姉――いまは古河の城主奥平家の女あるじである。それも姉とはいえ、秀忠は庶腹の子であるのに、加納殿は家康の正夫人築山殿の腹に生まれ、あの岡崎次郎三郎とは一つちがいの妹だったから、申すなら徳川一門きってのトップレディで、将軍秀忠でも時には叱られて頭があがらない。ましてや本多正純には主筋の姫君である。もう白髪の媼であるが、いたってこれが気性の烈しい老婆であることは幕府の閨閥に関心を寄せる者で知らない者はない。
そんな加納殿の名代となる岬なら、なるほど「お目もじいたせ」と言われるのもやむを得ないが、それにしても郎党とはひどいことになった。
郎党なら、二人は穴山小介の旧部下――家来というわけになる。
(おのれ小男めが)
腹の中で又々、清海入道歯がみしたが当人は平然たるものだ。
「岬どの」
女心をくすぐるような猫撫で声で、
「お案じいただいて恐縮ながら拙者いま少しこの者らに申し聞かせておきたい儀がござる。どうぞもう、安堵なされて宿へお引取りいただくよう――」
「ハイ」
美しい貌はコックリをしたが、どうやら彼女の気がかりなは穴山小介一人ではないらしかった。

「アノ……妾を案内してくだされた新太郎どのは？……雨中でのあの諍いのあと、ご無事だったのでございましょうか？」

「そ、そのことなら――」

いささか鼻じろんで、

「この両人もあの者なら存じおるよう……なかなか腕の立つ男なればご案じあるな。いまごろは、作事奉行を懲らしめ、どこぞで休息でもいたしておろうかと」

「アノ……その二人も、新太郎さまを存じていやるのですか？」

彼女の双眸があきらかに嬉しそうな輝きをこめていた。

「知、知っておるでござるとも」

喜色満面、声をかけられた嬉しさに、清海入道、身をのり出して、

「拙者がヒゲをあやつめは」

「え？」

「いや何……その、新太郎めなれば、抜群の使い手、作事奉行の一人や二人、ほっておいても心配はござらん」

「穴山さま――」

鎌之助はわざと郎党になりきった言葉づかいで、

「ひとつおたずねをつかまつるが……加納殿の御使者ともあるほどの岬さまが何で又、根来衆ごとき軽輩の木賃宿へなどわざわざ？」

「それか」

穴山小介が引きとった。これ又わざと横柄な口調で、

「さいぜんも申し聞かせたであろう、庄屋が娘の遺書の行方……じつは加納殿もいたく心におかけあそばし……」

「加納殿が？　あの、将軍家さえ叱りつけあそばすほどの高貴の御方が又どうして？」

「ま、わけを話せば長くなるが、つづめて申すと、奥平大膳大夫さまは先頃まで当宇都宮城が主であった。そのみぎり、城の奥に御殿奉公いたしていたく加納殿のお気に入った女中がすなわち、庄屋の妻となって娘志乃を生んだ……その志乃が、自害いたしたことがお耳に達しての、それで真相糺明にと岬どのを」

「では」

鎌之助が語気をつよめ、

「城普請に不審のすじあること、加納殿までが最早？……」

＋

『池上や』や『八幡や』は言うにおよばず、城下一帯の旅籠に、役人が出向いてきびしい旅人あらためがあったのは雨のあがった翌日である。

作事奉行岡村角左衛門が、柳生新太郎に襲われたうえ、騎馬ごと行方知れずになったのが原因なのはいうまでもないが、詮議はかなり過酷で、言動に不審ある者は容赦なく縄を打って城中に引っ立て、年寄（家老）早川庄左衛門じきじきの取調べが行なわれた。

以前にも述べたように、城下には新規お召抱えの仕官をあてに、予想以上の数多な牢人者の投宿していたことが、この取調べでわかったというが、おもしろいのは『池上や』で役人をむかえた時の三好清海入道である。

「われらに不審があるなればいずれへなりと引っ立ててもらおう……但しじゃ」

狭い中二階への梯子段の中ほどに例の金棒を把って、でんと腰をすえ、

「南都興福寺にて元僧籍に身をおいたこの清雲入道、ふるくは細川守護代にその者ありと知られた三好筑前守が裔なれば、その方らごとき小わっぱ役人どもに縄打たれるは片腹痛し。強って引っ立てんとならばこの場にて相手つかまつろう……我と思わん者はイザ、かかって参れ」

大音声に言って、二十貫はあろうという金棒を片手に、やおら立ちあがるとノッシノッシ階段を降りた。土間に犇めいていた捕方がパッと後退した。

土間の片隅では、人の好い亭主ら夫婦が子供を抱えて小きざみにふるえている。——その方へ、

「亭主どの……永々厄介にあいなった……おぬしらに迷惑はかけんゆえ、安心するがよい」

旅人あらためがあることを実は前晩に猿飛佐助に報らされ、清海入道は知っていた。由利鎌之助はいち早く、それで、早朝に宿をたち、清海入道のみ捕吏に引っ立てられて城中に入るのも実は予定の行動なのである。

「せいぜい暴れ回ったうえで引っ立てられてくれ」

と昨晩、佐助は言った。

「そうか。暴れてよいんか」

久々に羽根を伸ばせる……そう思うと昨夜から役人が来るのを腕を撫して清海入道、待ちかねていたのだ。

「ひとつ、おぬしにきくがの——」

向いの『八幡や』に投宿している穴山小介はともかく、岬という加納殿の使者は、旅人あらためで、どうなるのかと念のために確かめたら、

「おそらく身分は秘匿して城中に引っ立てられるよう柳生あたりが謀っておるのではないかな」

「引っ立てられると言うて……佐助、あれは加納殿の内意をうけて来ておるのじゃぞ、後ろ楯は加納殿じゃ、本多あたりの小わっぱ役人輩が」

「だから引っ立てられるのよ」

佐助は、かいつまんで岬がなぜ加納殿の使者となって宇都宮にやって来たか、また穴山小介が今はどういう立場にいるかを明かしてくれたのもこの時で、聞くなり、

「そうかい。われらを家来同様にあつかいくさったが、そういう裏があったんかい」

目を細めて清海入道、満悦そうに、

「なら、まかせておいてもらおう、岬どのには役人輩に指一本、ふれさせせんわ」

大見得を切った。

その手前がある。ここは大暴れして彼女に頼もしい殿御よと思われておきたいし……、万事その方が今後のためにもなるのだから、清海入道張り切っていた。

旅人あらための役人は配下の捕吏をふくめて総勢四十人あまり。支配役らしいのは陣笠に騎馬のいでたちである。それが二手にわかれ、『池上や』と同時に『八幡や』にも立ち入ってちょうど岬と、彼女に付いてきたお供女中を不審の廉で、拉致せんと外へ連れ出したところだった。どう弁明したか穴山小介や彼の引率していた大工らは、嫌疑をかけられずに済んだらしく、向いの二階窓で下の様子を見おろしていた。

街道の付近には土地の百姓らが遠巻きに群がって見物している。昨日とはうってかわって青空の澄んださわやかな午前だ。

「ヤイヤイ下っ葉役人ども」

のっそり『池上や』の軒下を表に出ると、じりじり後退する捕吏らを睨めまわして金棒を空中にビュンビュン回しながら岬を引っ立てようとする役人に追いつき、

「やい待て」

捕吏の一人のえり首をワシ摑みに、いと軽々と片手に持ちあげ、

「これにおわすご婦人を誰人と思いおる。ん？　非礼をはたらくにおいてはこの三好清雲が容赦せんぞ。ひかえい」

喚いてポイとほり出したからたまらない。捕吏は同僚の中へもろにころげ落ち数人が将棋倒しになった。

「無、無礼者」

陣笠が馬上で鞭をふるわせて激怒した。

愁眉

一

「おもしろい。われらに手むかい致すんなら、おう、いかほどでも相手になってくれるわ」

清海入道、岬と、まだうら若い女中を背にかばい立つとハッタと眼をむき、

「やあやあ近からん者は目にも見よ、遠くば寄って耳にも聞け……我こそは細川守護代にその人ありと知られた三好筑前守が末裔――同名清雲入道景久なあるぞ」

金棒を頭上にぶんぶん振り回してドン、と地ひびき立て大地におろすと、あたりを睥睨し、

「これにおわすご婦人を誰人と心得おる？　このお方こそはさるやんごとなき御方がお使い――岬どのであーるぞ。汝らごとき軽輩が引っ立てるとは以てのほか……たとえ岬どのは承知でもこの清雲入道がゆるさん。断じてゆるさん。たって手むかいいたす奴ばらはこの金棒にて石頭を木っ端みじんに打ちくだいてくれるわ。かかって参るか」

喚いて又、ブンブン片手に金棒を振り回した。まさに得意の絶頂だった。

見れば薄汚ない雲水のいでたちで、初から反抗的ゆえ城中へ引っ立てようとしたものの、先程の捕吏のえり首をつかんで投げた怪力といい、今また二十貫はあろうという金棒を軽々ふり回す

その底力に、陣笠役人も手が出せない。だい一、馬が、清海入道の気勢に驚いて後退し、ついに後肢二本で立っていななきながら、前あしの蹄で虚空を掻いたからたまらない。危く落馬しそうになり、役人は馬をなだめるのに精いっぱいだ。

それを見て、満悦そうに金棒をドンと大地におろすと、

「岬どの」

背後になおも彼女をかばい立って清海入道は言った。

「われら何処までも御供つかまつれば御安堵あれ……なあに本多が家来の五十人や百人、この三好清海……いや清雲、ただ一人にて防ぎ申す、そもじに指一本ふれさせは致さん」

ほんとうは、先刻から美しい眉をくもらせ、このお節介な男の出現にじつは彼女は迷惑しきっているのを本人は気づかずにいる。そして、役人や彼女の他に、もう一人、ひそかに清海の人の好さに舌打ちしていたのは二階窓で委細を見ていた穴山小介であった。

「阿呆が……何という出すぎたことを……」

おそらく、このままでは役人もあきらめて岬と清海入道を放置し、引揚げざるを得なかったろう。

世の中には、だが、お節介な男は他にもいたのである。

それも膂力で清海入道におとらぬ怪力の持ち主が。

身長六尺を越え、笈を負うてまるで歌舞伎の『安宅の関』に登場する武蔵坊弁慶さながらの扮装である。

面構えまでがそして、後世の名優市川団十郎演ずるところの弁慶にそっくりの男だ。

ただ、左頰に大きな刀疵の跡のあるのだけが、名優の面貌におとる。

さてその武蔵坊弁慶が、街道の彼方をこの時やって来て、しばらく、見物の群衆に立ち混じり清海の大見得を見ていたのが、ニヤリと刀きずの頰をゆがめて嗤うと、やおら群衆を掻きのけ、捕吏をも背後からかきわけて進み出て、

「さいぜんから聞いておればまるで傍に人無きがごとき暴言の数々……百人力とはほざきおった――」

言ってカンラカンラと打ち笑いながら騎馬の陣笠役人の前に来ると、

「どなたかは存じ申さぬが本多上野介どのが御家来と見うける。われらいささか上野介どのには恩義をこうむりし者なれば、この場にてご助勢つかまつらん、いざそれにてゆるゆるご見物あれ」

言って一礼ののち、やおら清海入道に対き返り、

「やい自惚れ男……おのれ一人が力持ちと思いおるなら片腹痛し。この弁慶が相手をいたしてくれよう。金棒なりと何なりと、汝が得意の道具にてかかって参るがよい」

「!……」

「だが、よいか、もし汝が負けたあかつきには、いさぎよくそれなる婦人を役人衆に差し出すのじゃぞ。さもないと、汝の石頭こそわがこの錫杖にて木っ端みじんに打ち砕いてくれる……よいな？」

「!……」

言ってリュウリュウと錫杖をしごき、

「イザ、どこからなりと打ちかかって参れ」

「どうした？　鳩が豆鉄炮喰ったみたいに目ばかりパチクリさせておっても、埒があかんぞ。

む？　それとも、もはや怯気づいて立合う気力もうせおったか。やいクソ坊主……返答せい」

何と言われても清海入道、のどが詰まって声が出ない。

弁慶と名乗ったこの山伏こそ誰あろう、大坂夏の陣で討死したとばかり思っていた真田遺臣の一人――筧十蔵だったのである。

二

男をあげるはずの清海入道が、まるで、闘志を失ったのでは結果は見えている。

「どうしたクソ坊主……なぜ、かかって参らん？」

何と罵言をあびせられようと、目をパチクリさせるばかり。

あげくには、重そうに金棒をおろして地へ突き、悄然、肩をさげてうなだれながら、

「どうなっておるんじゃ、佐助めは、こうは言うてくれなんだに……わけがわからん」

ぶつくさ独りごとを言っている。先刻とうって変り、精彩を欠くことおびただしい。

でもこれで、かえってよかったのである。

ひそかに岬は愁眉をひらき、わきの女中と無言で、何やらうなずき合っていた。

騎馬の陣笠役人がよろこんだのはもちろんである。

「まことに時宜を得たる助勢かたじけなし……弁慶と名乗りめされたが、いずれは名ある勇士でござろう。本日のことは、殿にも言上のうえ後刻あらためて挨拶にまかり出る」

言ってから、

「口ほどにもなきその不届き者、イザ匆々に引っ立てい」

馬上の手綱を引きしめ、馬首の方向をかえながら捕吏たちを叱咤した。清海入道はもうさからわなかった。

上眼づかいに、多少うらめしげに弁慶に化けた筧十蔵を睨めつけ、その目を背後の彼女に流し目して、

「こらえてくだされ岬どの……われは実はソノ……」

蚊の鳴くような声でモソモソ詫びを言うと、せめてもの腹いせだろう、近寄る捕吏どもをハッタとにらみつけ、

「うぬらの縄目は受けんわ。城中なりと何処なと、こうなればわれらの方から出向いてやる……どけ」

金棒をドスン、と突っ立て、胸をそらして騎馬のあとへつづいた。そのうしろから、しとやかな足どりで岬と女中が跟く。それを取り囲むように左右二列になって捕吏たちが護衛する。最後尾を、もう一人の陣笠役人が同じ騎馬でつづく。

一行は、陽差しの明るい街道を宇都宮城へ向った。見物人らは左右に道をよけ、畏怖と好奇のまざり合った目で美しい岬の容姿をながめ、清海入道を見送る。そんな見物の中にあの人の善い『池上や』夫婦の不安そうなかおが混っているのを知ったときだけは、清海入道、泣けたそうである。

捕吏らが遠ざかっても見物人らはまだ三々五々、群がって私語し合い、その場を去らない。彼らの視線は斉しく弁慶さながらな筧十蔵に集注していた。

十蔵は、疵あとの深い片頬をゆがめ、一度、チラと『八幡や』の二階窓から身をのり出すように終始を眺めていた穴山小介へ意味深長な視線をあげたが、少時して、何を思ったかクルッと踵を返すと、錫杖を取りなおし、遠ざかる捕吏たちの跡を悠然と尾けはじめた。

その口もとには皮肉な笑いが一度も消えたことがなかった。

「だいじょうぶでございますかいのう……」

『池上や』の亭主が隣りの男にささやいたのは、そんな武蔵坊弁慶の後ろ姿が街道を去りはじめた時である。

「心配はいりませんよ」

首をふって、男はこたえた。すねに継のあたった野良着に、目深かな菅笠。手には鍬を持ち、どう見ても畑仕事に出掛ける百姓の扮身ながら、菅笠の中の眼は涼しく、表情は凛々しい。

昨夜おそく『池上や』に立ち帰り、今朝がた由利鎌之助ともども宿を出発したはずの猿飛小天狗その人である。

変装はお手のものの忍び者にしても、その腰つきといい鍬を持つ節くれた指に、泥の乾いた土まで付いている様子といい、目の前を通過しながら清海入道がそれと気づかなんだのも無理はなかった。

「おらたちに、ではお咎めはありませんのじゃの？」

「大丈夫……わたしがあとは引受けますよ」

菅笠の目深かな目は、そう言いながらも道の向う側の人だかりの中にいる一人物をじっと見詰めていた。

それは紺の大きな包みを背に負い、尻からげの股引に紺足袋、わらじ穿きで、頭に手拭いをかぶり、

『くすり　万金丹』

と大書した幟を手に把っている。

富山の薬売り――それも田舎まわりの行商人のいでたちながら実は男装した女性であるのを夙うから佐助は見破っていた。

何のために、何者がそうした変装でこの宇都宮へやって来たのか？　それを読み取ろうと、先ほどから油断なく佐助は彼女の挙動を注視している……。

三

『くの一』なら、同じ薬売りに化けるにしてももう少し巧妙なはずである。

だいいち『蛇の道はヘビ』で、彼女が女忍者なら野良着姿でいる佐助の正体を看破できぬわけはあるまいに、キョロキョロ周囲に目はくばるが『池上や』の亭主と並んだ百姓――猿飛佐助には、まるで注意をはらわずにいる。

（何者だろう？）

さいぜん、捕吏に引っ立てられた清海入道や岬が通過したときは、いきを詰めて岬の白い貌を見まもり、さらに弁慶の引揚げよろしく寛十蔵が通りかかる時は幟をにぎる手に力をこめ鋭い双眸で十蔵の横顔を見ていた。その身構えには十蔵への敵意が感じとれた。

柳生新太郎の手の者かとも思う。

それにしては変装がシロウト臭い。

（公儀の女隠密か？……）

民家は、街道に沿って建て並んでおり、それの途絶えた空地のちょうど松樹の傍に彼女は立っていた。『八幡や』の側である。時おり、ひょいと身を前へ出し頭をめぐらして、はるかな二階窓の様子をうかがうのだ。

あたってみることにした。

「モシ……どこへ行かれますんけ？」

『池上や』の女房があわてて呼びかけるのへ、

「ちょっと——」

言いおいてゆっくり佐助は街道を横断し彼女へ近寄った。

はじめて相手は、佐助の風姿に気づいたようだ。一瞬、警戒の目つきになるとわざと知らんふりで、幟をとりなおし、まだ立話する土地の者らの背後を民家の建て並ぶ方へ去ろうとする。

かまわず尾けて行った。

『八幡や』の前を通りすぎた。二階窓に穴山小介らの姿はもうなかった。

それは江戸への方向である。

捕吏らの去ったのとは逆方向で、しばらく往けばここでも民家は途絶える。

行商人なら、薬を売込みに軒なみに民家へはいってゆくであろうに、彼女はそうせず少しずつ歩度を早めだしていた。

もうあきらかに佐助の尾行を意識していた。

かまわず佐助は鍬を担いでついて行った。

『くすり　万金丹』

と書いた幟が、どうやら仕込み杖になっているらしい。

前方から馬子が空馬を連れ、のんびりとやって来るのとすれ違ったあたりから、にわかにスルスルと歩度を早め佐助は彼女に追いついた。

途端、くるっと彼女はふり返りけわしい眸で彼をにらむ。

思ったよりは、身近かで見るとまだ若い女だった。

「変装がそもじは、へただな」

「！」

「そうコワい目でにらまずとも……。ハ、ハ、ハ、わたしは見る通りの百姓、……怪しい者ではないつもりだが」

「？……」

「何を目的で宇都宮へ来られた？　そもじ、加納殿の密使か？」

「！」

「ほう、図星か」

目深かな菅笠の下で白い歯がわらった瞬間、

「エイ」

紅唇をほとばしった気合もろとも、幟の先が突き出されるのを、

「危い」

パッと引っ摑んでおさえつけ、

「そうむきにならずとも……怪しい者ではないと申したはずよ」

「お、おのれ」

「ハ、ハ、ハ、女にしては使えるようながら、わたしには無駄だ。やめなさい。無理に仕込みを抜くつもりなら、そなたが怪我をするぞ」

「！……」

「何を目あての変装か、わけを聞こう……しだいによっては当方、力をかさんでもない——」

「おのれは、何者じゃ？　名乗りや」
「その言葉づかい、身分ある家に育ちなされたか？」
「は、はなせ」
「いいや」
　ゆっくり首をふって、佐助は、片手を肩に鍬をかついだまま逞しい長身で立ち、
「聞かせていただこう。そもじほどの優しい息女がなんで又、薬売りなどに？……加納殿の言いつけならすでに岬とやらが、ああして城中へ入ったはず……まさかそなた、岬の行状を見届け役でその男装して来たのではあるまい。わけを聞こう。――む？」
「たはっ」
　佐助は絶句した。
　幟の竿の部分を巧みに手操り寄せ、徐々に身を寄せながらヒタと面と面を見合わせて……突如、
「そなた、加納殿の使いではなかったのかッ。一体何者だ？」

四

　野辺を飛んでいた白い蝶が、ゆらゆら、街道の空を舞ってこの時、佐助の笠にとまった。あたりの空気は輝くばかりに明るかった。
　彼女と佐助は瞳をこらし、互いのかおを凝視し合う。
　深い双眸だった。黒目がちのその眸はうるみをおび、はじめは敵意をむき出しに彼をにらんでいたが、しだいにかなわぬと悟ってか、闘志を失うと、緊張していた頬に赧味がさし、しっとり汗ばむこめかみからツルリと、玉の汗が流れた。それが男髷に結った鬢の後れ毛を頬にまとい付

かせ、一種言い知れぬ女らしさを感じさせる。
　可憐さを失わぬ美貌である。
　二十になっているだろうか？
　闘志を失うにつれ、双眸には、彼の出現を怨ずるようなせつない色が湛えられてきた。
「はなしてたもれ……手を」
　いつの間にか幟を持つ手甲をはめた彼女の手首を、佐助は抑えつけていたのだ。
「聞かせてくれるか、わけを？」
「痛い……はなして」
　もう反抗する気配はない。佐助は白い手首を、はなした。ヒラリと蝶が虚空へ舞いあがって、傍らの雑木林へ去っていった。
「そなた名は？」
「おまえは？」
「小天狗。……猿飛小天狗」
「わらわは百合」
　二人連れの商人ふうな男が前方からやって来た。
「歩きながら話そう」
　佐助は素早く彼女をうながし、いかにも百姓らしく鍬をかついで、
「加納殿の使いでないものが、なぜ宇都宮へ？……まさか公儀隠密でもあるまいに――」
「おんみつ？　わらわが隠密に見えますのか？」
「見えはいたさん……が、そうとでも思わねば」

「なぜ、見えぬのです？」
「へたすぎる、変装が」
「この変装が、へた？」
　心外らしい。並んで歩きながら切れ長な眦に、あきらかに誇りをきずつけられた不満をこめて佐助を見返った。
　彼は失笑し、
「いよいよわからん……そもじのような育ちのよい女性がいったい何故」
「わらわは――」
　一時、言いよどんでから、
「月さまの仰せで、来た」
「月さま？」
「知らぬのか？」
　くびをふると、
「お前のことは聞いているのに」
「わたしを？　……月さま、と申す仁からか？」
「そうじゃ。おまえは真田の遺臣であろう？……忍び者で、名は、佐助」
　意外である。
「いつ、それを知っておった？」
　立ちどまって見すえると、女は、かまわず背の包みをうしろ手にヒョイと押しあげ、片手は、幟を杖にして歩きながら、

「自分でいま名乗ったではありませぬか」
「小天狗と申した」
「ホ、ホ、猿飛なぞという苗字がそうあるものかしら」
「そもじ――」
　ようやく佐助は真顔になった。
「江戸から参ったのか……それとも、古河か？」
　古河から来たのなら「月さま」なる人物も加納殿にゆかりがあるはずだ。
　女はだが、かすかにわらって、答えない。
「何処へ行くこれから？」
　問いなおすと、
「おまえは？」
「……」
「武蔵坊弁慶にはかまわずともよいのですか。あれも、おまえの一味であろう」
「――」
「それとも、わらわについて来ますか」
「どこへ？」
「ホ、ホ、……来ればわかる」
　こうなればこの女を見はなすわけにはゆかない。
「よかろう」
　佐助は肚をきめた。

「どこへでも参ろう」
「それがよい、ホ、ホ、ホ」
楽しそうに女はわらって、急に、クルリと回れ右をして、もと来た方へ向きなおった。
うかつだった。
いつの間にか後方に、編笠にぶっさき羽織、武芸者風な人物が尾けて来ていた。
あの雑木林で待機していたに相違ない。
佐助は、女をやりすごして佇立した。

五

編笠をかぶっていて、顔は見えないが、がっしりした肩幅、悠然たる歩行ぶり、相当、名のある兵法者にちがいなかった。
「兄者――」
男装した百合が、低くそう呼びかけるのを佐助は聞いた。
彼女は編笠の武士に近寄ると、それまで負うていた包みをおろして路傍におき、幟を手に武士と並んで、佐助へ向きなおる。
その双眸にはありあり敵意が光っていた。
どうやら、兄妹二人で佐助を倒すつもりらしい。
「そもじは手出しするでない。よいな」
たしなめたのは編笠の方だった。
「でも兄者――」

「よいわ。彼とて鬼神でもあるまい」
言うと、百合をうしろに単身、歩み寄って来て、
「卒爾ながら」
意外と丁重な物腰で、「われらはさる仁が家中にて田村勘解由と申す者……先刻より妹が言動に、もしお心障りのことあらば平にご容赦あれ」
ゆるく、頭をさげてから、
「ひとつお教えをねがえまいか」
「――何を？」
「お手前ら真田の遺臣が真意……宇都宮藩へは敵か、味方か」
「それを問われる貴公は？」
「……」
「なるほど、姓名は明かしなされたが、妹御の変装といい、貴公のその腰構え……当方の返答いかんでは斬りつけるおつもりと見受ける――」
「！……」
「なぜです。そうまでしてわたしの肚を問われる真意……貴公こそ、敵か、味方か、それを明かしていただかんと……」
「――」
「いま申されたさる仁とは、誰なので？　せめてそれを申していただけるなら」
「その儀は――」
ゆっくり、編笠を左右にふった。

「ではこちらも明かすわけには」
「これほど、頼み入れても？」
「……」
「やむを得ん」
武士の片手が、鯉口をきった。
刀に物を言わせても決着をつける腹らしい。
佐助の武器は鍬しかない。
遁走するのはかんたんである。だが佐助は動こうとしなかった。肩の鍬を、おろすと、柄を木刀がわりに片手に把って、柄先を先方へ突き出し、
「田村勘解由、と申されたが……まさか偽名ではないでしょうな？」
「――」
「明かして頂けませんか、さる仁とは誰か。いったい貴公だれのために――」
あいかわらず空に太陽は明るい。
キラッと武士の手に白刃が抜き放たれた。下段にそれを構える。地摺りの青眼である。
容易ならぬ強敵であるのを、佐助はその構えを見て、知った。
もう物を言う余裕はなかった。片手に柄を突き出して、ジリジリ、佐助は後退する。百合が編笠の背後で幟の竿から細身の刀を抜いている。
閑静な四囲は田舎風景。街道をやって来る旅人の姿は見当らなかったし、やって来ても白昼の決闘では、そばへ近寄れないだろう。
地摺りの青眼は、やや前かがみに面を俯せ気味につめ寄って来る。一刀流極意の剣である。う

かつに、頭上へ撃ちこめば、刃を返して下から、必殺の早業がこちらのあごへ切りあげてくる。
本気で、編笠の武士は佐助を斬る覚悟とわかったのだ。
後退するほかはなかった。防御のみが唯一の対抗手段だった。それでも、後しざりは所詮、前進の捷さにかなわない。踵を返せば一瞬のその虚に、背すじへ拝み討ちを浴びるだろう。
時が流れた。
いつの間にか佐助は道の端に追いつめられていた。其処は小さな崖になっていた。
もうほかに手はなかった。投げ玉をつかうしか。
曰く火遁の術である。
ふところへ、佐助は相手をにらみつつ片手をさしこんだ。
その時――
「双方、やめい」
佐助の後方で声あり。
「勝負は早や、見えた。やめい。それ以上争うては双方とも、怪我をするぞ。むだなことよ」
朗々たる音声が言って、
「勘解由、刀を引け」
「ぬ？」
「佐助もよ。夜陰の戦いなら知らぬこと、白昼、白刃を交えてはおぬしとて田村勘解由の一刀流にはかなわん。足の一本も斬られるが関の山よ、やめんか」
言ってヅカヅカと両者の中へ割って入ったのは柳生新太郎。
雲水（托鉢僧）の扮身だった。――

六

大きな、くらげのような網代笠に、墨染めの衣。
白い手甲脚絆にわらじばきで、とてもあの雨中に騎馬の作事奉行をやりこめたのと同じ人物とは思えない。
勘解由はまだ身構えているのに、その白刃の切先へ大胆にもヅカヅカと踏みこんで、
「おぬしにはまだわからんか。刀をおさめい勘解由……この猿飛は忍びの天才よ。いざとなるとどんな奥の手をつかうか知れたものではない……五体無事には、おぬしとて済まんぞ」
「お手前は？」
「名乗っても知るまいが……柳生新太郎と申す。又右衛門宗矩の、兄じゃ」
「――なんと？」
「まあ不審はあとで解いて進ぜる……先ずはそれを斂めい。今に人が来るぞ。江戸から。大炊頭の使者がな」
「土井殿の？」
思いがけぬ言葉だったらしい。
「そうよ、幕府にも知恵の働くのはおるわ」
言ってクルッと、こんどは佐助へ網代笠をゆらし、
「おぬしにまた貸しができたの……まあよい。ふところの物騒なものから、早う手をはなせ。伊賀流火遁の術が正体、いちど見届けておきたい気も致したがな。ハッ、ハ、ハ」
又、勘解由へ向いて、

「こう申せば得心いたすか。これなる猿飛佐助、本多上野介のまだ、敵でも、味方でもない。迷うておるのよ、ハ、ハ、ハ……」
百合が怖るおそる兄の背後へすり寄って来た。その手に、まだ仕込みの剣を光らせていた。
「百合かそもじが。薬売りとは、殊勝にも良う化けたと褒めてやりたいが、なっておらんなその腰つき……おなごのままよ。ハ、ハ、ハ」
よく笑う新太郎である。だが笑っておくのが、いちばん、要領いい仲裁法でもあったろう。
勘解由は刀をおさめた。見ならって百合も元通り幟に仕込みをおさめた。しかし腰つきが女だと言われたのがこたえたか、きまり悪そうに、もう紺の包みを背負おうとはしない。
見て、
「中は何だ、女の衣裳やら身のまわりの品々か。――佐助」
「？」
「おぬしが持ってやれ」
「わしが？」
「よいではないか。この兄妹、駿河殿の使いよ」
さすがに、声をのんだ。
駿河殿といえば将軍秀忠の二男――忠長のことである。つまり家光の弟で、幼名国松。
幕府列臣の中には竹千代君（家光）の凡庸なのにくらべ、聡明の国松君こそ天下をお継ぎなされるにふさわしき御器量なりと進言する者あり、秀忠夫妻も家光よりは忠長を鍾愛した。
それが、七年前――元和元年十月のことだったという。家康が駿府より江戸城にやって来たときに、竹千代、国松の二人の孫は幸橋のたもとまで祖父さまを出迎えた。さて城内西の丸に入っ

て、秀忠との対面のとき、家康は自分の坐っている上段へ竹千代を招いた。ついで国松が上段へ上ろうとしたら、

「おことは同席することならん」

と叱って、下座にすわらせた。この時はじめて、父の秀忠は言うまでもなく幕臣ら、大御所家康の意中を知り、竹千代を次代将軍家と定めたという。

いわばこの時に将軍継承問題は決着をみたのだが、それでも、家康亡きいま、凡庸の家光を措いて天下のため駿河五十五万石、権大納言忠長殿こそを将軍家にと、ひそかに願っている老臣は多いという。

――そんな忠長の密使が、一人は薬売りに変装までして、この宇都宮へ来ているのだ。宇都宮城主本多正純が、いまの将軍秀忠ににくまれ謀叛を企だてているらしいこと、忠長が駿府のあるじであり、あの御遺金は一たん駿府の久能山に納められたこと、その中の十万両余が紛失したこと、それらを考え併せれば、何のため勘解由兄妹が宇都宮を徘徊しているか、およその見当はつく。

佐助が声をのんだわけである。

もしかすれば、あの越前忠直卿と駿河権大納言忠長、それに本多正純の三人が共謀で、天下をゆるがす大謀叛は密議されているのかも知れないのだ。

しかも一方では、将軍秀忠の姉たる加納殿までが、侍女の岬をひそかに宇都宮へつかわしている。

いったい誰が、真の味方か、敵か。なるほど勘解由でなくとも、刀にかけて知っておきたいところであろうに、今また、真意不明の陰の男――柳生新太郎が、雲水姿で登場したのだ。

そもそもでは、新太郎はどちらの味方か？　謀叛サイドか、それとも公儀の隠密か？

「新太郎――」

佐助は菅笠の下で、眼を光らせ、

「おぬしこそ一体なんのために――」

問いかけたら、

「よいではないか。それよりおぬしに聞かせたいことがある。……ま、このままでは人目にも立つ、歩きながら話そう――」

七

柳生新太郎が説き明かしたのは先ず加納殿の心底だった。

加納殿の夫君奥平九八郎は、最初の妻を甲州へ人質に出してまで徳川家のために尽くした武将である。武田勝頼はついにこれを怒って、その妻を磔にしてしまった。それでも九八郎は家康への忠誠をつらぬいたので、これに感じた家康は自分の娘――岡崎三郎と一つ腹の妹である亀姫を、九八郎の後添えに与えた。

九八郎は慶長六年、美濃の加納で十万石の城主になったから、亀姫を人は加納殿と呼ぶ。

さてそれほど奥平氏は徳川に武功の家柄だから、九八郎と亀姫のあいだに生まれた奥平大膳大夫家昌には、加納とは別に宇都宮城が与えられていた。それが、慶長十九年、大膳大夫家昌は三十八歳で世を去り、その子忠昌（家康には外曾孫）は当時まだ七歳の幼少ゆえ、とても関東の要害――宇都宮を守るには心もとなしと、古河へ移し、あとに乗り込んだのが本多正純である。

古河と宇都宮では、その城郭の規模、奥羽一円へのにらみにおいて格段の差がある。

亀姫こと加納殿にはこれが心外だったらしい。彼女は愛孫忠昌のために、さっそく将軍秀忠に対面し、さして武功があるでもない正純――なるほど知恵は働こうが、野戦の経験もあまりなく、いわば文官である正純ごときに宇都宮の要害を守らせるは不適当なりと言って、ぜひ宇都宮は旧前通り孫忠昌に賜わるべしと言い張った。

秀忠は内心困惑したようだったが、すでに決まっていることで、この際の変更は無理でござると婉曲(えんきょく)にことわったという。そもそも本多正純が宇都宮に乗りこんだのは、前にも述べたように大御所さまご遺言にしたがうのであると、正純自身が言い出したことだった。大御所さまの遺命であれば、たとえ姉の加納殿が希望でも添い申すわけには参らん、秀忠はそう言ったという。

だが加納殿にしてみれば、家康の臨終に誰も立会ったわけではない。そもそも大御所さま臨終に際し、天下のことは御遺言あるともたかが関東の城ひとつのことなど、末期(いまわ)のきわに口になさる道理はない、きっとこれは正純が自分勝手に言い出したことにちがいないという考えがある。そこで語気激しく秀忠に変更を迫られたのだが、

「もはや決まったことなれば」

の一点張りで、ついに望みはかなえられなかった。忠昌は古河城主にきまった。

でも、よほど肚(はら)にすえかねたらしい。加納殿は愛孫忠昌の侍臣たちに、宇都宮を去るときは城中の竹木を伐(か)り取り、侍屋敷の畳建具も古河へ持って行きゃるがよい、と言いつけた。正純への一種の厭(いや)がらせである。

正純は怒った。大名の移封に際し、城中の諸具はむろん、城付きのものいっさい在来通りとし、竹木など伐り取ってはならぬのは武家の定法である、法を破っても持去るのであれば当方にも考えがある、と忠昌の家来共を叱りつけた。加納殿はたしかに御主筋のお生まれに相違ないが、い

まは一大名家の後室である、われらは幕府老中である、加納殿の心情はどうあれ、たかが大名夫人に定法をまげられては幕府の威信にもかかわること、

「只(ただ)では済むまいぞ」

忠昌の家老を呼びつけて叱ったのだ。

すじが通っている。

宇都宮を出るとき、やむなく忠昌の家来らは城中を散乱させておくことで加納殿の気を晴らし侍屋敷の畳建具はそのままに、古河へ移った。

――そういういきさつがある。

「加納殿の本心はの」

新太郎は言う。

「いま以て、本多上野介への憎しみでいっぱいよ。おりあらば上野介を失脚させ、初念をつらぬいて忠昌どのを再び宇都宮城主へと企んでおられるわ。岬という女を城下に潜入させられたもつまりはそれじゃ。上野介の越度(おちど)を、何とか見つけ出そうとな。――あの大工に惚(ほ)れて自害した庄屋の娘が遺書を手に入れるのが、されば加納殿の狙(ねら)いとわしは見ている。つまり、加納殿は上野介の敵――」

次に新太郎が口にしたのは佐助には思いもよらぬ人物の名前だった。

「さて次は、月どのじゃが――」

「月どの？」

それは一体だれなのかと佐助が問うと、

「ふ、ふ、は」

意味ありげに新太郎はわらって、
「忍び者のおぬしでも知らぬことが、世の中にはあるわ」

ふしぎな男

一

馬は、奥州産がよい。
あの山内一豊が、妻のへそくりで買った馬のおかげで、織田信長の目にとまり、出世する咄は有名だが、一豊が大金を投じて買ったのも奥州産の馬だった。
一口に奥州産といっても、南部馬、最上馬、仙台馬といろいろあり、毎年、何百匹という馬が奥州路を江戸へ送られる。そうして先ず将軍家で御用馬が定められたあと、各大名に買いあげられる。
このときアテモノということをする。
高張提灯、馬標、槍、長柄傘などを馬の面や体に当ててみて、驚くかどうかを試すので、仙台馬はいかにアテモノをしても平気でいる。南部馬にいたっては、更に鷹揚で、火事地震がおこっても驚かずケロッとしているそうだ。
その点、最上馬はそそっかしく尻軽で、かんしゃく持ちで、ふだん、乗手にさえ甘いと見れば咬みつくという。そのかわりいよいよとなれば、うまい芸をするのも最上馬が一番だそうである。

したがって、大名の身分、位、その性格や使途によって馬の選び方は違ってくる。えらばれた馬を見れば、乗手の殿様の知行高から気性までがわかると、心得ある者が言うゆえんで、山内一豊が信長の目にとまったのもこうした事由からである。

ところで、どんな馬も尻尾をふって蠅や虻を追い払うが、ここ仙台の城下はずれに農耕を業とする一青年あり。一日、街道を遠出する伊達政宗の騎馬姿を路上に眺めて、

「おわかりにならんかなあ」

と、つぶやいた。これが偶然、政宗の耳に入った。

政宗は馬をとめ、供奉する家来に、何がわからんのかと問わせると、

「尻尾じゃわい。良い馬やのに惜しいのう」

と言う。わしにまかせてくれればと言う。

「その方、馬喰か？」

と家来がきくと、ニヤリとわらって、

「いいや、ただの百姓じゃ」

身なりはたしかに貧しい野良着姿ながら、眉秀で、眼に不敵な光あり、ただの田舎者とも見えなかった。

馬上の政宗は、独眼でこの青年を暫し見すえてのち、

「悴め、汝にまかせば何とする？」

詞をかけると、陸奥の驍将伊達政宗と知らぬわけではあるまいに、

「せば、馬を降りてくだされ」

こともなげに言う。

少考ののち、政宗は馬をおり、これを青年にまかせた。

彼はすると、馬の後尾にまわり立って、手の鎌を揮いサッと尻尾の筋を切った。

こうすると馬はもう尾で蠅を追うことはできない。終始バラッと女の洗髪のように垂れ、まことに見た目にも優美になった。

政宗は感心した。

「その方、名は何と申す？」

牀几に腰をおろして問うと、

「小源太じゃ」

「当所の生まれか」

「うん」

「親は？」

くびをふって、もう死んだ、と言う。

その人品骨柄、衆にすぐれ、ただの水呑百姓とはどうしても見えないので、親は何者かと重ねて問うと、

「マタギじゃ」

山中を跋渉し、槍で熊を捕る奥州独自の猟師だというのである。なるほどそれなら筋骨のたくましいのもうなずける。

政宗は合点して、

「そうか、マタギの悴なら、どうじゃ、わしに奉公せぬか」

士分に取り立てようというのだから、大変な名誉である。

もっとも南部藩あたりでも、年に一度、正月にマタギの頭目は城門にいたり、登城をゆるされて藩公に年頭の祝詞をのべる。藩主からも年賀の引出物を下さる。雪の山中を駆け、槍一本を武器に熊と格闘してその月の輪を刺すのがマタギだから、どうかすれば武士より余程つよい。体軀（たいく）も頑健（がんけん）で、何よりも山中の地理にあかるい。

　そんなことから、合戦には武士以上の働きをすることとあり、藩主の厚遇をうけるのも無理はなかった。

が、マタギには俸禄（ほうろく）は給されない。武士なら知行があり、扶持（ふち）が出る。やっぱり士分に取り立てられるのは、大変ありがたいことで、マタギにとっても名誉である。

　そんな厚遇を、政宗は、小源太なる青年に与えようかと言ったのだ。

　ところが、小源太はニヤリと嗤（わら）って、くびをふった。

「いりませんわい」

二

　ふしぎな男だ。

「なぜ武士を厭（いと）う？」

　政宗が独眼を光らせると、

「……」

　ニヤリと又わらって、

「今のままが気が楽でええ」

　だれに頭をさげることも要らんし……と言う。

「住居は？　いずれに暮らしおるな？」

「この近くじゃ」

「芋沢（いもさわ）か」

「んだ」

「親は？」

「――」

「両親はおらぬのか？」

　わらって、

「死んだだ」

　あとで家来に調べさせたら、本当に両親はなく芋沢村のはずれの一軒家に妹と暮らしていた。妹は色白で、つぶらな瞳（ひとみ）の、唇（くちびる）の愛くるしい、まさに鄙（ひな）にはまれな乙女で、絣（かすり）の着物に赤いたすき、紺の手甲でよく野良仕事をしているという。

　もっとも村民の話では、藁（わら）ぶきのその一軒家は久しく空家だったのを、いつとはなく兄妹が来て住みついた。以前のその家のあるじは、独り暮らしの百姓で、変屈者で、村人ともほとんど口をきかぬ男だったのが、或（あ）る年、この付近の合戦に雑兵として駆り出され、家を出たきり村へ帰ってこなかった。多分、戦場の何処ぞで、名もない雑兵のまま討死したのであろうと、村の古老たちは語っている。

　兄妹は、行方知れずになったその変屈者の身内かどうか、村の者たちにはわからない。何さま、昔、口をきいた者はいないのだから。兄妹はとても仲が良くて、雪深い冬の期間、時折、熊を仕止めに青年が家を空ける以外は、ほとんど兄妹二人で中にとじ籠（こ）もって睦（むつま）じく暮らしている。い

ちど、近くを通りがかった村の者が、空腹で凍えそうだったので、粥でもめぐんでもらおうと訪ねてみたら、狭い奥座敷で兄妹は昼間から炬燵に入って寝ていた。それがどちらも全裸だった。

村人は目をみはったが、妹はいっこう悪びれる様子もなく、いそいで着物を着て、村人のために囲炉裏の自在鍋の雑炊を馳走してくれた。そうしてまた夜具へもどると、裸になって兄のそばへ身を横たえ、二人は抱き合った。

村人が囲炉裏ばたにいることなどまったく無視したような睦言を交して。

近親相姦は、田舎では間々見受けることである。しかしこうまで大っぴらに行為されては村人はたまげるほかはない。村へ帰ってこのことを吹聴したら、古老の一人は言ったそうだ。

「んだども、あれが兄妹だと何でわかる？」

本人たちが、

「兄者」

「妹よ」

と呼び合っているだけで、同じ腹から生まれたのを見た者はおらん、と。

――とにかくそんな兄妹という。

政宗は家来にこの報告を聴いて、

「怪体な話よの」

数日後、何を思ったか再び芋沢村へ遠乗りに出た。我が眼で妹を見るためだったろう。このときも小源太が尾のスジを切ったあの馬にまたがっていたが、乗れば乗るほど、女の垂れ髪のように伸びやかに靡いてけっして左右へ振りあげられることのない尻尾の品格に、政宗は満足していた。

百姓で、あるいはマタギで、馬のこうしたあつかいまで知っているとは不思議な男である。馬術の心得があるのではないか？

そんな疑念も再度彼に会って、はらしたいとも政宗は思っていたのだ。

ところが、芋沢村に入って、彼ら兄妹の一軒家の在り所を聞きたださんと、一たん庄屋の屋敷に休息した。

床屋の家族らは城主さまの突然のお越しというので、大騒ぎで出迎え、あらかじめ郡代からこの旨を伝えられていたので、饗応のために台所では鯉の生づくりを作っていた。今様でいえば「鯉のあらい」である。

ところで、庄屋の家人がこの料理にかかっていたときに、何処からともなく、ふらりと台所へやって来たのが例の兄――小源太である。

庄屋屋敷ににわかに村人が正装して集まっているので、何事かと立ち寄ったというのだが、さて台所で鯉を料理せんと女房らが庖丁を取る様子を見て、

「あかんのう……鯉はそんな料理の仕方では、味が落ちる。せっかくの生づくりが台無しじゃ。あかんのう」

うそぶいて、

「せっかくお殿様に差上げるんなら、旨い料理のしよう教えてやろうか？」

と言い出した。――ふしぎな男である。

三

女房は庖丁を手に持ったまま、ポカンと青年小源太を見あげ、はじめは、躊躇したという。

お殿様に進呈する料理である。村中でほとんど付き合いもないそんな青年に、せっかくの料理をまかせてよいものかどうか、女房はまよったのだ。

でもいかにも自信ありそうに小源太は笑っている。

そこで亭主に相談しようと、彼女は襷や前掛けを取って、奥座敷へ出向いた。あるじの庄屋はお殿様の御前へ挨拶に出、さすが庄屋だけに紋付羽織はかまで廊下に平伏していた。政宗は座敷の奥で、脇息にくつろいでいた。何人かの家来が左右に居並んでいた。

女房が畏る怖る亭主を物蔭へ呼ぼうとする気配に目をとめたのは政宗だった。

「どう致した」

「ハ、ハイ」

女房はあわてて亭主の背後に平伏して、ありのままを申上げた。

「なに。鯉の生づくりの料理法を教えると？」

「ハ、ハイ……お殿様にせっかく差上げますものなら、おいしく料理してやると……」

「あの男、小源太がか？」

「さ、さようでございます」

「おもしろい」

政宗はパッと座を起つと、

「予が直々に見分してくれる。——女、台所へ案内せい」

伊達政宗が一農村の庄屋の台所へ立ったなど、おそらく例のないことだろう。

台所で立働いていた婢や下男たちは驚いて平伏し、あるいは土下座した。

そんな土間に一人立って小源太だけは怖れる様子もなく政宗を見上げてヒョイと頭をさげ、わ

らっている。

「予に鯉の手料理をいたすと？」

「……ん」

「生きた鯉をか？」

「んだ」

「よし、やってみよ」

かくて小源太の鯉の生づくりが始まったが、彼は先ず、庄屋に言って奉書紙を一枚もらった。これを折り畳んで紙の兜のような烏帽子を作り、眼の下一尺二寸はあろうという鯉を水桶からつかみあげると、この鯉に烏帽子を冠せ、俎板の上に横たえ、庖丁で腹を三度撫でてから、鱗を一ひら取って上向きの眼に嵌めたのである。

すると、ふしぎや鯉は尾をヒクとも動かさなくなった。

もともと鯉は覚悟のよい魚と言われる。それでも先程、女房が料理しようとした時はピチピチ跳ねて困っていた。

それが、ジッと覚悟を決め、もう動かない。

俎板の鯉とは正にこれであろう。

あとは、庖丁で腹を裂き、ウロコを除き、つねの刺身に切れば足りるが、その庖丁さばきが、まるで藩お抱えの賄い役人みたいにあざやかである。

手もとを見まもっていた政宗以下、家来衆、下男、婢にいたるまでが呆然、息をのみ、舌をまいた。

片田舎で熊を獲り、その胆を売るのを業とするマタギの子とはとうてい思えない。

「小源太、その方……」
政宗の独眼が炯々と光り、
「かさねて申しつける。予の家来にならんか」
「……」
「いやか？」
「お殿様」
くびをふり、涼しい目でわらって小源太は、
「おらは今のままでええだ」
マタギだから山刀腰に差していたのは怪しむにあたらない。熊の皮を鞘にした脇差である。だが、脛に継のあたった野良着、右腰にぶら下げた手拭い、蔓で無造作に束ねただけの長髪、無精ひげ。どう見ても百姓のそれも小作人である。
「そちに妹がおるそうじゃな？」
政宗はなおも小源太を鋭く見すえて言った。
「ん、……いるだ」
「そのほう家来にならんのなら、妹を城へ差出すか？」
「――」
「いやとは言わさん。予も仙台の政宗である。ことわるにおいては所存があるぞ」
「……」
「どうじゃな、妹を奉公に出すか。そちが参るか？」
すると小源太は、人をくったように白い歯でニッとわらい、

「困るぞ殿さま……妹はおらと一緒でのうては、一日もよう生きん……お殿様なんぞの男根はいやと言うぞ。――ええんけ？」

四

「ぶ、無礼者。殿に対して何たる……」
家来の一人がたまりかね、刀に手をかけて土間へとび降りた。
政宗はとめなかった。
小源太は鯉を生づくりした庖丁をまだ手にしている。
左手へ、それを持ち替えながら、
「ぶれい者？　いやじゃのう侍は。……なんぞ言うたらお手討ちじゃ。んだから、おら、さむらいはきらいじゃ」
「宗九郎」
「はっ」
「かまわぬ、斬れ」
政宗が言った。
主君のお許しがあれば、もう遠慮はない。
宗九郎は馬廻りをつとめて、刀術自慢の屈強の士である。大刀を抜き放ち、
「下郎。殿の仰せなれば成敗してくれる。それへ、なおれ」
キャッ、とカマドの火加減やお膳を運ぶ手伝いに来ていた近在の百姓の女どもが、白刃に怖れ、壁ぎわに走り寄って、おののく。

「おらを斬る?……」
小源太はいっこうに愕かなかった。
「お殿さま」
囲炉裏ばたに突っ立つ政宗を見上げ、
「まだおらは死にとうないで……おらが勝っても、ええかの?」
「おのれ」
宗九郎は激怒し、
「小癪な下郎」
真っ向に、傍から、小源太の肩へ斬りつけた。
丁と、出刃庖丁の峯で切先を撥ね、横っ飛びにカマドへ寄ると沸る湯の柄杓を把って、わざと顔面には懸らぬよう胸から腕へ、どっぷりニエ湯を注いだからたまらない。
「あっつ、つ、熱……」
飛沫が首すじへ懸ったあと、胸や腕を火攻めする激痛で湯は宗九郎の肌着に浸透した。
あっという間の出来事だった。
「お、おのれ不埒な」
他の家来が三人ばかり一斉に、政宗の側を土間へとび降り、手に手に刀へ手をかけて小源太へ詰め寄った時は、すでにおそい。
小源太は又、どっぷり釜の湯を柄杓に汲み持っていて、
「くるか?……こんどは顔へ撒くぞ」
ニヤリとわらいながら一同へ目をくばる。近づく者はなかった。

じり、じり、そうして庖丁と柄杓を両手に小源太は後退し、とうとう台所の戸口までさがって、
「お殿さま」
はるかな政宗に言ったのだ。
「勘弁してけれ……あした、おらは妹をつれてお城へ行くだども、今日はこれで見逃してけれ。頼むぞ。なあ」
言うと、パッと後ざまに敷居をまたぎ出、
「庄屋さま……これ、返すで」
庖丁と柄杓を地面へ置くや忽ち外へ逃げ去った。その早さはとても並みの足で追跡できるものではなかった。
いかな伊達政宗も一本、取られたのである。
口惜しさよりは、かえって舌をまき、
「にくい奴めが……」
失笑すると、それきりもう小源太のことには触れず、
「せっかくじゃ、食味いたそう」
鯉の生づくりに後刻座敷で箸をつけた。そうして思わず、
「なるほど、うまい」
感嘆したそうである。
翌日、ひそかに政宗は心待ちしていたのに、とうとう小源太は姿を見せなかった。
翌日も、更に次の日も。
そこで大魚を逃がしたような心地になって、家臣をあらためて芋沢村へつかわすと、果して一

軒家は藻抜けのからであることがわかった。
兄妹で行方をくらましてしまったのだ。
ところが七日あまり過ぎて、
「との」
胸や二の腕を火傷し旁々面目を失って御前を遠慮していた伊沢宗九郎が登城して、
「これをご覧下さりませい」
差出したのは小さな壺と、何やら拙い字で書きしたためた紙片だった。
——読むと、
「昨日のことは怺えてけれ。この壺のくすりは火傷に能う効くで塗ってけれ」
そんな意味が記されてある。
「その方、塗ったのか」
「はっ」
宗九郎は「畏れながら」と、ことわって裃の衿もとを両手で、はだけた。
「ご覧ねがいまする」
やけどは跡方もなく癒っている。
まくりあげた腕も同様だ。あの翌朝には皮膚が水腫れして疼痛に一晩くるしみつづけたのが、半信半疑で壺の薬を塗ったところ、程なく痛みはおさまり、三日目あたりから水腫れもひいた。それで全治をまって登城したが、薬はまだ残っている、何かのおりお役にも立とうかと持参つかまつってございますと言うのである。
聞いて、

「この壺、小源太めはどのように届けて参った?」
「それが殿」
まことに奇怪なと、宗九郎は語り出した。

五

伊沢宗九郎は侍町に住んでいる。
まわりはすべて藩士たちの居宅。
宗九郎は犬が好きで、権と名づける秋田犬を飼っていた。
夜は庭に放ってあるが、垣根や塀をへだてた隣家に人が徘徊しても忽ちに吠え、まことに用心がいい。
曲者の侵入にそなえる意味でも、武士は犬を飼うべしというのが宗九郎の意見である。
そのゴンが、あの小源太に火傷させられた翌朝、厠へ宗九郎が起き立って、ふと見ると、いつもなら庭の何処にいても足音で主人と知って、尾をふりながら一番に縁先へ慕い寄ってくるのに、この朝にかぎって植木の下に腹這って動こうとしない。わずかに宗九郎をふりむいて尻尾をふるだけである。
「ゴン。どうした?」
ふしぎなことよと、胸や腕の疼痛に眉をしかめながらも、そこは犬好きとて、庭下駄を突っかけ、寝巻姿でそばへ寄っていった。
ゴンは嬉しそうに激しく尾を振ったが腹這いをやめようとしない。
そこで初めて、ゴンのなげ出した前肢の前に小さな壺が置かれ、あたかもゴンはこれを守備す

るように腹這っているのに気がついた。

壺の口には、何やら紙片が結びつけられていた。

不審に思いながらこれをひらき見て、宗九郎は開いた口がふさがらなかった。

昨夜彼は、疼痛でまんじりともしなかった。小源太が好意で届けてくれたにせよ、外から庭に忍び入ったものをゴンが吠え立てたのであれば、その啼き声を耳にしたはずであるのに、全然、その気配がなかったばかりか、こうしてゴンは小源太の届け物を、多分片時もそばを離れず守りつづけてきたのである。

何という不思議なこと。

「まことに以て小源太なる男、奇怪なものに存じまする」

宗九郎は政宗にそう言ったのだ。

「ふーん」

政宗もただ唸るばかりであった。

見れば見るほど、筆のチビた拙い字ながら、墨跡に言い知れぬ稚趣あり、人がらの醇朴なのを偲ばせる。いよいよ政宗は小源太を心ににくからず思うようになった、という。

が、行方の知れぬものを尋ねようがない。

翌年の春、参勤のことあって政宗は江戸に赴いた。当時は奥羽の大名が江戸に入るときは、将軍秀忠みずから騎馬で、千住や葛飾辺までわずかな供連れで出迎えたものである。そして入府の労をねぎらい、且つは親睦を深め、また外様大名への懐柔策ともしたが、のちに仙台黄門と敬称された政宗ほどになると、秀忠の出迎えも一段とねんごろで、わざわざ政宗の行列が街道をやって来るのを、馬を降り、路傍の牀几に憩いつつ待ったそうだ。

それぐらいだから、出迎えを受けたと知れば政宗も乗り物を降り、さっそく、自身も馬上の人となり将軍家と轡を並べて、互いの近況や世話咄など語らいながら江戸城に向う。

まだ土下座の制度など定められていなかったので江戸市民もわずかに路傍に行列を避ける程度、百姓なら農耕の手をやすめることもなかった。

（江戸府内にも当時は田畑がいくらもあった）

さて将軍家と二人、そうして長閑に談笑しながら馬を進めていて、ふと政宗は将軍家の乗馬は、しきりに尻尾で、虫をふり払っているのに気がついた。

「われらの馬が尾をご覧くだされよ」

女の洗い髪のようにしなやかに垂れたままなのを自慢したのである。

秀忠も戦場に馬を乗り回した経験のある武将だ。ひと目で、政宗の乗馬の尻尾の優美なのに惚れ込んで、

「なるほど。見事なものよ……乗馬の産地を領内にもつおことがうらやましい」

「いいや、お上のお言葉なれどただの仙台馬では、こうは参り申さぬ」

政宗はありのままに、小源太が尾のスジを切ったたまものであることを告げた。

「スジを切る？」

「さよう、われらも幼少より馬には乗りつけてござるが、尾が蠅を追うことまで気にとめはいたさなんだ……が、こうしてゆったりと尾のさがりおる臀を眺め申すと……ハ、ハ、ハ……こころよいもので」

そう言われると秀忠は何度か馬の足をゆるめ、後にさがって政宗の馬の尻をあらためてしげしげ眺めやってから、

「左門……左門はついて参ってはおらぬか」
ふり返って供奉する旗本の中で馬術自慢の朝比奈左門をさがした。
「は、左門、これにひかえおりまする」
供づれの中から、そう言って朝比奈左門が馬を駆け寄せて来た。

六

朝比奈左門は馬術の達人だけに、秀忠と政宗から委細を聞かされ、眼を光らせた。
末脚の早さ、疾駆する馬への鞭の入れよう、敵と駆けちがう時の手綱の締めぐあい——そういうことには、左門は抜群の妙手である。馬の姿を一目見ただけで、どれほど度胸のある馬か、長時間の疾走にどこまで耐えられるかも、左門は看破してほぼ誤りがなかったし、こんな逸話も伝えられている。
野原に放し飼いになった二頭の馬あり（むかしは千葉街道の船橋や行徳あたりで官用の馬が野飼いされていた）この二頭を左門が見て、かたわらの武士に、
「おぬしあの二頭のどちらが早く、この地に放し飼いされたかわかるか？」
と訊いた。相手がわからない、と答えると、
「鯉の滝のぼり、と申すことは？」
「それなら存じております」
「鯉のウロコはどの方向にむかって並んでおるか、わかるか？」
「方向？……」
「尻尾にむかってか、頭へか」

「それは申すまでもござらん、尾の方へと」
「さよう、だから鯉は上流にむかってのぼることができる。あのウロコが逆についておったら、鯉にかぎらずどのような魚も川を上流へ向いては泳げまい……同じ道理での、馬の毛あしはすべて頭から尾の方向へ生えておるもの、されば風を切って疾駆もできる。わかるか？　あの二頭のうち、黒毛のほうは草を喰むに尻を風かみに向けておろう。風上へ尻を向ければどうなる？　逆毛となって風は毛穴に吹き入り、風邪をひく、風邪は馬にとっての難病。よって常に風の吹いて参る方へ、土地に馴れた馬は馬首を向けて草を喰むものじゃ。しかるにあの黒毛は、季節により風の方向の変化いたすをまだ知らぬ……此の土地につれられ参って日の浅い証拠である」
あとで土地の馬喰にたずねたらその通りだったので、さすがは馬術の名手よと左門は将軍家お褒めにもあずかった。
そんな朝比奈左門でも、尾のスジを切って女の洗い髪のように美しく尻尾を靡かせることは知らなかったのだ。
「陸奥守どの」
左門は馬上の政宗のわきへ馬を寄せると、
「その者いったい、何者にござりまする？」
「ただ在所者よ。小源太と申して、マタギの悴と本人は申しおるが」
「マタギの……小源太？」
少時、思案ののち、
「アッ」
小さな叫びを左門はあげた。

「どうした？」
秀忠がいぶかって、
「そちに何ぞ思いあたることでもあるか」
「上様。その者なれば確か柳生又右衛門がもとに」
「なに？」
「間違いはございませぬ、たしかにその者、柳生又右衛門屋敷に居るをそれがし見受けたことが」
これには政宗が表情を変え、
「左門とやら、それは、まことか？」
「は。……くわしいことはそれがしも存じませぬが、たしかに」
「ならばいま、柳生のもとにおるのじゃな？」
「いえ、それがもう――」
自分が又右衛門宗矩のもとで見たのは一月ほど前で、そのときの宗矩の口ぶりでは、剣術の内弟子にと当人が希望して手もとにおいてみたが、いろいろふしぎなことを知っている、おもしろがってこの話を紀伊公にしたところ、
「おれに呉れよ」
紀伊藩主徳川頼宣は大そう小源太を気に入られて、強ってと懇望されたので今はたしか紀州家にいるはずである――そう左門は答えたのだ。念のため言っておくと、この時分の柳生宗矩はもちろんまだ大目付の要職に就いてはいないし新陰流兵法師範として将軍秀忠に仕えたとはいっても、麾下の一家士にすぎなかった。現在のわれわれが想像するほど有名な人物ではなかったのである。

だが伊達政宗はちがう。
かねて政宗は将軍家の側近に器量非凡の武士がいるのに目をつけていた。
名を柳生又右衛門と聞いて、
「なるほど……あれが素肌の宗矩か」
と、うなずき、あらためて仙台六十二万石の太守政宗みずから、二千石の旗本宗矩に親しくことばをかけ、親交をもとめている。その政宗だけに、不思議な男・小源太があの仙台城下より行方をくらましていたのが、一時にもせよ、宗矩のもとに身を寄せていたと知って、よほどざんねんだったらしく、
「お上に政宗、強ってお願いの儀がござるが」
馬を並べた将軍秀忠に言った。江戸城外郭の白い壁と、本丸の偉容がもう目の前に近づいていた。
「たっての願い？……なんだの？」
「お上お声がかりにて是非とも、譲りうけたきものがござる――」

七

大坂夏の陣で、豊臣方の城兵がある日、突然、討って出て秀忠が本営を襲い、真田幸村の設けた地雷火で陣所を破壊されたため、人馬とも傷ついて徳川勢は騒擾甚だしく、秀忠は危険にさらされたことがある。
この機に乗じ、城兵は木村主計以下、素肌の士三十五人で秀忠の本陣へ斬りこみをかけた。

これを単身、むかえ撃ったのが一介の兵法者（扈従の家士でもあった）柳生又右衛門宗矩で、宗矩は忽ち敵七人を斬り伏せ、更に進んで木村主計に手を負わせた。主計はのちに安藤右衛門に討ち取られたが、この安藤も戦死している。

短時間ながら、いかに凄惨な斬り合いだったかを生き残った者は後々まで語り草にしたが、柳生宗矩の妙剣を人々が認識したのはこの時からだった。時に宗矩四十二歳。たしかに宗矩が奮戦せねば秀忠は危なかったので、以来、

「素肌の宗矩」

と伊達政宗らが宗矩を呼ぶようにもなったわけである。

さて政宗が将軍秀忠に、ぜひとも所望つかまつると言ったのは、紀州家に奉公するようになったという小源太を、何とか、自分に譲ってもらえるよう口添えをしてほしいということだった。

「小源太とやらをか？……いったい左程になぜ、執着めされるな？」

秀忠がたずねるのへ、政宗は、ただ、もともと小源太は仙台領内に暮らしたもので、言えば自分の領民である、それが他藩で禄を食むのは理に合わぬしだいと思うからだ、と答えた。

秀忠も深くは追求せず、

「常陸介（紀州藩主頼宣）が何と申すか……ともかく、口添えはつかまつろう」

そう約束した。二人は馬首をならべて江戸城大手門を入った。

ところが、将軍家の口添えにもかかわらず徳川頼宣は、政宗のこの願いを一言のもとにことわったという。

「常陸が家来にいたした者は、たとえ何国の生まれなりとも今は主従なり。親子は一世、夫婦は二世、主従は三世の縁と申す譬えもあることなれば、前世よりの結びつきでござろう。いかに上

様がお言葉なりとも、此の儀はご免こうむる」

と。

政宗におとらぬ小源太への執心ぶりで、秀忠はむしろあきれて、

「素姓も知れぬたかが在所者に、一体また、どうして」

それほど執心するのかと問うと、当時十七歳の常陸介はまだ少年の面影のやどる頰を紅潮させ、こんな咄をしたそうだ。

或る邸内の庭に、竹が繁っていて、美味な筍が出る。この筍を分けてもらいたいと隣邸で所望したら、

「お口には合い申すまじく」

とニベもなく断わられた。これを聞いて当時宗矩の内弟子になっていた小源太が言うのに、

「筍かい。雑作もないことやのにのう」

と。

どうしてかとたずねると、竹の茂った隣邸との塀のこちらに、良質の肥料をたくさん撒いておけばよい。そうすれば翌年、隣邸から竹の地下茎がかならずこちらの庭に伸びてくる。つまり翌年になれば、おいしい筍が自ずとこちらにも生えるのだから、わざわざ隣邸に頼まずとも食味できるわけではないかと。

「万事がこの調子にて、まことに以てふしぎなる男、いろいろ他にもおもしろい知恵をさずけてくれる者なれば、重宝なることかぎりなし、惜しくて手離す気にはなれ申さぬ」

そう秀忠に語って、ことわったという。

相手はなにぶん、神君家康の実子、かつは秀忠の末弟である。いかな政宗もあきらめざるを得

なんだろうが、
「筍の盗みようまで心得おるとは、いよいよ以て奇っ怪なやつ……惜しい男をにがしたわ」
くり返しそう独言しては無念がり、「それにいたしても、まことにあ奴、マタギの倅であったのか？……」
小首をかしげたという。
――以上は三年前、元和四年ごろの話だ。
いま、小源太は、名を月ノ輪小源太と名乗り、頼宣公お直の家来となって、でも相変らず武士らしい身扮りをするではなく、和歌山領内で人跡未踏の熊野の深山にわけ入っては猟を楽しんだり、そうかと思うと頼宣公の言いつけでか、ふらりと江戸市中に出没しているそうだ。見かけは百姓そっくりのいでたちで。
「わかるか佐助」
ながいながい小源太のこんな略歴を、猿飛佐助に語ったあとで托鉢姿の柳生新太郎は胡坐になった。
「ここまで申せば、月さまとはソモ何者か、おぬしにも見当がつくであろう」
「ではふしぎなその男が月さま？」
「いいや」
新太郎はニコリともせず、
「紀州権中納言……常陸介頼宣どのよ」
「な、何と?!」

盟約

一

日はそろそろ西に傾いている。
ふしぎな男――小源太に就いて、長い話を新太郎が猿飛佐助に明かしたのは宇都宮城下はずれの、荒びた寺の本堂だった。
あの薬売りに変装した乙女百合と、地摺りの青眼を使った編笠の武士田村勘解由の姿は、ここには見当らない。
寺は、長楽寺といって、宇都宮城の西辺にあり、前年よりの城普請で押田という処に在ったのを、にわかにここへ移された。
「汗かき阿弥陀」
と俗に呼ばれる銅仏の如来さまが寺の本尊である。
対坐した托鉢姿の新太郎と佐助のわきに、露き出しで即製の台座の上にその如来さまが鎮座ましましている。
「いろいろ得体の知れぬ者までがいま、この宇都宮城下に出没いたしておるが」

新太郎は言った。大きな網代笠（あじろがさ）を脱ぐと、むろん、有髪（うはつ）で、佐助が素顔で柳生新太郎と相対するのはこれが初めてだ。

「よいか、この際お互いの今後がためもあることよ、敵味方を、わかりやすく分類いたしておこう。――先ず、これが本多上野介――」

言って、対坐する二人のあいだに、腰の火うち袋をはずして、置いた。

「おぬしの側はこれじゃ。まず当の猿飛佐助――別称小天狗。それに三好清海入道、由利鎌之助……この三人は『池上や』に投宿いたしておった。そこへ『八幡や』に、穴山小介が根来衆や大工をつれて到着いたした。この小介は内心、何を考えておるかまだおれには見当がついておらん。が察するに加納殿へ取り入り、多分はお付き女中の誰（だれ）ぞとねんごろにあいなって――小介は俗に申す『小男の大魔羅』……女にはモテるらしいでの――加納殿の今の家来分に取立てられての宇都宮入りであろうが……ともかく彼は目下まだ『八幡や』に投宿いたす。

次が、武蔵坊弁慶などとタワケた広言を吐いて突如、あらわれおった筧十蔵……十蔵があの旅人あらための場へ何故あらわれよったか……蔭（かげ）でおぬしが糸を引いておったかどうか、これもまだ実のところ、おれは委細がつかめておらんが……何にせよ十蔵が登場いたした。

もう一人は、霧隠才蔵こと〝くの一〟の才。土中の棺より蘇生（そせい）したごとく見せかけ、巧みに上野介へ取り入って今は駒井勘兵衛――あの白髪の妖僧（ようそう）を朋輩（ほうばい）ともども田楽刺し致したあの勘兵衛と、上野介じきじきの媒酌にて城中において祝言をあげて、今は勘兵衛の妻となった。そうさせた上野介の腹はまだ読めんが、おれの知る限り、夫婦をして越前忠直卿へ密使に旅立たせた気配がある。されば霧隠才はいま、この宇都宮にはおらん。――ちがうか？」

「その通りだ」

率直に佐助はうなずいた。

その眼を見詰めて、ニヤリと満足そうに新太郎はわらい、

「したがって――」

語りつづけた。

「大坂落城後、真田十勇士のうち生存いたしたものはおぬし、筧、由利、三好、穴山、それに霧隠の都合六人……これが、穴山小介の心底は別といたそう、いずれも亡君幸村の遺趣をはらさんとてか、徳川にひと泡（あわ）吹かさん、それには先ず軍資金として久能山の御遺金十万両が隠匿場所を突きとめんと――あるいはいっそ本多上野介に謀叛（むほん）させせんと煽動（せんどう）のため、当城下に参っておる――そうであろう？」

「……」

「ちがうとは言わさぬぞ。いつぞやの夜、おぬし白石城へ幸村どのが遺姫お万阿さまがご消息をたずねにと仙台領へ走った……あのおり実は古陰流の忍者狭川古弥太をおれは追跡させた――」

「狭川古弥太？」

「ふ、ふ、……知らんか。ならばよい。何にいたせ、白石城本丸におぬし見事潜入のうえ、お万阿さまに対面のかのうたこと、既に古弥太よりの報らせで当方、存じている。お万阿さまが近況を案じご機嫌（げん）うかがいにまかり入ったとは表むき、まことは、お万阿さまの夫君片倉重綱をして伊達政宗の心底をさぐらんといたしたこともな」

「！……」

「図星か。まあよかろう。次にじゃ――」

火うち袋のとなりへ、こんどは腰の印籠（いんろう）を、新太郎は置いた――

二

火うち袋と並べて置かれた印籠には、金蒔絵で吾亦紅の定紋が付いていた。それが柳生新太郎の身分を何か象徴していた。

そもそも火うち袋は、戦国時代の武士は腰にはさげず、太刀にくくり付けたものである。たいがいは、黒い錦か染め革を三角に縫い、裏を付け、端を糸でかがって緒をさし通して引きしめる。中には火うち石と、打ち鉄と、火口（一種の消し炭。また斑枝花に焔硝を加えて製したのもあった）が入れてあり、別に、砥の粉を包んだ袋を入れることもある。この袋は開けるところを小はぜでとめ、紛れぬように開口部は白地の錦でこしらえてある。人を斬って血をぬぐうとき、この砥の粉で血のぬめり（血のり）を除去せぬと切れ味がにぶるので、武士はかならず火うち袋を刀につけたのである。

新太郎が置いたのは、印籠同様、金襴地の見事なものだった。存外その袋も大きいのは、（本来は見苦しいとされているが）忍者ゆえ中に薬なども入れてあるのかも知れない。

さて二つを置き並べて、

「よいか佐助」

新太郎は言った。

「この火うち袋が本多上野介なれば、この印籠はさしづめ加納どの。おぬしが意図によっては毒薬にも、良薬にもなるものよ」

「？……」

「かくすな。加納どのが女使者――あの中﨟の岬へ清海入道を近づけんとしたおぬしの腹は見

えている。清海入道では人が好すぎて心もとないゆえ、弁慶こと筧十蔵にも一役買わせたこともな」

「――」

「だがな、加納どのが本多正純をにくみなされておること、自害した庄屋の娘が遺書を証拠に、正純が謀叛の企みをあばかんと岬を当地へつかわされたことも、又、明白……よっておぬしは加納どのに余り動き回られては本多の謀叛を煽動せんとの狙いに齟齬をきたすゆえ、これを牽制せんためにと三好や筧を近づけた……だがな、今も申す通り、しだいによっては加納どのは良薬になる……なぜなら加納どのはしょせんは女。いかに将軍家姉なればとてそのねらいは、本多正純が失脚にとどまりとてものことに天下をくつがえそうとは夢思うておられぬわ。しかるに国千代君――左中将忠長どのはちがう。次代将軍家たる家光公のご舎弟ながら、家光公より譜代大名の信望あつく、器量また大きい。さればこそ、越前忠直卿と手を組むかたわら正純はこの忠長どのにこそ、おのが生涯を賭けているとおれは見た。

――わかるか？　いかに正純が当代（将軍秀忠）をにくみ参らせばとて、身は一介の徳川の家来、天下は取れん……がな、忠長どのをもり立て次期将軍家にすえるなれば、幕府はおのが傀儡も同然、天下は意のままであろう……そこで、明年四月、当代が日光ご社参のおり宇都宮城に御泊りある機をとらえ、釣天井をもって当代を失いまいらせて、越前の忠直卿と謀り忠長どのこそ次期将軍家にふさわしいご器量との世論をおこすが、正純謀叛の企図たることおぬしもおよそ、察しておるはず……だがな、おめおめこの謀叛を成功させまいとする深謀家が一人……いや、二人、秀忠どのの側にもおるわ」

「二人？」

「そうよ」
「だれのことを？」
「ふ、ふ、ふ……」
　ここで新太郎は意味深長な含み笑いをうかべ、
「土井大炊頭利勝よ」
　大御所家康が、天下とともに秀忠に譲られたとまで評判される、土井利勝は傑物だ。
「大炊頭のことはわかるが、今一人は？」
「ふ、ふ、ふ……」
「や。まさかおぬし？……」
　佐助がハッと顔色を変えると、
「ちがう。おれでは、ない」
「？」
「わからぬか」
「——月どの、とおぬしの言った……紀州公か？」
「ちがう。紀州公は別派よ。あの御仁もまたひそかに天下をうかごうてはおられるが……何をかくそう、この柳生新太郎、じつは紀州公とのつながりで動いておるが……しかし、今一人は紀州公ではない」
「では誰？」
「わからんか」
　ふ、ふ、ふ……と又ひくく嗤いながら、

「さよう、おぬしら真田の遺臣には不倶戴天の宿敵——柳生宗矩じゃ」
「ぬ」
「又右衛門宗矩よ」

三

　そろそろ周囲が暗くなってきた。
　忍者はむろん、暗がりでも目はきく。
　しばらくして佐助は、新太郎を見つめ、
「又右衛門宗矩が」
「幕府にあって、深謀をめぐらす一人なら、つづまるところおぬしも、本多正純の、敵か？」
「いちがいにそうは言えん。そうであろう？　宗矩は、あくまで家光公を次代将軍家にすえる腹——このかぎりでは土井大炊と一つ穴のむじなよ。だが、おれはちがう」
「？」
「紀州どのよ。大御所がまだ在世のみぎり、将軍（秀忠）に万一のことあらば天下は常陸（紀州）が惣領よと申されたことがある」
「惣領？」
「よいか、なるほど年齢ならいま尾張の義直公が紀州どのより年長。当代に万一のことあれば先ず尾張殿が後を襲ぐが長幼の序と人は思うかも知れん。だがな、尾張義直どのには弟がない。紀州公には御舎弟に水戸頼房どのがある。つまり紀州公こそは庶子の惣領……曾て越前秀康どのをおいて、当代秀忠公が将軍家になられたのと同じじゃ。尾張どのは同腹の兄弟なき御仁なれば、

たとえ当代ご他界のことあるとも次期将軍は望めず……となると、天下を継ぐもの紀州公をおいて無い……ちがうか？」

「それはおかしい」

「おかしい？……何が？」

「当代はすでに嫡子家光、次男忠長の二人が」

「わからん男よのうおぬしも。……よいか、さようなことは天下衆知、おぬしがあらためて言わずともわかりきっておる……しかしじゃぞ、万一、将軍家の二子がそろって早世いたしたら……どうなる？　また早世せぬとおぬしどうして、言いきれる？」

凄い眼つきであった。

いかな佐助もとっさに言葉は出なかった。

凝乎と、暗がりの中で両者は対坐し、互いの眼をヒタと見つめ合ってから、

「おぬし」

佐助が言った。

「わたしに、では家光か忠長どのを、消せと？——」

「いいや」

ニヤッと嗤ったが新太郎はくびをふって、

「さような大それたことをおぬしには頼まん」

「では何をせよと——？」

「見ておってもらいたいのよ、何もせずにの」

「？……」

「あと半年でよい、半年すればこの宇都宮に日光ご社参の途次、将軍家は一泊いたす、そのみぎり、果たして例の釣天井がものを言うかどうか……もし正純の狙いどおり謀叛が成就いたしたら、その時あらためて、おぬし蹶起いたしてもおそくはあるまい？　毒には毒をもって制す譬もあることだ……みずから手を下さず、あと半年、なり行きを見まもってみる気は、ないか？」

「いっさい、手出しはするなと申すのか？」

「さよう。おぬしにかぎらん、おぬしら真田の遺臣のすべてがじゃ」

「——ことわったら？」

「やむを得まい」

ニヤリと新太郎はわらって、

「おぬしと此処で刺し違えるまでよ」

語尾に殺気があった。

佐助は言った。

「ひとつたずねさせてもらう……おぬしは、どうする？」

「——」

「わたしらが手を引いてもおぬしの方が」

「いいや」

大きく、くびをふると、

「おれも、古陰の柳生新太郎……たしかにおぬしら真田の遺臣にいま動き回られては、チト困ることはある。だが、約束する。おぬしが手を引くなら当方もこの宇都宮に立ちまわることだけは、いっさい、せん」

「きっとか？」
「刀にかけて誓おう」
「霧隠はどうする？」
「それよ、おぬしの差し金でなく駒井勘兵衛の妻となったものを、宇都宮にとどまるなとはおぬしにも言えまい。よって、あれは別。霧隠は本人の好きにさせる……が残る面々——弁慶の筧十蔵、由利鎌之助、三好清海、それに穴山小介ら」
「小介もか？　あれは加納どのの……」
「わかっておる。だがおぬしが手をかさねばあの男ひとりに何ができる。つづまるところあれはおぬしの助力を当てにすればこそ、加納どのに取り入って宇都宮へ来よったとおれは見ている……つまりおぬしあっての穴山小介よ……どうじゃ、あと半年……日光ご社参に将軍家がこの宇都宮へ一泊いたす日まで、いっさい、手を引くと誓うてくれぬか？　おれも引く。武士の名にかけて、このことは約束いたす……どうだ？」
「あと半年だな」
佐助は少考して……ふと、
「十万両のあの御遺金の行方を探すことは？」

四

「十万両か……」
新太郎が膝前へおいたあの印籠を、やおら腰へ吊りながら、
「百万石にくらべれば、しれたもの……」

ふしぎなことを言った。
「おぬしにくれてやる」
「百万石？」
「そうよ、紀州公がお目当ての封高……はじめは百万石であった——」
のちに、紀伊大納言とよばれた徳川頼宣は家康の第十子で、幼名は長福丸。生まれつき英邁で、家康の寵愛もっとも厚く、水戸、尾張とともに御三家と称されたが家康の在世中、いちばん長く膝下に置かれて成人し、家康は駿府城ともども百万石をこの頼宣に与え、自身は三島に隠居するつもりで三島の泉頭という古城の跡に、隠居所の縄張りまでしていたという。
この時にはそして、江戸から土井大炊頭が将軍秀忠の名代となって祝儀まで述べに来た。
ところが、この年の暮（元和二年）に家康は薨じてしまい、右の沙汰は立ち消えになったから、頼宣の生母養珠院はいたく残念がって、
「権現様今三年御存生ならば、常陸(頼宣)を百万石の大身にも叙さるべきを、残り多きことなり」
と口ぐせにもらしていたという。当時幕府老臣の中にはこんな家康の素志を知っている者は多勢いたから、紀州五十五万石に頼宣が封ぜられたとき、
「常陸様の御器量にては紀伊はいささか小国にすぎ申すべく、ご異心これ有るやもはかり難し」
と憂慮する者がいたという。
ちなみに、古書に記された頼宣の言行録を見ると、頼宣は父家康が天下を取れたのは、畢竟、よい家来を持ったからであると思慮し、たとえ浪人者でも、物の用に立つ士と見ればねんごろに引見して引出物を与え、または召し抱え大層たいせつに扱った。
『たとえ他藩の士にしても覚えある名高き者は、使者などに参り候えば親しく御前に召されてな

かなか御念比(ねんごろ)なり』
と誌(しる)されている。だから中国・関東・五畿内・北国・西国にいたるまでも名ある武士で頼宣の音物(いんもつ)を賜わった士は多かった。万一、浪人でもすればいちばんに紀州へ馳(は)せ参じ、皆々公のため身命を捨てても御用に立たんと心掛けたという。

大坂落城後、豊臣恩顧の武将の家臣で浪人したもの数知れず、幕府では、とくに豊臣方残党の詮索には厳重で、警戒の眼を光らせていたが頼宣はそんな幕府の方針には無頓着で、勇士豪傑とみればたとえ以前は徳川に弓引いた武士でも、過去は水に流して召し抱えた。

あのふしぎな男・月ノ輪小源太が有無なく家来に取り立てられたわけである。

頼宣はまた「家来」を手なずけるのに妙を得ていて、たとえば五節句朔望(さくぼう)（一日と十五日）の総登城に藩士が続々城へ登り、大広間が大勢の家士で充満すると、末座や人の群がる蔭(かげ)になって主君の顔もろくに拝せぬ者が居ることになるが、頼宣はそんな末座人かげの家士にまで、名を呼びかけ、

「母者は息災か」

「隠居いたした父親(てておや)は変わりないか」

などと相応の詞(ことば)をかけた。

『よって末々の輩もお目見えつかまつるを歓び、人かげに居ても殿様はよく御覧あそばされ候こと身に余るしあわせと感泣し、出仕日には御前に貴賤(きせん)群集せり』と。

そんな紀州公である。口ぶりで察すれば、当の柳生新太郎も紀州公の為に何事かをなさんとしていると見ていい。

あたりはいよいよ暗さを増し、もう二つの黒い影が対坐する様子さえ見定めかねる程になった。

「どうじゃ」

新太郎が言った。

「十万両の隠匿場所、宇都宮以外なればおぬしがどう探索いたそうと自由。ただし、向う半年——来年四月宇都宮の釣天井が落ちるかどうか……それを見届けるまで、手出しはいっさいひかえること……約束してもらえぬか？　柳生新太郎も武士、ここでおぬしと誓ったことは、守るぞ」

「わかった」

猿飛佐助は言った。

「約束しよう」

「そうか。では」

「手を引く。ただし。釣天井にいっさい小細工はせぬと、おぬしが誓うなら」

「いかにも誓うぞ」

「きっとか？」

「武士に二言はない。宇都宮城のどの天井が落ちるかは、本多正純の才覚ひとつ——」

「よし。ならば誓おう」

「おう」

暗がりで両者は何かを交換し合った。

そしてパッと離れていた。

五

こうして誓いは成立し、猿飛佐助は約を守って宇都宮から、三好清海入道らと姿を消した。駒

井勘兵衛の妻となった才をのぞいて。

一方、柳生新太郎もまた、あの作事奉行を雨中で殺害した容疑者として厳重な探索を受けているのをのがれる口実に、城下から姿を消したという。

そして半年——

東照神君七回忌法会のための、将軍秀忠日光社参の日が、ついにやって来たのだ。

古書に記するところによれば、その道中の警固は物々しいもので、幾多の禁令が出されている——

御社参に供奉する者は、いっさい御通り筋の街道より一歩も脇道せざること。

将軍旅館に到着のあとは当直の者以外、宿舎に近寄らざるべきこと。

騎馬の中へ替え馬引き入れまじきこと。

御旅館の駅にて馬の口洗うべからず。

晴天の時は雨具を騎馬の列に持ち込むことまかりならず、たとえ供奉の士たりとも筒傘をはじめ、刀剣をかくしおくようなるものは騎馬の列に入れまじきこと。

——等である。

将軍家の行列には、水戸宰相頼房と藤堂高虎が陪侍のほか、土井利勝をはじめ、譜代旗本が供奉し、べつに禁裏の名代として広橋前内府、三条大納言、また門跡より青蓮院尊純法親王、梶井門跡最胤法親王をはじめ、正親町三条中納言、柳原宰相業光卿、平松宰相時慶卿ら輿を連ね列に加わったというから、蜿々長蛇の行列がつづいたわけだ。

一行は、四月十二日に江戸城を発して同日は岩槻城に一泊。城主青山伯耆守より秀忠に饗膳をたてまつり、

「この日は風日和にて空青し」

と『元和年録』にいう。

翌十三日はあの加納殿の愛孫・奥平忠昌の古河城に投宿。このとき加納殿より侍女岬を以て、ひそかに秀忠に親書がさし出された。

それには——

「このたびは本多正純が旅館営造のさまに不審あり。その結構奇巧をきわめ、先ず御寝所の床を高く造りその下を自由に人の往来すべきように構えたること。

（縁の下を高くすれば曲者侵入して床下より刀を刺し上げ狼藉に及ぶおそれがあり、貴人の館の床下は低く構えるのが常である。）またこの営造は深夜にいそぎて構造し、あまっさえ構造にあずかりし根来同心ならびに大工ら百人、ことごとく誅したること。

また旅館の設けにも心得ぬこと多し。先ず寝殿の戸にカマチを付け、このカマチ庭に出させ給わんとせば落ちて戸の明かざる仕組みあり。繰り戸ごとにも余分の戸一枚ずつを設け、これは将軍家の身辺危きとき扈従の士ら守護し参らせんとおそばに近寄るを妨げんためとか。

また浴室の板敷き踏まば落ちん様にたくみ、その下に剣を逆立て並べたる疑いあり。湯殿の天井板また紐を切れば落ちる仕掛けあり。

これらはつぶさに内偵のうえ確認せしことなれば夢々宇都宮に御止宿は然るべからず」

概略、そんな意味の親書である。直接これを秀忠にさし出さんとする岬へ、土井大炊頭の命令で応対にあたったのが将軍家の側近を勤める柳生又右衛門宗矩だった。

宗矩は鄭重に岬の労をねぎらって、

「そこもと予て内偵に辛酸のことども我らも耳にいたしてござる。お役目大儀であった。あとは、

われらにおまかせあるよう江戸の加納殿にお伝え下され」
「それでは、わたくしの手より上様へ直にこの親書、お渡し申す儀はかなわぬのでござりまするか？」
「岬どの」
宗矩はやさしく笑ったそうである。時に宗矩五十二歳。中肉中背で目鼻立ちは平凡。色はやや白いほうで、とても新陰流を遣って天下無双の達人とは見えなかった。
「本多上野介どのはかりにも老中の要職にある仁。いかに加納殿が上様御姉君なればとて、老中に謀叛の疑いあるなど申す親書を、加納殿のお使いより直にお渡しあったと公けに相成っては天下にしめしがつき申さず」
「で、でも柳生どの」
岬は美しい眸に険をふくんで、
「本多どのに謀叛の企みあることは、もはや明白にござりまするぞえ。上様宇都宮に御止宿あそばされ万一のことあっては」
「お案じあるな。上様の身に変事など起りはいたさぬ。よって明日は予定通り宇都宮にお泊りをねがい申す」
「な、なにを以てお前さまはそのような悠長なことを」
「おわかりにならんか」
おだやかな目で宗矩はまた微笑した。

六

「わけをうけたまわりとう存じます」
岬の目が、吊りあがってきた。
「御寝殿の床の高さ、根来同心や大工殺害のこと、湯殿の板敷き踏みはずしになった仕掛け……天井の釣ってあること……これほど恐ろしい罠のある宇都宮にお泊りあって、変事が起こらぬとは」
「よろしいか岬どの」
柳生宗矩の声はあくまで冷静だった。
「明日変事は断じておこるおそれ無いゆえ、宇都宮にお泊りなさる」
「なぜでございます。なぜ断じておこらぬとそのように」
「本多どのはそういうお人よ」
「？……」
「おわかりにならんか。上野介どのはわけて亡き大御所さまの寵をうけて参られた。このたびのご社参はその七回忌法要のため……いかに異心あればとて、法要がとどこおりなく相済むまでは上野介どのに変事を起こす腹はなし、よってご無事と申上げた……ただし、帰途は別。これはわかり申さん――」
大きないわば賭けである。本当に往路はつつがなく将軍家を通し参らせるとは神以て、だれにも断言はできぬことだろう。だが柳生宗矩は、かならず釣天井が落ちるならそれは帰路ふたたび将軍家が宇都宮にお泊りになる時である。往きはつつがなしと秀忠にも進言し、この際むしろ平然と宇都宮城に御止宿あることこそ、天下平穏の為なりと言った。
なぜなら往路、宇都宮を避けたところで日光ご社参――東照神君の七回忌法会を中止されるわけには参らない。してみれば将軍家はどうしても日光に往かれることになる。もし、宇都宮に投

宿なくば謀叛露顕と知って、本多正純はその帰路を扼し軍兵を動かすだろう。そんなことがあっては軍勢の用意なき将軍家の身辺こそかえって危険であり、しかも日光街道の宇都宮は要害にあたる。宇都宮を通過せずにご帰還はのぞめないのである。

いっそそれなら、正純を信じきった体をよそおって往きは宇都宮に一泊し、正純を油断させて、帰路にわかに道を変更するか然るべき対応策を講じるのが、兵法というもの。正純の気質から見て、大御所さまの七回忌法会を盛大に営まれるのを誰よりも望んでいるのは正純自身と思惟されるので、ここは一番、何くわぬ顔で宇都宮に御止宿あるべし、それこそが陰謀を実現させぬ妙諦なりと宗矩は言ったという。

「そちはどう思う？」

この進言を聴いて秀忠は土井大炊頭にはかった。最初の、岩槻城に泊った夜だった。土井利勝はしげしげ宗矩のかおを見すえて、

「又右衛門、往路は無事に間違いはないのじゃな？」

「ござりませぬ。柳生宗矩神明に誓ってこの儀は」

「よし」

利勝は大きくうなずくと、

「上様」

逆心ある者へはなるべくその逆心を刺戟せぬよう穏便にはからうのも天下人のつとめである。ここは宗矩の進言通り、宇都宮に御止宿あるが最良の策かと心得まするといった。そこで、予定通り十四日は宇都宮に一泊と、古河に着く前からすでに決められていたのである。

そういう内々のことは、むろん宗矩はいっさい岬には明かさなかった。あくまで、往路はご無

事ゆえご安堵あれと言い、「夜中お役目大儀……たしかにこの親書は又右衛門お預り申し上様に進呈つかまつる。されば安堵めされてお引取りなされよ。夜中とても人目がござる」

そう言って岬をさがらせた。まだ心残りの様子だったが、

「呉々もではご無事を」

岬は退出するほかはなかったろう。

明けて十四日。予定通り将軍家の行列は宇都宮城へ向った。

本当にだが、無事で済むと言いきれるのか？

蜿々長蛇の、長い行装である。宇都宮の手前、壬生の宿駅にそんな行列がさしかかったころ、路傍の見物人に混って列を見送る二人の人物があった。

相変らず武蔵坊弁慶のいでたちした筧十蔵と、どういうつもりか尼僧に化けた猿飛佐助の両人である。

「おぬしはどう見る？」

弁慶がささやく。

「将軍家の前を騎馬で先途していたのが宗矩らしいが……無事で今宵は、済むかの」

「そうだな」

こっぽり白布で頭をつつみ、割とやさしく品のいい尼僧に化けて、口もとも女みたいにすぼめているが物言いは男だ。

「先発隊が何ぞ細工いたすのではあるまいかな」

「先発？……」

「土井大炊よ。それに出発の時刻も、くさい——」

七

「出発がくさい、とは？」
「おそすぎる……そうであろう。今ごろ壬生を通るようでは宇都宮へ着くのは夜。それもかなり更けてからになるが」
「よいではないか。どうせ泊るだけ……おぬしの見込み通りなら変事はおこらんのだぞ。ちがうか」
「まあな」
手に水晶の数珠をまさぐり、いかにも楚々たる尼僧ぶりで、背丈もいつもほど高くないのは、墨染の衣の中で膝をかがめているためか。
将軍家日光社参の一行が江戸を立ってから、二人はずっと行列とともに此処までやって来た。
「何にいたせ、今夜がヤマか」
「――」
「のう佐……いや寂妙尼、新太郎はどうしておろう」
「柳生か……それよりわたしは、三好らが気になる」
「ふん、あの連中なら酒でもくろうて今ごろ羽根をのばしておるわ」
むしろわしは、霧隠のほうが気になると寛十蔵は言ったが、これには佐助は何もこたえず、やがてまた、行列にそうて二人は歩き出していた。
佐助の推察はあたった。
土井利勝の先遣隊が宇都宮城下に入ったのは日の没する前で、この時、供の中に病人が出、薬

を煎じなければならなくなった。そこで火を焚いたら、本多の家臣で道中見廻りの駒井勘兵衛なる者が馳せつけ、
「火を焚くことは禁じられておる。早々お消しなされよ」
と言う。土井家の番頭が、
「急病人なれば薬を煎じるは急務、何ゆえ火を焚くことまかり成らずと申される？」
怒気をふくんで詰めよったら、駒井は、将軍家御着の前夜から、泊まられて御夜食の済むまで宇都宮の城下では誰人たるを問わず、火を禁じてある。出火の騒擾にて上様の身辺に万一のことなきための用心なれば、たとえ土井大炊どのが家来とて例外はみとめられず。すみやかに火を消され度い、と言う。
こういう禁令は当時ないことである。しかし駒井の態度には毅然たるものあり、たってさからえば手勢をもって土井家の家来でも召し捕えん意気込みを見せていた。
番頭は、そこで、一たん其の場の火は消したが、この旨を主君利勝につたえた。
土井利勝――
大御所家康が、天下とともに秀忠にお譲りなされたとまで評された一代の傑物である。系図のつたえるところでは家康の母方の従弟にあたるが、実は家康の庶子との俗説もあり、幼名を松千代という。
天正七年七歳のとき、秀忠が生まれるやそのお付き小姓となり、以来四十年余、いまでは下総国佐倉六万五千石の領主となり且つは幕閣第一の秀忠の補佐役として、諸侯ににらみをきかせている。智略縦横、その深謀のはかり知れざることは、本多正純とまさに好一対と称された。年五十一歳であった。

利勝は番頭の注進を聴くと、
「さようか。出火のおそれあれば火は焚くな？……なるほど」
口をゆがめてわらい、
「病人の加減はどうじゃ？」
「は。それが……」
番頭は答えに窮した。何故ならそれが仮病であることを主君利勝こそ実は誰よりも知っているはずだからである。
「どういたした？」
利勝は道わきの牀几に腰をすえて、
「痛むと申すのか？　ならばやむを得ん。病人を見殺しにはできまい……そうであろう」
「は、……？」
「城下にて火が焚けんのなら、火の焚ける場所に移るまでじゃ。今宵は野陣をはる。一同にこの旨伝えい」
鶴のひと声だった。
休息していた行列は再び隊伍をととのえ、宇都宮城下をあとにしてどんどん今市へ向った。そうして城下をはずれた処で、野営をした。
そのころ秀忠は宇都宮に着いていたが、いっさい火を焚かないのでは城下は暗闇も同然である。わずかに、行装の者らの提げる提灯が街道を点々と長蛇の列となって移動した。
「宗矩」
馬上で秀忠は言った。

「そちの申す通りに相成っておるようじゃが、よいのかこれで？」
「お案じめされまするな。すべては見込み通りに進んでおりまする」
「大炊はどういたしておる？　先着のはずが、見えんぞ」
「今ごろは城下を去っておりましょう」
「去る？」
「挟撃の体勢をととのえておくも、策の一つかと――」
「つまりは宇都宮をはさみうちにと申す意か？」
「御意」

八

しばらくして、馬上からまた秀忠は声をかけた。
「いつぞや申しておったそちの兄――新太郎か……あれは、どうしておる？」
宗矩は徒歩で馬わきを勤めている。暗闇でも宗矩の眼はたえず左右へくばられているようだった。
「上様はお気づきにならぬがよろしゅうござり申すが……江戸を出ましてより、たえずおそばを五丁とはなれず跟いて参っておりますようで」
「新太郎がか？」
「御意」
「なぜじゃ、そちの兄なら、なぜ出てまいって」
「上様」

暗くて顔は見えないが陣笠の下の声はよく通った。

「言上いたすのがおくれ申してござりまするが、柳生新太郎、いまだ二十代の青年にござりまする」

「何じゃと？」

「それがしは早や五十過ぎ……よって、新太郎が兄である道理は」

「何と申す？　そちの長兄は柳生新太郎と」

「いかにも。なれど兄は死亡つかまつり、あれは、その倅で」

「？……」

「いずれ仔細を申上げるおりも参るでござりましょうが今は」

「まて宗矩」

秀忠の声が不審そうに、馬上から身を前かがみにのり出していた。

「大炊はそちの兄と申すゆえ、予は紀州につけてやった……あれが兄でないなら紀州の常陸介は、いったい、何を考えて江戸から予の身辺に尾行など」

答えるかわりに、

「着いたようにござりまする」

ひときわ高声に宗矩は言って、ゆっくり立ちどまった。

なるほど先供の列は宇都宮城大手門にさしかかり、おびただしい提灯が城門から秀忠を出迎えに走り出していた。

その中央に、麻裃で立っているのは家老小田島監物。

「重きこと石の如し」

といわれるあの慎重居士だ。

ツカツカと秀忠の馬前から宗矩はそんな監物の前に歩み寄り、鄭重に会釈をして何事かを告げた。

こたえる監物の物腰も鄭重だった。

もどって宗矩は秀忠の馬の口をとりながら将軍家を見上げ、

「上様」

ニッコリわらった。

今夜変事の起る気づかいはないという合図だ。監物の態度を、兵法者柳生宗矩の眼で見届けての判断だろう。

この判断に狂いはなかったのである。

この夜、釣天井は落ちなかったし湯殿の床板もはずれなかった。

（もっとも、入浴を風邪気味とて秀忠はやめている。本当に秀忠の声は鼻声だったから上野介正純は、むしろ薬の調合を侍医に申しつけた。この薬を、こだわらず秀忠は飲んでいる。大した腹芸である）

毒を盛られていれば、天下はこの時変わっていたろうから。

お側近くにあって薬を差し出す侍医の手を、炯々たる眼で終始、宗矩は見まもった。この時ほど気の詰まりたることわが生涯についぞ無し、と後に宗矩は述懐したほどだから、見届けたつもりでも、内心、薄氷をふむおもいだったのだろう。

「そちほどの男が、それにしても毒味もいたさず、よくぞ上様へ差上げたわ」

あとで話を聴いて土井利勝が胆を冷やしたら、

「いかさま、今でこそかように笑い話でこと済み申すが、あの時ばかりはこの宗矩」
「だれをあてにいたした」
「は？」
「かくすな。そちほどの者、手段(てだて)を裏で仕組んであったに相違ない。さものうて毒味もせず上様へさしあげるその方か。侍医が薬の調合ぶり、誰(たれ)ぞに天井裏あたりで見届けさせての上であろう。それとも、侍医と爾前(じぜん)に気脈を通じての上か？」
「ハテ、何を仰せあるのやら」
「まだとぼけおる。よいか、上様は風邪など召されてはおらなんだ……そもそもあの鼻声からして、くさい。そうであろう？　その方の陰で働いたは、誰じゃ？」
何ときかれても宗矩は目ばかりシワシワまばたいて、
「ハテ何のことやら……それがしには一向に――」
笑いつづけていたという。
「しぶといものよ」
利勝もそれ以上は追求しなかった。
何にせよ、宇都宮城で侍医の差し出す薬を秀忠が平然と飲んだことで、かえって、本多正純は帰路をこそ扼(やく)して事を決すべき当初の方針の自信を深めた。
おかげで、天下は動乱せずに済むのである。
それにしても柳生宗矩の陰の協力者とは誰だったのか？

暗　躍

一

翌朝。
つつがなく本多家の藩士らに見送られ秀忠は大手門を出立した。
前晩、上野介正純は老職たる一人として秀忠の御前に伺候し、家臣一統とねんごろな挨拶(あいさつ)を述べたのはいうまでもないし、夜は寝殿のまわりに宇都宮藩士による物々しい警固と、不寝番が立てられた。
城門を出る馬上の秀忠の表情はまことに晴ればれとしていた。
そんな将軍家を、城下はずれの郊外路上に待ちもうけ、さすがに土井利勝は喜色をかくせず、
「……よくぞご無事で」
目をうるませたそうだ。
秀忠は、
「予はこの通り五体満足じゃが、又右衛門をねぎろうてやれ。予に代って、臥所(ふしど)にて終夜まんじりともいたさなんだと申す、ハ、ハ、ハ」

言われてみれば、なるほど宗矩は睡眠不足で腫れぼったい目をしていた。

利勝がおかしそうに言った。

「又右衛門」

「上のご許可をわしが得よう。騎馬にいたせ、もう大丈夫であろう。馬上にて居眠りいたすおぬしの顔が見たいわ、ハ、ハ、ハ……」

この日は無事、今市の宿駅に一泊。道中たしかに宗矩は馬上で身をゆられながら、とろとろ眠りこむようだったが、一度、欠伸を嚙みこらえるふりでチラと眼を開き、松並木の蔭を見た。其処に、優雅な尼僧が松樹へ身をひそめるように立っていた。尼僧は鞍上の宗矩を見上げニッとわらった。しばらくして、こんどは弁慶さながらの左頰に深い疵のある男が、これは仁王立ちで宗矩の通過するのをにらみ上げていた。

この時は薄目に、宗矩は眠そうな目を半眼にしたが、すぐ又、居眠りをつづけた。

もう一人、同じような松並木の影で、ひそかに馬上の宗矩を目迎目送した男があった。常の百姓のいでたちで、汗くさい手拭いで頰冠りさえしていたが、彼は、熱い眼差で宗矩を見上げゴクンと隆いそののど仏で何かをのみこんでいた。宗矩もこの時ばかりは、鞍上からじっと彼を見まもって、

「役目大儀……苦労をかけるが、たのむぞ」

無言でそんなしぐさを彼に示していた。

あとで判明したことだが、柳生直門の高弟七名、点々と松並木に在ってひそかに将軍家の一行を黙送し、且つは付近の警戒にあたっていたのである。

将軍家の行列が通過すると、七名もまた急流をさかのぼる鮎のように見物の群衆をかきわけて街道沿いを先行し、あるいは畦や雑木林を走って街道の要所を固めた。七名の名は後に各藩武術指南役として歴史に登場する。当時はまだ宗矩自身がそうであるように、ほとんど無名の存在だった。だが新陰流奥ゆるしを得た練達の面々だった。

いかな真田十勇士の生き残りも、機敏な彼等の暗躍ぶりを見ては容易に手が出せなかったにちがいない。

さて、今市の宿駅に着いて、本陣宿に秀忠は一泊。土地の領主たる新庄越前守が伺候して御膳を献じ、歓談あり。秀忠は快い眠りに就いた。宿直は宗矩がした。本陣の周辺には公儀役人のほか、柳生直門の七名がいずれも襷がけに袴の股立をとり、ひそかに警固の任にあたっていた。

翌十六日朝、秀忠は本陣を出発。いろは坂の長坂を登って夕刻、日光山に到着。

明けて十七日、東照宮にて祭礼あり、江戸より供奉の旗本全員が神輿に随い、秀忠はしつらわれた桟敷に着座してこれを見物。水戸宰相、藤堂高虎が左右に陪侍した。

十八日が、いよいよ七回忌法会の日である。『台徳院殿（秀忠）御実紀』巻五十六に曰く――

「この日、中禅寺に詣で給う。水戸宰相、藤堂高虎陪し奉り、伶人の舞楽ご覧ぜらる。廣橋前内府兼勝、三條大納言実條卿も着座あり。御参堂はてていったんかえらせ給い、午刻、東照宮へ参らせ給う。ここにても舞楽あり。青蓮院門跡尊純親王、梶井門跡最胤法親王をはじめ、兼勝公、実條卿、正親町三条中納言卿、柳原宰相、松平宰相ら御着座せられ、御供所参御ありて舞楽ご覧ぜらる。大僧正天海、この日奥院御宝塔前において円頓戒を授し奉り。最胤、尊純両法親王は証誠。そのほか三老僧が塔中に入り、衆僧は塔外に侍列す。

はてて此輩は御本社に参り四箇法要を執行。

翌十九日。御本地堂曼荼羅供おこなわれ、この日将軍家、日光山をおりたまい今市より宇都宮

城に向い給う」

と。

いよいよ本多正純謀叛の日が、来たのである。

二

『徳川実紀』の記載によると、日光を発ったその日に秀忠は今市を過ぎ、宇都宮の手前にさしかかったところで、江戸から御台所（秀忠夫人）の病気を報らせる使者が来た。そこでにわかに予定を変更して、宇都宮城下を抜け、当夜は壬生に一泊。翌日は岩槻に泊り、次の日にはもう江戸城に還りついた。石谷十蔵、柳生宗矩、志村加兵衛らわずか数名の家士が、かろうじて秀忠の駕（のりもの）におくれず必死に駆けて供奉したという。

十二日に江戸を発したときは岩槻、古河、宇都宮、今市と四泊して五日目に日光に到着している。それが、帰路はわずか二泊。いかに道をいそいだかがわかる。しかも秀忠夫人は夜更けて江戸城へ還った秀忠を起きて待っていたという。

『元和年録』の記載では、往路は、せっかく侍女岬を使者として宇都宮城釣天井の陰謀を密告したのに、秀忠が平然と宇都宮に泊ったので、将軍家の姉たる身で不安かぎりなしと、加納殿はこんどは堀伊賀守なる者を使者として日光へ走らせた。これが今市を出て間なしの秀忠に日光街道で行き会い、堀は加納殿よりの密書を渡す。

これには宇都宮城内殿舎に種々不審の仕掛けあることに併せて、上方よりあまたの銃をとりよせた上、この銃の火縄にいつでも火を点ける準備を城兵のしていることが記してあった。

「近臣らこれを知りて、いかにもさる事なかるべしとも思われず、他にも不審のことども多ければ、いよいよ御止宿然るべからずとの事に決して、急に御駕をいそがせ給い直に壬生までおわしたり」

と。

宇都宮城へは、秀忠のかわりに、井上主計頭正就ただ一人でまかり入り、城内構建のさまを、あらためて、つぶさに巡察したという。そしてこの巡察の委細をもとに不審十一カ条を後日、本多正純に突きつけた。正純は十一カ条のうち、鉄炮密造のこと、秀忠の宿舎たる寝殿の造営を深夜に普請し、しかもこの普請にあたった根来同心ら百人を一日のうちにことごとく斬殺したこと、城の石垣を許可なくみだりに修築したことの三カ条だけは、どうしても釈明できず、ついにこれがもとで十五万五千石を没収され、出羽に流罪の身となった。

おもしろいことに、この日光ご社参の前後、伊達政宗は江戸藩邸で病いと称して床にあり、秀忠に供奉しなかった。紀伊中納言頼宣また紀州にいて病いを称し国もとを動かなかった。

動いたのは越前忠直卿ひとりである。

だが忠直もまた、日光山へ参拝のためといって国を出、美濃の関ヶ原へ来たとき突如、病いを称して帰国せんとし、老臣本多飛騨守成重がこれを諫めると激怒して国に帰るや、直ちに成重の居城丸岡を攻めんとした。そこでやむなく成重は京に出て所司代板倉重宗に事を打ち明けたので、ついに忠直も公儀より蟄居を命ぜられる身になった。

公けには、『越前忠直乱心』として、彼が酒色にふけり、強暴の行ない多いことを理由にしているが、主君の乱心を公儀へひた隠すのが臣である。ただの乱心ごときで、家康の直孫たる藩主が蟄居流謫の悲運に泣いたためしはない。

強暴の行ないのあったのは事実にせよ、宇都宮城謀叛との関連なくして起こる流謫ではなかっ

た。正純の出羽への流罪と前後して忠直の処分の決していることが、雄弁にこれを物語っている。

歴史の誌すところは、つねに生存者・勝者の側の記録である。勝者に不都合なものはすべて抹殺（まっさつ）される。

だが謀叛が起った時点で、体制、反体制のどちらが勝者となるか、これは凡人にはわからない。わかる者は失敗する謀叛ならはじめからおこすまい。

一敗地にまみれようとも、義によって起たねばならぬ陰謀への参加が、人生にはある。その場合、極力陰謀を成功に結びつけようとする努力は、時には第二の陰謀を生むことになるかも知れない。

これも又、人生である。なぜなら第二の陰謀は、当初の陰謀への裏切りになる場合があるからだ。

畢竟（ひっきょう）は、陰謀の成功率をどれだけ正確に読みとるかによって、陰謀そのもの——ひいては歴史は変る。最後の捷利（しょうり）を得るのは陰謀に加担すると否とを問わず、もっとも的確に、深く、陰謀の成功率を読んだ者だ。

本多正純の側よりも将軍家の側近に、より深く、それを読んだ者がいたから謀叛は成功しなかった。読みきった者の一人が柳生宗矩だった。

宗矩が宇都宮事件に示した知略の深さは驚嘆にあたいする。

それは秀忠の駕を護って宇都宮城下を脱出するときに、まず発揮される——

三

堀伊賀守が、加納殿の親書をたずさえ秀忠の行列に行き会ったとき、日はまだ西の空に沈んでいなかった。

親書は見ずともその内容は宗矩にはわかっていたにちがいない。

「上様」

はじめから帰途宇都宮城へ投宿のつもりは、秀忠にはない。だが本多正純とて凡器ではない。おめおめ将軍家を通過させぬようおびただしい藩兵を街道にくり出し、要路を扼（やく）して何が何でも秀忠の脱出を防ごうとするにきまっていた。そういう意味では、謀叛は七回忌法会のおわった時すでに始まっているのである。

いかにそれを異心ある他の大名へ波及させず穏便に処理するか。

将軍秀忠の生命保全とともに、これを行なわねばならぬところに土井利勝や宗矩の苦慮があった。

宗矩は先ず伊賀守に、これへの途次、宇都宮城下の様子はいかがなりやとたずねた。

「さよう、われらは浪人風体にて今市へ向う身なれば、通しくれ申したようなものの、日光街道を江戸表へ向う者は身分の士たると庶民を問わず、いっさい、将軍家ご通路なればとて厳重なる身許しらべをいたしおる様子——」

堀伊賀守利重（としげ）はもと常陸の香取で一万二千石を取っていた武人である。それが本多正純父子のために、大久保忠隣（ただちか）（有名なあの大久保彦左衛門の一族）がお家取りつぶしとなったとき、連坐して禄（ろく）を没収され、加納殿の奥平家に身柄をあずけられた。それで彼もまた私（ひそか）に正純を恨んでいて、親書携行の役を買って出たのである。

虚無僧姿だったことも利重が無事に城下を通ってこられた原因だろうが、いずれにせよ、街道すじの物々しい警戒ぶりは手にとるようにこれでわかった。

そこで、

「上様」

宗矩は言ったのである。

日の没するまでこれにてご休息あるがしかるべきかと。

「日が暮れるまで？　それではかえって宇都宮に投宿いたさねば相成るまいが？」

土井利勝が面色を変えると、

「いいえ」

日のあるうちに、お上を通しまいらせること所詮は不可能とおもわれる。宇都宮藩士たちの阻止を、斬り開いて脱出するのは可能であるが、それではせっかくの、穏便に処置せんとの素志にそむく。

さいわい、夜中、城下では火を焚かない、申さば暗闇である。これがいっそ倖いであり、

「いっさいは、この又右衛門が方寸におまかせたまわりまするように」

宗矩はそう言って、さすがに緊迫の面持ちで秀忠を仰ぎ見た。この時の秀忠は網代輿に乗っていた。

三つ葉葵定紋付きの将軍家の乗物である。

その輿わきに平伏して、じっと宗矩は将軍家を見上げたのだ。かたわらには虚無僧姿の堀利重も深編笠を脱いで跪坐していた。

「方寸にまかせよと申したが」

しばらくして、秀忠は言った。

「なんぞ企んでの上と思われるが、どう致すつもりじゃな」

「何事も、この柳生宗矩に――」

「まかせる、そう申したら何といたす？」

「おかみを斬りまする」

「な、なんじゃと？」

「上様。騒擾をおこさぬが東照神君七法会の帰途、お上のいちばんお心掛けあそばすこと。且つは天下人たるご器量の本領かと存じ上げ奉りまする……お髪を切り申すことで天下安泰となるなれば、これほど価値高きお髪はこれ無く、まことに上様なればこそ」

「待て宗矩。予を法体させるがたとえこの場を穏便に計らう妙策なればとて、大納言は未だ弱年、無事江戸にもどったにせよ、予が剃髪いたしたと知らば諸大名がどう思惟いたすか」

「いいえ」

ゆっくり宗矩はくびをふり、

「入道あそばす意ではござり申さぬ」

「ならば何故髪を」

「斬る、と申上げました」

「ぬ？」

「又右衛門」

乗物の脇に立つ土井利勝が気色ばんで、

「言葉が過ぎはせぬか。いかに何でも上様にむかいたてまつって……」

宗矩はひるまなかった。

こう言った。

「本多上州どのを甘くご覧なされては悔いを千載に残すことに相成りましょう」
「大炊頭さまがお考えなされているより、あの上野介どのは切れ者、街道を家士に固めさせて安堵いたしおるような愚物ではござりますまい。通行人の身許検べをいたすなどは、むしろ表向き。真意は他にござるかと……それを証拠に、あれをご覧なさりませい」
くるっとふり向いて、路傍の松並木の影を指さした。

四

宗矩が指さしたのは秀忠の乗物からかなり前方の、長柄傘を持つ中間どもが停止して、出発の号令を待っているあたり——そこらは道が少し登り坂になり、松並木が、ひときわ高く、夕空に枝を伸ばしていた。
そんな松並木の影に、遠目にも尼僧と見える女人が立っているのだ。
「あの者が何をいたすと申す？」
土井利勝にはまた意味がわかりかねたろう。
宗矩は、再び輿の中の秀忠にむき返ると、
「本多どの差し回しの間者にござりまする」
「——あれが？」
「のち程、おかごの御簾の中より篤とご覧あそばしますよう」
言って、
「大炊頭どの」

乗物わきに突っ立つ土井利勝へ目をあげた。
「本多どのが過般密造の鉄炮、軍をおこすため宇都宮へ運んだと思惟めさるなれば早計、あれは、今日のため備え申したものにござる」
「？」
「おわかりに相成りませんか？　鉄炮玉につかうは、火薬。帰途ふたたび宇都宮にご宿泊なき場合、火薬をもって御道すじを爆破し、行路をさまたげその騒動の隙に、上様を襲わんが本多上野介どのの真意。さればこそ不時の引火をおそれ城下にて火を焚くを厳禁いたしたものにござりましょう」
「ま、まことか宗矩？」
「されば、城下を無事ご通過あるは容易ならざる難事、よってお髪を切りたてまつる——」
「！……」
「上様、これを——」
懐中から袱紗に包んだ何やら重そうなものを宗矩は御輿へ差し出した。
「何であるな？」
「燧石にござりまする。京の吉久が手造りの燧。これを、おかみの髻の上に結びおき下さりますように」
「？……」
「今でのうてようござりまする。後ほど、お輿の中にて」
それから行列はなるべく緩慢に進め、宇都宮のはるか手前——少なくとも文挟に至るまでに日が暮れるようご配慮ねがいたいと、これは土井利勝にたのんだ。

文挟の宿駅は、古くは落合とも呼ばれ、ここから鹿沼宿を経て壬生へいたる裏街道と、宇都宮への表街道にわかれる。距離的には、江戸へは鹿沼経由のほうが近い。

本多正純がそんな文挟の岐路へ監視の目を光らせずにおくわけはないのである。恐るべきは、火薬と、鉄炮隊であるから、当然その岐れ路をつつがなく通過するためには、夜陰であることが望ましいと宗矩は言ったのだ。

鉄炮隊と聞くと、いかな豪気の土井利勝も二の句がつげぬようだった。

「夜陰であれば上様がご無事をその方、はかれると申すのじゃな？」

「――誓って」

「よし。ならば申す通りに手配はいたそうが――あの尼僧は？」

放置してよいのかと利勝はきいた。

「まさかここで手出しはつかまつるまいかと」

「間者と申したの」

「御意」

「すりゃ、男が尼に化けておるのか？」

「その辺のところは……」

まだ、ここからでは距離もあり、確かめかねると宗矩が言うと、

「われらが見届けて参り申そう」

虚無僧姿で堀伊賀守が立とうとするのへ、

「お待ちなされよ」

それはまずい、と宗矩は止めた。

「なぜじゃ？」

「あれが男女いずれであれ、今は素知らぬふりにて通過あそばすが」

「？……」

「あまり停滞いたしてはかえって不審をうけましょう。それよりはイザ、そろそろ御出立のほどを」

あとは万事この胸にと、かるく、宗矩はわが胸を敲いた。

「柳生の申す通りにいたせ」

秀忠は言って、

「宗矩、この燧石を、もとどりに結び付ければよいのか」

「恐れながら――」

「あいわかった」

行装は、道具（槍）が先頭に立ち、つぎが打物（長刀）、それに挟箱。つぎが長柄傘。つぎが牽馬。つぎに供侍。つぎに騎馬供。そして徒の列がつづく。この徒のあいだに秀忠の乗物が舁かれて往く。六尺（駕籠舁き人足）が前後に三人ずつ。これに交替人足が並行して、都合六人が揃えの法被姿で乗物を進める。これに駕籠脇の士が徒歩で付く。この駕籠脇を宗矩がつとめ、乗物のうしろにも供侍がつづく。次が押の足軽。次が茶弁当。つぎが供槍（供方侍の槍）を以て、行列は編成されている。天下の将軍家の行装ともなれば、騎馬供だけで三十騎。徒士が百五十人、これに中間人足が三百人。秀忠ひとりに合計五百人を超える人数が隊列を整えて随うわけである。緩慢になら、いくらでもゆるゆると進める道理だ。

さて行列は日の沈む西へむかって、ゆるゆると進み出した。しだいにそして、松影の尼僧の方

へ秀忠の乗物は近寄った……。

五

乗物のすだれの中から秀忠が見ると、松並木の影の尼僧は見るからに品のいい、年は二十六、七ながら、剃髪以前さぞ美貌であったろうと思える女性で、乗物の通過するのを俯し目に、数珠を手に、うやうやしく迎える容姿は敬虔でとても間者を働いているとは見えない。

人は見かけによらぬというが、白布にかおをつつんだその眉の剃り跡の青々したおもざしは、いっそ、まだ人妻かと思えるくらい艶めいていたのである。

「さよう、われらも一時は又右衛門が目ちがいかと存じ申した」

のちに土井利勝もそう述懐して、間諜とはとうてい見えなかったと言った。

宗矩はちがう。

かご脇を勤めて松並木に近づくにつれ、鋭く光っていた宗矩の眼に、

「吁……」

微かな狼狽が走っていた。

正真正銘の女なのである。往路、江戸より今市あたりまで幾度か見掛けた忍者の変装とは別人で、まぎれもない乳房のふくらみを衿もとに見せていた。

しかも、イむその姿に一分の隙もない。

（何者？……）

宗矩の知るかぎり、これほど武芸にたしなみある婦人は本多正純の家中には――その家族にも――いないはずであった。

あらゆる術策を弄して、双方が、陰謀への読みと読みを闘わせたこの宇都宮事件で、宗矩がひそかに本多正純の意中をはかりかねて青ざめた、これは唯一の刹那だったかも知れぬ。

（やむを得まい……）

この時ほんとうに将軍秀忠の頭上へ太刀を揮う決意を、宗矩は決めたという。

京都千本通り下立売に燧を売る老人がいた。吉久といった。元和のころ百歳でなお壮健で、鍛冶の職をもよく勤め、毎日、自身に燧を打っては諸方に商いしたが、その歩行すこぶる未だ健やかだったから、時の関白は彼の健在を愛でて「鉄石軒」の号を与えた。そこで吉久は自ら鍛えた燧に『鉄石軒吉久』の銘を刻み、彼の妻また九十余歳で至ってすこやかだったので、京の王侯貴人は、長寿のまじない也と競って吉久の燧を求めたという。

宗矩が秀忠に差出したのはこの燧である。

行列は徐々に進んだ。

予定通り、文挟の宿駅に着く手前で日は暮れきった。

「――上様」

あたりのすっかり暗くなった街道を、乗物に副うてなおも歩みながら、

「燧は、髻にお付け下さりましてござりましょうや？」

宗矩は声をひそめて問いかけ、

「付けたが、どういたすのじゃ？」

「降りて頂きとう存じまする」

「輿をか？」

「は、それも至急に――」

夜陰とて忍び者には目が見える。

あの松並木の尼僧のほかに、これまで、山伏や百姓に身をやつした正体不明の者が何人となく、川の流れに添うごとく行列について移動してくるのを、宗矩は知っていた。柳生直門の高弟らは本多正純の放った密偵とも思えずと、いち早く報らせてはくれているが、正体不明だけに無気味である。文挟（落合）宿の岐路に出てしまっては、万事はおわる——

低く、乗物を舁く人足共に、

「歩度をゆるめよ」

宗矩は命じた。但し、停止することまかりならず、とも言った。

人足共はその意図を怪しみながらも、

「柳生の申す通りにいたせ」

お声がかかったので、そうすると、

「今でござる上様。早う」

宗矩がうながした。転び落ちるように乗物の戸を開け秀忠は足袋はだしで路上にとび出た。

周囲は暗闇である。

「おそれながら……」

危うく横転しそうな秀忠の肩を、確と抱きとめ、

「徒歩にて暫しご歩行をねがいまする……これを」

かねて用意の履物を宗矩自身で、秀忠の足もとに揃えた。

乗物はわずかな渋滞のあと、徐々にまた進み出していた。

そうしていよいよ目差す落合宿の岐路が近づいていた。其処には果して、おびただしい提灯

をかざして宇都宮藩士が道路監視の任にあたっていた。

行列の先頭から、そんな監視の様子を報らせる伝令がお乗物のわきへ走って来た時から、宗矩の、一世一代の腹芸がはじまる——

「監視のおよその人数は？」

「は。提灯の数にて判じまするに十数名かと」

聞くなり、

「上様」

くるっと徒歩の秀忠にむき直ると、

「御免」

やにわに、将軍家に抱きついた。

六

「な、何をいたす所存じゃ、宗矩？」

突如、抱きつかれて秀忠は愕いたようだが宗矩はかまわなかった。

「石谷、村上どの……これへ」

打合わせはあらかじめしてあったのだろう、そう呼ばわると、

「心得て候」

歩行頭石谷十蔵と村上新兵衛が配下をうながし、ぐるっと輪をなして秀忠を取りかこむ。

「上様、早う……着替えを遊ばしませい」

低く、叱りつけるような宗矩の声だった。

この声を合図に、取巻いていた旗本の中から両三名がバラバラとお側に寄って、強引に、一人はお羽織を脱がせにかかる。一人は袴の紐を解く。

「足袋も替えいよ。お履物は、無用……早う」

うながす声は悲壮感さえおびていた。だが宗矩は沈着だった。

「何をいたす所存じゃ宗矩？」

「ご変装をねがいまする」

「変装？　予が？」

秀忠がもし、宇都宮城への投宿を避けるなら、帰路は鹿沼への裏街道をとるにきまっている。そう察して本多正純ほどのキレ者が、鉄炮隊を鹿沼道に待機させぬわけはない。

それを突破するに他に手段はなかったのである。

束の間に変装は出来あがった。ともかくも秀忠は、将軍家の容姿ではなく常の家士の姿になった。

それを見届けて、

「上様。ごめん」

パッと宗矩は、抜討ちに頭上へ太刀をひらめかせたのだ。

水も溜まらぬ早業だった。

「あっ」

と、そばにある者、胆を冷やした。

あらかじめ知らされていたとはいえ、将軍家の横鬢を宗矩は切ったのである。髷は無事だった。だが左鬢を切られ、バサリと髪が垂れた。

当時の武士は月代は大きく剃りあげたものである。それだけ鬢は狭い。その鬢を半ば切られて、さながら、サンバラ髪をふり乱す概あり、これだけで到底もう将軍家とは見られなかった。見事な変身だ。あたかも乱心者の風体で、暗がりではなおお更である。

「上様」

宗矩の芝居はこれから始まるのだ。

「今一度お確かめ下さりませい。燧は、付いておりましょうな？」

髷は切っていないから、秀忠が夢中で頭上を手さぐると、燧はまだ元結に括り付けられている。

「ついておるぞ」

「ならば」

宗矩はそれまで帯びていた差料を、腰からはずし、村上新兵衛のを受取って差し替えた。

将軍家の小鬢を切った宗矩のはあらためて秀忠に差し出し、

「これをお佩き下さりませい」

と言った。こうして準備はできた。それまで止まっていた行装は、再び、徐々に前進する。

宿駅を出はずれた所で道は二つに岐れている。本多正純にとって、秀忠にとってもいわば運命の岐路になる。提灯をふりかざした宇都宮藩の監視役が、行列の先頭に道をゆずりながらも、行列が右するか左せんか、必死になって見まもっていた。

右すれば鹿沼道、左へ往くなら宇都宮城下である。

槍をかざした先頭は何のためらいもなく、足なみを揃え、左へまがった。続々と行列はそのあとにつづいた。監視役人らは互いに顔を見合い、ひそかに安堵し、いち早くこれを主君上野介に報らさんものと、行列のはるか前方を騎馬が一騎、暗夜に駆け去っていった。

同時に別の伝令が鹿沼道に待機する鉄炮隊へ飛んだ。

まだわからぬからである。宇都宮への道は採っても、泊らずに城下を通過しないとはかぎらない。その場合は退路を遮る意味をかねて、鉄炮隊は将軍家の行列に追従し、後方から奇襲すべしと正純は下知っていたのだ。

「そうか。行列は城下へ向かわせられたか」

「ありがたや。おくれるでない……それ」

「おう」

口々に励まし合い鹿沼道の街道傍の暗がりから、続々、鉄炮隊が姿をあらわすと、隊伍を整えるのももどかしげに、

「お跡につき参らせい。無事城中にお入りあるまで油断はならぬぞ」

サク、サク、夜道を足なみそろえた駆歩で鉄炮隊は将軍家行列の最後尾に追従した。後尾のあとには、少しの間隔をおいて水戸中納言頼房の行列がつづいている。そのあいだへ鉄炮隊は割り込んだのである。

事情をまだ知らぬ水戸家の行列の先供はこれに驚き、

「何者じゃ、控えい……水戸宰相様が御列なるぞ」

大音声に叱ったが鉄炮隊は耳をかさない。それどころか、バラバラと提灯をかざした宇都宮藩士が、両手をひろげさえぎり立って、

「われらお役目により上様御行列を守護し奉る。宇都宮城にお入りあるまで、たとえ水戸どのが家中とて一歩も通すことまかりならず」

声高く言い放った。

七

これが戌ノ刻だった。

「どうするつもりだろう？」

「――わからん」

二つに岐れた街道のほぼ中央――雑草の生い繁った空地に潜んで、黒い影が私語していた。

「佐助」

「――む？」

「これで、秀忠がもし、無事江戸に還りついたら、謀叛はどうなる？……本多正純のではない、われわれのだ」

「わからんな」

「？」

「わかっておるのは、はじめからわたしらは一匹狼……誰をあてにしたとて詮のないことだった」

「い、今になっておぬし、そんな」

「よいではないか」

別の影が言った。頭巾に笈を負い、六角棒を突いて、

「あれを見い」

鹿沼道のはるか彼方を棒の先で示した。暗闇に小さな提灯が、点々と一列になって文挾の岐路へ駆けて行く。

「――すごい」
影の一つが思わず、うなった。小柄な影だった。
「将軍家は鹿沼へ抜け宇都宮には寄らずとにらんで、あれだけ遠くまで第二の鉄炮隊を待ち伏せさすとは……本多もただのねずみではない。この勝負、まだわからんぞ佐助」
なるほど言われてみれば、提灯をかざした藩士に引率された鉄炮隊は、別の藩士が大手をひろげて水戸宰相の行列をせき止めている辺から、くるりと方向を変え、将軍家の列を追って一散に駆けて往く……
「わからん」
佐助がつぶやいた。黒装束に鎖かたびらを着込んだ黒覆面――刀を背に負った本来の忍者姿で、
「何がわからん」
となりの山伏がたずねるのに、
「柳生よ、あの第二鉄炮隊も宗矩の読みに入っておったとすると、宗矩こそは恐るべき鼠……この勝負、早や見えたも同じよ」
「拙者はそうは思わん」
また小柄の影が言った。
「そうであろうが？　第二鉄炮隊まであのように遠くへ待機させるほどの正純……宇都宮城下に、まだどれほど罠を仕掛けておるか……腹の底は知れたものではない」
「そらそうじゃの」
これまで黙っていたもう一つの、坊主頭の大きな影が相槌をうった。地声の、暗闇とはいえあたりをはばからぬ胴間声である。

「シッ」
佐助が坊主頭の肩を抑え、素早く、身をかがめて、
「誰か来る……伏せよ」
四つの影は、亀が首をすくめるように、一斉に、地に伏し、沈黙した。
忍者の敏い耳だけが聞きわけたのだろう。四辺の闇は静寂を保っていっこうに、それまでと変らない。
「どうしたんじゃ佐助……別になにも」
「シッ」
こんどは山伏が、鋭く、制した。
さわさわと草むらの騒ぐ音が、きこえる。それから駆けつづけた荒い呼吸と、話し合う声。
「そこは危うございまするぞ。さ、これへ」
「――」
「十蔵どの」
「おう」
「お手前さきに立ってもらえぬか。このあたり田へ水をひく小川があるはず、溝かも知れぬが水の流れる音がきこえる」
「心得申した。――上様、ごめん」
しばらくして、もうあきらかに数人の足音が、乱れがちに近寄って来る。
「……どうする？」
「シッ」

様子を見るにこしたことはない。四人の潜む草むらの目と鼻を、一人が走り抜け、ついで二人、二人……と都合五人がいそぎがちに、通りすぎていった。

「宗矩」

「は」

「裏街道へ出たあとは、何とする？」

「……」

「いかが致した？」

足音が一人だけ、停止し、急にこちらの闇を透し視ているのは遉が、柳生又右衛門らしかった。

「いかが召された柳生うじ？」

「いえ何」

いっ時の間をおいて、

「それがしの思いちがいらしゅうござる……いざ上様、早う」

足音は鹿沼道の方へ遠ざかった。畦づたいに主従五人だけ、夜陰にまぎれどうやら行列を離れ鹿沼街道に出て、一気に壬生へ走ろう魂胆らしい。

「どうする」

山伏がつぶやいた。

「又とない好機かも知れぬぞ……天下の征夷大将軍が目の前におるのだ、この際、ひと思いに」

「――」

猿飛佐助は答えなかった。彼は別なものを、見届けていたのだ。

八

秀忠主従は、鉄炮隊が引揚げた跡ひそかに鹿沼道へ出、日光街道の行列とは別れて単独に、一気に壬生へ疾走する意図らしい。

柳生の直門数名が、むろん、その前後の護衛にあたるのだろうが、それにしても天下の将軍家が、わずか四名の士に守られ夜陰の畦道を、逃げ走るとは前代未聞のことだろう。

本多正純は、だが、その前代未聞の事態をさえ想定していたらしいのだ。

「ここが上様、あがりやすうござりまする……ここへおみ足をおかけなされて」

先行する石谷十蔵がさきに畦道から、鹿沼街道へあがり、手をさしのべて秀忠を足もとの安全な場所へ誘おうとした。秀忠の尻を宗矩は押していた。畦から街道へは一段、土が高くなって雑草に蔽われた岩が突起していたからである。

石谷や宗矩ら旗本四名はすべて行装のお供のいでたちでまだ陣笠をかぶり、秀忠のみ、横鬢を切られたあのさんばら髪で、見るからに気の狂れた軽輩者の姿である。しかも秀忠だけは足袋ハダシで、それも厚地の裏のついた紺足袋――。

見事な変装というべきだった。

だが。

背を押されて秀忠がようやく街道へあがった時だ。

「ぬ？」

さきに路傍にあがっていた石谷十蔵が、ハッと後を見返った。

もう鉄炮隊も引き払ったはずの街道の行く手――それも文挟の岐路からは、かなり隔たった向

うの暗闇に、人声がし、何やら小さな明かりが動いている。

龕燈提灯である。

「柳、柳生どの……」

石谷十蔵の顔色が変った。

まだ宇都宮藩士がいたのだ。

それもただの提灯ではなく龕燈を持つほどだから、変装して将軍家が逃げて来るのを予知していたとも考えられる。

いわば秀忠を邀えるにあたっての後押え――最後の監視隊であろう。戦場でもそうだが、後押え（しんがり）こそはもっとも沈着な、腕の立つ勇士の役目だ。

脱出の最難関を、それは意味した。

石谷十蔵の顔色を変えるのも道理である。

宗矩は、だが、冷静だった。

龕燈は心なしか道の左右を交互に照らしながらこちらへやってくる。畦から街道へあがった者のあるのを、気配で察知したのかも知れぬ。総勢およそ二十名ほど。うち十数名は鉄炮をかついでいる――

「上様」

宗矩は言った。さすがに声はきびしかった。

「やむを得ませぬ。駆けてお行きなされませい、彼等の方へ」

「走れと？」

「さよう。われらに追われ逃げる素振りをねがいまする。早う。さもないと世は最早これまでにござりまするぞ」

言ってやにわに秀忠の刀を、手前に引き抜き、パッと抜身で秀忠の袴を掠め切った。それからサッ、サッと路傍の雑草をなで切り、

「いざ」

その抜身を再び秀忠の手に持たせて、

「これでようござる、この抜身をひっさげてお往きなされい。逃げると見せて、早う」

トン、と力まかせに背を押しやった。よろめく足で、そのまま秀忠は駆け出す。

龕燈の近づいて来る方へ。

「おのおの」

宗矩は言った。宗矩は抜刀していた。

「これからが天下分け目……よろしいか。上様を無事お救い申す手段、ほかにはござらぬ。さ、参られい」

言って、バタバタとわざと足音を立てながら、

「おのれ狼藉者……逃げるか。待て」

大音声にわめいて秀忠の跡を追った。この喚き声は十町四方に聞えたという。

驚いたのは石谷ら三名である。いかに芝居とて、上様を抜刀して追い回すのである。ことと次第では切腹ものである。だが腹を切るぐらいは夙く宗矩は覚悟の上なのがその気魄でわかるから、

「各々、ひるんでおる場合ではござらん。――参るぞ」

石谷十蔵も抜刀して、

「不埒者待て。に、にがさんぞォ」

宗矩のあとにつづいた。石谷のこの声も夜空に谺するほど大きかったという。

やって来る宇都宮藩士らに、これが聞えぬわけがない。藩士らの先頭で龕燈をかざし持っていたのは駒井勘兵衛だった。勘兵衛は配下の鉄炮隊を制すると、道路中央に立ちはだかり、

「念のためじゃ、火縄に火を点けい」

号令して颯と龕燈の明りを前方へ注いだ。

さんばら髪で駆けて来る武士の姿が照らし出された。

九

秀忠は立ちすくんだ。

暗闇で突然、龕燈に面を照らされてはまぶしい。

それで、刀を提げる方の右手で、肘をあげ、顔をしかめて光をさえぎりつつ、

「追われておる身じゃ、通せ」

言った。おのずから必死なおもいがその声に出ていた。

駒井勘兵衛は真率の士である。主君正純に一命は捧げている。主君の真意がどこにあるかを今は知っている。

見かけはどうあろうと、猫の子一匹、この夜、鹿沼街道を江戸へ向けて通す気は勘兵衛にはなかった。

「いずれの家中にて何者か、姓名を名乗れい」

一、二歩、前に出て、秀忠の足もとから袴、胸、顔、頭上へ龕燈を照らしつけ、

「おかみ御用なれば身もとをあらためる。姓名は?」

かさねて問いかけた。

答えようがなかったろう。

――そこへ、

「本多上野介どの家中見廻り役と見うけるが」

秀忠のうしろの道の暗がりから、抜刀した宗矩と石谷十蔵が龕燈の明るさの中へ走りこんで来て、

「手出しは無用……その者、われらが成敗いたす」

「お手前がた姓名は?」

「旗本柳又右衛門ならびに石谷十蔵――」

ふたりとも陣笠に扈従のいでたち、歴々の旗本であることは歴然としている。軽輩は陣笠はかぶれぬからである。

それでもまだ、龕燈で秀忠を照らし駒井勘兵衛は一歩もひかなかった。

「御成道をそれたとは申せ、このあたり将軍家御社参が帰路にござるぞ。夜中とて抜刀はただ事ならず、仔細を申されよ。それ聞くまでは一歩たりとも此の場は通すことまかりならず」

声をはげまして言った。宗矩と石谷十蔵の後方から、更に陣笠の二名が現われたのが、かえって勘兵衛の疑念を深めさせたようだった。

宗矩はもうそれには答えなかった。

「おのれもう逃がさん。逃がさんぞ」

二度言って、太刀をとりなおすと、

「軽輩者、覚悟」

叫ぶや真っ向上段に太刀をふりかぶった。
秀忠は、まぶしさをさえぎってきた手をおろし思わず青眼に構えた。おのずと逃げ腰だった。
宗矩はためらわなかった。
「観念せい」
言って、拝み討ちに切りおろしたのだ。
「あっ」
恐怖の叫びをあげたのは石谷十蔵の方である。二名の旗本である。
宗矩の剣は凄まじかった。極意の太刀だ。
躱す間も、受け止める余裕もなかった。
龕燈の灯に、銀蛇のように白刃は一閃し、刹那、鏘然と秀忠の頭上で真二つに刀は折れていたのである。
「わっ」
折れた切先は駒井勘兵衛のとなりに立つ、もう一人の支配役の肩口に刺ざっていた。
と悲鳴をあげ支配役人は反り身になって、顛倒した。彼の持っていた龕燈が闇の虚空へ投げ出された。
鉄炮隊はおどろいた。彼等の半数は倒れた家士の支配下にある。
「だいじょうぶでござりまするか」
「内藤さま」
口々に叫び、思わずバラバラと身辺にかけ寄って、
「しっかりなさりませい。……内藤さま」

秀忠はまだ茫然自失で立ちつくしていた。
「逃げるかっ」
宗矩が又言った。折れた刀を宗矩は大地へ叩き捨て、脇差を抜くと、
「各々、逃がすでないぞ。今じゃ、懸れい」
腹の底からふりしぼる声で、言ったのである。悲痛ともとれる声だった。
ようやく秀忠は察した。
体勢の乱れた鉄炮隊の前を、やにわにバタバタと鹿沼へむかって駆け出したのだ。
「待て」
必死でそれを止めようとしたのは駒井勘兵衛ただ一人だった。だが勘兵衛も同役が折れた刀に刺され昏倒したのを抱き起こそうとしていたので、おくれを取った。
「ま、待たぬか」
同役のそばから、夢中で追いすがろうとする鼻さきへパッとおどり出ていたのは宗矩である。
「各々、早う……早う追跡を」
叫びながら脇差を揮って勘兵衛の脾腹を刺していた。
目にもとまらぬ早業だった。
「うっ」
と呻き、返す切先で心臓を刺され勘兵衛はあたかも宗矩へ抱きつくように取り付いて、ずるずると下へ崩れた。
秀忠たちは暗闇の彼方をもう走っていた。

十

「えらいことをやるものよ」
　秀忠主従が鹿沼道へあがるのを、それとなく尾行して来た影の一人が、宗矩が駒井勘兵衛を刺すのを暗がりにすかし見て、うめいた。
「どういうわけじゃ佐助……頭上に斬りつけて、刀が折れるとは」
「音がした」
「？」
「あらかじめ頭髪に鉄気のものを付けおったのではないか」
「鉄気？……では折れた先があの役人に刺さるよう、斬りさげたと？」
「そうとしか思えぬ」
「ふーん」
　べつの影が、うなった。
「柳生宗矩、キレ者とは聞いておったが、あれほどに遣う者とは」
　鹿沼街道では、内藤某についで駒井勘兵衛までが倒れたので、周章狼狽鉄炮隊員らは秀忠を追うどころか勘兵衛らのまわりを右往左往するばかり。一足おくれに駆け出す宗矩を、制止する者さえない。勘兵衛の持っていた龕燈が臓腑を刺されたとき、路上に投げ出されたのが、転がって、ちょうど宗矩の走り去る方向を照らしていた。
「おい、あれを」
　となりにいた山伏が、佐助を、肘で小突いた。

　宗矩の逃げ去る方向へ、鹿沼街道をはさんでちょうど向う側の、桑畑の木影から飛び出した人物が、闇を突いて横走りに、宗矩の行く手へ立ちはだかろうとしている。
「おっ」
　大きな眼をむいて、坊主頭が胴間声をあげた。
「尼じゃゾ。あ、あれは……」
　その通り。
　尼僧の姿をした霧隠才だ。かりにも夫婦の契りを交した勘兵衛を刺殺され、彼女としては一矢むくいずにいられないのだろう。龕燈の明りの届く彼方で、横走りながら白い頭巾を先ず彼女は脱いだ。黒髪が靡いた。
　それから白布の帯を解き、着ている墨染の衣を脱ぎ捨てた。下には、忍びの黒装束を彼女は着ていた。
　パッとその姿で宗矩の行く手に躍り出し、
「柳生又右衛門、通さぬぞ」
「――ぬ？」
「駒井勘兵衛の妻、才。この場は通すわけに、ゆかぬ。――見参」
　大小は帯びていない。手にしているのは八方手裏剣である。
「駒井勘兵衛？……」
　宗矩には思い当たらぬ名前だったろう。
「いまそなたに刺された本多上野介どの家来……駒井の妻じゃ」
「何と？」

「覚悟しや。ゆくぞえ」
風をきって手裏剣は飛来した。宗矩は危く、上体を伏せ、陣笠でそれを受け止めた。
戛、……
二本目が来た。脇差の鞘でこれは叩き落した。
吾亦紅の金紋の真ん中にそれは刺さっていた。
宗矩も又、刀は将軍家の髻に付いた鉄石軒吉久の燧で折れ、脇差は、勘兵衛を刺したままにして来ている。抜けば返り血を浴びるからである。
つまり素手にひとしい。
三度目の手裏剣は凄まじかった。必殺の気合がこもっていた。鞘を取りなおす余裕は、宗矩にはなかったのである。
「たはっ」
とっさに、身をひねり袂でそれを払おうとした。この気勢もすさまじかった。
ピッと袂が裂け、袴の脇が三寸ばかり斜に切れていた。
四本目が飛んできた。何という至妙さ、わざと、それは速度をゆるめ、山なりにふうわりと、だが宗矩の咽喉もとをあやまたず狙って投げられていた。
速度のこの変化は、かえって確実に、柳生宗矩の死命を制すると見えた。
これぞ甲賀流秘伝の手裏剣投擲法だったのである。
はるかな闇のこちらからこの様子を凝視し、
「やったか」
めずらしく猿飛佐助が声をあげた。

あげて、ゴクンと生唾をのんだ。
佐助には見えた。宗矩の手から鞘が捨てられたのが。その手がパッと合掌するのが。
信じられようか。
合掌した両手のうちに手裏剣ははさまっている。
無刀取りの極意である。
いかな才も茫然自失、われとわが目を疑うように、ふらふらと前へ進み寄った。
見て、
「あぶない！……霧隠」
夢中で佐助は叫んでいたのだ。

十一

それから一刻あまりが過ぎた。
文挟の宿駅の夜空に、やや褐色がかった月がのぼっていた。
静かな夜である。
思い出したように何処かで蛙が鳴いている。
街道わきの草むらのかげに、車座になった五つの影——
陰謀は未遂におわったのである。
本多正純は長蛇を逸した。釣天井はついに落ちる機会なく、いまごろは井上主計頭正就が『監察』として宇都宮城に乗りこみ、殿舎構造に何カ条か怪しい点のあるのを糺問しているだろう。
「まんまと奴に、一杯、くったのではあるまいかの」

つぶやいたのは三好清海入道だった。
「奴とは？」
穴山小介がきいた。
「きまっておろう、あの柳生新太郎じゃ。そうではないか佐助、あの新太郎めがいっさい、われらに手出しするなと言うを真にうけて、なりゆきを見ておったらこのザマじゃ……当初の手はず通り、はじめからわれらが本多に加担しておったら、何の、宗矩ごときに溜飲をさげさせておらなんだわ……のう霧隠」
「……」
才はこたえない。うなだれた肩に黒髪が風で乱れていた。今いちばん複雑な気持でいるのは彼女だろう。わずか半年あまりでも、一般武士より身分賤しいと軽視される「くの一」の身で、ともかくも宇都宮藩士の妻の日常を経験した。
姑の勘兵衛の母は、才が常の女でないのを感じていたようだった。でも姑は、よく出来た婦人で嫁いびりをするどころか、かえって、何かにつけやさしく才をいたわってくれた。
「そもじにもわけはおありであろうけど」
一度、勘兵衛が宿直で不在の夜、姑は「おやすみ」を言いにいった才に、夜具へ起きなおってこう言ったことがあった。
「どのような事情でそなたこの宇都宮に来やったかは知りませぬ……なれど、いまはそなたは駒井家の大事なよめ。つらいこともあろうけど、どうぞ辛抱して、早うよい子を生んでたもれ……この姑に、孫の世話をさせてたもれや、たのみまするぞえ」
涙がこぼれる嬉しい言葉だった。

「おかあさま……」
才は思わず両手で、顔を蔽ったのだ。母と呼ぶ人を知らず才は育った。捨て児だった。それを甲賀者に拾われ、物心つくころから女忍者に仕込まれて、今日まで来た。いろいろなことがあった。真田幸村どのにも目をかけられた。だが、この半年余の、駒井勘兵衛の妻としての明け暮れほど、人知れぬ気づかいはあったが女の平穏な幸せともいうべきものを、しみじみ味わえたことはない。
そのしあわせが、ここに、潰え去った。勘兵衛は死んだ。あの柳生宗矩のために……
月下の草むらに顔を並べた真田の遺臣五名――
猿飛佐助。
筧十蔵。
三好清海入道。
穴山小介。
それに当の霧隠才だが、本多正純の謀叛が未遂におわった今、これから皆でどうするか、その方針がどう決まるにせよ、才だけは、たとえ命を捨てても宗矩にこの怨みははらしてみせると、心に誓っている。たとえ女の体を張ってでも……
「すぎたことを、ここで兎や角言うても詮がない……新太郎にだまされたと、わしは三好のようには思わぬが……つづまるところは、これからをどうするかじゃ」
筧十蔵が、月の光に頬の疵を、くっきり浮かばせて言った。
「佐助、わしの意を述べてよいか」
「言うてもらおう」

「われらは真田幸村どのに仕えはしたが、真田家譜代の家来ではない。申さば一匹狼でいた者が、幸村どのの器量に惚れ、幸村公に合力して徳川へ一泡吹かさんとしたまでのこと。その幸村公は大坂城にて討死、めざす徳川家康また今は不帰の客となった……せめてそれで、現将軍に異心をいだく本多正純の出方によっては、正純に加担して幕府へ真田家残党の健在を思い知らせてやろうというのが、われわれの腹であった。だが今、正純は挫折した。おぬしの話では、幸村公の遺姫お万阿さまも今は白石城に片倉重綱夫人としてつつがなく、真田家再興の意志はお持ちなされぬよし。してみれば、われらばかりがいかように騒ごうと、ここで事を構える名分は、もはやない。――となれば、各々もとの一匹狼にもどるしか他に」

「待て」

佐助が急に筧を制し、後方の闇を、キッとすかし見て、

「そこにおるのは、誰だ？」

薫香

一

闇にうかびあがって来たのは二人の影だった。

「わしだ」

影の大きい方が言った。

「や、おぬしか？」

佐助が思わず草むらで立ちあがると、

「さよう。柳生新太郎――」

「な、な、何？」

清海入道が目をむくのへ、

「ふ、ふ、ふ……さいぜんおぬしのほざいた文句は、聞いたゾ。坊主」

「おのれ何ちゅう」

「まあそうむくれるな。――それより、おぬしらに引き会わせたい御仁がある」

柳生新太郎は佐助や才と同様の忍者装束で、例によって刀を背に負い、かるさん袴。但し、覆

面はしていなかった。月代（さかやき）もきれいに剃（そ）って、忍者ではなくどこかの家士の面貌（めんぼう）である。

つれ立っているのはあきらかに高貴の育ちと思える、夜目にも華美な打掛けをまとった女人。黒髪は背に丈なすごとく、近づくにつれて伽羅（きゃら）を焚（た）きこめたような妙な薫香が夜気に漂い、清海入道など無意識にヒクヒクその団子鼻をうごめかせた。そうして、

「や？」

奇声をあげた。

「さよう、おぬしらが見る通り――」

柳生新太郎が言った。女人は、車座の一同の前へ静かに立ちあらわれたのを見れば、薄い被衣（かつき）を頭より翳（かざ）している、その被衣の下に何と、般若（はんにゃ）面をつけている。

わずかな月光にうかびあがった臈（ろう）たけた姿の美しさにくらべ、般若面の形相の凄（すさ）まじさは、いかな真田十勇士の生き残りたちもゾッと背に寒さをおぼえるほどである。

「この方のご身分をおぬしらに今、打明けるわけには参らんが、さるやんごとなき姫君におわすことはこの新太郎が武士の名にかけて明言する」

「……」

「じつを申すと、おぬしらに本多正純が謀叛（むほん）の成否を見届けるまで、いっさい手出しを遠慮してくれよと頼み入れたのもこの婦人の深慮から出たこと……けっして、三好、おぬしが言うようにわしがだましたのではない。むほんが成就いたすなら、わしとて、かえって好都合と思うておったわ……だがの、見る通り謀叛は成らず本多正純の命運はここに尽きた。よってあらためてこの御仁を、おぬしらに引き会わせにまかりこした――」

車座の面々いずれもまだ般若面の女人の正体を推察できず、声をのんで月あかりに立つ女性の

容姿を凝視している。

それでも、

「才――」

穴山小介は用心深かった。となりの才の耳もとに顔を寄せ、そっと小声で、

「そなたなら一目でわかろう……あれは、まことの女か？　何者かが変装し面をかぶっておるのではないか？」

たずねていた。

才はこたえなかった。こたえずとも彼女の一すじな視線は、それが紛れもなく自分たちとは育ちのちがう天性の姫君であることを語っていた。

「それで、われらに夜中わざわざかようの場所まで出向かれたわけは？」

筧十蔵がたずねた。十蔵はちょうど般若の女性を真正面に見る位置に坐（すわ）っていた。

「あらためておぬしらに談じ入れたい儀があってよ」

柳生新太郎が言った。

「談じ入れる？……どんなことかな？」

「この御人に合力してもらえるかどうか」

「いったい、どなたじゃ？　御当人の身分も明かさず合力せよと申されても……」

「妾（わらわ）のことなら」

はじめて般若面の女性が口をきった。玉をころがすような、玲瓏（れいろう）と美しい声だった。

「九重（ここのえ）の裡（うち）にある身とおぼえてたもれ」

「九重？……」

穴山小介が身をのり出し、
「ならば禁裡にゆかりある御方か？　それとも公卿のご息女か？」
「……」
「公卿のご息女なら、日光御社参に伴された御門跡にゆかりでも？」
さもなくてこんな夜中、まして日光街道はずれのむさい草むらへ高貴の婦人がやって来られるわけがない。
「はじめにも申した通り」
新太郎が女人にかわって、
「ご身分をあかすこと今はならぬ。ご門跡なり公卿なり、推測はおぬしらの自由。ただこれだけは申しておく。あまねくこの国を照らし給う日のごとき御方であるとな」
「日のごときじゃと？」
「さよう。申すなれば太陽よ」

二

「日のような御仁の使い――つまりわしらは太陽の使者か」
三好清海がつぶやいていたら、
「それで、われらに何をせよと申される？」
筧十蔵が鋭い眼をまっすぐ、般若面へあげた。
「わしが代って答える――」
新太郎が般若の婦人の前に一歩、出て、
「およそ半年後に、或る場所であることが起る。それ以上は今は明かすわけにはゆかぬが、同意してもらえるのであれば、当座の費用に一人あたり金二十両」

「二十両じゃと？」
「さよう」
「われらを真田の遺臣と知っての依頼か。それとも多少は物の用に立つ浪人と見て」
「むろん用に立つ勇士と見ればこそじゃが、真田の遺臣でなくば、おそらくかような話を姫は出されまい」
「すると、真田の遺臣――つまり徳川の天下に弓引く者ゆえ合力せよと申されるのか？」
穴山小介が口をはさんだ。
「まあそういうことになる」
「妙じゃな」
十蔵が言った。
「おぬしは柳生新太郎……柳生なら、さいぜんこの街道にて宗矩のいたしたことは承知のはず。将軍家の急をつまり宗矩は救うたぞ。その同じ柳生のおぬしが何でまた、徳川の天下に弓ひくわれらへ」
「いかにも又右衛門宗矩は、わが一族。なれど兄弟牆にせめぐ例は世間にざらにあること。宗矩は将軍家扈従なればその難を救うた。わしはちがう。宗矩は新陰流、この柳生新太郎は古陰流……一族なればとて、同じ志を有するとはかぎるまい」
「……」
「どうじゃ。不審はまだあることと思うが、何も、今ここで事を決しようと申すのではない。半

年後に、もしその意があるなら集結いたしてくれればよい。それまでの当座の費用に、一人あたり金二十両、姫は出すと申されておる」

「……」

「それと、集結に際して各々に今ここで匂い袋を手渡すが、合力の意があるなら、誓いのしるしにその匂い袋をたずさえて、半年後、駿府久能山へ集結してもらいたい」

「――久能山?……」

「さよう」

うなずくと、

「姫」

新太郎は背後の女人をふり返った。

般若面が、かすかに、こっくりをして、被衣を持っていた右手をおのが懐中にさし入れる。むろん、帯は前結びである。

懐中から出したのは、夜目にもそれと察しのつく、五色の、括り紐に結ばれた綾錦の匂い袋。言い知れぬ薫香が、たちまち車座の内にひろがった。

新太郎は、女人が匂い袋を出すと同時に、自身も懐中より慶長小判の包みを出し、さらさらとそれをかぞえ、二十枚ずつに重ねて、露の早やしっとり降りはじめた地面へ、じかに置く。

そうして姫君から五つの匂い袋を一揖して受取り、

「よろしいか」

車座の中央で五人をぐるっと見まわして、

「赤、黄、緑、紫、茶の五色のくくり紐の付いた匂い袋……夜中なれば色は判じ難いかも知れぬ

が、この色の順番に、受取った者からこの場を去ってもらう。そうして半年後、十一月十一日、駿府久能山に集まってもらいたい。もちろん、半年後なれば人の一生ははかり知れず、あるいは余儀なき事情にて駿府に出向けぬ者もあろう。それは縁のないものとあきらめ、われらいっさい意趣はふくまぬ。ただ、合力いたす気になった向きだけ、集結いたしてくれればよい。――そう姫は申されるのじゃ」

「……」

「さ、どれでも、気の向いたのを取ってもらおう……ただし、猿飛佐助と霧隠は暗夜とて目が見える。色を判じ得るゆえ公平を欠かぬため残ったのをえらんでもらいたい」

「赤……赤をとった者が、最初にこの場を去るのか?」

三好清海入道がきいた。

「さよう」

「なんでいっしょに出立せん?」

「猿飛佐助になら、いや霧隠にも見分けがついていようと思うが、宇都宮城下の街道すじ、たとえ間道とて将軍家が城中に入られぬこと判明して今や人数がくり出され、通行の者吟味に大騒ぎよ。さようなところにおぬしらが打ちつれて歩いては無用の疑いを受けるが関の山……ならばいっそ、一人ずつであった方が」

「……」

「さ、誰からでもよい。好きなのをえらんでもらおう」

それでもしばらくは誰も手を出さなかったが、やがて、

「よし」

穴山小介が先ず、腕をのばした。

三

月明りながら、暗くて穴山小介に匂い袋の紐の色はわからなかったろう。
彼は袋を両のてのひらに載せると、顔を寄せて匂いを嗅ぎ、
「ふーん……よい匂いよ……沈香か」
大きな鼻をうごめかせた。どうやら嗅ぎ分けるところを般若の女性に見せたかったらしい。聞香は、貴人のたしなみで下級武士に出来ることではないからである。
柳生新太郎はそんな穴山の気障っぽさは黙殺し、
「次は？」
残る四人を見まわした。
「佐助、おぬし取らんのか？」
「わたしには色が見える……あとにしよう」
「寛十蔵、お手前は？」
十蔵はチラと佐助の方を見、それから正面に佇む女人の容姿に目をあげて、しばらく無言でいた。
おのが運命を賭けるそれは沈黙のたまゆらとも見えたが、やがて、
「——佐助」
ゆっくり又、顔を向け、
「この話に、おぬし乗るのか？」

「わたしはのる。こうなればほかに生きる目途はないだろう……が、強要はせん。受けるもことわるもおぬしの肚ひとつ」
「そうか」
ニヤッと寛十蔵の口もとがわらった。
「一蓮托生よ。おぬしがそう言うなら」
ムズと手をのばし、目の前の匂い袋と小判をワシづかみした。
「そんならわしも」
すぐ清海入道が膝をのり出し、残った三つを暗がりに見くらべて、
「どれにしようかいのう……」
独りごとを言いながら、
「太陽の使者——か、ふむ。呼び名が気に入った……よし、これにしよう」
両手で小判と袋をすくい持って大事そうに膝へのせる。
佐助には見えていた。才にも。
穴山小介のは赤色で、寛十蔵が黄、三好清海入道のは紫色の紐であることが。
「そもじ取ったら？」
佐助が才に言った。
才だけは、だが柳生の名にこだわっているらしく、黒髪を左右にふって、
「あたしは、ことわるわ」
「ぬ？……いやか？」
「そう」

深い双眸でじっと新太郎をにらみあげ、紅唇を一の字につぐんでいる。

「――そうか」

佐助は無理強いはせず、

「では」

あっさり緑色の匂い袋と小判を取った。

新太郎も無理強いはしなかった。ただ残った茶の紐の袋を般若の女人へ返すと、小判二十枚を手にもって、

「霧隠――」

才の前へ立つと、

「そもじのこばむ気持はわからんではない。あの駒井勘兵衛と宇都宮城中にて祝言の模様では、そなたはまさしく女子……宗矩を恨む気になるも道理と、わしも思う……だがの、同じ柳生の姓を名乗らばとて宗矩は兵法者、わしは忍者」

「忍者？」

「そうよ、この装束を見ればわかろう」

「ホ、ホ、ホ……身なりで忍びが出来るかえ」

「まだ疑うておるか。ならば言おう、そもじがあの初夜、本多正純が面前にて勘兵衛と新枕を交わせし一部始終、つぶさに天井裏より見ておったわ」

「なんと？」

「うそではない。真田十勇士がひとり霧隠才蔵が本性は女とは、あの時、そもじが裸になるまでこの新太郎知らなんだ」

「!……」

「更に言おうか。勘兵衛はそなたと寝るあの夜が初めての房事であったな。そなたは、ちがう。勘兵衛の下になり、肢をひろげて」

「!……」

「あっという間にコトは終っておったが、そなたは愛おしそうに勘兵衛を掻き抱き、泣いておった……あの涙が今われらへの合力をこばませるのであろう。無理ないとわしはおもう。されば強って合力を依頼はせぬ。だがな、勘兵衛がみまかっては、いかに嫁とてそなた宇都宮に長くとどまれはすまい。われらに合力せぬ理由の今ひとつは、そなた、あの勘兵衛が老母にかしずき、せめて老母のみまかるまで嫁として身のまわりの世話をしたいのであろう……それには半年後の久能山集結は約束できぬゆえ、合力はいやと申した――そうわしは見た」

「!……」

「よいわ、くの一であるそなたを常の嫁のごとく扱うてくれた老母じゃ、せいぜい孝養をつくすがよい。だが若し、半年以内に老母が果てたらそのときは久能山に来てくれまいか。それまでの当座の費用、そう思うてこの二十両、気持よう受取ってくれよ……たのむ」

四

月がむら雲に隠れた。

「拙者から、去ればよいのか？」

穴山小介がそう言って、やおら腰をあげたのは才が小判二十両をようやく受取って間なしである。

「さよう」
柳生新太郎はうなずいて、
「赤紐なればおぬしから先ず去ってもらおう。行く先はどこへなとおぬしの自由……ただし半年後には」
「わかっておる」
穴山小介はまだ匂い袋は手のひらにのせていたのを、再び、鼻のさきに近寄せて匂いを嗅いで、
「では出立するが——」
佐助、寛十蔵、才、三好清海の一人々々に視線を注ぎながら、
「約束は違えぬ。半年後の十一月十一日、かならずわしは久能山におもむく……それまで、しばしの別れよ。おぬしらも息災での」
言って、被衣をかざし持つ般若面の女人に、あらためて一礼して、
「ではさらば——」
闇の野辺に、ゆっくりと去っていった。
蛙がまた鳴いていた。
「つぎは黄色の寛十蔵」
柳生新太郎が告げるのへ、これは黙って笈を負いなおして起ちあがると、
「佐助……それから霧隠、清海——」
「？」
「縁があるかないか、半年後になってみねば人のいのちは知れぬもの……しだいによってはこれが、おぬしらと今生の別れになるかも知れぬ……が、寿命があればかならず、わしも久能山に行

く。再会を、心から待つぞ」
言って、般若の女性には会釈もせず三、四歩、佐助たちを見つづけて後退してから、くるっと背を皆へ向け、六角棒を携え悠然と暗闇に姿を没した。穴山小介とは反対の方向だった。
つぎに佐助が立ちあがった。猿飛佐助は訣別の辞は口にしなかった。
平然と、
「では後日……久能山で」
新太郎と般若面へかるく黙礼して、
「霧隠……寛のことばではないが、縁があれば、またな」
三好清海入道にはポンと軽く肩をたたき、
「あまり大食はするなよ……さらば」
「ま、待ってくれい」
大きな図体に似ず、清海入道は心細くなったらしい。
「水臭いぞ、佐助……わしも、一緒に」
「それはならん」
語気きびしく言ったのは柳生新太郎である。
「なぜじゃい。われらと猿飛は、これまでも常に共に」
「約束は守ってもらおう……さいぜんも申した通り、連れ立ってでは道中見廻り役人どもに要らざる嫌疑をうけては面倒」
「わしは僧体じゃぞ。仏門にある者を誰が」
「三好」

佐助がおだやかな声で、
「一緒ではわたしが困る……。半年たてばまた会えるのだ。それまで、せいぜい羽根をのばし、好き放題にするがよい。少々思い切って遊んでも金二十両なら余りがあるはず」
「そ、それもそうじゃが……」
「何も案じることはない。半年よ、温泉でのんびり垢を落すもよいではないか」
清海入道は、そうまで言われれば浮かした腰をおろすしかなかったろう。
それでも、まだ、こんどは隣りの才をかえりみて、
「どうするそもじは？……誓いの守り袋、そもじだけは受取らんでおるが……このまま、此処に残るのかい？　それとも……」
才はこたえるかわりに、黙って、般若の女性の様子をただ見まもっていた。穴山が去り寛十蔵が去り、今また、猿飛佐助が去れば、ほぼ彼女がここへ出向いてきた用事は済んだようなもので、般若面をつけた異様さを自省するおもいもあってか、何となく、落着かずにいる。その気配を、じっと才は見まもっていたのだ。
彼女は最後までここに居残るつもりだった。独りになって、あらためて彼女は為たいことがある。夫勘兵衛はもう死んだ。新太郎はああ言ったが、今更、宇都宮に残り老母の身のまわりの世話をする気は才にはない。老母もそれを望みはすまい。
そのかわり、死力をつくして暗夜を駆けてもあの柳生宗矩を追跡し、体を張って、一矢、酬いようと心に決めている。武運つたなく宗矩の刃にかかって死ぬかも知れぬ。それで匂い袋を彼女はとらなかったのだ……。
あくまで、才が坐りつづけたのは、だからおのれの意志からだった。それが、思いも寄らぬ光景を——柳生新太郎の正体を——目撃することになろうとは。

五

穴山小介のことから書かねばならない。
赤い紐の匂い袋をとった彼は、最初に皆と別れたが、忍者でない小介に夜目はきかなかった。おぼろな月明りをたよりに、何度か、畦に足をとられそうになって、ようやく鹿沼街道に出た。後方をふり向くと、むろん、一面の闇で、車座になったあの場所さえどの辺か見当もつかない。
「太陽の使者か……清海入道め、ふ、ふ……柄になくうまいことを……」
つぶやいて、あとはほのぼの白い道を足さぐりに鹿沼へむかうばかりだった。
文挟から鹿沼宿へ約二里八丁。
途中、八幡台、御成ばし、如来堂などの立場（小部落）を通るが、折がおりとていずれも戸を卸し、一夜の宿を乞うすべもなかった。二里余を鹿沼宿へたどり着くほかはなかった。
「どうしよるんじゃろうあの連中……わしの次は寛のはずじゃが、いずれはこの街道を通るほかあるまいて」
だとすれば、のろのろ歩いているうちに寛十蔵が追いつくかも知れぬ。そんなこともふと思い小介は、べつだん、道をいそがなかった。
御成ばしの手前の、黒川という川に懸った橋をちょうど渡りきった時だった。
バラバラと道沿いの民家の暗がりから踊り出た数人の影があった。
やはり、ギョッとした。
柳生宗矩たちなら、もうとっくに将軍家を擁護しこのあたりは通過しているはずで、宇都宮藩

士最後の鉄炮隊の関門かと思ったのである。
　ちがったらしい。
　おどり出たのはいずれも黒装束、黒覆面。中で首領らしいのが両手をひろげて行く手に立ちはだかり、
「それに来るは真田の遺臣と見うけ申す。――違うか？」
「ぬ」
　本能的に小介は刀の柄へ手をかけ、
「その方ら何者？」
　闇をすかし見た。
「返答あれ……真田の遺臣ならば証拠の品を所持いたすはず」
「証拠じゃと？」
「さよう。さるやんごとなき御方より賜わりし匂い袋、所持めされるか？」
　意外である。
　あの柳生新太郎に関わりのある者でなくば、たった今受取って来たそれを知る道理がない。
「おぬしら――」
　油断なく鯉口を切って、
「いかにも所持いたすと申さば何とする？」
「ならば遺臣の一人に間違いないな？」
「言え。なぜ匂い袋がこと存じおる？」
　答えるかわりに、大手をひろげた影はその手をおろすとツカツカと寄って来て、

「念のため匂い袋をあらためる……所持あるなら、出してみられよ」
「む？」
「掌に示されるだけでよい。夜中とて芳香は匂い申す……イザ、出してみられよ」
　たしかに理に合っている。少時、ためらったが、言われるままに柄にかけていた手を内ぶところへさぐり入れた。
　瞬間。
　水もたまらぬ抜討ちが頭上に斬り下げられていたのだ。
「おのれ卑、卑怯……」
　穴山小介ほどの勇士でもこの居合斬りはかわせなかった。それほど手練の一太刀だった。のけ反り気味に、ひたいから鼻唇へ一すじ、切先の走るのを危く避けたつもりだったが、後れた。眉間から血がほとばしり、ふところの衿のしたへさぐり入れた肘が、手首のところで、腕と真二つに断ち切られていたのだ。手首だけが懐中を摑み、腕はぷうっと血汐を吹いて肩でぐるぐる石を投げる時のように、空しく回っていた。
　刀の柄を握ろうとする必死の意志がそうさせたのである。
　腕の回転につれて血が四散した。
　それだけ出血はすさまじく、あわれや死期を早めたことになる。
「う、汝ら何ゆえ……この、身を、真田の、遺臣と知って……斬、斬るッ？」
　首領は沈着だった。抜討ちの白刃はもう鞘におさめて、
「角馬」
「は」

「匂い袋を……早う」
穴山小介のふところから取り出すように部下へうながし、
「おぬしに意趣を含むものではないが」
小介へ言った。
「太陽の使者となるには抜群の士でのうてはかなわぬ。今の抜討ちにムザと斬られるようではのう……不憫なれどこうしておぬしら一人一人の腕を、試せとの新太郎殿の命令じゃ。斬られたがお手前の悲運、あきらめて成仏されよ」
言って、部下が懐中から奪い取った錦の袋をそれと確認すると、
「次が来るぞ……早う、散れ」
小介の悶絶には目もくれず一斉に闇へ消えた。
次の足音が、やって来た……

六

笈を負い、兜巾に棒をたずさえた影でそれが寛十蔵なのはあきらかだった。
穴山小介は虫の息ながら、まだいのちはあった。
いかに夜道でも、血に染まって横たわる断末魔の人の気配はわかる。黒川の橋を渡りきったところで
「?……」
十蔵は、行く手の闇やみを窺い見て、佇立し、
「そこにおるは、だれじゃ?」

「……」
「手負いか?」
かすかに、地に伏した小介の体がうごいた。
十蔵はそれでも、立ちどまって動かず、いちど、橋の後方をふり返ってから、やおら六角棒を小脇に、ゆっくり、地に伏した者へ進み寄った。
「たっ」
地面にひろがる血のぬめりに草鞋をすべらせ、危く横転しそうになったのはもう、穴山小介らしいと、おぼろげに察しのつく距離だった。
「おぬし……?」
日頃豪気な寛十蔵も思いがけぬ朋友の姿に、愕然。色をうしなって、
「ど、どうした?……この有様は何としたぞ。穴山、気を、しっかり持てい」
馳せ寄ると棒を投げ捨てて肩を抱えおこし、
「鉄炮きずでは、ないな。……相手は?　誰にやられた?」
「……や、……ぎ……新」
仄かな月明りに、無惨に、鼻唇まで縦に切り裂かれた凄まじい形相で小介は、意味の聞きとれぬうわごとをもらしたのを最期に、がっくり、コトきれた。
その時。
バラバラと数人の黒装束が民家のかげからおどり出して、
「寛十蔵と見受ける――」
首領がツカツカと歩み寄ると、

「匂い袋を所持めされおるならば差し出されよ。念のため検分いたす」
「検分？」
　寛十蔵は捨てた六角棒を素早くつかみ寄せ、穴山の身を路上に横たえて、立った。
「――何者じゃその方ら？」
「お手前がまこと匂い袋を所持あるかどうか、検めのためつかわされた者よ」
「だれにつかわされた？」
「？……」
「般若の面をお付けなされたさるやんごとなき御仁」
「匂い袋、いざ、お示しあれ。……まこと所持あるなら真田の遺臣寛十蔵どのに相違なし。よってこの場は通しはべる。万一、所持ないなら太陽の使者を騙る偽者。一歩たりとも通すことはまかりならぬ」
「――」
「さ、匂い袋を」
　言って手を無造作にのばしてきた。右手だった。左腰には刀は差している。首領の右手へ匂い袋をにぎらす限り、抜討ちはない。
　寛は用心深かった。
「そうか」
　左手で棒を斜めに構え不意討ちにそなえながら、右手で、ふところの匂い袋をさぐり取ると、
「この通りいかにも般若の女人より受領した。とくと、見るがよい」
　あたかも握手するかっこうで相手の右手へ匂い袋を差し出した。瞬間、互いの眼と眼が合った。

　寛は穴山小介ほどうかつではなかったのである。棒術をきわめた彼の身構えに兎の毛で突くほどの隙もなかったのだ。
へたに袋を受けとろうとすれば脳天に一撃を喰っていたのは首領だったろう。
パッ、と首領は後へ跳びさがって、
「見事！……寛十蔵どのに、もはや相違なし。いざ通過あれ」
「いいや」
　十蔵の眼に怒気が光った。
「穴山小介をなぜ殺めた？　小介もわれらと同じ匂い袋は所持いたしたはず……それを汝ら、斬ったな？」
「――」
「なぜじゃ？」
「いかにも斬り申した」
　首領はこたえた。
「凡庸の士にはたとえ真田十勇士が生き残りでも此度の大役はつとまらず、よって斬れとの仰せなれば」
「誰がそれを命じた？」
「今は、まだ……明かせぬ」
「大役とは？　太陽の使者たる役のことか？」
「……」
「今ひとつ訊く。由利鎌之助なぜか消息が知れぬ。あれだけの丈夫、めったなことでわれらとの

約をたがえる道理なし。それが姿を見せなんだは、さてはその方ら、斬ったな?」

言葉で答えるかわりに、黙ってコックリをした。

「ぬ?……何処で斬った?」

「江戸」

「江戸?……だれが?」

「——」

「手にかけたは、申せ、誰じゃ?」

こんども答えるかわりに、

「すみやかに此の場を通過めされるか、それとも亡き両人の仇討を所望か?……もしそうなら、あらためてわれら、ここにてお相手つかまつろう——」

七

首領をふくめて、路上に立ちはだかった影は都合、五名。

くさり帷子を着込んだ首領のほかは、いずれも、黒覆面ながら忍者か、ただの刺客か寛十蔵にはわからなかった。

だがいずれおとらぬ刀術の達人らしい見当はついた。

一対一ならともかく、五名を同時に相手ではいかな棒術をつかっても勝ち目はない。

足下に横たわる穴山小介の無惨な死が、それを証している……

ようやく寛十蔵の頬が、刀の疵あとを深めてゆがんだ。

今にして柳生新太郎の策に、まんまとはまったのをさとる……十蔵らも佐助や清海入道らと、

五人一緒なら、互角の戦いをしてみせたろう。それが匂い袋の紐の順番などに、うまく乗せられ、一人々々で五人と闘う仕儀になった——

「どうめさる?……お通りあるか。それとも勝負をいどまれるか?」

「通る——と申さば、おだやかに通すか?」

「言うまでもござらぬ」

「なぜじゃ、ならばなぜ穴山を斬った?」

「さいぜんも申した通り、太陽の使者たる器量かどうか刀にかけて、試したまで」

「するとおぬしらも、太陽の使者か?」

くびをふった。

「われらは新太郎どのの依頼にてお手前がたを試すまで。太陽の使者では、ない」

「なぜ?」

「——」

「なぜわしを倒せるほどの手練がそろうて、使者になれぬ?」

「それは言えん」

言って、

「どうなされる?」

問う語気はきびしかった。

そろそろ次の誰かがやって来るかも知れぬ。

「お通りあるか、それとも」

「もし引き返すと申したら?」

「斬る」

この声には殺気がこもっていた。配下の四人のうち早や二人が抜刀していた。

「通ろう」

言下に寛十蔵は言った。

賭けだ。

匂い袋がまこと太陽の使者たる意味をあらわすなら、もうおだやかに通行させよう。そうでなく真田の遺臣ひとり一人を暗殺する意図だったら、しょせん、無事には通すまい。

寛十蔵の豪気の腹芸が、かくて発揮される場面となった。

「どいてもらおうか」

左手の棒を、芝居の花道を引揚げる武蔵坊弁慶よろしく小脇に把って、六方こそ踏まね、大跨にゆっくり、穴山小介の死体をまたぎ越えて、歩き出した。

立ちはだかっていた五人は、ふた手に別れ、道の両側に並んだ。その真ん中を、昂然、胸をそらし、一歩ずつ大地をふみしめて通ったのだ。

瞳をこらして、その様子を首領は凝視していた。

ほんのわずかでも、怯えを見せれば即時に首領は抜討ちをかけたろう。

息づまる数秒だった。

寛十蔵はしかし、傍らに人無きがごとく五人の目前を通りすぎたのだ。

「見事」

首領は低くいった。

「心底のほど今こそ見届け申した。さすがは真田幸村どのが股肱の臣……いずれ十一月十一日、

久能山にて、お目もじつかまつろう――道中ご息災に」

言うと、部下へ合図をし一斉に路傍の闇へ四散し去った。

十蔵は歩みつづけた。彼等に目もくれず寛十蔵もまた街道を鹿沼へ向って消え去った。

次の男が来た。

足音は大きかった。

ドシン、ドシン……

橋をわたる時、橋桁ににぶい地ひびきをたてたのは金棒を突いている証拠である。

三好清海入道である。

寛十蔵とちがって、彼は蹴つまずきそうになるまで穴山小介の死体が道に横たわっているのに気づかなかった。

あまつさえ、

「どうした?……さようなところで寝ておると風邪をひくぞ……む？　酔い倒れか?」

のっそり立ちどまり、中腰で、上から死者のかおを覗きこんで、

「や、や」

どんぐり眼をみはり、

「小介ではないか。穴山小……」

それから

「たはっ」

腰をぬかさんばかりに仰天した。

「死、死んでおるな小介……どうした？　おぬしどうしてかような……」

バラバラとその周囲へ黒装束が踊り出した。

「三好清海入道と見受ける」

黒覆面の一人が言った。

「上意じゃ。覚悟せい」

八

「上意？……何のことじゃ？　一体おぬしら……」

懐中にした黄金二十枚のこころよい重みに、いちばん恍惚として此処まで来たのは三好清海入道だったろう。

生まれつき好人物の彼は、金銭には元来淡白であった。そのくせ潤沢なお金があれば好もしい女を一夜妻として抱くこと、うまい物を腹一杯食うことも出来ると空想するだけで、たのしい気持ちになるのを人にかくさないし、自分が愉しいことは他人もそうだろうと思っている。いわば天真爛漫の、自然児である。

猿飛佐助らと別れる当座は心細さをおぼえたが、さて夜道を独りで歩き出してみると、元来が豪傑ゆえ恐怖心というものを知らない。自分同様、あの穴山小介や筧十蔵だってすこぶる女は好きなのであるから、今ごろは夜道をいそいで先行の穴山小介など、もう鹿沼宿で飯盛り女を漁っておるかも知れん……ニヤニヤそんなことを空想して清海入道はやって来たのである。

しかるに、穴山小介は死んでいた。

あまっさえ黒覆面の曲者どもがバラバラと周囲を取りかこみ、中で二人ほど早や白刃を抜いている。

てっきり、黄金二十枚を目当ての強盗と清海入道はおもった。

上意とは片腹痛し。

上意討ちは主君の意で家来が家臣を討つことである。三好は浪人なのである。主君をもたぬ。したがって上意討ちのいわれはない。

「そうか、うぬら黄金めあてに穴山を倒したんじゃな？　よーし……ならばこの清海が亡き友の仇を討ってくれる。目にもの見せてやろう、一人一人はめんどう、束になって、かかって参れ」

早トチリもお人よしの特徴のひとつか、二十貫の金棒を左手にブンブン振り回し周囲の五人をハッタとにらみつけた。夜気を截る金棒の唸りは凄まじかった。

首領の覆面の眼に、ふっと困惑の色がうかんだ。

本人はいっぱし豪傑ぶっているが、近づきさえせねば危害をうけることはない。しょせん金棒が威力を発揮するのは戦場で、雑兵の群れへ暴れこんでこそそれは無類の兇器となる。

だが、今、彼を倒すには一丁の鉄炮があれば足りる、手裏剣でことは済む。そのことを、本人は知らない。戦国時代の豪傑は泰平の世になっても怖れられると思いこんだ、おのれのその時代錯誤に気づかない。考えれば哀れな男である。

つまりは底の知れぬお人よしで、そんな好人物を暗殺するのに、ふと、首領はあわれさを感じたのだ。

だが柳生新太郎はこう言った。

「よいか、力自慢が物を言う時代はすぎた。これからは知恵がともなわねばならぬ。智略が世を制する時代……哀れではあるが、金棒をふり回すほかに能のない清海あたりが、生きて栄耀のできる世の中ではない。いっそ生き辛うなる前に死なせてやるが慈悲であろう。情けは無用、斬れ」

その言葉がある。

首領は、ブルンブルン、金棒をふり回して近づく清海入道にさからわず、つ、つ、つ……と後退しながら部下の一人へ目くばせした。

部下の指に六本の手裏剣が把(と)りなおされ、まるで一条の銀の流れのように矢継早に三好入道の肢(あし)、腹、鳩尾(みぞおち)、のど、両眼を狙(ねら)って投げられた。

「喝(かつ)」

裂帛(れっぱく)の気合が闇(やみ)の何処かで発せられたのは、これと同時だ。

鈍い六つの音が虚空で散った。

「?!……」

愕然(がくぜん)、色を失ったのは手裏剣を投げた当人と首領である。首領は瞠目(どうもく)してうしろをふり仰いだ。

彼等がひそんでいた民家の、その屋根の上に黒い影が立っていた。

其処(そこ)から投げられた礫(つぶて)が手裏剣をたたき落としていたのだ。

「何者?」

首領は喚(おめ)く。

「――猿飛か?」

「いかにもわたしだ」

「?……」

「新太郎が何をお手前らに命じたかは知らぬが……助けてやれ。太陽の使者たるうつわでないからとて、死なせることはあるまい。三好清海の怪力もつかいようで役に立つぞ」

「……」

「それに、使者たる任務の仔細われらまだ聞いておらぬ。なれば秘密のもれるおそれはないはず、それでもまだ三好を討つと申すなら」

闇の空に黒い影は大きな弧をえがいて飛んだ。黒装束の面々が、

「あっ」

清海入道を囲んだ輪をひろげた時には、クルッと膝(ひざ)と背をまげ、虚空に一回転して猿飛佐助は地面に立っていた。

そして、

「狭川古弥太(さがわこやた)と見受ける――」

うしろに清海入道をかばいながら、

「強(た)って三好を斬るのであれば、わたしも使者には、ならぬ」

九

清海入道のうれしそうな顔。

彼とて愚物ではない。

金棒をふり回せばとて、威嚇(いかく)にはなるが時代おくれなそれが武器なのを知らぬではなかったのだ。といって、三好清海に何ができたろう。

敵の一人だけなら、かならず倒すことはできる。横なぐりに金棒を投げ捨てればよい。

だがそのあと、首領にでも組み付いて死ぬほかはなかったのである。――そこへ、猿飛佐助は救いに来てくれた。

「かたじけない……わしは、もう、こ、ここで死んでも、本望じゃ」

お人よしだけに感激もひとしおである。礫に撥ねとばされた手裏剣の一本が、かるく、右肘に刺さっていた。ドスンとおろした金棒を胸に抱くようにして、肘の手裏剣を抜き取りながら、言ったのだ。

「――退け」

首領の表情があきらかに、また、困惑した。

太陽の使者たることを佐助にこばまれては、彼――狭川古弥太の立場がない。

部下に古弥太は低く言って、

「この場はおぬしにめんじ、いかにも三好清海を見のがそう……しかし、今一人」

「霧隠か」

「――」

「案じることはない。霧隠才蔵なら、ほれ、おぬしのうしろに、おるわ」

「?!」

驚いてふり向くと、なるほど、道の暗がりにいつの間にか黒髪を背になびかせた才が立っていた。

勝負は、きまったようなものだった。

五対三だ。

「わかった……」

古弥太は佐助と霧隠に挟撃された体勢で、もう一度、

「退け」

部下たちへうながし、

「お手前ら三名の業前、われらにまさったと有体に新太郎どのに報告いたす……但し、任務の立場がある。念を入れるようなれどお手前ら、匂い袋を所持しあることこの場で、見せてもらいたい」

「おやすい御用だ」

佐助が先ずふところに手をさし入れ、匂い袋をとり出した。

それを合図のように背後の暗がりでも霧隠才が、掌に匂い袋を載せている。

見て、清海入道が、

「これかい、これでよいのかい」

「――わかり申した」

古弥太はここで何を思ったか、覆面を脱ぎ取ると、おぼろな月明に、さかやきをきれいに削った面貌をあらわして、

「あらためて御意を得る。仙台藩士、古陰流狭川古弥太……以後、お見知りおきをねがいたい」

言うと残る黒覆面四人も斉しく、覆面をはずした。皆、まげの結いようで忍者ではなく家士とわかる――

仙台藩士と名乗られたのは心外だったらしい。

「すりゃわれらを使者にする太陽というは――」

いちばんに、清海入道が大声をあげた。

「仙台黄門伊達政宗のことか？」

「さようではない」

「したがおぬしさいぜん『上意討ち』と申したぞ。上意というなら政宗がことであろう？　なんで、その政宗どのがわれらを斬れと」

「――」

「佐助、わけがわからん……どうなっておるんじゃ。いったい誰がわしらを召抱え、久能山へ集結せいと――」

佐助にもそれはわからない。わかっているのは狭川古弥太がたしかに柳生新太郎同様、古陰流をつかい、いま伊達政宗に仕えていることぐらいで、そもそも般若の面をかぶったあの女性の正体さえ不明なのである。

こうは考えられる。

新太郎自身は、伊達藩士ではない。むしろ貴人に接するその態度から察するに、般若面の女性に仕える身であろうし、女性はやんごとなき御方であろう。

つまり本多正純の陰謀の潰えた今、更に二つの勢力が――少なくとも仙台六十二万石と臈たけた女性の属する或る階級が――ひそかに盟約し、何事かを為さんとして真田の遺臣の働きを必要としている。

遺臣が非力なら容赦なく斬れという審査のきびしさは、つまりは密盟の団結の強さを意味しないか？……

「霧隠――」

佐助はややあって、まだ古弥太の背後に立つ才へ言った。

「わたしはこのまま、江戸へ出てみようとおもう……半年後には、そして久能山へ、ともかく出向いてみようと。そもじの本心はどうやらまだ宗矩に意趣をふくんでいるらしい……それもわからんではないが、どうだろう、そのことはそれとして、これまで同様、清海らと一緒に、太陽の使者とやらにそなたもなってみないか？……女の使者が一人くらいいた方がおもしろい……どうだ、いやか。どうしても宗矩に恨みをはらすか？……」

遊行女婦（さぶるこ）

一

ここは江戸銭湯風呂。

むろん混浴である。

ただし男は〝湯具〟といって褌をしめ、女も〝湯もじ〟と後に称された腰巻をして湯に入った。

そもそも昔（室町時代までは）風呂といえば塩湯が常だった。それゆえ井戸の水をわかしたのを水風呂、または行水といった。戦国乱世とともに、この塩湯はすたれ、常の水になったのだが、銭湯が江戸に発生したのはいつごろだろうか？

古本を見ると、

『江戸繁昌の始め、天正十九年夏の比とかや、伊勢与市といいし者、銭瓶橋のほとりに銭湯風呂を立てる。風呂銭は永楽一銭なり。みな人めずらしきものかなとて入りぬれども、そのころは風呂不馴れの人あまたありて、

あら熱き湯の雫や、息つまりて物も言われず。

煙りにて目をあかれぬ。

など言いて、風呂の口に立ちふさがり、ぬる湯を好む。のちには町ごとに風呂あり、鐚十五銭二十銭ずつにて入るなり』

と誌されている。

つまり天正年間から、家康の居城として江戸が繁昌するとともに、こうした銭湯ができ、気の早い江戸っ子がわれもわれもと裸ひとつで男女混浴にとび込んだ。それが濛々と立ちのぼる湯気と、目もあかれぬ煙りの中で、たやすく男女の逸楽をたのしむようになったものである。

そして銭湯が随所に繁昌するにつれて、いつしか、そこに湯女という女性の出現をみるようになった。

湯女は、

垢掻き女

髪洗い女

とも呼ばれ、浴客の背中の垢をかいたり髪をすいて媚を売ったので、当然、売春婦だが二枚櫛を挿していた。これが後世の花魁のあの櫛こうがいを何本も挿す髪型のはじまりになった。

このへん足立直郎氏の『遊女・風俗姿細見』（須賀書房刊）にくわしいが、往昔、身分ある婦人はすべて下げ髪で、髪を結いあげるのは売女か、賤しい女ときまっていた。下げ髪だから貴婦人はカンザシ（こうがい）など挿す要もなかった。

また江戸に初めて銭湯のうまれたころ、びん付け油はまだ無かったので、茶筅髪で、男でも入浴すれば必ず髪を洗った。この髪を洗うのを湯女は手伝うわけだが、洗えばまた元通りに茶せんに結んでやるのが奉仕である。結ぶためには梳く櫛が要る。

そこで湯女は自分の髪に櫛をさしていたが、一枚あれば足りるものを、多くの客を持っていると見せかけるため塗櫛二、三枚を挿す女が出てきた。これを見て他の湯女も競って櫛をさすようになったのである。

もう一つ。

はじめて江戸に銭湯風呂が立ったとき、どうして人々がわれもわれもと入りに行ったかというと、昔は、貴人をむかえると馳走として風呂をたてるのがたてまえだった。室町時代の記録にはこの馳走ぶりの様子がずいぶん出ている。

つまり江戸市民を貴人としてもてなしましょうと伊勢与市は銭湯を設けたので、どっと人が押しかけたのだ。

また、馳走のために立てる風呂だから当然、背中を流すべき侍女の奉仕がともなう。『源平盛衰記』にも、

「二十ばかりと見える女」がかたびらに白の裳を着けて湯殿にやって来て、中将重衡どののお垢を掻きに参りましたと言い、新しい櫛を取り出し、水懸けで洗った中将殿の髪を、くしけずる様子が書かれている。これが湯女の起りである。

いよいよ以て一般市民も貴人の気分を味わえるわけで、加えるに男女混浴、どうかすれば湯中で白くやわらかな肢へ毛脛で触れたり出来るのだ、淫靡なその楽しみは近時、ラッシュの通勤電車内のおさわりの比ではない。

そっと、湯の中で、股間をまさぐられるヒソカな愉悦をあてにして入浴する大年増や、後家がいるのだからなおさらだ。

淫欲をたのしみたいのは男子ばかりとは限らんのである。

毎日、秘めやかなこの悦楽をあてに、熱い湯に飛びこんで真赤にゆだりながら白いやわらかな内股の感触に、

「ウ、シ、シ、シ……」

と目尻をさげる男が大勢いても、けだし当然だろう。銭湯の大繁昌するゆえんだろう。

さて江戸日本橋にちかいそんな銭湯の一軒に、昼さがりになると、きまってやってくる坊主頭の巨漢がいた。胸毛の黒々と生えて、まことに筋骨衆にぬきん出た容貌魁偉の破戒僧と見えるが、根はいたって善人らしい。女客がいると、嬉しそうに目尻を下げて、猪首までどっぷり湯につかるのである。

二

破戒僧と見えたのは三好清海入道。

季節は夏である。

長湯をすれば、あがってドッと汗が吹き出て始末にこまる。

そうでなくても元来が汗っかきで、胸毛に玉の汗を光らせ白昼の往来を銭湯へやってくる。好きなのである。

江戸の旅籠に滞在してからは、金棒はめったに持ち歩かなくなった。戦国生き残りの豪傑というよりは、ますます好色な破戒坊主と見えるので、入浴客も清海入道が毛むくじゃらな褌ひとつでノッシノッシ湯舟に近寄ると、はじめは忌避してそっと湯の中を別な場所へ移動したものだ。だいたい、毎日、熱い湯にとびこんで真赤にゆだりながら卑猥な楽しみをもとめる顔ぶれは、きまっている。

江戸城西の丸の普請に、全国から集められた大工、左官のうちで、いまちょうど仕事の手のすいている連中。それに地方には――大坂をのぞいて――まだ銭湯はないのだから、物めずらしさ、故郷へのみやげ話にと、噂を聞いて詰めかける商人たちである。もちろん、目的は一つだから近所の好き者がこれに加わる。

さすがに身分の歴とした旗本は来ない。それだけに、はじめは破戒僧と見えた清海入道が、毛深い体の随所に無数の刀きず、鉄炮疵があるのを知って、顔を合わすとお世辞の一つも彼等の方から言うようになった。何よりも、信じがたいほど大枚の黄金を清海は所持しているのがわかってきたから、お世辞にも真情がこめられるようになり、そうなるとお人よしの彼のこと、上機嫌で、

「のう棟梁」

「へい」

「昨日の洗い髪の後家は、肌は浅黒いが肉のしまったよい体であったが……おぬし、こっそりいじっておったの」

「冗談おっしゃっては困ります。下のほうから手を伸ばしておいでだったのはあなたさまで」

「それを知っておるは、つまりおぬしが前から手をあてがっておった証拠である」

「ま、そりゃ、そういうことになりますようで……へ、へ、へ」

「棟梁」

「何です」

「湯女の開祖はどこの女か知っておるか」

「?……」

「摂津の有馬温泉じゃ。むかしの湯女は、白衣に紅袴の装束を着け、歯を染めまゆずみをえがいて、あたかも上臈のごとくによそおい、もっぱら高位公卿の沐浴する前後や休憩のおりに、その傍らに侍って碁を打つ相手をしたり、琴をひいたり、和歌など詠んでつれづれをなぐさめるを業とした。けっして今みるような春の売り方はいたさなんだという……」

「へえ、つまらねえこってすねえ」

「つまらん？」

「だってそうじゃありませんか。誰だってアレがいちばん好きなんで。それを、しねえで歌なんぞ読んでみたって」

「それはそうに違いないが……そう言ってはミもフタもないわい」

いい女客が来あわさないと、のんびり湯舟の外に坐りこんで他愛もないそんな与太を言っている。

「さぶることというのを聞いたことがあるか」

「さぶるこ？……いったい何のことで？」

「知らんか。遊行女婦と書いてサブルコと詠む……万葉集にすでに出ておるが、つまりは遊女のことよ」

「へえ……」

興福寺で学んだだけに、清海入道、へんな知識はあるのだ。

「さぶる（侍）は貴人の傍につきそうこと——男なら、即ちさぶらい——武士じゃが、女ゆえさぶる子」

「するてえと、お武家さまはずいぶん威張っておいでなさいますが、何のことはねえ、金タマさ

げた遊女ってことになるんで？」

「いやなことを言う」

「だっておっしゃる通りなら」

「お、親方」

お供で来ていた徒弟らしい大工が、湯舟の中から、あわてて身をのり出し棟梁の肩を、小突いた。

さては女客の御到来かと、白いものの混る髷でヒョイとふり向けば、湯殿へはいって来たのは女にあらず、一見して浪人者とわかる肌浅黒い男である。

頬に大きな刀疵がある。

手拭を片手に、ゆっくり湯舟に近づくと、其処に坐りこんでいる清海と棟梁には目もくれず、むろん、かかり湯をするではなく、ふんどしのまま、ずぶっと片足から湯にふみ入った。キラキラ天窓から射す夏の陽光が水面に反映し、光の波紋をちりばめた。湯はもうかなり濁っていて、それでも湯舟の底まで見えるのは湯客の少ないせいだろう。

どっぷり浪人は肩までつかった。

その時、見たこともない若い湯女が、一人、湯文字姿ではいって来た。

三

女は、年は二十になるかならず。

むっちりと色白く、それも蚕がまさに糸を吐く寸前のような透明な美しい白さで、そのくせ腋の下や股間はいかにも毛深い。

彼女は浪人につづいて湯舟に近よると、棟梁の目の前もかまわず、桶で湯をくみ、腰巻の前を分けて手をあてがい陰部を濯いだ。

蕾の感じで尖った乳房は豊満で、胴はくびれ、湯文字の腰は片膝立ちにかがんだ所為か、ひときわふっくらと肉付きがいい。

また、桶で湯舟の湯を汲みとっては、惜しみなく両の膝を開けて湯をそそぐ。丹念に洗う。

その容姿の悩ましさ。

当人はいささかも羞恥せず、堂々としているのだから未通女でないことはあきらかである。

でも黒髪を項から束ねあげて櫛ではなく刀の小柄で挿し止めてあるのは、常の湯女の所作ではない。

浪人は一足さきに徒弟の身近かへつかっていた。そしてぶるんと湯を掬って面を撫でてからは何事も知らんふりで、目をつむっている。かすかに無精ひげがのび、険しい風貌である。

女は棟梁にことわって、ゴマ塩頭の鼻さきで、中腰になり、湯舟のふちを跨ぎ入ろうとした。

「ごめんなさいましよ」

その時――

「光――」

浪人は目をとじたまま、

「そなたは入らず待っておれ」

「……ハイ」

素直にこっくりすると、ニッコリ棟梁へ愛想笑いをして、あげていた肢をもどすはずみに、よろめいて棟梁の肩へ手がさわった。

ぶるっ、棟梁おもわず身ぶるいし、その感触のこころよさに、さながら、美酒に酔うたごとく、恍惚となってガラにもなく赤面すると、

「どうなさいます？」

となりの清海入道へ上ずった声をかけ、

「わっちゃ、もう一風呂――」

湯舟にとびこんだ。入るのにふちをまたぐ時、年甲斐もなく手拭で前をかくしていた。

燦々と天窓からは明るい真夏の陽光と、外気が差しこみ、湯気は立ちこめず浴槽内の男三人の下半身までが透けてみえる。むろん三人とも褌はしている。

なんとも奇妙な顔つきをしているのは清海入道だ。

棟梁がいなくなって、ひときわ身近かに眺められる女の全身は、まぶしいばかりに魅力的で、彼女は浴槽には入れないので、手持ちぶさたか湯をくんでは、肩へ濯ぎかけている。そのときのぞく腋毛の濃い悩ましさ。

乳房のさきで雫する湯の玉の美しさ……

銭湯の湯はもう濁って、けっして澄みとおっているわけではないのに、まるで彼女の肌に懸かると水晶の珠のようだ。

清海入道のは俗にいう越中ふんどしである。

至って簡素である。

紅い絹布を前後にまわしてあるだけなので、当時えっちゅうふんどしは大へんめずらしく、京島原の遊女越中の客が入浴の際、酔っていて下帯をずり落したのを見て、

「ぬしさん、これを」

おのが腰巻をとってとっさに男の股間にあてがったのに起るといわれ、いわば流行の最先端を清海入道、行っているつもりだった。

だがそれだけに、ふだんはだらりとしたのが勃起すると、あたかも天狗の鼻に布をかぶせたおもむきで、立つわけにはいかんのである。

うらめしそうに、それで、湯の中の浪人をにらみつけ、目を流してチラと女の下腹部を見やり、また浪人筧十蔵の乙に澄ました瞑想的かおを、にらみつけていた。

とうとう、がまんの緒が切れた。

「のう、……棟梁」

「へ、へい？」

「湯女がちかごろ何でふえて参ったか、知っておるかい」

手拭をのせた頭が、くびをふる。

となりに徒弟も亀の子みたいに、湯から首だけ出して、これはもう顔面だらだら汗を流し、のぼせそうになっても湯を出ないのは、どこかで痛いほど膨張しているのであろう。

「むかしの例でみるとの」

ジロッと瞑目の筧十蔵をにらみつけて、

「平安末期より鎌倉時代にかけて、雨後のたけのこのように巷には売春婦があふれた……なぜかわかるかい？」

チラとこんどはとなりを偸み見ている。

四

「まず藤原氏がほろび、平家が滅び、源氏が亡び、北条の室町幕府もやがてほろび、世の中、変るにつれてそれまで権門に取り入っておった貴族もともに生計が立たなくなる。また庇護をうけておった神社仏閣も所領を没収されたり、減少するために巫女や宮仕えの尼僧らは、生きるに手だてなく、やむを得ず色を売らずにはおれなくなった……心では世をはかなみながら、恥ずかしさには目をとじて男に媚びを売りかろうじて生きたわけよ。

さような遊行女婦の中には、もとは月卿雲客の姫でおわした女もないとはいえん。何にせよ世の中変れば、先ず巷に遊女はふえるものじゃ」

「……」

「いまもそうではないか。豊太閤亡きあと、一時、天下は平穏であったが、関ヶ原合戦、ついで大坂両度の陣で亡んだ大名かず知れず、戦場にては生き残っても主君をうしない、浪人の身となった武将また多い。禄をはなれた家臣はさらに多い……家臣とて妻子はおるわ、のう、その妻や娘はなにを糧に生きてゆける？」

「――」

「知っての通り、世は徳川の天下とはなったが、福島正則どのをはじめ、外様大名の取りつぶし、所領没収はその後もおびただしい数にのぼる……家来はどうして生きてゆける？　仕方がないであろう、禄をはなれた夫のため、わが子や親兄弟をやしなうため、けっきょくは、身を売るは女。よって昔は何不自由ない暮しを楽しんだ婦女子も、浮き世に身を沈め、あるいは遊里に体を売って、どうにか家族の生きるを扶養する……これが、いま町に垢掻き女のふえた原因であろう」

となりの彼女にあてこすりの意図もないではない。あるいは、彼女の境涯に同情して本人は言

ったつもりかも知れないが、聞く方にはたっぷり厭味を言ったとしか受取れない。――このへんが、口説の巧みでない清海入道の、損なところである。

女は、清海の話の途中で、くるっと白い背を向け、ざあーっと又、湯をかぶって話を無視しきっていた。

――そこへ、

「光」

彼女へ呼びかけ、湯の中でスーと寛十蔵が立った。

「あがるぞ、背を流してくれんか」

女はふり返って、コックリをした。やさしい笑顔だった。

ゆっくり寛十蔵は風呂をあがると、湯舟のわきから少しはなれた板塀の前――真新しい湯を湛えた大桶のわきに、清海入道へは背を向けて坐った。

真水を満たした樽が、大桶と並べて据えてある。

女は、いちども浴槽にはつかっていないが、充分、湯を浴びたので、もう腰巻は濡れてヒタと下半身に密着している。白い晒の湯文字である。悩ましいほど、腰の線のすっくり透けたその姿でいそいそと十蔵の背後へ寄って、桶の熱い湯と、樽の水を汲み合わせ熱さを加減してから、男のたくましい背へ手桶でそっと流しかける。

「……」

何か笑いながら寛の耳もとへ口を寄せ、話しかけている。湯女と客というより、まるで睦まじいそれは夫婦の入浴図と見えた。

棟梁と徒弟はまだ湯舟にいて思わず顔を合わせ、

「モシ……」

棟梁が浴槽のきわまで寄って来て、

「どうなってるんでございます？　あの二人……わっちらにゃ、何とも奇怪で……」

清海入道はちがった。

彼の眼はそれまでとは別人のようにランランと光って、一途に女の動作を見まもっていた。

ふつう、湯加減をするなら、まず盥に熱湯を入れ、それに冷水を加えつつ熱さを加減してゆくものである。しかるに彼女は、最初に水をいれ、熱湯を徐々に加えながら程よい温度にして、すすぎ掛けた。

切腹人への作法なのである。

切腹まえに武士は沐浴して身体を清潔にするが、そのとき、たらいを据え、先ず下へ水を入れ、上に湯を注ぎ加えて程よい湯加減にする。これで行水して、死ぬのである。

女はその作法を知っているのだ。さもなくて水に湯を入れて温かくする者がいるわけはない。

寛十蔵がそうするように命じたのか。ならば十蔵は死ぬ気なのか？

それとも女が、勝手に、寛十蔵の死を予知して、そうしているのか？

「やい、寛」

とうとう堪りかねて、叫んだ。

「その女、おぬしの何じゃ？」

五

「言うてくれい寛……賤しい生い立ちの者とは見えんが、それにしてもただの湯女とは思え

ん……その女、おぬしの一体、何じゃい？」

風呂中にとどろき渡るような大声だった。

棟梁と弟子は思わず湯舟の中で、くびをすくめていた。ちょうどこの時、あだっぽい三十後家が柳腰をくねらせるようにして、風呂へはいって来るところだったが、後家もまた、声の大きさにおどろいて、立ちすくんでいる。

寛十蔵は背を向けて微動だにしなかった。

そこは女で、彼女はハッと水桶から汲み移そうとした冷水の手桶を、中途でとめ、清海入道をふり返っている。

その表情にはこれまでついぞ見せなかった羞恥と、かすかな狼狽の色がうかんでいる。

目を据えてそんな女をにらみつけ、清海入道はまた言った。

「おぬしの身をおもうてわしは……ヤイ、背中におぬし、目があるとでも言うつもりか？」

「うるさい坊主よ」

「何じゃと？」

「光。かまわん……あんな野次馬の相手はいたすな……さ、流してくれよ」

「ハ、ハイ……」

女は、再び、水を小さな盥へ汲みうつして、湯桶の熱湯をすくい、たらたらと盥へ落しながら湯加減のよくなったところで、盥を両手で持つと背中から腰のあたりへ濯ぎかける。そうして白い手のひらで、男の毛深い背中から尻を、撫でさわる。（糠袋を当時の武士はまだ使用しなかったのである）

彼女のそのしぐさは、やっぱり、いそいそ愛人のからだを磨く丹念さと、まごころに満ちていた。どう見ても夫婦であった。

だが寛十蔵、生涯、戦場を駆けめぐり、あるいは浪々の身で諸州を漫遊して、帯妻してはいないことを清海入道は知っている。

「かけい……」

意を決して、清海は湯舟のわきを起ちあがり大跨に十蔵へ近寄った。

もはや赤ふんどしの股間は天狗の鼻のようにはなっていなかった。

「水くさいぞ十蔵……何ぞ、おぬし。わしにかくしておろう？」

「約束してあったはずじゃがな……江戸市中にて出会うても他人のふりをいたすようにと」

「わかっておるわい。さればこそ今まで、知らんふりして、見て見んふりでおったんじゃ……じゃがもう見すごすわけにいかん、おぬしを見殺しにできるかい。む？」

「――」

「先ずきこう、この女、何者じゃ？」

「――」

「なぜこたえん！」

「申してもあわて者のおぬしになっとくゆかせるには、時間がかかる……いまは無理よ」

「な、なにが無理じゃい？　生死の境におぬしいま立っておるんであろうが？　ならばそのわけを聞こうというに……」

「――」

「寛、では女のことは後にしよう。おぬしじゃ、何でまたこの銭湯へ来た？　われらは連日、ここで徒々をまぎらわせておるが、おぬしは今日がはじめて。この湯女もはじめて。なぜじゃ？

猿飛や霧隠もわしがこれへ通うておるはついぞ知らんであろうに……何でまたおぬし

「出てから話そう」

「？……」

「光。……しかたがない。明かしてやれ」

言われて女は、心なし顔を赤らめると、目をふせ、盥をいったん下に置いて中腰で膝を折り、

「お初にお目もじいたします……むさし湯の、光でございます」

「むさし湯？」

たしか芝神明に、そういう名の銭湯が流行を追って店開きし、顔立の美しい湯女を揃えているというので、評判の高いうわさは清海入道も湯客の雑談から耳にしていた。

もとは武家の作法にくわしい女が、いまは湯女に落ちぶれ果てても時世なれば怪しむにあたらない。

しかし、ここは日本橋の銭湯である。湯女相手に無聊をなぐさめたいなら寛は、むさし湯でそれをやればよい。わざわざ日本橋まで来ることはあるまい。

ましてや、切腹の作法に則して湯加減をしている。寛十蔵がそうさせたのか、女がわきまえて勝手にしているのか？……

「十蔵」

清海入道は十蔵の肩へ手をかけ、

「こっちを向けい。あとで話すとおぬし言うが、腹掻き切っては口はきけまい……それにおぬし、剃刀の用意もしてはおらんぞ。腹切る者が無精ひげをはやしたままとはどういうわけじゃ？　言え、何があったんじゃ？……」

六

「――光」

「ハイ」

「そもじ一風呂あびてまいれ」

「――」

「遠慮することはない。ここでは、そもじは客じゃ」

女はちょっと思案する表情になったが、

「――それじゃ」

程よい加減に湯を満たした盥をわきへおくと、清海入道に無言で会釈して、湯舟へ起って行った。

「切腹を、どうして知った？」

板壁から清海入道の方にむきなおり、お光が置いた盥を引寄せて手拭を浸すと、一度しぼって、あぐらのまま腕を拭きにかかる。

「どうと言うて……あの女が湯加減するを見てわかったわい……水を、熱湯であたためてゆきおった」

「――」

「くどいようじゃが、あれは、誰じゃ？」

「見る通り、垢掻き女よ」

「それだけか」

「……」

「わしの眼はごまかされんぞ、寛……ただの客と湯女であように睦まじい所作が」

「猿飛が江戸へ来ておる」

十蔵は話題をかえた。

「お万阿さまの、お供でな」

「お万阿さま？……」

同じく胡坐で十蔵に対き合っていた清海入道、お万阿さまと聞くとたちまち正坐になおり、

「い、いつじゃい？」

「昨日よ」

「すりゃお万阿さまも、われらと同じく久能山へまいられるんか？」

寛十蔵は失笑し、首をふった。

「白石城主片倉どのの今は正室……なんでお万阿さまが今更、太陽の使者になど」

「でもあの夜道でわれらを襲うた狭川古弥太、伊達藩士と名乗ったぞ。片倉小十郎とて同じ伊達家の家老であろうが？　それなら」

今度は黙って否々をした。

湯舟では、三十後家に加えて、お光が湯につかったので大工師弟は有頂天である。さすがに寛十蔵とただならぬ仲らしいから、お光へは、まさか湯の中を利用したいたずらはしない様子だが、でも同じ湯舟へつかる心安立てに、棟梁はさも親しげに何やら話しかけている。

弟子のほうは、とっくにのぼせあがりそうだったのに、急に、いきいきして、三十後家のうしろへいつの間にかまわりこみ、首までつかりながらモソモソその肩が動いているのは、何か、湯

の中でイタズラしているらしい。

後家は知らんふり。

湯に浸した手拭で耳のあたりや、首すじをそっと洗っている。こころもち上体を前へかたむけ、尻をうしろへ出すようにも見えた。

「おぬしの切腹……お万阿さまが江戸入りにかかわりあるのか？」

清海入道がまたたずねた。

「――ない」

「ではわけは何じゃ？」

「――」

「言えんのか。生死を長年ともにしたこのわしに打明けられんのかい？」

「……」

「寛」

「おぬしにはかかわりないことよ……おぬしばかりか、真田家の誰にもな」

「ぬ」

「それに拙者切腹するとは、いちども申しておらん」

「な、な、なんじゃと？」

「おぬしが勝手にきめたことよ。そうであろう？」

手拭をうしろへまわし、両端をもつと斜め上下に動かして背中を拭いた。

お光がもどって来た。

「光」

十蔵は起ちあがると、
「拙者、出るぞ」
「お髪は洗わなくてよいんでございますか」
「口うるさいのが、そばにおるでの」
「!……」
「そもじも、すぐ拭いて出てまいれ」
「……ハイ」
さっさと十蔵は風呂場を出ていった。
「待て」
清海入道、筧十蔵の冷淡さを真にうけるほど馬鹿ではない。
あわてて立ちあがるとあがり湯もせず、手拭で胸毛のあたりをコソコソと撫でながら、それで拭いたつもりだろう。
跡を追った。
「待て筧……まだ話はすんでおらんぞ」
残ったお光もいそいで体を拭いていた。
それから数刻――
暑い日ざしのようやく傾きはじめた寺院の境内を二人は歩いていた。うしろにお光が随っていた。
「ここに」
清海入道が言った。
「まこと、ここにお万阿さまはおわすのかい?」
「――さよう」

七

お万阿の夫となった白石城主・片倉小十郎重綱の父・小十郎景綱は、伊達家第一の功臣とも称すべき武将だった。
『仙台史伝』にいう――
「景綱、幼にして異才あり、その非凡を認められて世子政宗の近侍となる。時に四隣みな敵にして、政宗の家を襲ぐにおよび、景綱これを輔けて四隣の敵を破り、隣境みな慴伏して鋒を避くるに至った。
天正十八年四月、豊臣秀吉が小田原城を囲むや、政宗会師の期におくれ疑義百出したが、景綱よく順序を説いて政宗とともに小田原に至り、秀吉に謁せしめ、ために伊達氏の社稷安泰たるを得た。
秀吉、景綱を封ずるに小春五万石を以てせんとしたことあり、景綱は、
「臣すでに伊達氏の封を受く」
と固辞して受けず、のち徳川家康のとき、邸宅を江戸に賜わったおりも、同じく辞して受けなかった。
かねて景綱は音楽を好み、ことに笛を愛してこれを潮風と名づけ、軍陣にのぞむ際はかならず腰間に挿んで、兵馬擾乱の時にもこれを吹奏して自らを慰めた。
政宗は景綱の功を賞し白石一万六千石に封じたが、歳入じつは十万石に比したといわれる。

大坂の陣起るや景綱老いて病み、その子小十郎重綱をして代って先鋒たらしめたが、ひそかに誡めて言うのに、

「この役必ず講和を以て局を結ばん。東西両軍の決戦は必ず明年にあらん」

と。

みなその言の如し。人々その先見の明に敬服すという。元和元年十月四日ついに病いに歿す。時に年五十九。

子の小十郎重綱は、才識勇武父に類してよく家声を落さず、大坂冬の陣には政宗に従って武功あり。翌年夏の陣にも伊達家の先陣となって兵千余人を率いて道明寺口片山の麓に陣し、大坂方の猛将後藤又兵衛、薄田隼人（岩見重太郎）の軍と戦って大いに之を破り、ついに又兵衛、隼人の首級を獲た。ために大坂方の士気はとみにおとろえ、軍勢またふるわず、わずかに真田丸に拠った幸村らの抵抗を見るにとどまったという……。

此の日重綱獲る所の首級、将卒あわせて九十一を算し、これより人は、

「鬼小十郎」

と呼んだが、家康大いにその武勲を賞揚して感状を与えた。

時に重綱三十二歳。

そしてこの夏の陣で真田父子（幸村とその悴大助）は討死したが、遺姫お万阿は戦火の城中に立ち迷っているところを重綱に捕われ、幸村の遺姫とわかってむしろ鄭重に重綱はお万阿を遇し、且つ、その気品ある容姿を愛でて、主君政宗および家康に乞うて彼女を妻とした。

時にお万阿十五歳の少女だったのは以前に述べた通りである。小十郎には前の夫人があったがみまかって当時は鰥夫だったので、大坂の陣がおわるとお万阿をともなって居城白石にかえり、

翌元和二年の秋に、祝言をあげた。

重綱は終生、きわめて大切にこの幼な妻をあつかったが、ひとつにはお万阿が生まれつき病体だったからともいう。ついでながら、終生、お万阿との間に子は産まれず、お万阿亡き後も継室を重綱は娶らなかったから、白石城主三代目には片倉氏の外孫が入って養子となった。お万阿がみまかったのは寛永元年秋というから重綱は四十一。まだ後添えをもらって不思議のない壮年であるのにこれをしなかったのは、お万阿への愛惜の情からであろうか。

――さて寛十蔵が湯女お光ともども清海入道をともなったのは根岸の里の円光寺という禅寺だった。

この寺の境内には有名な紫藤があり、花のころは見事な總を垂れるので世人称して藤寺という。鎮守の弁財天は弘法大師の作と伝えられるそうだが、僧体とはいえそういうことにとんと清海入道は関心を示さない。

「まことお万阿さまがおわすなれば」

今少し身なりをととのえてくるのであった、こんな、銭湯がよいのいでたちで拝謁いたすは気恥ずかしいわ、など言いながらも、

「われらが九度山にて昵懇いたした頃はまだ少女でおわしたが……いまお幾つになられるかのう」

「二十二におなりじゃ」

「ふーん……ならば女ざかり。さぞお美しゅう……」

目を輝かしている。

「こっちじゃ」

寛十蔵はもう何度か来て勝手を知っているらしく、境内の、これも有名な本堂前の鏡松と呼ばれる松樹の影の下を通って庭に通じる柴折戸をあけ、じかに庫裡の中庭へ入った。

そうして、

「寛十蔵、三好清海を同道つかまつってござる」

大きな声で言った。

八

庫裡のその一室は、書院造りになっていて、中庭に面した障子は開け放ってあり、広縁には本堂から渡り廊下がつづいている。

書院窓の外には、ちょうど窓へ影を投じるように百日紅の木が枝をひろげ、別な植込みにはザクロが赤い実をつけていた。

寛十蔵の高声に、室内から縁へ顔をのぞかせたのは白眉に白いヤギひげをたくわえた老僧だった。

「お待ちかねじゃ、あがらっしゃれ」

「――は」

日ごろ傲慢な十蔵が別人みたいに鞠躬如として大きな沓脱ぎ石のわきへ履物をそろえ、着流しの腰の差料をはずし持ってから、

「清海、お目通りがかなうぞ。おぬしも」

と言う。もう一人のお光へは、目顔で何やらうなずき合っている。

いかに白石城主の夫人なればとて、曾て真田幸村が九度山に蟄居中は、一つ屋根のもとに暮ら

した仲だ。蕨取りの山道では、お万阿さまを清海入道、おんぶしてさしあげたこともある。十蔵だって同じであろうに、いやに緊張しているので半ばあやしみ、なかば同じ緊張気味で、

「三好清海参着いたしてござる――ごめん」

寛におとらぬ大声をあげ、まず尻を向けて冷めし草履を揃え脱いだ。清海入道もあの金棒は携行せず、やや汗くさい僧衣に念珠のみ手にしていた。

広い書院であった。

天井は高く、ふすまには漢詩とも経文ともおもえる達筆の墨跡が躍っている。

「――や？」

敷居ぎわの手前――広縁に、寛十蔵と並んで坐って清海入道、おどろくまいことか。

床の間を背に、脇息を引寄せて膝を斜めに坐しているのは般若の面でかおをかくした婦人であった。

臈たけた華奢な体つきは、あの鹿沼道の夜の草むらで眺めた時より小柄におもえるが、あの夜は被衣をかぶっていたのだから印象がちがうのかも知れない。

それにしても、太陽の使者を集うためあらわれたあの婦人が、まさかお万阿さまとは。

本当なのか？

あっけにとられる清海入道の傍に、そっと湯女のお光もあがって来た。

書院には般若面と対き合いに、くつろいだ姿勢で老僧がいるばかり。

「――清海」

般若面がしっとり湿りをおびた低い声で、

「このように面をつけてそなたに会うは心苦しいけれど……こらえておくれ。久しぶりです……

さ、もそっと近う」

清海は大きな眼玉を思わずみはり、それから忙(せわ)しく瞬(まばた)かせた。

忘れようがあろうか。

お顔は見えずとも、まさしく聞きおぼえのお万阿さまの声である。

「ひ、姫……」

ごくんと熱いものをのみこんで、

「久しくご無音(ぶいん)にうちすぎ申訳ございませぬ……なれど、いつに変らぬご健勝のおもむき、三好清海、恐悦しごくに存じたてまつりまする……」

善人はこういう時、感激ぶりも人一倍である。

「姫があように申されることじゃ。ささ、遠慮のう近う入れられよ、光どの」

「ハイ」

「そもじも遠慮はいらん、はいって参られい」

老僧は世俗に超然としているか、実収十万石の白石城主夫人と、売春婦同然な遊行女婦の同席をいささかも意にかけぬ温和な表情で、

「さ、これへ」

自分のわきへと手まねく。

お光はチラと筧十蔵をうかがい見た。

十蔵はうなずいた。

三人そろって、あらためて室内に入り、十蔵と清海入道は般若面の斜め対き合いに、庭を背に着坐する。お光は老僧の後方へひかえる。

いっ時、何とはない感慨に各自が思いこむような沈黙が流れた。

蟬(せみ)しぐれが庭で喧(かまびす)しかった。

「姫」

沈黙に耐えられないのはやっぱり清海入道である。

「何から言上つかまつってよいやら、われら突然のお目もじなれば言葉に窮してござるが……ひとつ、おたずねつかまつることお許し下さりましょうや？」

「何ですか？」

「は。先ず、何ゆえわれらにさような面にてかおをおかくしなされまするぞ？……九度山にてはママゴトのお相手もつかまつったこの清海……せっかく、拝顔の栄に浴し心底よろこびおりまするに、さようの面をおつけでは別人にお会い申しておるがようにて、はなはだ以て、われら」

九

「愚僧がかわって答え申そう」

老僧が言った。

「姫は火傷(やけど)をなされておっての。見苦しいかお、そこもとらに見られるにしのびんと……それで、異様な形相ながら、寺にあった能面を、愚僧、おつけ申したわけじゃ」

「やけどを？」

清海はかたわらの筧十蔵を、見た。

黙って、十蔵はうなずいた。

だが不審は解けない。

「いつぞや宇都宮城下はずれの野辺にて、夜中、われらをお召しあったみぎりにも同じ面をおつけ遊ばしてでござったが」

「その話は十蔵から聞きました……でも清海、あれは、わらわではないのです」

「？」

「そなた方に匂い袋をその女人は渡されたそうなれど……所持していますか？」

「――は」

女の裸にいかにうつつをぬかせばとて、こればかりは秋に集結を誓ったしるし……肌身はなさず所持して、たっぷり残った黄金とともに風呂に入る時は、銭湯の亭主にあずける。

もしくは、湯屋の二階で女とたわむれることもあって、その馴染みの湯女に入浴中は保管させてきたのである。

汗臭くなっては、せっかくの薫香が失われるからと、油紙に大事に包んでこれに結び紐をつけ、お守りのように首へさげているのだ。

「ご覧くだされ……かように」

毛むくじゃらな胸をくつろげ、紐ごと取り出そうとするのを、

「よい、所持していやるなら……」

心なしか般若の面をくもらせ（面を俯せるのを能楽では「曇らせる」という）、

「和尚……」

老僧へむいて、

「炎暑を出向いて来やったこの者らに、茶など進じてくれませぬか」

「これは愚僧としたことが」

白髯をしごき、まがった腰でやおら起つと、老僧は自身で茶の支度を命じに本堂へ去った。それとなく主従だけにしてくれたのかも知れぬ。

「姫」

清海は身をのり出し、

「今ひとつおたずねつかまつる……これなる筧、切腹いたすよし」

「清海」

「いいや、言わしてくれい……姫はご存じにござりまするか？」

「知っています」

コックリを般若面はした。

「してそのわけは？」

「――」

「姫。いまは仙台藩にてもずい一の功臣が夫人におわす姫に、われら浪々の身でかようなこと言上つかまつるは」

「やめんか清海」

語気するどく筧十蔵がさえぎったが、

「……いいえ」

気のせいか、悲しそうに般若面が又曇って、

「そのことでそなたに実は来てもろうたのです……清海」

「は？」

「十蔵どのに切腹のこと、わらわが頼みました」

「なんと？」
「わけは後で当の十蔵にきいてたもれ。わらわの口からは、とても……」
「何故にござりまする。姫、なにゆえ白石一万石余の城主夫人におわす姫が、浪人寛十蔵に腹切れなどと」
「姫が申されたのではない」
十蔵が言った。
「拙者より願い出たことじゃ」
「なんで？……」
「――」
「やい、十蔵、なんでじゃ。わけを言うてくれい」
「柳生に、ハメられた」
「ぬ？」
「わな？」
「まんまと罠におちたのよ」
「そうとしか思えぬ……が、今はこの寛十蔵、よろこんで死ぬる。……悔いは、ないわ」
「何でじゃ？　い、いったい何があったんじゃ？」
「――」
「寛！」
だがもう十蔵は口を緘し、瞑目沈思して答えない。お万阿さまも面をそむけ気味に、かおを俯せておられる。

庭で急にヒグラシが啼き出した。
気がつくと、それに女の嗚咽が加わっていた。
湯女のお光がしのび泣いているのだ。
――わけがわからない。
「寛」
たまりかねて、
「おぬしが腹切ること、猿飛は、知っておるんか？」
「――」
「佐助はいまどこにおるのじゃい？」

十

「佐助は大和へおもむいたわ」
寛十蔵が言った。
「大和じゃと？」
「火傷にはヘチマの汁が特効あり、それも大和の産が品質ずい一と申して、昨日――」
火傷は、うかつに治療したのでは醜い跡がのこる。お万阿さまのは左眉から、頬へかけての火傷で、痕跡をとどめぬためには余程良質のヘチマ汁を、徐々に、それも丹念に塗り替え塗りかえして治さねばならない。それで最良のヘチマ汁を入手のため佐助は大和へ走ったという。
「……なんでまた、お顔に火傷などを」
粗忽者なら知らぬこと、生まれつき蒲柳の質ではあるが、立居振舞いも上品で、おっとりした

性質のお万阿さまが火傷めさるとは、信じられぬと清海入道は言ったのだが、これには、お万阿さまも寛十蔵も何故か黙りこんで答えない。

小僧がうやうやしく、お盆に茶を捧げ持って廊下をやって来た。

茶托に蓋つきの茶碗を先ずお万阿さまの膝前へ、それから、独り、何となくうなだれる湯女へ、鄭重に差し出してから、十蔵と清海の膝前に小僧は置いた。

ふしぎなことだ。男尊女卑の時代に、ましてやお光は賤しい垢掻き女なのである。

「寛……」

たしかに咽喉はかわいているが、お万阿さまは般若面をつけておいでで、面をはずさねばお飲みにはなれない。先ず姫が手を出されぬものを飲むわけにはいかんのだ。——それに正直、今は茶どころではなかった。

「言ってくれんか……なんでおぬし腹を切る？」

「——」

「では、あの湯女、おぬしのいったい、何じゃ？」

「——」

「チッ、水臭い」

とうとう清海いら立って、

「姫」

直接お万阿さまに糺そうとした時だ。

「ワッ」

と手で顔を蔽い、突如、声をあげてお光が泣きくずれた。

「見苦しいぞ光。……泣くでない」

十蔵が叱った。だが心なしその叱声は弱い。お光はのどを詰まらせ、嗚咽をこらえようとするが、せきあげるものを制しきれないのだろう、袂で面を蔽うと、逃げるように書院を走り去った。

「！……」

ゴクンと、瞑目した十蔵の隆い咽喉仏が何かをのみこんでいる。お万阿さまも袖をかざし、般若の面をかくすようにして微かに肩身をふるわせておられる。つんぼ桟敷におかれたのは清海入道ただ一人だ。

わけがわからない。

それにしても日頃気のつよい寛十蔵が暗涙にむせぶとは、よくよくのことだろう。

清海入道、ついに腹をきめた。

このままでは埒が明かぬ。当寺の住職とおもわれる白髯のあの老僧に、じかに、わけを聞き出そうと決めたのだ。

清海はお万阿さまと寛を残して座を起ち、広縁に出た。夕焼けが西の空を茜色に染めていた。

足音でお光の去った方向はわかっている。ずんずん渡り廊下を本堂へまわり、

「和尚……三好清海おたずね申したい儀がござる。いずれにおわす、和尚」

大音に呼ばわった。

広い境内ではあるが、この声は多分、山門までとどいたろう。

それほど、地声を張りあげて堂内をめぐったのだ。

応答は、意外なところから出てきた。

本堂につづいて庫裡がある。廊下づたいに「和尚、和尚」と呼びかけその庫裡へ入ろうとした

時、出合いがしらに、裃に威儀を正した武士二人があらわれた。
てっきり、お万阿さまに供奉する片倉家の家士と清海入道はおもったら、これが、
下
と表書きした奉書を衿に挿している。
つまり公儀役人である。
しかも老僧は庫裡の敷居ぎわに跪坐して役人を廊下へ送り出そうとしている。
「これは」
にぶい三好清海にも武士両人の厳粛な表情で、事情は読めた。
検使だ。
今一人は介錯人だろう。
つまり日没をまって、寛十蔵の切腹ならびに介錯を見届けにやって来たのだ。
幸か不幸か、僧体の清海入道を役人はこの寺の人間と見なしたらしい。
「うかつ者、どけ」
言い放つと、目をみはる清海入道には一顧もくれず廊下で直角に向きをかえると別棟の書院へむかう。
もう一人がこれにつづく。
何処かの部屋で、かすかに、また、嗚咽するお光のしのび泣きがこの時、もれてきた……

十一

伊達政宗は当時（元和八年七月）まだ江戸邸にいた。

茜色に染まった夕空が、しだいにうす墨を刷いたように暗くなり、やがて夜のとばりが四囲に垂れこめるまで、休息の座所の広廂に立って、独り、手をうしろに組み、じっと独眼を光らせて空の一点を見上げていたそうである。
すっかりあたりが暗くなりはじめたころ、
「との」
近習が広廂のはずれにかしこまって、
「狭川古弥太、お目通りを願い出ておりまするが」
「もどって参ったか……よい、これへ通せ」
少時すると、政宗の佇立する広廂の庭前に黒い影が平伏していた。
「狭川古弥太ただ今参着つかまつってござりまする」
「首尾はどうじゃ」
「――は、すべて手筈どおり――」
「腹を切ったのじゃな」
「御意」
しばらくして、
「お万阿はまだ寺に？」
「は」
「切腹に立会うたか？」
「いえ……」
「そうか……あれだけの武士、死なせるは惜しいと予の意は、お万阿に伝えたのじゃな？」

「は。お詞通りに」
「為様があるまい……のう、伊達六十二万石、頬に疵ある浪人者のいのちと引きかえにはできん……そうは思わぬか？」
「御、御意にござりまする……」
「ふ、ふ、ふ……心底そうでもなさそうじゃの……だがの古弥太、物は考えよう、太陽の使者たる任務、あれは果したとも申せる。本多を買いかぶりすぎた予の落度は、別としてじゃ」
しばらくして又言った。
「切腹の様子は見届けたか」
「は。まことに天っ晴れな切りざまにござりました」
「一文字か？　掻きあげたか？」
「左脇より切先深々と刺し入れ、右に引きまわして、ぐい、と上へ」
「ふーん……惜しい男をのう」
あたりはにわかに暗さを増していた。
古弥太はつねの家士の身なりである。
「介錯はどうであった？」
「？……」
「刀の構え様じゃ、首を打つ前に、八双に構えたか、切先は下げてか、それを問うておる」
「八双より更に高々と切先をあげ、上段より、一刀に打ち申してござりまする」
「上段？……そうか」
独眼が空を見上げ、感慨のまばたきをした。

「介錯人は又右衛門とか申したの」
「御意。庄田喜左衛門にござりまする」
「こころにくい柳生め……武士の情けをかけおったわ」
介錯をするとき、切腹人が介錯人より身分高い場合は、切先を真上にかざして、打ちおろす。身分の下る者（もしくは罪人）の首を打つときは片手に刀を提げ、その姿勢から一気に斬り落すのが心得である。
寛十蔵は、無冠の浪人者にすぎない。ふつうなら、当然、切先を下げた介錯を受けるべきである。
それを、あたかも貴人のあつかいで、介錯人庄田は首を打ったという。つまり寛十蔵を天っ晴れな武士として死なせたのだ。
宗矩の指示であろう。
しかも、寛十蔵に反逆の罪を着せたのは他でもない、宗矩だった。
じつは伊達政宗は宇都宮での本多正純の謀叛に、ひそかに加担していた。宗矩はその証拠をにぎっていた。にぎりながら、加担を、政宗の家来でもない寛十蔵一人の罪にして、切腹させた。これには理由がある。いや実は恐るべき取引が、用意されている……
「との」
小姓が手燭をかざして座敷の向う廊下から現われて、
「暗うござりまする……灯を、おつけ仕りまする」
「そうじゃの」
我にかえったように、ふりかえり、

「数馬」
「は？」
「腹も減ってまいった」
「ではお膳をこれにお運び致しまするか？」
「そうしてくれよ」
言いながら広廂をゆっくり座所に入って、
「相伴いたす者がおるぞ」
「？……」
「膳部は、ふたつ用意せい」
小姓が意味をはかりかね、不審そうに見上げるのにかまわず、
「古弥太……ところで例の湯女はどうしおった？」

十二

銭湯は、七つ時分（午後四時）になると湯を仕舞い、湯女たちは身支度をととのえ、風呂の上り湯の格子の間を座敷にかまえて、金屛風を引きまわし、燭をつらね、これに衣裳を改めて姿を出して、三絃などを爪弾き、あるいは小唄をうたって客をむかえた。
昼夜を問わぬ働き様である。
いわゆる吉原のくるわに、元和三年、幕府が遊女町を公認して他の場所での売春を禁じた後も、この銭湯に湯女三人ずつを置くことだけは当時ゆるされていた。
吉原が公認の遊女町に定められる以前には、三十人ちかい湯女が一軒の銭湯にはいたといわれ

るから、そんな時代にくらべると、三人では、うらさびれた感じになり、湯女の美醜がきわ立ってしまう。
加えるに、美しい湯女には吉原から引抜きがくる。
けっきょく、さほど見映えのせぬ、まあ十人並みならいい方という器量の女が、どこの銭湯にも並ぶ仕儀になってしまった。
そんな中で、芝の『むさし湯』に絶世の美女が敢えて垢掻き女をつとめるとて、たいそう評判になったのがお光であった。
ただし、夜のつとめを彼女はしない。
昼間の垢掻き、髪洗いだけで夜は近所の居宅へ帰ってしまう。それは乳呑み児がいるためとも、老母が病床に臥せているからとも『むさし湯』の亭主は言うが、乳呑み児のある体かどうかは、乳房を見れば一目瞭然で、多分、病母の世話をするのであろうと浴客は推量したが、そのうち、じつは病床に臥せているのは亭主らしいと言い出す者があった。
『むさし湯』からは三丁と離れぬ大横丁の裏長屋に病体の浪人者あり、そこへお光が帰って行くのを見届けたというのである。
といって、昼間の『むさし湯』で、彼女が湯女であることに変りはない。
ということは、垢を掻くほかに、求められれば枕頭に侍ることもあるからである。
もっとも、誰の要求をも受け入れるわけではなく、むしろことわる場合の方が多かった。それでも、人妻であれば、いかに病夫を養うためとて貞操を売るわけがなく、そこで病床に臥しているのは夫ではなく、兄か、縁者だろうということになった。
そんな或る日——五月なかばのことである——頬に疵のある浪人者が『むさし湯』にやって来

て、彼女に背を流させ、挙句、二階にあがった。

仕切りの障子を閉めたその一室で、すなおに彼女は要求をうけいれたらしいのだが、お光にかねて執心する浴客の一人が、ひそかに障子に穴をあけ、様子をぬすみ見て後に語るところでは、何でも座敷で差し向かいになって程なく、

「お武家は上方のお人でございますか」

女がたずねた。

「上方？……どうして」

「む？……」

「なつかしい匂いがいたします」

浪人は懐中から何やら袋をとり出すと、

「この匂いにおぼえがあるのか」

「……」

「そなた、宮仕えをいたした身か？」

彼女は首をふった。

「わたくしではございません……わたくしの存じ上げて参った御方が……」

「それは、姫君か？　それとも、男か？」

お光はわらって答えなかった。

二階へあがれば、何はさておき酒肴の用意をさせるのがねらいである。湯女ではない下女がこのとき、その支度をして二階へあがって来たので、あわてて男は障子の前をはなれ廊下トンビをきめこんだから、再び穴へ眼をあてて室内の様子を覗き見るまで少時、間があいたそうだが、さ

て覗き見て思わず、生唾をのみこんだ。

下女が置いていった酒肴の膳はそのまま、浪人は対坐した彼女の方に腕をのばし、裾前をかきわけ、股間の奥をまさぐっていたという。

お光は、こころもち腰を浮かし気味に膝を開けて、片手を浪人の肩にかけ、半眼に目をとじてじっとしていた。

五月といえばもう夏である。

春を売る湯女なのだから何をされても承知の上ではあろうものの、多くの客をことわりつづけた彼女が、浪人にはソコをいじるにまかせている様子は何ともなまめかしく、悩ましく煽情的で、クラクラと目がくらんだと男は言う。

当のお光も鼻すじにやがて汗をかき、細い眉をしかめ、歯をくいしばって肩をつかむ白い指に力をこめていた。それでも浪人はなぜか、それ以上の行為に及ぼうとはしなかった。

唐竹割り

一

「おいらこの年になるが」
のぞき見をした男は言うのである。
「あんな凄え情交なんてものは見たことがねえ……ほかの湯女じゃねえ、あの女盛りのお光がよ、それもめったに諾と言わねえ女が……相手は、そりゃ、こちとら職人とはちがう。裸を見りゃわかる通り、戦場の疵だらけのおさむれえだ、けどね、こんな銭場へ来なさる所を見りゃ、そうご身分があるとも思えねえやな。そうだろう、それがおめえ、ぐっとこうお光の膝前をおしひろげて、手をさし入れて、好き放題いじくりまわして、お光はお武家につかまっていたのはいいが、とうとうたまらなくなって来たにちげえねえや、自分でこう、坐っていた腰をあげてよ、顔じゅう玉の汗をうかべ歯をくいしばって、こ、こんな具合に……」
腰をまわす恰好をしてみせる。もちろん湯舟のわきに浴客の集まった中でである。
聞いている連中もお光の容姿を知っているから心中おだやかでないが、恰好をしてみせる当人が、ふんどしを膨脹させていたのは思い出しても興奮せずにいられぬ、濃厚なそれはシーンだったからであろう。

もっとも、聞いているのは男客ばかりではなく、浴槽につかって、さりげない顔で聞き耳を立てている女客もこの時いた。あきらかに、そんな女客に聞かせる意図もあって話すことだろうから、いくらか誇張はあったにちがいないが、それにしても、現場を目撃せずに言えることではない。
「それからどうした？」
「おう、それからがすげえのよ。お武家は着流しだ、腰には脇差をさしておいでのまま……傍には下女の運んできたお膳が、手もつけず置いてあって、その盃へトクトクと空いた方の手で、酒をついでから、いじっていた手を、いったん、こう抜き出して、たっぷり指を浸したと思いねえ、盃によ。そうしておいて、酒に濡れた指で――いや、濡れたんだか洗ったか知れたもんじゃねえが、その指を又ね、そうろとお光の肢のあいだへ差し入れて……そんな時の、お光の眉をしかめた悶えようなんてものはおめえ……」
卑猥な咄は口から口へと、またたく間にひろがるものである。
そのためかどうか、その後ふっつりお光は『むさし湯』へ稼ぎに来なくなった。むろん、七つ時分に湯が仕舞ったあと、風呂の上り湯の格子の間を座敷にかまえて、金屏風を引きまわした処で媚を売ることもない。
そうなれば話にいよいよ尾ひれが付き、お光と頰に疵のある浪人者の情事は『むさし湯』の客で誰知らぬ者とてない評判になった。
そんな頃であった。
障子の穴から始終を覗き見たのは松吉という三十過ぎの左官だったが、この松吉が仕事の帰路、

近道にと飯倉神社の人気ない境内を急ぎ足に横切ろうとしたら、つと鳥居の影から一人の武士が姿をあらわし、
「左官松吉は、その方か？」
「へい……わっちが松吉でございますが」
「湯女お光の情事を見たと申す当人じゃな」
「へい」
「お光は、浪人者の所持いたす匂い袋の薫香におぼえがあると申したというは、まことか？」
「匂い袋？……さあ、匂い袋ってンですかねえ、何でもそのおさむれえの匂いにゃ憶えがある、お武家は上方のお人じゃねえかって、そんなふうにきいていたようでござんしたが」
「それで浪人は何と答えた？」
「さあ何と言いなすったか……その辺はこちとらにゃ肝腎なことじゃねえんで、よくおぼえておりゃせん」
「さようか」
武士は立派な身なりで、何故か気儘頭巾でかおをかくしていて、それも身分ある御方の証拠と松吉には見えたろう。
「では匂い袋を女は見届けたわけではないのじゃな」
「いえ、その袋なら、お武家がふところから出してこれにおぼえがあるかと」
「見せたのか？」
「へい」
「その方も見たのじゃな？」

「へい、チラッとではござんしたが、たしかにこの眼で」
言いも果てぬうちに、目にもとまらぬ抜討ちが松吉を唐竹割りに斬っていた。
ぐうとも言わず松吉は即死した。

二

「むごいことをするものよ」
頭蓋から鼻唇へ真っ向唐竹割りの一刀を浴び、血を吹いて左官松吉の倒れるのを、神殿のかげで見ていた浪人がこの時、気儘頭巾の武士の前に姿を出した。
「匂い袋を詮議いたすから公儀役人かと初めは思うたが……今の抜討ち、尋常の手並みにあらず……おぬし、柳生の手の者か？」
「——」
「その頭巾を、とれ」
「寛十蔵だの」
武士は落着いていた。
「その方に代っておろか者を成敗いたしたが、不満か」
「成敗じゃと？」
「さよう、匂い袋を湯女ごときに見せるとはその方にも似合わぬ軽率……かわりに、おぬしを斬ってもよかった」
「おもしろい……おれが、斬れるか？」
ニヤッと口もとをゆがめ、寛十蔵は刀の反りをかえし、鯉口を切った。

武士は松吉を抜討ちした瞬間にはもう、返り血を避けて三、四歩、後退し、血のりを拭うと刀を鞘におさめていた。

その体勢のまま、

「のぞみとあらば斬って進ぜよう……が、匂い袋をその方に渡した女人、何者か承知の上か？」

「？……」

「知らずにここで果てるなら、それも又よし——」

空おそろしいほど落着きはらっている。あの夜の鹿沼道で穴山小介を斬った首領も殺意をみなぎらせていたが、数段、この武士の沈着さは冷酷だった。

本当に斬る気でいるのを寛十蔵は悟った。

尋常に刃を交えたのでは多分、勝ち目はない。

「おぬし——」

寛十蔵はだが少しも臆さなかった。

「きいたふうなことをほざくが、あの女人の正体、おぬしまこと存じておるのか？」

「……」

「おもしろい。死出のみやげにその名前、聞いておこうか」

言いながら刀の鞘をはらった。青眼につけた。

微動もせずその構えを武士は見て、ふっ、と気儘頭巾の中で嗤ったという。

「いかに相討ちを望めばとて、その太刀すじで身共は、斬れぬぞ」

「——」

「よかろう、冥土のみやげに聞かせて進ぜよう……あの夜、般若面をつけた貴婦人、五郎八どのじゃ」

「いろは？……」

「知らぬか、ふ、ふ、ふ……それでよう大事そうに匂い袋を所持したもの……面構えに似ず、おぬしも人がよいの」

言って、ゆっくり二歩ばかりさがると、

「いずれまた出会うおりも参るはず……今日のところはこれ迄にいたそう」

くるっと、踵を返した。

白刃へ、堂々と背を向けるその腰構えに一分の隙もなく、いかな十蔵も見送るほかはなかった。

見送って、

「！……」

呼吸をとめた。羽織の背中に吾亦紅の隠し紋——

柳生又右衛門宗矩である。

（……道理で）

それにしても、五郎八とは何者なのか？

当時、猿飛佐助はまだお万阿さまにお供して江戸に来てはいなかった。

五郎八なる変った名前の女性の正体をただすには、匂い袋の薫香におぼえありと言ったあの湯女に当るほかはない。

そこで大横丁の裏長屋に浪人者を看病しているという、お光を十蔵は訪ねた。

むし暑い六月の末であった。

想像以上に貧しい生計の中で、もう六十にちかい浪人者は頰のこけて無精ひげののびるにまか

せた、無惨に痩せ細った身を貧しい蒲団に横たえていた。

もう長くないいのちなのは一目でわかった。お光の姿は枕頭には見当らなかった。

半死半生の病人は、覚十蔵が無断で枕もとへあがりこんで来意を告げると、生気を失ったうつろな眼で、しばらく、雨漏りの汚点のついた天井をぼんやり見上げていたのが、やがて、

「五郎八さまと申すは……」

尖った咽喉仏をゴクンとうごかしてから、

「わ、われらが主君……越後少将忠輝さま夫人……」

「ぬ？」

「伊、伊達政宗公が姫君にござる……」

「何と?!」

三

思いもよらぬことである。

越後少将松平忠輝といえば、徳川家康の第六男。

文禄元年に江戸城に生まれ、信州川中島十八万石の領主から更にすすんで、慶長十五年には越後五十五万石に封ぜられ越後高田の城主となった。

しかるに元和元年、近江の守山で将軍秀忠の家来を手討ちにしたことで秀忠と仲違いし、大坂夏の陣にも参加せず、とかく素行に粗暴のふるまいありとて罪に問われ、終に封地を没収のうえ伊勢に流謫の身となって、そこで落髪し、その後は鳥羽の城主九鬼長門守に監視される哀れな境涯に落ちた。

今はそして飛騨の高山に幽閉の身であるという。

同じ家康の子でありながら、兄秀忠は将軍職、他の兄弟も尾張、紀伊、水戸でそれぞれ雄藩の太守となっているのに、越後少将忠輝ひとり、配所の月をながめる悲遇に陥った。

さきの越前忠直卿のことといい、徳川幕府安泰のかげには、こうした骨肉のいわば血を血で洗う犠牲者が出なければならなかったところに、天下統一の、管理職の、人にはうかがえぬむつかしさがあったともいえようか。

——何にせよ、そんな忠輝の五郎八は夫人であった。

伊達政宗には元和八年のこの当時、十三人の子があった。うち二人は早世し、五郎八姫はその長女である。文禄三年に京都聚楽第で生まれ、慶長四年正月、六歳で忠輝と婚約、十一年十二月に江戸で祝言を挙げた。

時に忠輝十六歳、新婦五郎八は十三歳だった。

忠輝に従って江戸を発して越後国高田城に入ったのはもう二十歳の美しい婦人に成長した時だが、それから二年後、大坂夏の陣あり、ついで元和二年七月、夫忠輝は伊勢より飛騨の山奥に謫せられてしまう。

彼女は夫と別離して仙台に帰り、城の西隅に館住いをする身となったので、仙台の人ら、

「西のお館さま」

また

「西館殿」

と称した。彼女はついに此の館を移ることなく、後に六十八年の生涯をとじるのだが、そんな五郎八姫であれば、あの夜、般若にかおをかくし、ひそかに太陽の使者を募られたのもふしぎは

ないと寛十蔵はおもう。

　ちなみに、夫君忠輝また飛驒から上諏訪に移されて終に九十二歳の長い生涯を、流謫のまま、夫婦再会することなく果てるのだがこれは後の話である。

　裏長屋で病いに倒れた浪人は、もとそんな越後少将忠輝の家臣、お光は同じく五郎八姫に仕える侍女だったと後に十蔵は知るわけだ。

　世が世なら東照神君の実の子――将軍秀忠とは血をわけた兄弟の夫人にかしずいた身が、同じ将軍家お膝もとで湯女（売春婦）に身をやつして縁故の病者の介抱をせねばならなかったとは、お光も哀れな女だった。それがわかって、同じ時流に背いた身で、ふしぎな共感と、いたわりを十蔵とお光が抱き合ったのも情の自然といえようか。

　ましてや、密約のしるしたる匂い袋を与えた婦人がお光の旧主とわかっては。

　――ところで、重病の浪人が明かしたのはこれだけではなかった。

　伊達政宗の知られざる一面を、寛十蔵は聞かされた。

　政宗は嘗て百万石を与うべしとの、家康直筆のお墨付きを給わり、これを今なお所持しているというのである。

「百万石？……あの伊達公が……まことか？」

「か、かようなこと嘘を申して何になり申そう……断じて、虚言ではござらぬ。大御所さま直筆のお墨付き……さ、さればいかような大望に伊達どの加担めさるとも、こ、このお墨付きを幕府に披露あるみぎりは、謀叛とは申されず……よ、よって天下に野望をいだく人士ら、ひそかに、伊達政宗どのに誼を通じ……あわよくば天下をと……」

「ご老体、気を、気をたしかに持たれい」

　枕から抱きかかえるようにして声をはげますと、病人は、とろんとした眼で弱々しくくびをふり、

「くわしいことは、光に……光に」

「光なら墨付きのことも存知いたすのでござるな？」

「……」

「ご老体、まことにその真筆、今なお伊達公の手もとに？……ご老体！」

四

「伯父が申したことは、ほんとうでございます」

　お光が打明けたのは、浪人者が永眠して、その初七日をむかえた昼さがりのことである。

　シトシト、ぬか雨が貧しい裏長屋の廂に雨音をたてていた。数日前まで病人の臥せていた六畳の壁ぎわに、ふちの欠けた経机へ、白木の位牌が一つ。

　法研清竜居士

と戒名が読める。その前に線香がゆれている。

　伯父にあたる故人の姓名をとうとう死んでもお光は明かそうとしないのは、遺言によるのであろうが、それが、かえって越後少将忠輝の側近であったのを偲ばせた。

　名を惜しむ武士の、最後の意地でもあったろう――

「伊達政宗どのの手もとに」

　位牌へ合掌してから十蔵は言った。

「今もって、ではお墨付きはあるのじゃな？」

「ございます。五郎八姫さまも、いちど、父君より披露され、目にしたと申されてございました……政宗公はそのとき、

『いろは、そもじは大御所さまの子に嫁して気が重いと思うておるやも知れぬが、百万石の輿入れよ、ハ、ハ、むこ殿に、ひけは取るまいぞ』

そう申されましたとか……」

「いつごろ、家康はその墨付きを？」

「関ヶ原合戦のみぎりだそうにございます。天下分け目のいくさ、徳川にお味方いたしてくれるなればと、そう申されて……」

ありそうなことである。だが関ヶ原合戦といえばもう二十年の昔だ。その間、ついに百万石の沙汰はなかったし、家康も既にない。

墨付きは、ほご同然ではないのか？

「いいえ」

お光はくびをふって

「こんな話がございます――」

駿府城で家康が薨じたあと、尾張、紀伊、水戸の御三家に御遺金が渡されたのは前に述べたが、そのあとで、誰言うとなく、政宗への家康のお墨付きのことが、江戸城内で話題になった。閣老たちも話は知っていたからである。

まさか、御三家にのみ御遺金を与え百万石のお墨付きに知らんかおは出来ない。といって、他の大名の手前、政宗にのみ御遺金を与えるわけにもいかず、どうしたものかと首をあつめて評議のすえ、ここは知恵者の本多正純に一任しようということになった。

難題を正純に吹っかけたわけだが、彼は承知した。仙台藩邸におもむくと政宗に面会し、今日は老職としてまかり越した身にあらず、かねて親しい間柄、お墨付きなる品をいちど拝見したくて参上したり、と言った。

政宗は独眼をカッと見開いて正純を凝視すると、やがて、ニッコリわらい、

「やすきことなり」

と床の間においた桐箱をうやうやしく捧げ持って、ふたを開け一通の書をとり出すと二、三遍ちょうだいして正純に差出し、

「つつしんで拝見いたされよ」

と言った。正純もまた一拝ののち披き見れば、疑いもなく大御所家康の直筆である。

家康はまことはきわめて筆不精で、ほとんど漢語は書けず、横着な当て字でしか文を草さぬ人なのを正純は知っていたのだ。

お墨付きは、まさしくそんな当て字だらけの仮名書きで、

『そこもとに百まんご久あ田え申すべし』

と書かれていた。

「中納言どの」

正純は言った。

「ごらんの通り、いまこの墨付きをそれがし引き裂いたら何とめされる？」

さっと政宗は顔色を変え、

「裂く？」

「さよう、引き裂いてこれなる火鉢へ焚べ申したら」

「？……」

「たわむれを申しておるのではござらぬぞ。幕府にては執政の者ら種々談合いたし、仕置きに手を焼き申しておれど、いま灰にいたすなれば」

「ふ、ふ、ふ」

「ぬ？」

「ならばこの政宗が面前にて破いてみられい」

「本心か？」

「上州」

政宗の一眼が底光って、

「おぬしほどのキレ者、その気なれば有無なく黙って今、引き裂いたはず……それをせぬは、なぜじゃ？　腹を聴こうか」

正純もお墨付きの上辺に二指をかけ、今にも引き裂かんとして、じっと政宗のかお色を見まもった。

腹芸と腹芸の、息づまる数秒が流れた……

五

「そのときに伊達公と宇都宮とに、密約が？」

聞きおわって寛十蔵の面は紅潮していた。

越前忠直卿の本多正純との共謀は想像されたが、あの宇都宮のつり天井に、そこまで深く伊達政宗が関わっていようとは、思いも寄らなんだのである。

だが、越後忠輝――五郎八姫――お墨付き……そう結んでゆけばおのずと、十蔵ら真田の遺臣を太陽の使者にえらんだ人の意図が奈辺にあるかの見当はついてくる。

「わかり申した」

十蔵は言って、お光の手を取った。

「そもじが五郎八姫に仕えた身とわかったからは、今の話といい、あの位牌となった故人の素志といい……この寛、もうそもじを離しはせぬぞ」

「！……」

「案じることはない。われら十一月までのあいだ、不自由なきようさるお人より大枚の金子をちょうだい致した。それが五郎八姫とわかってみれば、いわばそなたのために貰うたも同然……こうして知り合ったも何人かの引きあわせであろう。もう明日から湯女に出ることはない。わしと、夫婦と思うてくれ。十一月になればわしは駿府久能山へ往く。往けばどうなるかは又べつのこと、十一月までのあいだ、侘びしくともこの裏長屋で暮らそうではないか」

お光は、

「ほんとうでございますか？」

眸をうるませ、やがてうつ向いて、

「うれしゅうございます……」

こうして寛十蔵はお光と同棲するようになった。二人は長屋の連中があきれるほど睦まじく過ごした。

半月あまりがまたたく間に過ぎた七月初旬――

大川端で釣り糸を垂れ、十蔵が太公望をきめこんでいたら、

「釣れますかな？」
背後に朧ろ富士の編笠の武士が立っていた。
さびた声に聞きおぼえがあった。
「さよう……約束どおり、まかり越した」
「柳生又右衛門か？……」
「？」
「ずいぶんと仲のよい夫婦暮らしの明け暮れとか、先ずは祝着。だが十蔵、おぬしらのおもうほど世の中甘くはない。天網恢々疎にして漏らさずのたとえもあること……悪事は露顕いたすものよ」
「悪事と？」
飯倉天神のあの境内で宗矩の練達ぶりはわかっている。だが退くわけにはゆかぬ。
川岸の草むらで、竿はそのままに寛十蔵は腰をあげ、ゆっくり、ふりかえった。
「知らぬか」
宗矩が言った。
「猿飛佐助がお万阿どのについて白石城より、この江戸へまかり入るそうな」
「お万阿さまが？……いつ？」
「さあ……いつかの」
宗矩の後方の土手上には門弟だろう、侍二人が、同じ編笠を目深かにこちらの様子を窺い見て立っている。
「おぬしにたずねるが」

十蔵は一歩、雑草をふんで宗矩にせまりながら、
「いちどは糺そうと思うておった……古陰流を唱える柳生新太郎、同じおぬしの一門なれど、今どこにいる？」
「新太郎？　なるほど、おぬしらに匂い袋を手渡す女人にあの夜、供奉しておったそうじゃの。それが、同じ柳生でいながら当方はおぬしを斬る、条理に合わぬと申したいのであろうが」
「そうよ。どこにいる？」
「申しておこう……よいか、寛十蔵――」
宗矩は、徐々に、うしろの土手へ後退してあがりだした。
「同じ神君の血をわけた御方なればとて、越後少将どのは知っての通り流謫の今は身……それと同じで柳生の血をつげばとて新太郎とこの又右衛門、こころざしを一にいたすとは限らぬわ」
「まことか？」
「うそと思うか？……見くびっては困る。その方ら真田の遺臣、なにをたくらみ何をなさんといたすかぐらい、新太郎をわずらわさずとも知るに造作はかからぬわ」
「では新太郎、おぬしの、敵か？」
「そういうことに相成る」
「まことか？」
「くどいの」
宗矩はもう堤にあがっていた。そこで腰の刀を抜いた。
「その方らは手出しいたすでないぞ」
背後の二人へ言って、

「いつぞやの約束どおり、今日はおぬしを斬る。……さ、抜くがよい」

六

「どうだ」

刀を抜き合わせると、宗矩はしずかに星眼にとった。

新陰流では青眼の構えを、星眼という。『陰』の構えは下段の太刀、大上段を『陽』と称える。ツカをにぎる拳（こぶし）が星で、青眼はだから二星の構え。これが八双になれば、上にまげた肘（ひじ）は峯（みね）。下の肘が谷。両肩を遠山といい、陰陽に峯や星や谷、遠山をさまざまに変化させて敵と対し、変幻自在にこれを倒す。

不可敗こそは新陰流の妙諦（みょうてい）で、不可敗すなわち星眼の構えである。

「おぬしほどの人物、この太刀筋に勝てぬくらいは察しておると思うが」

「――」

「それでも、来るか？」

刀を抜き合わせ、呼吸もみださず静かに物が言えるのは余程のことである。たいがいは、緊張して息を詰める。

「いやらしい男よおぬし」

寛十蔵が言った。

「いやらしい？」

「そうよ。うぬの方が強いならツベコベ言わずに斬って参ればよかろう。それを、弱者をいたぶるようなその口のききよう……いやらしいわ」

「！」

「さ、早う斬るなら、斬れ」

朧ろ富士の編笠は大きくて、上段や八双には構えにくい。技の範囲は当然せまくなるのを十蔵は見抜いている。

「そうか」

宗矩は言った。編笠にかくれて表情は見えないが、言葉づかいの冷静さはかわらなかった。

「上段で撃ちこまぬと思うておると、おぬし、真っ二つになるぞ」

「！……」

「斬ってみようか」

スーと、まるで釣り竿（ざお）をあげる自然さで、切先（きっさき）があがった。この瞬間、寛十蔵は負けたとおもい、一刀両断になるのを観念した。

せまい堤の道を、お光が彼のための弁当をこしらえてやって来たのはこの時だった。

道の行く手に背を向けて二人の侍が立ち、その向うに、こちらへ刀を抜いているのは十蔵ではないか。

夢中で、彼女は黒髪をなびかせ堤を走った。はかない仮初（かりそめ）の結びつきにもせよ、彼女にとって寛十蔵は夫であった。

「待って下さいまし……」

愛する人をおもうとき、女は、こわさを知らない。柳生直門の両人の背を突きのけるようにして、さらに、上段にふりかざした宗矩の背後からスルリと前へ、まるで身代りに斬られるのを覚悟した者のごとく、割って入った。

「待って下さいまし……」
はげしく叱ったのは十蔵だったが、
「退け。お光」
「いいえ」
うしろに彼をかばうように立って、
「夫が何をしたのでございます？　三人と一人……どんな理由があるにせよ、あなた方も武士なら被り物（編笠）をおとりなされてはどうでございます？　武士にむかってかぶり物のまま刀を抜き合わすとは失礼ではございませんか？」
凄い剣幕だった。ただの湯女に吐ける言葉ではない。おのずとお光の生い立ちをそれは明かしていた。
柳生宗矩はだが、とっくに彼女の生い立ちを知っていたようである。久しく病床にあった彼女の伯父が越後少将の侍臣であったことも。
もしかすれば、お光が弁当を用意して大川端へこのとき来るのも、あらかじめ内偵して承知のうえで、抜き合わせたのかも知れない。抜き合わせ、
（負けた）
と寛十蔵に観念させることこそ、真の狙いだったのかも。
何故なら、このとき伊達政宗が宇都宮城の本多正純の謀叛に、裏で気脈を通じていたことは、すでに幕閣にわかっていた。だが政宗を失脚させるに宗矩はしのびなかった。そこで、誰かを謀叛の身代りに仕立てなければならない。
藩主たる政宗の身代りに——つまり仙台六十二万石の安泰のために、喜んで死ぬ家臣はむろん

伊達藩には無数にいよう。だが伊達藩士が死んだのではかえって容疑を深めるようなもの。
そこで、責任を一身に負う、しかも伊達藩士でない何者かを架空の陰謀者としてでっちあげ、その者に腹を切らせる必要があった。
その白羽の矢を旧真田幸村の家来・寛十蔵に宗矩は立て、死を覚悟させるために、わざと敗北を痛感させた——それが、この場の対決ではなかったのか？
もしそうなら、武士らしい寛十蔵のいさぎよさを全て計算の上で、宗矩は大芝居を演じていたことになる。
実に大した腹芸であり、あの円光寺の切腹にのぞんで、十蔵が「宗矩にハメられた」と言ったゆえんであろう。
——ただ、問題は、では何故そうまでして伊達政宗を宗矩はかばったのか？……

道の者

一

——そのころ、猿飛佐助は意外な女性と会っていた。

神殿で、妙齢の美しい巫女が幣束をかつぎ、鈴を振りながら、振り袖ともつかぬ法衣のようなものに紅袴をつけ、たもとをひるがえして舞い踊る容姿はどこの神社でも見うけられたが、そのあでやかな舞い姿を見ようとして多くの男が神社に押しかけた様子を『遊女風俗姿細見』は、川柳を採り入れて巧みに描いている。

すなわち——

『見物の大半は舞いの所作などはどうでもよく、彼女たちのあで姿にうつつをぬかして、間がよくば徒枕を交さんものと、その夢を追ったし、もともとこの巫女という舞姫（娘もあり、人妻もあった）は、字義からいえば、神の子の義だからきわめて神聖なはずではあるが、彼女たちも女である以上、男性への恋情やみがたかったとみえ、ずいぶん色っぽく姿態をくねらせたり、その妖しい身振りや眼つきで鼻下長連の心をそそりたてた。

遠くから抱きつくように神子は舞い　　異なとこへ当って笑う神楽堂

尻眼などつかい神楽を奏すなり　　神楽堂小指をはねて幣を持ち

と、いった古川柳をみても、その情趣があらわれている。

わが国は、岩戸神楽の始めから、女ならでは夜の明けぬ国とあって、美しい巫女が出なければおひねり銭も多く集まらなかった。そのかわりみめうるわしい美女が出て、彼女の舞いぶりが頂点に達すると、おひねりのつぶてが雨あられと飛び、観衆の中で夢中になった男の中には、巫女の局部をねらっておさい銭を投げる助平もあれば、雅楽の笛を吹いている禰宜の顔へ岡焼き半分に紙つぶてをたたきつけるのも出たりして、たいへんな騒ぎだった』

——と。（足立直郎氏著『遊女風俗姿細見』より）

右の川柳でとらえられた巫女の生態は徳川幕府の中期に入ってからで、二代将軍秀忠の時代には、まだ、ここまで淫靡に庶民は騒がなかったが、それでも神殿に鈴を振って巫女は舞い、巫女が舞えばその姿は春をひさぐ女のあえかさを彷彿させた。

畢竟、彼女らは道の者だったからである。

「遊女を道の者という」

と曾我物語にある。

むかし、京より任国の守、また貢物を運ぶ官僚は、往来の宿駅にたどりつくと其の地の名だたる豪家、長者の屋敷をえらんで旅館とした。亭主は旅客のなぐさめに宴をもうけ、当然、婦人が出て接待をする。

客はみな貴公子あるいは公卿だから、歌舞音曲にたしなみある才媛をえらんで相手とするが、ここに白拍子の発祥があったともいえるだろう。

白拍子——平安時代（永久年間）に起った舞妓の称で、あの静御前も白拍子だったのは知られ

ている。

白拍子は立烏帽子に白の水干を着け、腰に太刀を佩いて舞うが、巫女にこの扮身の写されているのは想像に難くない。

往昔の白拍子は大方が武人を相手に春をひさいだ。江戸時代の巫女の相手は武士にかぎらぬ程度には、その有様も変ってきたまでだろう。

——さて。

鎌倉鶴岡八幡宮で何かの祭礼あり、神殿では巫女たちがお神楽の奏べに合わせてあでやかに舞っていた。

秋の近いのをおもわせる、空のさわやかに澄み透った晴天である。大勢の善男善女が神殿前にむらがって、巫女の舞い姿に見惚れている。そんな見物の中に虚無僧が一人いた。

猿飛佐助である。

佐助は鈴をふる巫女のひとりを天蓋（深編笠）の中で凝視していた。

二十になるかならぬの、頬のふっくらした円顔の乙女だ。眉毛は濃く、目はつぶらで肌は小麦色。

ぷっとふくらんだ下唇はいかにも負けん気が強そうで、他の巫女はしなをつくって舞っているのに、彼女は終始、ニコリともせず一生けんめい鈴をふり、床をまわる。まだ巫女になって日の浅いのが、その、どこかぎごちない手ぶりでもわかるが、かえって健康的で見ていてすがしい。

人の目は正直なもので、見物の誰もが彼女ひとりに視線を集めていた。

そのうち、神前にうやうやしく一礼し、跪坐する姿勢になって神楽はおわった。

バラバラと、さいせん箱に銭の飛来する音がした。

神楽がおわったので見物人は散っていった。その中で、虚無僧だけは動かずにいた。

何気なく、ふと、巫女はそんな社前の虚無僧に目をとめた。

はじめはけげんそうに彼女は虚無僧を見やっていた。

そのうち、

「吁」

と声にならぬ奇声をあげ、目をみるみる大きくみはった。

二

「佐助さん……おまえは、佐助さんだね？」

神殿のはずれまで巫女は小走りに寄って、かん高い声をあげた。歓喜がその語気にあふれていた。

佐助は天蓋を脱がず、わずかに持ちあげて顔を見せる。

すぐ又、目深かにかぶると、片手の尺八で境内の外を示した。そこで落合おうといったのだ。

「うん。……すぐ支度して行くだべ」

おもしろいことに、それから大分たって、人目をさけた境内外の木立の小道を、虚無僧に並んでいるのは、紺の手甲に脚絆、久留米がすりの着物を、裾みじかく着て、赤いたすきをかけ、手拭を姉さまかぶりにした女であった。

まるで茶摘み女のようだが、むろん巫女が顔を知られているので、カモフラージュにそうしているばかりではない。もともと彼女はそういう姿で猿飛佐助と知り合ったのである。

名をキヨという。

花菖蒲である。

『遊女風俗姿細見』にいう――

『潮来出島の真菰の中にあやめ咲くとはしおらしや』

で有名な常陸の国にいる売春婦をとらえて、俳人などが「花菖蒲」といった。こうした俗謡でも知れわたっているが古い俳句にも、

　花あやめの弾くや潮来のさんさ節

というのがある。

また『潮来細見』の序文に、

『四時のながめのその中に、わけて目に立つ花あやめ、通い曲輪の格子先、紋日物日のかけ札も一、二あらそう船駕籠の、ちぎりは絶えぬ客のかずかず』

と潮来の情趣を活写している。

いたこ情緒は、今はさておき昔は明治の中頃までは、みめうるわしい娘たちが膝がしら丈切りの荒い紺がすりの筒袖姿に菅笠をまぶかにかむり、赤い腰巻をちらつかせながら船べりに片足をかけて竿をさし、両岸に咲きみだれる花菖蒲見物の遊山客の案内をした。その艶めいた風姿はたしかに花あやめにもまさる情味があった。

船脚のあとに立つ波紋のかげに妖しくゆれる彼女たちの白いふくよかな脚のふれあいは、潮来を訪れた男客の心に、あやめならぬ、きぬぎぬの徒花となったにちがいない――

と。

キヨもそんな潮来の娘だった。

この春――まだ菖蒲の咲かぬころに――佐助は鹿島、香取の両神宮に詣でた途次、潮来に立ち寄ってキヨを知った。

佐助は旅の浪人者のいでたちだった。

キヨは十八で、その面貌――ぷっくとふくらんだ下唇で想像されるように、負けん気のつよい、早熟で、男嫌いで通った乙女だったという。

それが佐助の口説にどう乗せられたのか、からだの成熟には自分で抗しきれなかったのか、葦の茂みに船をもやって、佐助の言いなりに舟底に仰向けに寝た。

それでもにらむように佐助をみつめていた。

「そうこわがることはない……もっと、肩の力をぬいて。ひざの力も……」

佐助は腰の大小をはずし、野袴も脱いでいた。春霞む空ににぶく太陽が光っていた。

痛がらぬように、恐怖心をいだかせぬように丹念に情をこめて佐助はキヨの体の秘めやかな部分を愛撫した。貝が水にほとびるようにキヨは先ず精神の緊張をゆるめていった。自身を開放していった。

開放のあとに肉のよろこびがおとずれることを佐助は知りぬいている。

山野を疾駆し、火遁や水遁の術を使うのだけが忍者とおもうのは早計だ。女体を歓びにふるわせる手くだもまた、忍者の秘術の一である。随喜させて様々な情報をつかみ、時には其所に身を匿す。

「おらは、気持が変になってきた……こんな気持ははじめて。……はじめて」

キヨはしだいに小きざみにふるえ出し、ふなばたを渾身の力でにぎりしめた。そのかたわらに肘枕で佐助は身を横たえていた。明るい空に太陽はぼんやりと光りつづけ、舟底をヒタヒタと

小波(さざなみ)が打っていた。

四囲(あたり)はまったく静かだった。

そのうち、

「どうしよう……いい、どうしよう」

うわごとをキヨは口走り佐助の衿(えり)もとを、あいた手でつかんで来た。ひたいにびっしり汗をかき、呼吸(いき)を荒くしていた。それが頂上をきわめたところで、動かしていた手をはなし、やおら、佐助は身をおこすと彼自身の怒脹(どちょう)したものを、はじめて、挿入した。未経験な女にはこの方法しかないのだ。

キヨはもうこばむことを知らなかった。すなおに受けいれた。彼は彼女に折りかさなった。

舟がユラユラ揺れ出した……

三

おわると、キヨは舟底で死んだようにじーっと目をとじていた。

胸だけはまだ激しい呼吸づかいをしていた。

紺がすりのはだかった胸に露出しているその乳首を、佐助は吸ってやった。

ヒリ、とキヨは全身でけいれんした。

下半身は、両足をのばして白日のもとにある。繁茂は黒いほうである。そこの毛深い女性は情が剛(こわ)く、意地っぱりで、いったん肌をゆるした男には実心をささげるという。

キヨも田舎娘ながらそんな乙女と見て佐助は情を交えた。

太陽の使者となれば、明日に死が迫っていることを猿飛佐助は知っていた。

此(こ)の世に、もしかすれば忍者が残しておけるものは、何ひとつない。

それなら新たなる生命を残しておくべきである。人間が一生をかけてやれることは、しょせん、多寡は知れていよう。だが連綿と生命をつたえてゆけば、いつかは、大事を成せる日があろう。

忍者は身分いやしいものである。武士階級とは厳然と差別される。下忍(げにん)はとりわけそうである。しかも死に際しては、顔を焼くか、削(そ)ぐか、つぶして死ねとさとされている。

忍者の掟(おきて)だ。

誰(だれ)であったかを人にさとられぬための。

つまり猿飛佐助は、いつ何処(どこ)で死んで行くか人は知らない。認識されぬものは、無にひとしい。

つまり死をさとられぬ人間には生もない。

死によって、はじめて人はその生命を確認され、生き方を問われるのだから。

猿飛佐助は忍び者であるかぎり、つまり、此の世には存在しないのだ。理屈ではそうなってしまう。

そういう存在感をもたぬむなしさをおぼえたとき、じつは忍者としては、何ものかにすでに負けているのだが、およそ、敗北を考えたことのない人間はいないだろう。

死を予感することと、それを怖れることは断固べつだろう。

佐助は死の遠くないのを知って、乙女におのが生命を新たに育(はぐく)んでもらうことを考えた。名もない田舎娘でいい、健康な母親になってくれるなら。

霞(かす)んだ春空に、日はあいかわらずにぶく光りつづけていた。水面はそれまでと変らぬ長閑(のどか)で平和な静寂を湛(たた)えていた。

微風も、葦をそよがせ時々小波を水面に広げた。

「わたしの名は猿飛佐助――」
双(もろ)の乳房を吸ってから、その衿(えり)もとを佐助はかき合わせてやり、
「目をあいたらどうだ？」
「……」
「よいか。わたしの名は佐助だ。もとはさる武将に仕えた身だが、見るとおり今は浪々の身……そなたには何もしてやれはしない……そなた、両親は居るのか？」
キヨはくびをふった。濡(ぬれ)た目をようやく半眼に開いて、上から見おろす猿飛佐助の顔を、近々と見つめ返していた。
「そうか……独り身ならそれもいい……もしかすればそなた、今、わたしの子を妊(はら)んでしまったかも知れぬ。そうであったら、どうする？　おろすか？」
又くびをふった。
「うむ」
「そうか」
佐助のかおが白い歯を見せた。
「ここに小判がある、そなたのものだ……この冬十一月十一日、もしそなた身ごもったら、よいか、駿河へ来るがよい。駿河の久能山と申すところ……土地の者に問えばわかる。そこに廟(びょう)がある。家康の墓所が。その前へ来て立つがよい。そう、今ぐらいの時刻と定めておこう」
「お前さまも、行くの？」
「かならず、行く」
キヨは、はじめて嬉(うれ)しそうにわらった。

「あたいはこの潮来で生まれたと爺(じい)さまは言うけど、お父もおっ母も、知らないわ……じいさまが死んであたいはこんなことするようになったの……この舟はあたいのものよ。この舟があれば、あたいは暮しに困らない……けど、これからは、お前さまのために、精いっぱい、生きる……そして駿河へ行く。きっと」
「そうしてくれると嬉しい」
「本当に？」
キヨはひたむきな眸差(まなざし)で佐助をみつめた。
「ほんとうに、お前さまの子をみごもれなくても？」
「そうだ」
キヨは上体を起こした。
「うれしい……あたいは、でも、きっと」
「船を漕(こ)ぎ出してくれぬか」
佐助が言うと、
「うん」
元気よくそれから立ちあがって、身づくろいをし、頬(ほお)に乱れた髪をかきあげて、まだ紺の手甲をはめた手に竿(さお)を把(と)ると、岸を一突きした。
舟はしずかに水面にすべり出た……

四

「……それで、あれからそもじ、どうした？」

潮来で別れてまだ四カ月はたっていない。

身ごもったのなら、目立つお腹になるわけはないだろうが、天蓋をかぶった中で、佐助の目はともすればキヨの腹部に注がれた。

キヨは明るく答えた。

「お別れしてあたい、江戸へ行ったわ」

「――江戸？」

「うん、そうすればきっと佐助さんに会えると思った――」

木立沿いの小径は雪ノ下という処に来ていた。ここから坂道を下れば街道に出る。街道は大船を経て藤沢宿へつづく。

どこまでもキヨは一緒について来るつもりらしい。

雪ノ下の急な坂道を下るとき佐助が先に立って手をかしてやったら、嬉しそうにつかまり、そろそろ、足を踏み滑らさぬよう慎重に歩をはこんだ。

その様子に佐助は目をみはって、

「そもじ、……身ごもったのか？」

「うん、そうよ」

何と明るい声だろう。

「まことか？」

「そう。転んで流産したら困るものね」

坂がなだらかになると、

「ありがとう」

キヨはようやく手をはなし、

「あたいは男の子だとおもう……その方が佐助さん、いいでしょ？」

佐助はもどかしくなって我知らず天蓋を脱いでいた。道は西へ向っていた。傾きはじめた西日がこの時の猿飛佐助には無性にまぶしかった。

「それでそもじ、江戸では何をしておった？」

「何もしないわ。親切な人が一緒にいたから」

「しんせつ？」

「霧の才蔵って言う人……馬子だったけど」

「馬子？……男か？」

キヨは佐助をかえり見て可笑しそうにわらい、

「女の馬子っているけ？」

何者だろう。いかに霧隠才蔵が忍びに巧みでも男の馬子に化けきれるものではない。キヨの無邪気さはなにものよりも確かに男女の差異を見分けるはずだ。

「そもじ」

佐助の顔は緊張していた。あたかもこの時、前方から、空馬を曳いた馬子が鼻唄を唄いながらやって来た。四十前の、肩に継のあたった野良着に同じ継の股引に素足の草鞋。人の好さそうな男だった。

「才蔵とやら申した馬子――あのような男か？」

「ううん、もっと若いよ……でも、そうかなあ……あんなふうに見えるかなあ」

「ひげは？」

「はえていたわ、こわい髯。無精ひげ」

才ではない。

何者かが霧隠才蔵の名を騙りおキヨに接近して、江戸へ連れ出したのであろうか？　ならば佐助と媾合したことを既に知っている。身ごもったのも若しかすればうかがい知って、キヨに近づいたのかも知れぬ。

然りとすれば何のために？

「キヨ」

佐助は歩度をゆるめた。

「そもじどうして鎌倉に来ておった？」

「佐助さんに逢いたかったからよ」

「わたしが鎌倉へ立寄ると何故？」

「聞いたの」

「その才蔵にか？」

「うん」

「巫女になることもその男がすすめてか？」

「そう」

にこやかな黒眸をあげて、

「駿府の久能山をあたいは土地の者じゃないから知らないでしょう、それを言ったの。そうしたら、鶴岡八幡宮で働いていればきっと逢えるって……その通りになったものね」

佐助はしだいに顔を曇らせ、考えこんだ。

キヨはまったくそんな佐助に頓着なかった。建長寺の甍が遙かな夕映え空の彼方に望見できるあたりに来たら、一度立ちどまって、目をとじ、鼻で大きく息を吸って、

「おいしい……赤ん坊はきっと、元気な子がうまれるわ」

名も知らぬ其処は立場の近くであった。

もう疲れて歩けない、とキヨは言った。

すでに母の強さを有つそれは厳然たる口調で、佐助は言いなりに旅籠をさがした。

街道ぞいに一軒、藁ぶきの屋根の軒下に、

『宿や』

と吊り行燈へ筆太にしるした農家があった。

投宿客とて見当らぬ其所で意外と親切な農婦が、濯ぎ湯を出してくれ、自身で佐助やキヨの前にしゃがんで足を濯ごうとしてくれる。

虚無僧と茶摘み女。

奇妙な取り合わせをまるで怪しむ様子さえなかった。

隠居所ふうな離れ家の一室に通してくれた。

ここも茅葺きだった。

夕餉には熱い鍋汁が奉仕された。

美味しそうに、実に見事な健啖ぶりをキヨは発揮して、食べ了ると、

「ああおいしかった……お腹がいっぱい……ほら、さわってみて……こんな」

胸を反らし、佐助の手をとって下腹を撫でさせようとする。

「しっ……」

この時、佐助はキヨを制し、障子縁の外の暗がりに鋭い目を注いで、
「そこにおるのは、誰だ？」

五

「やっぱり、御者か――」
佐助に誰何された縁さきの暗がりから、ぬっと姿を出したのは身なりは在所者（百姓）のようながら、腰に脇差をたばさみ頭は法体に丸めた奇怪な人物。
「よう似ておるが虚無僧の扮ゆえ別人かとも思うてな、様子を見ておった、ハッハ、ハ……それにしても御者とかような所で会うとは――」
言って、ツカツカと縁側に近寄ると、
「いや、久しぶりじゃな」
佐助の満面が、
「六郎……」
みるみる喜色をあふらせ、
「おぬし、ど、どうしてこんな所に？……」
「こんな？　それはないじゃろう。見る通りわれら今は寺男、東慶寺にて天秀院さまに奉仕しておる」
「天秀院？……」
「そうじゃ、おんしゃもそのため当地へまかり越したんではないんか？」
「では、綾姫さまが天秀院？」

「知らんのか、こいつはあきれた、ようそれで伊賀流ずい一の忍びじゃなぞと申せた義理か」
でんと縁側に腰をおろすと、はじめて、
「ふーん……よい眸をしておるな」
まじまじキヨの面貌を見て、
「おん者、茶摘み女とは見えん……猿飛に惚れておるのか？」
「そうよ」
晴れ晴れとキヨは言った。
「あたいの大事な人よ」
猿飛佐助はまだ半ば幻を見る心地でいた。
海野六郎。もと真田十勇士の一人である。
しかし大坂夏の陣で、てっきり討死したと思っていたのに、寺男となって綾姫さまに奉仕しているという。
綾姫さまとは秀頼公の遺姫のことだ。
豊臣秀頼は、将軍秀忠の女千姫と結婚したが、縁組がまとまって千姫が大坂城へ輿入れしたのはわずか六歳の幼女のとき、秀頼もまだ十一歳の少年だった。それから十二年、夏の陣で大坂城は亡び、秀頼は母淀君ともども自害。千姫は火炎につつまれ危いところを坂崎出羽守に救出されたのは人の知るところだが、時に秀頼すでに二十三歳。
千姫との夫婦のあいだに子はなかったが、側妾が一男一女をもうけていた。男子が国松といって八歳、女子が当時七歳の綾姫だった。
国松、綾姫はともに乳母に擁せられて落城前、ひそかに大坂を落ちのび、伏見に遁れたところ

を徳川方に捕えられ、終に国松は六条河原で斬罪。綾姫のみは尼となって鎌倉東慶寺に入ったのである。

そんな綾姫――剃髪後は天秀尼、また天秀泰和尚といった――の身辺に戦死したはずの海野六郎が寺男に身をつやして奉仕していようとは。

佐助が鎌倉へ立寄ったのも実は綾姫さまの消息をたずねるようお万阿さまに頼まれたからである。

そこはでも男子禁制の尼寺。

まさか本物の尼僧を相手に化けもならず、武士のいでたちでは門前払いをくうおそれもあろうかと、普化僧（虚無僧）に変装して来てみたのだ。

来る道を程ヶ谷より浦賀みち（金沢経由）の近道にとったので、さきに鶴岡八幡宮に詣でたところ、巫女のキヨと再会したわけだった。

「それでおぬし、落城後ずっと姫のおそばに？」

「まあの、豊臣恩顧の武将ら或は亡び或は徳川になびき、主君幸村公も討死あそばしたと聞いたで、世を拗ね諸州を流浪して当地へ参ったら――さようあれは五年前になるか――まだいとけない少女が禿姿で道の草を摘んでいる……可哀そうにと思うての、近寄ってつくづく見れば何と綾姫さまにおわすではないか。いやもう驚いたの何の……姫は、われらごときにお憶えはない、当方は髯づらの浪人じゃ。でもな、国松君がこと、秀頼公が御事、さらには幸村どのがことどもは幼な心にもご記憶あって、ひそかに昔を偲んでおられたのであろう、身よりとてない今は人目をしのぶ御身に、昔の姫を存じあげるわれらがおめもじいたしたが余程お嬉しかったらしく、ワッと声をあげてお泣きあそばした……無理もない、まだ十二歳の少女じゃ。世が世なれば右大臣豊臣秀頼公が御息女……それがかような在所の尼寺で、生涯を仏門にお仕えあそばさねばならん……それをおもうとお労わしゅう又ご不憫でならず、よってこの海野六郎、武士を捨て、生涯、寺男となってお側に仕えんと肚をきめ、早速に常楽寺なる寺が和尚にたのんで頭を丸めたわけじゃ……まあ話せば他にも長い物語はあるがの」

「……」

「ところで御者こそ、よう今迄生きておったの。……風の便りでは筧十蔵や由利鎌之助も無事生きのびておるそうなが……奴らの消息、おんしゃなら存じであろう。皆どうしておる？　無事か。やはり江戸表に出ておるんか？……」

六

「由利鎌之助は、死んだ……穴山小介も」

「？」

「いずれ筧十蔵も腹を切ろう……わたしは筧十郎の切腹を見るにしのびず、昨日江戸を発って来たが」

さすがに佐助の声は沈んでいた。

ともかくもと海野六郎を座敷にあげ、キヨには、行水でも藉りて参れと中坐させての差しむかいである。

パチン、

手のひらで六郎はおのが首すじを叩いた。この辺もう藪蚊が出ている。叩いたのをだが、本人は意識しないでいたかも知れない。

「由利や穴山が死んだとは、どういうわけじゃ」

歳は真田十勇士の中でも年長だったから、もう四十ちかくなっている。中肉中背、とりわけて風貌に異相はなく、しいていえば顎がしゃくれ気味なことと眉間の中央に大きなイボのあることだろう。

このイボが、仏像を偲ばせることもあって、幸村の家士のあいだでは、

「仏の六郎」

とも異称されたが、勇武を誇る十勇士の中にあっては人格円満、物言いは豪傑ふうでも戦場以外では実は虫一匹殺さぬ温厚の士で、今それが尼寺の寺男になっているのも思えば六郎らしい余生かも知れない。

そうおもうと、殺伐な穴山小介や由利鎌之助の最期を、つぶさに物語る気は佐助にはなくなっていた。

かんたんに、宇都宮城で本多正純に謀叛の企てがあり、それにまぎれて由利、穴山の二人は死んだとだけ語った。

「筧の、では、切腹のわけは？」

「お万阿さまの御為よ」

「お万阿さま？……あの片倉小十郎が夫人におなりなされたとうわさされる姫のか？」

「そう」

「すりゃお万阿さまに御者、会うたのか？」

「美しゅうおなり遊ばしたわ……華奢な御体質なのは昔と変らぬが」

「ふーん、あれから八年……さもあろうのう」

感慨は海野六郎の胸中をもさまざまにめぐるらしい。

「おもえば女の運命もわからぬものよ……片や右大臣の御息女に生まれながら辺境の尼寺に身を沈められ、今一人はその右大臣が部将の女に生まれて今は白石城何万石やらの城主夫人……わからぬものようのう」

「――」

「ところで、ほかの者らは？　三好清海入道やおんしゃと同じ忍び者――男に化けたあの霧隠も戦場より生きのびたと聞いておるが……どういたした？」

「三好なら健在、今は江戸市井にまぎれ住んでおる。霧隠はどうしたか……」

佐助はことばを濁した。才のことは、じつはいろいろ知っていたが、今ここで海野六郎に明かしても詮のないことと胸にたたんでおいたのである。

「そうか、すると御者をふくめて清海と霧隠にわしの四人……真田十勇士の生き残りがまだおるわけか」

キヨが湯上がりの火照った頰で庭の暗がりを、ヒタヒタ草鞋を鳴らしてもどって来た。

「ああ、気持のいいお風呂だった……釜風呂なのよ。とてもいい気持」

紺の手甲や脚絆は言うまでもなく、絣の着物まで丸めて手に抱えて、すそ短かな湯文字に木綿の肌着だけ。その肌着も衿が開いてむっちり豊満な乳房が露呈しているのもキヨは意に介さない。

武家育ちではとても人前に出られる姿ではないが、潮来の花あやめだった本人には、一番、それが今は快いかっこうだろう。

「キヨ」

佐助は六郎の手前、目のやり場に困ったが、

「ふーん。……浮世をわれら捨てて久しいが、婦女子も天真らんまんに振舞うは、よいものよのう」

六郎は目を細め、

「いや、久々によい目の保養をしたわ、ハ、ハ、ハ」

さわやかに哄笑して、

「ところで猿飛。この旅籠をかねた農家へは、じつは醤油を借りに来たので、そろそろ寺へもどらねばならないが、東慶寺はここから二丁余の近さである。天秀院さまにお目もじ致したいなら、いっそ人目に立たぬ今の方が何かと好都合。どうじゃ、わしと一緒に寺へ来んかい？　綾姫さまも今は十六におなりなされ、少女の尼僧じゃ、お美しいぞ。下賤の御者などご記憶なされてはおるまいが、真田の遺臣と聞けばお喜びであろう、一緒に来んか？」

七

外の暗がりへ出る前に、宿の少年が提灯をかしてくれた。離れ座敷を中庭づたいに表へ出るかたえに、さいぜんキヨのかりた風呂場があって、開いた窓から、主婦らしい三十すぎの女が赤ん坊を湯につけていて顔を見せ、

「六さまあ、こんな恰好で……ほんに気をつけてお戻りなさいませやあ」

別れの挨拶を投げてきたのは、海野六郎とはもう余程顔なじみで、彼を尼寺の本当の寺男と思っているのだろう。

提灯はなくとも忍者の佐助には夜目は利く。

六郎は醤油の徳利を左手に、右手に提灯をさげて、

「あの娘――」

キヨのことを言った。

「ただの体ではないようじゃが……御者の子か？」

「わかったか」

「どこで出来た？」

「――潮来」

「いたこ？　ふーん……」

それきりキヨの話は出なかった。夜道は登り坂になっていた。

東慶寺は鎌倉五山の第二寺、円覚寺の南に在り、禅宗で、開基は北条時宗夫人。天秀院はちょうど二十代目の住職にあたるという。

「鎌倉五山と申せばの――」

その第一、建長寺は鶴岡の西北・巨福路坂に在り、仏殿には済田地蔵尊が祀られ、この寺の建立される以前、このあたりを地獄谷といった。

犯罪者を刑罰した場所だったからである。

北条時頼の代に、済田という者重科によって斬罪に処せられたとき、処刑役人が二太刀まで打ちおろしたが斬れず、刀を見れば刃が折れていた。何故ならんと問うに、済田答えて、自分はつねに地蔵尊を信じ、身に放さず、いまも髻の内にありと。

そこで検べてみれば確かに地蔵の小像あり、その背面に刀の痕があった。時頼ら大いに歎異して即ち済田の科赦し、のち建長寺建立のとき恵心僧都の作り給う千体地蔵を済田地蔵尊の頭内におさめ以て仏殿に安置すと。

「御者とちごうて、今のわしに話せるのはかようなことぐらいかの、ふ、ふ」

淋しそうに六郎は嗤ったが、聞いていた佐助の脳裏にふと、あの燧石を将軍秀忠の髻に結びつけ、斬りおろして刀を折った宗矩の所業が想い出された。

宗矩の父石舟斎も禅に参じて剣理を究めたというから、禅の古刹建長寺にまつわる咄なら知っていて不思議はないだろうが、それにしても……そう思い、

「異なことをたずねるが、おぬし、柳生又右衛門を存じておるか？」

「柳生？……大和のあの剣術使いか？」

六郎は提灯を佐助の顔を照らすようにかざしあげ、

「御者、知っておるんか？」

「知？……それはわたしがたずねている」

「何故じゃ？」

六郎はくびをふった。

「何故と申して……おぬしはどうなんだ」

「身共は知らん。が、使いと申す者なら東慶寺へ訪ねて参った」

「？……」

「女であったが……お藤とか申した、又右衛門の妻と名乗っておったようじゃ。天秀院さまにお願いの儀があると申して」

「？」

「あれは、桜の散った頃かの……東慶寺には名人孫右衛門の打ったとつたえる般若の面があるが、それを拝借ねがえまいか、そんなことを申しておったようじゃ」

「般若面!?……」

「なんでも紀伊公の御息女が猿楽『羅生門』を舞われるについて、孫右衛門が面をおつけなされたい……そのような話であったとおもう」

「それで、面をおかしなされたのか？」

「いいや、紀州公直々なれば別であろうが、柳生宗矩とて天秀院さまには存じ寄りのない者、寺宝なればとお断わりなされた……そうしたらの、尼僧なればとて破瓜（思春期―十六歳の意）のお年ごろ、身に香を焚べておいでなされるが、その薫香は伽羅か沈香か――そうたずねたそうな」

わが耳を佐助は疑った。

（そんなことがあり得るのか？）

あの夜の般若面の女性――おぼろげに越後少将夫人――かつは伊達政宗の息女五郎八姫かと想像していたのに、何と、柳生宗矩が、あの本多正純の謀叛を制し将軍秀忠を擁護して鹿沼道を逃げ去った、その宗矩が、太陽の使者を集うあの匂い袋に間接的にもせよ関わっていたことになる。

（そんな馬鹿な！）

思わず胸で叫んだ――ちょうどその時、

「ここじゃ」

東慶寺に着いたらしく、暗夜にひっそりしずまり立つ山門を提灯でかざして、

「御者のその身なりでは堂々と入るわけにはいかんの。よい、灯を消すがついてこいよ」

言って、ふっと提灯の灯を吹き消し、

「――こっちじゃ」

八

その夜、キヨの寝ている旅籠（農家）の離れ座敷へ猿飛佐助が帰ったのはもうかなり更けてからであった。

キヨは仮眠で待っていた。

夜着は並べてふたつ。

農家らしく、表装の色の古びたものながら枕屏風が立てまわされ、あんどんではなく土器に灯油を満たした燭が、三脚に載せられて乏しい明りを点じている。

佐助の帰った気配に、キヨは目をさまし、うすい掻巻をはねのけ慌てて蒲団に起きなおると、肌襦袢の衿を掻き合わせた。

「おかえりなさい……おそかったのね」

複雑だった佐助の表情が、ふっと和んだ。

「まだ起きておったのか」

「そう……お風呂を借りなさる？　おとさぬようにあたしが頼んでおいたの。もう冷めているかも知れないけど、あたしが、焚いてあげる」

何という邪気のない明るい気性の女だろう。野育ちかも知れぬがキヨといると、鬱屈した気分も佐助は霽れるおもいがした。

微笑で彼は首をふった。

「よいわ、もうおそい」

「でも」

「それよりな」

天蓋こそかぶっていないが佐助はまだ虚無僧の扮身のままである。

その袈裟を先ず首からはずし、丸ぐけの帯を解き、絹布の小袖を脱いで下帯ひとつの裸になりながら、

「明日わたしは早い。そもじを連れて行くつもりであったが、急に予定がかわった……済まぬが、当分そもじまた鶴岡で巫女をつとめていてはくれんか」

「当分て……いつまで？」

「さよう、十日かな」

「なんだ……もっと長くかと思った……いいわ、十日位なら」

佐助の脱ぎ捨てたものを、足もとへ寄って来てたたもうとする。肌じゅばんに薄い湯文字一枚。その湯文字の裾が割れてむっちり健康な膝小僧が覗いていた。

田舎娘に育っているのに、いっぱし今は彼の身のまわりの世話を焼こうとする。そうすることを心からたのしんでいる。

「キヨ」

「なに？……」

「くるしくはなかったか」

「？」

「夜、独りで。わたしと一緒に寝られなくて」

勢いよくキヨはくびをふった。さすがに目もとは赧らんでいたが、

「いつかきっと、こうして逢えると思っていたもの……平気だった」

「本当か？」

「そうよ。あたしはもう一人きりじゃないとわかったし……そうでしょ、佐助さんの子供が一緒にいるんだから」

「では、これからも独りでがまんができるか？」

「これから？……いやだ！」

一そう激しくかぶりをふり、

「十日間ではないの？」

「――」

「ね。ずうっと、もっと長くなるの？」

佐助がゆるくくびをふった。

「どのようなことがあろうと、そもじが無事に子を産むまで、離れはせん」

聞いて、うれしそうにキヨは小袖をたたみ、

「あたしだって離れない……」

夜具に身を横たえると、キヨの方からそばへもぐりこんできた。

やっぱりキヨの体は燃えていた。

佐助はあの船の中のように彼女を仰臥させ、衿をかきひろげ仄明りに乳房をつくづくと眺めて、そっと乳首を口にふくんだ。母の乳房を知らずに佐助は育った。

キヨは目をとじ、全身を彼の為すにゆだね、ゆだねることの幸せを味わっている。

湯文字を佐助は解いた。白いふくよかな腹を視た。

四か月ではまだ大きくなったとも思えない。でもその腹部を、てのひらでしずかに撫で、脇腹

を撫で腰から太腿へと撫でさげた手を徐々に、谷間の茂みへと、もどす。谷間を撫で分けて丹穴に触れる。

すでにそこはうるおいきっていた。

だが以前もそうしたように、けっして佐助はいそがなかった。

心なし、色づいて蕾の開いた趣きのある乳頭を吸い、首すじから耳たぶに舌を這わせ、ぷっとふくらんだあの下唇に口を合わす。そうして敏感な谷間の小さなものを指さきで愛撫する。

キヨの呼吸づかいが少しずつ荒くなり閉じたまぶたに力がこめられ、まつ毛がふるえている。

佐助もいつかキヨのわきに肘枕となって片指で股間の愛撫をつづけながら目をとじていた。彼の眼裏にはだが、東慶寺で対面した天秀院の清らかな尼僧姿と、意外な話を打明けられた奥書院での光景が浮んでいた……

九

翌朝。

二番鶏の鳴くのを合図に、旅籠を発って海野六郎と落合う手筈だった。

黎明に一番どりが鳴いた。

キヨはスヤスヤと眠っていた。

仰向けに、まっすぐ足を伸ばして。

女が性的に充分満足しきったあとは、かならず、脚をのばして眠る。あしをのばすためには仰臥しなければならない。行為のあと、たとえ横向きに、男の胸へ抱かれて眠っても双方が熟睡すれば、いつの間にか女は――性の極限を味わいきったあとは――仰向けになるからふしぎだ。

片ひざを立てたり、腹這って眠るのはだから充分な快味を得られなかったしるしであり、行為のあと、夜中に目ざめて隣りに眠る女の姿態がどのような様子かを、見て、男はおのれの性技を省みなくてはならない。——そう忍者は修業の途次に教えこまれている。

「媾合のあと、足をのばして眠りし女の告げる情報は真なり。たとえ同衾するとも、膝をたて、また横臥せし態にて語る女の言葉は曲あり、信ずべからず」

と。

キヨは仰臥でねむっている。

土器の燭はすでに灯が消え、薄明の縁障子がぼうと室内のたたずまいを浮きあがらせている。

絹布の小袖にくるくると丸ぐけの帯をしめた。

その時——

ふっとキヨが目をさました。

「あら。……もう起きたの？」

夜着をあげて上体をおこすのへ、

「寝ていなさい」

できることならキヨの知らぬうちに去りたかったのだ。目をさましたのは、昨夜の媾合が不充分だったのか？

「こんなに早く……どこへ？」

「六郎と人に逢いに参る」

「久能山？」

「いいや」

「十日間、逢えなくなるところ？」

「キヨ」

背中でいそいで帯を結ぶと、夜具のかたわらへ膝をかがめた。

「わたしも武士、時には役目を果さねばならぬことも生じる……十日たてば帰って参るつもりだ。淋しかろうが、がまんをしてくれ」

「——」

「どうした、いやか？」

「ううん。……がまんする。そのかわり」

キヨの手が佐助の手首をとらえ、自分のほうへ引寄せた。

「さよならの前に……もう一度、あたしを」

「抱けと？」

「うん」

目がわらいながら媚びている。男に愛撫される悦びを体でおぼえた女の貪欲さか。子を孕んだ安堵がうむ情熱か。

気は急いている。だがこういうとき、けっして、男はいやな顔を見せてはならない。

佐助はわらった。白い歯で。明るい声だった。

「昨夜のようにはいかぬが、よいか。手口を変えるぞ」

「……うん」

「よし。——ならば」

夜着をかけのけ、敷布団にあぐらになると佐助は前をひろげて、下帯をゆるめ、逸物をむき出

した。小袖を着たままだ。すでにソレは怒脹していた。

前技はぬきである。

「さ、これへ、坐れ」

キヨは一瞬ためらったが、ぽっと顔を赤らめると、

「……こう？」

男の肩に両手をあずけ、湯文字の裾を割って、そうろと膝にまたがる。八の字型にその白い肢が開いていた。

「持つのじゃ」

佐助が言った。陽根を彼女が手で持って、自分のへあてがえ、と。

やはり恥ずかしいらしい。でも目をつむると言われるとおり右手をさげ、ソレに触れると腰を浮かして、徐々に、重心をおろした。

おろしながら、

「イッ」

と奇妙な声をあげた。肌着は、乗るときから衿がひらいている。健康なぷりぷりした乳房が露出している。その乳房をやさしく佐助は愛撫し、乳首を吸い、腕をまわしてゆるく胴を抱き寄せ、あいた手で金溝をもてあそび核をやさしく弄った。金溝とはワレメちゃんのことである。

キヨは佐助の首に抱きついてじっとしている。腰をまわすことなど彼女は出来ない。まわさずとも、全身を硬直させ、しだいに痙攣してゆくことで相互の歓びを深めた。縁障子がしだいに明るさを加えていたが二人はそうして相擁し、ほとんど動かなかった。

二番鶏が鳴いた。

朝の早い農家の者はもう起き出す物音が戸外でしていた。

それでも全身汗を流して二人は犇と抱き合っていた。鶏小屋で一羽が羽搏きしていた。

十

街道わきの一里塚のかたえに、海野六郎は腰をすえて待っていた。

「おくれて済まん……」

小走りに佐助が近寄って声をかけると、

「よいわ」

ゆっくり立ちあがる。寺男の風体ではなく、野袴に大小をたばさみ、古びた重籐の弓を小脇にかかえていた。矢は胡籙におさめて背に負うている。すげ笠を目深かにかぶって坊主頭をかくしている。

「別れを惜しんでまいったのか」

「……まあな」

佐助は虚無僧のいでたちだ。天蓋はキヨと別れる時からかぶって来た。

「天秀院さまが、くれぐれも御者に身をいたわれと申されてであった」

「おぬしには？」

「ふ、ふ、この身なれば――」

海野六郎は弓を執らせれば空を飛ぶ鳥をも、狙って射落さぬということがない。十勇士の中にあって射術の名手で知られていた。

ただ、鉄炮の普及したこの時代に、弓術とはいかにも時勢おくれのようで、本人もそれを恥じ、

めったに弓は執らないが、一度、まだ九度山で幸村の蟄居のころ、暇を持て余した由利鎌之助や清海入道が、戯れに竿の先へ日の丸の扇子を結びつけ、
「今様那須与一の腕前やいかに」
清海入道も野原に出てこの竿を持ちあげ、
「ざんぶ、……ざぶ、ざぶ」
あたかも舟がゆれる有様をなぞって空中にこの竿を左右に揺らした。数丁はなれた位置で、六郎は弓に矢をつがえキリリと引きしぼるとヒョウと放った。入道はじつは賭けをしていた。当たらぬ方に賭けたのである。それで、矢が放たれるのを見て、にわかに竿をぐいと斜めに倒したのだ。
一矢はむなしく外れてしまった。
「や。わしが勝ったぞ」
喜悦した瞬間、目にもとまらず放たれた二の矢が、見事、扇の要を射抜いた。
ユラユラのどかな青空に日の丸の扇は舞い落ちた。
想えば、平穏なあれは日々だった……
「われらにはまだ信じられんが」
六郎が言った。
二人の歩度は早かった。
「匂い袋を天秀院さまがお出しなされたとは……裏があるようにおもえてならん」
「わたしもそれは思った……般若面をつけたあの夜の女人、五郎八姫に先ず相違ないと思うが……万一、事の成らざるとき、罪を天秀院さまに着せる宗矩の意図のような気もいたす。それくらいはあの男なら、やりかねまい」

「したが御者が言う通りなら、宗矩は将軍家を守護したはずではないか？　なんでその人物が一方で太陽の使者などを」
「本多上野介に、要はその器量なしと読んでおったのではあるまいか」
「器量？」
「謀叛の。釣天井にて、よし将軍家を失い参らせても本多正純にはその後の天下は掌握できぬ……とすれば、ここで将軍秀忠亡きものとなっては、いたずらに天下は動乱いたすのみ……それよりは正純の陰謀を機に、陰謀に加担せし大名は誰々か、どこまで事をなす決意があったか、その心底を見届けるよすがとした……わたしは、そう見ている」
「ふーん……すると新太郎というもしょせんは宗矩と同じ穴のむじなになるか？」
「わからん」
「？」
「新太郎の狙いはほかにあるかも」
「どのような？」
「わたしの見るところ、宗矩とは仲がわるい。同じ柳生一族とて、骨肉のあらそいはまた別のような気がする」
「何を一体あらそうのじゃ」
「つづまるところ、天下の剣」
「む？」
「いずれ十一月十一日、久能山に集結いたすころには凡そは明らかになろうが、古陰流か新陰流

——そのいずれが天下に覇（は）を唱えるか。最後には新太郎と宗矩が雌雄を決するような気が、わたしはする」
朝空はあかるく晴れ、街道を三々五々、旅人の行き交う姿が見られるようになった。
二人は東海道へ出る道をいそいだ。
若山城下へおもむくのが海野六郎の目的である。
「おんしゃ」
と一風かわった呼び方をするのでもわかるように、六郎は紀州の出で、般若面の女人は佐助の言うような五郎八姫ではなく、紀州家の息女ではあるまいか……そう天秀院が言い出された。
「思いあたることもあるのです」
と。
何を思いあたられるのか、その点は、たずねても少女の尼僧はうつ向いてこたえられなかったが、ともかく、彼女の不審をはらす意図もあって、紀州家の事情にくわしい六郎が若山へ向うことになったのである。
佐助の目的は別にあった。
北鎌倉を発っておよそ二刻（とき）、九ツ（十二時）すぎには道幅も広く、旅人の往反（ゆきき）のにぎやかな東海道藤沢の宿に出ていた。
——と。
「やや、おぬし、海野六郎ではないか」
奇声をあげ、休息所の茶店からとび出して来た男がいた。
三好清海入道だ。

みかん

一

天蓋（てんがい）をかぶっているので、猿飛佐助には気がつかない。
「矢立てに弓を持っておるゆえ遠くからでも一目でわかった……それにしても、海野六郎が生きてくれておったとは……」
清海入道の喜びはひじょうなもので、街道を往反する人目もはばからず、抱きつかんばかりである。
「御者（おんしゃ）なぜ又かようなところに？」
「わしか。江戸におったが色々おもしろうないことばかりでのう……ムシャクシャいたすゆえ、十一月まで旅でもいたそうと——」
「十一日の久能山集結までか」
「や。なんでそれを知っておる？……おぬしさては、使者の一人かい」
「そうではない」
虚無僧が猿飛佐助とわからぬ様子に六郎は苦笑して、

「これなる仁に聞いたまでよ」
「この、ぼろんじに？」
眼をむくのへゆっくり佐助が天蓋をさしあげ、
「わたしだ」
「たはっ……お、おぬしへちまの汁をもとめに上方に往っておったのではないんか？」
「へちまの？……何だそれは？」
「これはしたり。お万阿さまが火傷なされて、それにへちまの汁が効くとて」
「なるほど……さては寛十蔵に会うたのじゃな」
「おお、会うたも何も……根岸の何とやら申す寺へ身を寄せられるお万阿さまに久々の対面をいたせしばかりか、寛が腹を切る場面にもこの清海」
「……」
「おぬし、知、知っておるのか寛が切腹の事情――？」
「多少はな」
「そ、それで平気でおるのか。やい猿飛、おぬしそれでも」
「まああそう大声をあげられるな」
六郎が割って入って、
「御者あの茶店で休んでおったのか」
「――」
「ちょうどよい、猿飛、われらも休息いたそう」
まだ不平づらの清海入道をなだめるようにして、それから三人打ちつれて縁台に腰をおろし、

焼餅と茶を喫した。
　その間、かいつまんで、寛十蔵の切腹は伊達政宗があの宇都宮城の謀叛に、陰で加担していた責任を公儀へ取るための、犠牲となった経緯を佐助は明かした。
「くわしいことはわたしにもわからんが、裏で柳生宗矩が御膳立てをととのえ、すべての手順をはこんだらしい……何故じゃと？　伊達公への友誼からではないかな」
「友誼？……すりゃ、宗矩は伊達政宗と仲がよいのか？」
「だろうと思う。いずれにせよ、わたしにわかっていることは寛十蔵は単に仙台六十二万石のために死んだのではない、もはや太陽の使者として死んだことだ。われらはつまり、もう事を起こしておるのよ。匂い袋を受取ったあの夜から」
「？……」
「不審がるも無理はないが、こう申せばわかるか？　寛十蔵が切腹いたしてくれねば、久能山へわしらが集結する意図さえ徒労におわる……集結して何をはじめるか、まだ明かされてはおらぬが、何をなすにせよ、その事のために――あるいは事を隠密裡に運ぶためには寛十蔵の犠牲が必要だった――わたしはそう見ている。いやわたしではなく寛十蔵みずから、それを感知したればこそ黙って腹を切っていったと……。寛は仙台藩のために死んだのではない、あとに残るわたし達の働きよいように、何も言わず、死んでいった……」
　空は雨雲が蔽いはじめ、道を往来する旅人の足は早くなっている。槍持ちをしたがえた騎乗の武士が二人ばかり茶店の前を通過し、子供の手を引いて、婦人の旅客が手甲脚絆の杖を頼りに下僕をうながしながら通りすぎていった……
「ふーん……われらが久能山集結のためにか……したが佐助、いったい集結して何をする？」

「わたしにもわからぬ……が、十一月十一日と日をかぎるからにはそれだけの事由があろう、その日が来れば、おのずとわけは判明しよう」

「そうじゃの」

海野六郎だけは、黙って、お代りの渋茶をのんでいる。もともと差し出口はきかぬ男である。

ふと清海入道がつぶやいた。

「真田十勇士の生残りとて、はや穴山小介、筧十蔵、それに由利鎌之助までが死んでしもうた。残るはわれら三人。いや霧隠をいれて四人か……時の流れとはいいながら、淋しいのう」

実感がこもっていた。佐助は脱いでいた天蓋をかぶって、

「そろそろ参ろうか」

「そうよの」

六郎もやおら矢立てを肩にして、弓を執ると、

「あるじ……茶代をこれへ置くぞ」

「いやそれは困る。わしに奢らせい」

清海入道があわてて縁台を立ち、嚢中をモソモソやりながら、

「亭主、全部でいか程じゃ？」

二

その夜は小田原宿の旅亭に泊った。

海野六郎とは大坂夏の陣以来、八年ぶりの邂逅でもあり、懐かしい九度山時代のことどももふくめ、昔話に話はつきない。

道中でもそうだったが、例によって木賃宿の大部屋とて他の投宿客もいることながら、至って話し好きで声の大きい清海入道の語り口には思わず手枕で横になった他の客までが時にはふり返って清海入道の蛮声にあきれている。

話題はおもに戦場での、十勇士の活躍の懐旧談である。ひときわ大活躍をするのが本人の三好清海入道であるところが、いかにもお人好しの彼らしい。

むらがる敵の雑兵どもをちぎっては投げちぎっては投げ……ヤアヤア遠くば音にも聞け、近くば寄って目にも見よ、わあれこそは大坂方にその者ありと聞こえたある……てな具合である。

その点、海野六郎は話しぶりはおとなしい。

「小田原と申せば名物は外郎……このういろうなるものはの、北条氏綱のころ、京都西洞院錦小路に住居せし外郎なる者が当地に来たって痰切りの薬を製し、これを氏綱に献上いたしたに由来するが、氏綱はいたくこれを歎称し、霊薬として小田原に八ツ棟の居宅を与え製薬を弘めんことを外郎にすすめた。よって今に天下の名物とあいなっておるが、そもそもの起りは鎌倉建長寺の開山・大覚禅師来朝のみぎり、供奉せし者が京人に製法を伝授いたしたに始まる……されば蒸し菓子にはあらず、旧名を『透頂香』と申す薬よ」

東慶寺で寺男をつとめただけに抹香臭い語り口になっているのを、

「あきれたのう、弓を執っては今様那須与一とまでうたわれた海野が、もとは坊主のわしを差しおいて大覚禅師来朝のみぎりと来たわ。変れば変るものかな」

翌朝は早くに宿を発って箱根越え。夏なれば図体が大きく汗っかきの清海入道は、ともすれば後れがちで、

「しんどいのう……かなわん、のう、ここらで一服いたさんか」

湯本から十丁の山道をのぼった塔の沢の温泉場で早くもアゴを出した。

無理もない。二十貫の金棒をひっさげての坂道なのである。

「おぬし何なら独りのんびり湯治でもして参ったら？　遠慮はいらんぞ」

佐助が言うのへ、

「つめたい男よ、せっかくめぐり逢うたんではないかい、のう海野」

「そうよの。じゃが御者まで紀州へ同行することはない、猿飛が申すも御者をいたわってのことよ。やすんで参ったら？　このあたり箱根七湯の中でも景勝の地と申すぞ」

「チッ、おぬしまでが……よいわ、先に往けい」

佐助と六郎は可笑しそうに天蓋と菅笠のかおを寄せ、笑い合って足を早める。ここ塔の沢はたしかに箱根温泉郷の中でも賑わい良く、家数二十軒余が道に沿うてひさしをつらね、家作もきわめて風流に建てられ湯女の艶姿が白昼でもチラチラしている。

汗を拭き拭き清海は追いついて来た。

「どうもいかん……筧がことを思い出していかんわ」

六郎の後方数歩のところまで追いつくと、

「のう海野……猿飛めは知ったかぶりで明かしてもくれんが、いったい、紀州へ何をしにまかり越す？　おぬしの話では、天秀院さまが依頼とのことであったが、そもそも秀頼公が忘れ形見とは申せ、たかが十六歳におわす少女……まして落飾あそばされた御身なれば世を捨てられたはずであろう？　何をおぬしに」

「紀州頼宣公が息女にまこと御者らを集い召された事実があるかどうか、それをたずねに参る」

「何じゃと？　すりゃ紀州公も今度の集結に一枚かんでおられるのか」

「わからん。それを確かめに行くのよ」

聞いていないと思った佐助が、かわりに数歩前で答えていた。

佐助はまるで汗を掻く様子さえなかった。

しばらくして、

「清海」

「何じゃ」

「おぬしには言わなんだが……才のことを知っているか？」

「霧隠がどうかしたか？」

「根岸の寺にておぬしの会うたお万阿さま……般若面をおつけなされていたと申したが……あれは、まことのお万阿さまではない」

「な、な、なんじゃと？」

「お万阿さまは火傷などあそばしてはおらん。——あれは才よ」

「ぬ？」

「宗矩をあざむくため一世一代の変身術を、才は使うた……おかげで宗矩の心底をわれら知ったのよ。紀州へおもむく仕儀になったも、ひとつにはそのことがあってじゃが……何、それもこれも十一日になれば、わかる——」

三

十一月になった。

ちら、ちら、朝から雪が舞っている。

温暖の紀州にはめずらしいことである。

「殿」

和歌山城本丸の中奥。

紀伊宰相頼宣の病いに臥(ふせ)った座所の外に、

「望月(もちづき)大膳、お召しによりただ今参上つかまつってござる――」

頼宣は枕(まくら)に後頭部をあずけて仰臥(ぎょうが)のまま目を開(あ)かなかった。

「……来たか」

聞こえるか聞こえぬかの弱々しい声で、

「ゆるす。近う、まいれ……」

座所の外にかしこまった大膳にはきこえない。

枕もとに侍る前髪の児小姓(ちごこしょう)が、チラと上座の養珠院のかお色をうかがってから、

「大膳どの、近う、との御諚(ごじょう)にござりまする」

「はっ」

裃(かみしも)のすそを鳴らし、中腰でスルスルとお側ちかく大膳は進み入り、平伏した。

「……十一日まで、あと、何日じゃ」

しばらくして弱々しく頼宣がたずねた。

「きょうが朔日(ついたち)にござりますれば」

「久能山へ、すりゃ、あと十日しか、ないか……」

「御意」

紀伊頼宣、この時二十一歳。

「東照神君の御子孫多き中に、頼宣君はその器量天才にして尋常の御性質にはあらざりしを神君御覧じて寵愛(ちょうあい)とくに深し」

と『大君言行録』に誌(しる)されたその英邁(えいまい)も久しい病いにはかてず、頬(ほお)はこけ、口辺にうすい無精ひげののびた面貌は、拝する家士らの胸を痛めずにはおかない。

病いの原因は不明である。

この年九月に遽(にわか)に疾病に倒れ、以来典医ら投薬に心をくだいたが病状は快癒(かいゆ)を見ず、九月末には将軍家より看病のため板倉内膳正(ないぜんのしょう)が到着、十月には家光君より井上清兵衛使者となって病状をたずね、更に頼宣の生母養珠院も江戸より看病にかけつけた。でも病勢は一進一退、はがゆいほどの長煩(わずら)いである。

「その方を呼んだは」

言いかけて、

「数馬」

「はいッ」

「手をかせ……起きる」

「よろしいのでございますか、今ご無理をあそばしては」

「起きる」

弱いが、気迫のこもる語声である。児小姓はどうしたものかと養珠院の顔色をうかがう。

往昔、家康が江戸城への帰途沼津の本陣で一泊のとき、湯殿に侍って家康の目にとまり、寵を受けた浪人者の娘お菊の美貌は、養珠院となった今も左程おとろえてはいない。

「常陸介」

養珠院は茵を降り、頼宣のそばににじり寄って、

「起きなさるなれば妾が手をかしましょう」

「かたじけのうござる」

児小姓がパンヤの掛布団をそっとあげると、頼宣は生母と今ひとりお付きの老臣に背を抱えられて、上体をおこした。

脇息を別の小姓が差し出した。

それに凭れ、やおら、養珠院へむきなおると、

「母者」

「？……」

「御前を、これへお呼び下され」

「満どのをか」

「おねがい申す」

御前とは、頼宣の夫人満姫の呼称である。藩中の者らは「御前様」と称んでいる。

満姫は加藤清正の息女で、九歳のとき頼宣と縁組あり、元和三年、十七歳で、当時駿府にあった頼宣のもとへ婚礼のため肥後熊本から嫁いで来た。いまは同じ和歌山城内北の丸にいる。頼宣より一歳年長の、世俗にいう姉さま女房である。

しかし婚礼後五年、いまだ夫婦のあいだに子はなく、なにぶんにも豊臣恩顧の名将加藤清正の息女なれば、大坂滅亡のあと、いまは清正も逝去して熊本城はその子（満姫の兄）忠広が治めているとはいえ、養珠院には嫁満姫への疑念がはれない。

頼宣の長煩いも、もしやすれば満姫が徐々に毒を盛ったのではあるまいか（何故なら家康の子孫多きうちにも出色の器量なのだから徳川を倒す野望があるなら一番に頼宣を亡きものにせんと謀るだろう――生母の立場ではそう考える）。それで、看病に和歌山城に入ってから養珠院の言いつけで満姫は夫の枕もとをしりぞけられ、北の丸で暮らすようになっている。

その夫人を、

「是非、これへ」

かさねて頼宣は頼んだのである。そんな主君を、目を凝らしてじっと望月大膳は仰ぎ見ていた。

四

養珠院の小皺の見えはじめた面が、いっ時、曇った。

「大膳とやら」

「――は？」

「お馬掛かりを仰せつかるそこもとに、病中の常陸介がにわかのお召しとは妾には解せぬが、どのような用向きで来やったのじゃえ？」

「……そ、それは」

「言うてたもれ」

「母者」

さすがに頼宣が毅然たる面持ちで、

「御前を、早う」

語気鋭く言った。そして語気をつよめすぎて、むせんだ。

あわてて老臣が背を撫でながら、

「殿がか程に申されておいでなされる。養珠院さまとて、御諚を却けあそばすなればいっそわれらが」

「わかりました……」

ようやく養珠院は腰をあげた。御前様（頼宣夫人）の館へはたとえ老臣でも男子は禁制である。城内表向きに夫人は姿を見せぬのが建前になっている。それで、病臥以来、満夫人が頼宣の病床を見舞ったのは、これまでにわずか数度。したしく看病したのはそのうちの両三度にすぎない。頼宣が会いたくともにわかの場合は、母をわずらわさねばならぬことわりである。

養珠院が座を立つと、隅に控えていたお付き女中も一斉に起ちあがるのへ、

「そなた達はこれにいて、殿の世話をしやれ。わらわに代ってなあ」

一人だけ局を随えると打掛けの裾を曳いて病室を出ていった。出るときそれでもまだ、平伏する望月大膳をいぶかしげに見おろしていた。

今様で言う、養珠院は過保護のおもむきのある母親だった。しかし暗愚の婦人ではない。

もともと、生前、家康の頼宣への寵愛はひじょうなものだった。大坂落城の年の冬、家康は、頼宣に駿河国に百万石を添えて譲り渡し、自身は三島の泉頭という古城の跡を隠居所にして住もうと、縄張りまでした程である。そのときには、江戸表より土井利勝が祝儀の口上を述べにやって来ている。

それが、年暮れて翌年（元和二年）になって、程なく家康は薨じ、ことは沙汰止みとなった。しかし、縄張りはともかく、頼宣に百万石をゆずるべしとの家康の意向は、当然、遺言として実行されてよいはずであるのに、その後、幕府からはこの沙汰なく、土井利勝も知らん顔の半兵衛をきめこんでいる。そして、一時は水戸国へ、のち江戸をはるか離れた人跡未踏の森林（熊野）

や大台ヶ原のような山ばかりのこの紀州に五十五万石で封ぜられてしまった。

それが養珠院には口惜しくてならないらしく、

「権現様今三年ご存生ならば、常陸介を百万石の大身にお成しあそばしたであろうに、残り多いことなり」

と口ぐせに嘆いている。それだけに、わざわざ祝儀を述べに来ておきながら、知らんふりの土井利勝を心中おもしろからず養珠院は思っていて、土井利勝とは犬猿の本多正純を、蔭でひそかに支援した婦人なのである。

もし、宇都宮釣天井の陰謀が成功し、将軍秀忠のにわかの他界を見ていたら、ひそかに最も快哉を叫んだのは、だから養珠院だったかも知れない。

将軍秀忠亡きあと、嫡子家光はまだ幼少、次期将軍職を襲いで諸大名に君臨する器量において、頼宣に勝る者は見当らぬからである。

この意味では、おもえば、いかに本多正純キレ者なればとて、秀忠を失い参らせて自身が天下を取れると思うわけもなく、しかも釣天井を仕掛けるからには、陰謀成就のあかつきは頼宣公こそ次期将軍家にと、蔭の密約が養珠院との間に交わされていたかも知れず、むしろそう考える方が筋道は通っている。

曾て家康自身が言ったのである。

「万一、将軍（秀忠）に事ある時は、右兵衛佐（尾張義直）に一腹の弟なし、常陸は弟於鶴（のちの水戸頼房）あることなれば、天下の惣領は常陸なり」

と。

頼宣を将軍に据え、そのまわりを越後少将、越前忠直、それに天下の雄藩・仙台伊達政宗を擁

して固めるなら、苦情をさしはさむ者もあるまい。その上で、幕閣老中筆頭として政務を執り、意のままに天下を動かす――これが本多正純のひそかにえがいた構想だったことがわかる。

ひそかなこの構想があればこそ、将軍家を釣天井で誅しまいらすような大陰謀も企て得たのだ。

その陰謀が、挫折した。

そして、太陽の使者を集う正体不明の女人が、かわりに、登場していたのである。挫折したその夜、同じ宇都宮城下の野原に――。

五

ことわるまでもなく、頼宣は二十一歳、まさに青年藩主である。

夫人は二十二。

成熟しきって、本来なら女としてもっとも美しい年齢ではあろうが、この夫婦に『紀州の息女』と呼ばれる女が生まれているわけがない。

ましてや満夫人は、まだ懐妊のきざしさえ見たことのない婦人である。

だとすれば、般若面をつけた『紀州家の息女』とは果して誰なのか？

養珠院は、頼宣がいっこうに平癒しないのは満夫人がひそかに毒を盛るからではないかと猜疑したが、本多正純の謀叛に蔭で養珠院が――つまりは頼宣が――結びついていたのなら、ひそかに頼宣の毒殺を企図するのは加藤清正の息女たる満夫人とはかぎらない。

かえって、頼宣の器量とその野望を探知した江戸幕府（あるいは土井利勝あたり）が差し向けた何者かかも知れないのである。

その意味では、九月に病いで倒れたときに、いち早く将軍家お使いと称して看病にまかり来た板倉内膳正こそ、実は薬餌にかこつけて毒を盛った張本人かも知れず、内膳正は毛頭そのつもりは無くとも江戸より随行した侍医に、利勝あたりが何事かを言いふくめていたかも知れない。

板倉内膳正を疑うよりむしろ、この方が当たっているのではないか？　そう頼宣は気がついて、養珠院の到着を幸便に内膳正とその随行医を江戸に返した。これが十月十九日。約十日前である。以来、ひそかに、おのが病状を頼宣みずから観察するに、まだ十日の短時日ゆえ明白なことはわからぬながら、徐々に、気のせいか体内に生気のよみがえるのを自覚するようになった。

むろん、これを容易く口外する頼宣ではない。病臥苦吟の体を表面はまだよそおいつつ、私に、策を練ってきたのだ。

腹心の家来望月大膳を枕頭に召したのも、じつはこの為にほかならなかった――

「……大膳」

「は？」

「いき苦しゅうて、声が出せぬ……耳をかせ。――近う」

養珠院にわざと北の丸へ夫人を呼びに行ってもらったのも、母には委細を聞かせたくないからだった。しかし、代りの女中どもがまだ傍に残っている。大膳の耳もとへ囁くほかはない。

大膳は明敏の士だった。

「おことばに甘えたてまつりまする」

言って、平伏の身を起こすとツ、ツ、ツ……と頼宣の夜具のきわまで膝行し、

「イザ……仰せ下さりませい」

片耳をさし出した。

老臣はまだ頼宣の背を撫でていた。しかし老臣また忠節一途の武士である。児小姓はその孫で

ある。
「爺……もう、よい」
背を撫でるのを制して、
「そちを呼んだはほかではない」
頼宣は大膳の耳もとへ囁いた。
「……いつぞや、海野六郎と申す者、当城下へまいったを存じておろう」
「あの、天秀院さま名代とか申しましたる？……」
頼宣は弱々しくうなずいて、
「その方、これより江戸表へ参って六郎に会え。……案じずともよい、例の、匂い袋を所持いたすのじゃ……場所は、竹橋の予が江戸屋敷……其処に、六郎は同じ匂い袋を持参いたす他の一両名と身を寄せておるはず……ただし、早馬を駆って急げよ……十一日まで後十日じゃ、行き違いにでもならば一大事」
「心得ましてござるが……との、その六郎に会い申して、何を？」
「予が病いに倒れしおり、江戸よりまかり越した侍医を、おぼえておるか？」
「板倉様に随行つかまつったあの、安田玄庵とか申す？……」
「さよう、その玄庵をな、糾明いたせ……万一自白いたすようなれば」
「自白？……何をでござりまするか？」
「予の病いじゃ」
「何と仰せられます？」
思わず、むき直って目をみはるのへ、

「……声が出せぬわ……近う、耳を」
「……」
「よいな。ことは急を要する……城をさがって、即刻、出発いたせ。万一、玄庵が何事か白状いたすようなら、竹橋屋敷におる海野六郎らに、十一日がことは、中止いたすと」
「との」
「行け……早う、一刻をあらそうぞ……予の見込みがあたっておったら、十一日、かえって皆の者は一網打尽になる……そ、そう申せばわかる……海野にはわからずとも他の、佐助と申す者には——」
養珠院がかえって来た。つづいて満夫人が現われた。
それを見るや、にわかに疲労のたいで頼宣はうしろに昏倒した。
驚いた老臣が抱き寄って、
「と、との！……」

六

満夫人は、戦国の武将——あの髯の加藤清正の息女にしては意外に嫋々と可憐な風情あり、眸は大きく、まつ毛は濃く、表情はつねに愁いがちで、とても養珠院が疑うような夫謀殺をはかる夫人とは見えない。姉さま女房と言ってもむしろ、撫で肩で細そりした体つきは、房事すら耐え難い感じである。
彼女がいよいよ頼宣に縁組ときまったとき、当時まだ在世の清正はよほど彼女の行く末が気がかりだったらしく、それだけ不憫のおもいもひとしおだったのだろう、秘蔵のあの虎退治で有名

な片鎌の槍や、朝鮮分捕品の珍宝佳什のほとんどを嫁入道具に加えさせ、別に、清正の行列には常に持たせた長柄熊毛さやの槍二十本をも、入輿の折にはつかわすべしと言った。当時彼女は九歳だった。末娘のゆえもあってやはり目に入れても痛くないほど可愛かったらしい。

それで、いよいよ駿府へ輿入れのとき、既に清正は世を去っていたが、兄肥後守忠広は亡父の懐いを察し、妹のこの嫁入り支度には加藤家としては過分のこしらえを整えさせ、養珠院をはじめ頼宣に仕える女中共にまで祝儀の品に心をくばった。

「このたびの婚礼には自分三カ年分の物入りを費やし申し候」

と後に忠広は語っている。いかに贅美を尽くしたかがわかるが、別に、天下の名医と後年たたえられた医師武田道安へ、

「この上われら手に負い申さざる儀は良き医者をお供に加えられぬことである。こればかりは偏にそこもとに頼み入れるほかなし」

と言い、道安も、

「心得申した、われら片腕とも存じ候酒井三伯を進じ参らすべし」

とて、内弟子三伯を譲って入輿に添えている。

こんな配慮も必要なほど満姫は病弱だったわけだが、嫁入りに侍臣まで付き添わせたというこの異例な措置が、かえって養珠院に、毒を盛るためと疑われたのは皮肉だった。

養珠院は和歌山城に入ると、まっ先に三伯を追放した。そのためだが頼宣よりも満夫人が、常用薬を調合してもらえるお付きの典医を失い、いっそう弱々しく今なっている。

さて頼宣の昏倒に、

「殿さま！……」

夫人は驚倒して、裲襠を細い肩からずり落さんばかりに、よろめいて頼宣のそばに馳せ寄ろうとするのを、

「どうしやった常陸介……」

養珠院また、夢中で進み寄り夫人をおしのけると、

「其処を退きゃれ」

背を抱きとめた老臣にかわって、

「気をたしかにもってたもれ……コレ、常陸介」

わが膝に頼宣の後頭部をのせながら

「誰かある、早う、医師を」

頼宣は薄目で大膳へ、

「早う行け」

うながして又、昏倒のふりをする。

江戸までいかな早馬でも五日はかかる。五日間、ぶっ通しで疾駆するのは、たとえ、手綱を執りつつ鞍上でうたた寝できても、江戸へ到着の時分は先ず息絶え絶えにちがいない。

死ぬ覚悟で疾駆しなければならぬ。

それの出来るのは忠義の士にして馬術の名手望月大膳をおいてないのだ。

十一月十一日久能山集結の予定で、常の者が江戸を発つのは六日前後。それまでに江戸に着かねばならない。

もし遅れたら、累は頼宣自身――つまり紀州五十五万石の全藩士に及ぶ。

「――との」

万感のおもいで大膳は病床のきわに、あらためて平伏すると、
「これにて……御免」
パッと席を立った。
「待ちや」
制したのは養珠院である。
「どこへ行きまする？」
「は。……それは」
「殿の昏倒はそなたが厚かましゅうおそばに参じたからではおじゃらぬか、それでよう殿を見捨てて」
「！……」
「大膳、くすしの来るまで、行くことはなりませぬぞ。わらわが申しつける、それに控えていやれ。くすしが診察をまって、その方の仕置き、妾が沙汰しまする」
吁、女と小人は度し難し……心で頼宣は舌打ちしたにちがいない。
一刻をあらそうのである。
ましてや屋外には雪が降っているという。
雪が積もってしまえば江戸まで百四十六里余を、熊野や箱根の嶮を越えて五日以内に駆け得ようか？……母者の膝枕では目の開けようがない。
……祈るおもいで頼宣は大膳の決断をまった――
さすがは望月大膳。
チラと主君の寝顔を見、養珠院へ目をあげると、ニヤッとわらったという。狂気をよそおったのである。そして、くるっと養珠院へ背を向け、ゆっくり御前を退っていった。
時に十一月朔日八ツの刻――午後二時――であった。

七

和歌山から江戸へ、当時、参勤交替の行列などには日程十八日間を要した。
道すじでも和歌山から貝塚、助松、住吉を経て大坂へ出、守口、枚方、伏見経由で京都より東海道を江戸へ下る。
直線距離でなら粉河を五条に向い、伊賀上野を経て鈴鹿の関へ出るのが早いが、それには高野山口、名張、伊賀神部、上野、柘植などことごとく山間の嶮路を通らねばならぬ。
馬は一匹で済むわけがない。
途中、乗替え馬を雇うためにも駅伝（宿つぎ伝馬）の設備のととのった大坂経由を採る方が結局は早いのだ。
それでも、五日間で江戸へは、まさに殺人的日程である。しかも俚諺にいう――
『箱根八里は馬でも越すがこすに越されぬ大井川』
大井川が氾濫でもして居ればいかに馬術の名手とて、五日で無事江戸にたどり着けるだろうか。
だが、大膳は敢然これをなした。
お城をさがると下僕に命じて愛馬『月影』に鞍をしつらえさせ、
若党に、
「半右衛門」
「隣邸に小源太どの在宅なれば教示を仰ぎたき仔細あり、至急来宅を乞うと申せ」

裃を脱ぎ捨て身支度をととのえながら言った。若党は主人のただならぬ面色に驚きながらも隣家へ走った。

望月大膳は未だ独り身である。母と妹がいる。妹へは、

「干餉を用意せい。五日分じゃ。それから旨そうな蜜柑を数多、嚢に詰めてくれよ。梅干とな」

「どう遊ばすのでございます？」

「道中食にいたす」

とだけ答えた。

隣家の小源太がやって来た。いつぞや述べたあの『ふしぎな男』——馬の尻尾の筋を切ったり鯉料理の手腕で、伊達政宗をあきれさせたあのマタギ出身と称する月ノ輪小源太である。望月大膳の愛馬——それは黒い斑を有つ白馬だった——を、紀伊藩中ずい一の駿馬と推称したのも小源太だった。

厩から、下僕によって月影は玄関口に曳き出され、すでに鞍はつけられていた。霏々と雪は舞い降っていた。その玄関へ、のっそり小源太はあらわれると、

「いつ見ても、良い馬よ」

鼻づらを撫で、

「何事じゃいな」

下僕にたずねた。

「急な出立で江戸へ早駆けあそばすそうにございます」

「江戸？……ふーん。そうか」

あまり小源太は意外そうにはしなかったという。

そこへ馬上に脛を顕わさぬよう襠を高くとった馬袴に、襷がけ、桐油紙製の鎧合羽に藺笠の紐をあごでキリリと締めながら大膳があらわれた。腰には干餉と蜜柑をおびただしく巻きつけ、刀は下緒で肩に負うていた。背後に母と妹が送り来ていた。

「お手前にたずねる」

草鞋を穿き、紐を男結びしながら、

「われら江戸への道中には不案内……船渡しの川は、何処と何処でござろうや？」

「いよいよ時節が到来したんですな」

小源太は少しも驚かず何やら独り合点をすると、

「船渡しの個所は都合七カ所……中でもっとも時を要するは新居浜より舞坂への渡海でござろう」

「大井川は？」

「あれはお前さんの馬術なれば、少々の出水でも渡れる」

「念のため主な川すじを御教示ねがいたい」

「そうよなあ……貝塚までの樫の井川の歩行渡しは存じておられよう。あとは、大津川の歩行渡しと、枚方から伏見へかけての天の川の渡し、瀬田から草津、大亀川の渡河——これはチト難儀やが、あとは愛知川、高宮川、あさつ川——いずれもお前さんなら雑作あるまいが、佐渡川の船渡し、その次に池鯉鮒より岡崎へかけての矢作川の船渡しがある。これは馬にては無理。そのあとが、今切りの渡海、その次が天竜川、大井川、瀬戸川、安倍川餅の安倍川、清見寺川、興津川の歩行渡しの次が富士川。それから箱根を越えて酒匂川、馬入川、さいごが六郷の渡しを経て、品川——」

「かたじけない。それだけうけたまわれば」
「何日のご予定じゃ」
「五日のうちに何としても」
「そうか、まあ五日あれば久能山へお前さんの馬術なら」
「駿府ではござらぬ。江戸へまいる」
「なに江戸？」
小源太の面色が変った。下僕はどう言おうと、大膳の目ざすのは久能山と思い込んでいたのだ。
「そ、それは危い……いかなお前さまでも」
言おうとしたが、もう耳をかさず、
「ごめん」
下僕より手綱を奪い取るとヒラリ馬上へ。
そのまま月影へ一鞭あてると雪の舞う外門へ躍り出した。

八

吹雪を突いての、望月大膳の決死の疾駆がこうしてはじまった。
五日間を不眠不休で駆けるのはいかに頑健な肉体の持ち主にも、なせることではない。
暗夜の疾駆はさらに困難だろう。
だが大膳は敢行したのである。
むろん川渡しの船中では仮眠をとった。時に鞍上で鞭を揮いながらタテガミに顔をおしつけて眠った。飲料水は蜜柑をかじることで代えたという。それと梅干の種を始終、口にふくんでいた

そうだ。
こうすると唾液がわき、口のかわくことなしという。
時には、轡をたぐりよせ、疾走しながら馬の口中へも強引に蜜柑を与えた。愛馬『月影』は二昼夜、和歌山から泉州、河内、摂津、山城、近江、甲賀、美濃を経て尾張鳴海に到るまで休むことなく走ったのである。鞍上、人なく鞍下まさに馬無きが如くだった。関ヶ原では豪雨の中を突破した。そうして、矢作川の渡しの手前で、遂に前肢を折って、横ざまに倒れた。
「よくぞ駆けてくれた……」
大膳はわが身の疲労も省みず鼻づらを撫で、瞑目感泣した。愛馬も大きな目からポロリ、と涙をこぼした。武士と馬のこれが最後の別れになった。
名馬『月影』は、そのまま、死んでしまった。
ところで、特筆すべきは大膳を玄関先で送り出したあとの、小源太である。
雪の舞う中にしばらく彼は立ちつくしていて、同じように門前まで兄を送り出していた妹へ、
「兄上は、殿の御病状に変りがあるようなこと、何ぞ、申しておられませんでしたかいな？」
「殿さまが？……いいえ」
妹は、かねて奥羽なまりがあって、大小は差していても、いっこう武士らしくない隣家の小源太を、敬して遠ざける様子があったから、この時も、
「失礼します」
会釈すると足早やに玄関内に入ってしまった。
雪の中に小源太はまだ立ちつづけ、
「五日間か……」

独りごとを言った。それから、何を思ったか望月家の厩へ入り、裸馬を曳き出すと、

「どうなされまする？」

厩中間がおどろくのへ、

「藉せ」

足でわき腹を蹴った。馬は駆け出した。

驀地に小源太は城へ登ったのである。

裃も着けず不断着に粗末なもんぺの儘だった。しかし特別のお声がかりで、彼だけは自在に本丸お庭さきへ入って主君にお目通りは許されることになっていた。

ただ、病臥されてからは小源太の方で目通りを願い出るのを遠慮していた。

だが、今は非常の場合である。

「月ノ輪小源太、とのさまに言上のすじあり、推参いたあーす」

大音に呼ばわりつつ庭を走り、中奥御病室の中庭へ来たった。

頼宣はもう昏倒から回復して病床に横たわっていたが、ちょうど満夫人と久々の対面ではあり、北の丸の様子など（夫人の他に頼宣にはすでに二人ばかり、お手のついた女中が北の丸にいたので、その様子）をたずねているところだった。

児小姓が小源太のにわかの伺候を取次いだ。

「なに、小源太が来よった？」

「ハイ、御前をもはばからず着の身着のままにござりまするが」

聴いて、頼宣は枕から顔をおこした。

「よい。目通り許す……これへ通せ」

養珠院のいないのがこの際好都合というべきであった。

頭髪や肩に雪の片々をとどめて小源太が小姓に案内されてきた。

「お殿様よ」

家士のような平伏は小源太はしない。敷居ぎわに着座すると、他の者へは目もくれず、病状をうかがってから、

「おたずねをします。望月大膳どの、江戸は何処をめあてに出向かれましたのじゃ？」

「竹橋の予が江戸屋敷であるが、それが何とした？」

「わしにも行かせていただきたいので」

「――ぬ？」

「五日では心許のう思いまする。万一のことがあってはと……それで、わしに」

「その方なら往けるか？」

「まあ何とか」

「馬か？」

くびをふると白い歯を見せた。

「この、親にもろうた二本の脚で」

頼宣の眼が一瞬、鋭く光った。ためらう理由は、だが、無いのである。

「許す。ならば行ってみよ」

読者は思い起してほしい。明治二十七年六月の、あの韋駄天勇松が奥州二本松から芸州広島まで、三百二十五里を約三十六時間で走破した記録を。

和歌山から江戸へ百四十六里なのである。街道をたどれば騎馬でも五日はかかる。小源太なら、

まる一昼夜で走れるのである。

九

韋駄天の勇松が奥州から広島へ三百二十五里——約一、三〇〇キロを、三十六時間で走破したのは、夏であった。道すじも多分中仙道沿いを走ったので、箱根の嶮を越えることはなかった。明治三十五年、上野不忍の池畔を百二十周して世人を瞠目させたのは、秋ながら池の周辺なら、平地である。

小源太が走るのは冬であり、山道は雪に蔽われている、明治時代とは道路事情もちがう。和歌山から江戸への百四十六里を、二昼夜で走破するのは、マタギの健脚なくしては為せぬことであろう。

病床の頼宣には、それがわからない。とうてい駿馬の疾走を人が追跡できるわけがない、と思えたにちがいない。ただ、小源太は万事にふしぎな男ゆえ、あるいは駿府あたりでなら江戸より取って返す大膳に行き会えよう、さすれば吉左右だけでも念を入れて知ることが出来よう、そう感じて、

「行ってみよ」

と言ったのである。

お城をさがると、しだいに雪化粧の濃くなる濠端を、一気に裸馬で小源太は居宅に帰った。彼らの組屋敷は能登町にあった。

「お仙」

馬を大膳方の厩へ返し、庭つづきの垣根を躍り越えると屋内の妹を呼んだ。近親相姦で仙台領

内芋沢村の里人を曾て驚かせた、あの妹である。紀州家に召抱えられてからも、身近の世話はこのお仙に小源太はまかせている。

「何だえ兄さん」

カラッと縁側の障子を開け、

「まあ……きれいな雪」

東北育ちの彼女には温暖のこの紀州城下に住んでから、雪を見るのは久しぶりなのであろうが、小源太はそれどころではない。

「旅に出る、支度じゃ。いそぐぞ」

お仙はおどろかなかった。

「今すぐ？」

「そう」

「どこ？」

「江戸じゃ」

「あいよ」

たちまち納戸へ入って長持の蓋をあけ、身支度の品々を取出した。不時の出発には馴れた手つきだった。真新しい下帯に肌着、手甲、火打ち袋、柄袋、印籠、裏地を厚く縫った紺足袋、かんじき、それに穿き替えのわらじが二足。

いったん素裸になると下帯から小源太は股間を巻き締めてゆく。

「まさかとは思うが、今度ばかりは帰還がぐんと後れるかもしれん……もし師走になってオレが戻ってこんようであったら、お仙、かまうことはない。当城下を逃げ出せ。よいな」

「逃げる?……」

「くにへ帰るのよ、奥州へのう」

「わけを、くわしゅう言うておる暇はないのじゃが、かりそめごとと思うたらえらい目にあうぞ。本気じゃ、よいな」

「?」

身支度は早かった。戸外の雪の舞い様を見て、座敷内で蓑笠を着けわらじをはいて、

「では行ってくる」

「気をつけて兄さん」

パッと、戸外へおどり出した。

小源太は粉河を東する道をとった。

高野山口——橋本宿へたどり着く前にはもうとっぷり日は暮れていた。夜道をだが彼は疾った。携行食をたずさえてはいないが印籠の丸薬一粒は能く一日分の糧秣にあたいする。東の空の白むころには伊賀神部を通過していたという。おそるべき早足で、何と東海道鳴海の宿へ達したのは『月影』で疾駆する望月大膳より早かったのである。

桑名から佐屋へ海上三里を帆船に乗ってこの速さだった。以て小源太の健脚をうかがうに足るし、何事もなければ、多分、小源太の方が一足早く江戸に到着していたろう。

——好事魔多しの譬え。

岡崎城下を過ぎて五里ばかり、御油の宿場へさしかかった時であった。

数人連れの武士がいずれも、ぶっさき羽織に野袴、旅姿で江戸へ向って二列になって歩いていた。その後方を、従者に挟箱と長柄の槍を持たせた別の武士が歩行していた。かなりな身分であることは槍の鞘に光る三葉柏の定紋でわかったが、この槍持ち中間のわきを、疾風の早さで小源太が追い抜いたとき、中間は偶然、肩の槍を担ぎ替えた、その肘が小源太に当った。

アッという間もない。

中間はよろめき、たたらを踏んで、足がもつれ前方につんのめった。はずみで、槍の穂首が前の武士のえり首をしたたかに搏った。武士は愕いて後返ったとき、傍を小源太が駆け抜けていた。

瞬時にして武士は事情を察した。

「おのれ無礼者、待、待たんかッ」

小源太が中間をつきとばして逃げると見えたのである。

小源太は、

「こらえてけれ……急ぐ身よ」

言い捨てざまに、なおも走りつづけたからたまらない。

「狼藉者!……頼み申す、そ、それなる者を引っ捕えて下されい」

先方を行く数人へ、武士は大音に呼びかけた。小源太にとっての悲運はこの時に起った——

＋

数人で前方を往く武士の中に、居合の永里太左衛門がいた。

太左衛門は肥後藩士である。激越の士で、常々不言実行を旨とし、事に臨んで決断の早きことを信条としていた。

「狼藉者を押し捕えて下され」

後方で旅の武士がそう喚くのを耳にして、一斉に同行の面々は後をふり見たが太左衛門だけは

もう鯉口を切っていたという。切って、背後から駆けてくる狼藉者の足音を胸で目測していた。太左衛門は一行の先頭を歩いていた。二列の右側にいた。

小源太は気が急くので歩度をゆるめずどんどん肥後藩士たちに追跡し、こんどは突き当らぬよう、充分、間合いをおいて、呼びとめられても面倒とわきを駆け抜け追い越した。

——瞬間、

「こな糞ッ」

叫ぶや目にもとまらぬ永里太左衛門の抜討ちが小源太の胴を薙いでいた。

「あっ」

かわす間のあるわけがない。

遣い手は居合の達人。

小源太はひたすら駆歩に専念していた。物理的法則だけが此の場のいっさいを決めたのである。

「これは」

同行の一人が驚愕した時には血を奔いて胴と下半身が二つになり、小源太はそれでも刀を抜いて虚空にクルッと舞いあがっていた。肢だけはスタスタ前方へ走っていたという。

水もたまらぬ早業だったのである。

虚空に一回転して、

「無念」

絶叫し、小源太はまっ逆さまに松並木の根方へ激突した。その勢いで片手に把った刀がポキリと折れ、折れた刀身は空高く銀蛇のように飛んだそうだ。松の根方は、ぱあっと鮮血に染まり路傍の雑草がまるで打ち水を浴びたようにザーッと騒いだ。下半身は、斬られた位置から二十七歩、

スタスタ歩いて、はじめて足がもつれ、横にどたりと倒れたという。歩く腰でかんじきの揺れているのが妙に印象的だったそうである。血は意外とほとばしらなんだという。

こうして、月ノ輪小源太は最後まで不思議な死に方をした。

小源太が何者かは、東海道を往反していた旅人は遂に誰も知ることがなかった。わずかに槍持ち中間を随えた武士の傍を駆け抜ける時に、

「こらえてけれ」

と口走ったので、東北の者かと御油近在の者らは語り合ったが、何分、当人が二つ胴になってしまっては身許の明かしようもない。

——それにしても、

「水際立ったる早業かな」

槍持ちを随えた武士が後で一行と挨拶ののちに長大息したら、

「さにはあらず」

永里太左衛門はこう言ったという。

自分はこれまで重罪人の生き胴を試し斬りしたことあり、居合も両三度つかったが、今日ばかりはわが業前にて斬ったとは到底おもえず、死者こそ駆歩の達人に相違ない。恐るべきは彼の早駆けの執念である。はじめ「狼藉者」と声あったゆえ、てっきり『ごまのはい』と思い、召捕えんよりは道中する諸人のため斬り捨てんと瞬時に決断して抜討ちをかけたのであるが、もし、ふり向いておれば斬られたのは自分の方であったろう、それを証拠に、

「これを見られよ」

右腕をあげて見せたら、腋の下が肌着一枚を残して横一文字に断ち截られていた。いつの間に

抜いたのか、二つ胴になるとき小源太も又、一太刀むくいていたのである。

げにコワい人物を斬ったものよ、そう言って日頃不言実行の太左衛門が身ぶるいし、しきりに死者の偉材であった点を力説した。そこで槍持ちを随えた武士ともども、あらためて一同、胴と肢と二つになった小源太の遺骸を寄せ合わせ、土民を督促して近所の一寺へ運んで埋葬し、ねんごろにその霊を弔った。しかし死人が誰かはわからずじまいに終った。

小源太の上半身が激突した松の根方は、その後、日を経ても鮮血淋漓たる状態を変えなかったので、土地の者ら久しくこれを赤根の松と称し、時々、線香と華が何者かの手で供えられていたという。

さて小源太の遺骸が、寺でねんごろに葬られているころ、松の根方に近在の者らが群がり集まって、その鮮血と、肢だけスタスタ歩いた光景の凄まじさを興奮して語り合っていた。

「おらはこの眼でハッキリ見ただ」

老百姓はもう何百遍も同じことを群がった人々に語っていた。そんな人だかりのわきを、暮れなずむ西方から蓦地に疾駆してきた騎馬があっという間に駆け抜けていた。

十一

望月大膳が江戸にたどり着いたのは十一月六日払暁だった。

六郷川の渡しはまだ船が出ないので、ざんぶと河中におどりこみ、馬で泳ぎ渡った。

竹橋の紀伊邸に到着した時は、だからまだ全身ずぶ濡れだったという。

大膳はもう疲労困憊、まさに絶息の寸前だったが、鬼神の形相で声をふりしぼり、

「開門、開門……国もと紀州よりお馬掛り望月大膳、と、とのご沙汰にて急使とあいなりまかり越した……開門あれい」

しらじら明けの江戸の空三町四方にとどろき渡る大音をあげたのである。

竹橋邸は元和四年に幕府より下賜されたもので、同六年十二月に邸館落成し、御成門の作営美麗なること諸侯の江戸邸中ずい一と称された。隣りが後に水戸屋敷、更に隣りは尾張藩邸で、紀伊邸は北の端の大道に面し後ろは鼠穴といって半蔵門への往還に当ったという。

その表御門は二階建て櫓門式の大棟門で、梁の所々に総金冠木の彫物あり、左右の扉の上棟には長さ八間余の竜が彫られていたという。

払暁なれば、むろん少々大声で呼ばわっても固く門は閉ざされ、番卒の現われ出る気配はない。塀を躍り越えるには気力すでに尽き、馬また宿駅の駄馬である。

朝霧の立ちこめる中に、いつの間にか項を垂れ、手綱をしっかりつかんで鞍上にまたがったまま、背を丸め、大膳はタテガミに面をおしつけるようにして失神していたという。

馬だけが、朝の冷気に白く鼻息を吐き、時々、ひづめで地面を掻いていた。

海野六郎は頼宣の言った通り、この時分、紀州邸に身を寄せていた。奇しくも六日のこの朝、久能山へ向って出発の予定だった。

ふつう、江戸より駿府へ東海道をのぼる者は、江戸を発して第一日目が神奈川泊り、次が藤沢泊り。次が小田原、翌日箱根を越えて三島に泊り、翌日は蒲原か由比泊り。その翌日、はじめて駿府に到着する。都合六日かかる。

十一日に久能山に集結するには、この朝江戸を発つのではかなり強行軍なので、まして六郎は途次、鎌倉に立寄り天秀院さまにお別れの挨拶を述べるつもりでいたから、払暁ながら早や夜具に目覚めてそろそろ身支度にかかろうとしていた。

となりには猿飛佐助が六郎へは背を向け、まだスヤスヤ眠っていた。
ところが眠っているはずの佐助が、
「六郎」
身を横たえたまま、
「ひづめの音がしたようだな」
「ひづめ？　われらが耳にはいっこう」
「いいや、誰ぞ当屋敷へやって来た……この時刻に、よほど心急いて参ったと見える」
「？……」
「おぬし、様子を見に行ってやらんか」
見てこいと言われても、払暁とて、屋内はまだほの暗く、ましてや八千坪余の敷地の邸宅。どこをどう行けば表門に出られるか藩士でない身では、見当もつかない。
「無理を申すぞ御者」
六郎が失笑したら、掻巻をはねのけ、むっくり佐助が起きあがった。
「ど、どうした？」
「おかしい」
虚空に目をすえるように、一時、聞き耳を立て、
「六郎、行ってみよう……死んでおるのかも知れんが」
「ぬ？」
「支度をせい、早く」
いつだって佐助は他人の屋敷では身支度をしてある。その上で、ごろ寝している。

夜具の下に敷いていた刀を、下緒でたぐり寄せ腰に帯びると、早や、すっと立ちあがっていた。
「待、待て」
いそいで六郎も支度にかかった。そのあいだに六郎の弓と矢立てを佐助は両手に携げ、廊下に出、ちょっと耳を澄ましてから、雨戸の一枚をトンと蹴落した。戸外の明るさが寒気とともに二人の寝ていた小座敷に流れこむ。その時もう佐助は庭に降り立っていて、
「早う来い」
小走りに走り出した。あわてて六郎は足袋はだしのまま跡を追った。
どれほどかして。
邸内から塀をおどり越え、人影ひとつ見えぬ閑散たる朝気の中に静まった路上に、馬が野放しの如く路傍の草を食んでいるそばへ佐助と六郎は馳せ寄った。馬上には失神した武士がいた。
先ず手綱で馬の口を取って、
「誰人かは知らぬが気をたしかにもたれよ、コレ」
パッと馬の鼻づらを平手で打ったのである。
ヒ、ヒイン……
いなないて馬は後肢で立った。
何条たまろう、どうと大膳は鞍から路上へ転落し、ハッと正気にかえった。

十二

佐助が大膳を抱え起こした。
「紀州から来られたか？」

「……」
「コレ、気をたしかに持たれい」
ようやく大膳のトロンとした目に、わずかな生気が甦えって、
「う、うん……の」
「海野？……海野六郎ならこれにおるゾ。御者は、誰じゃ？」
憔悴しきって頬の削げた顔が、佐助とならんで首をつき出した海野六郎を、見詰めた。
だが、たかい咽喉仏がゴクン、と動くだけで、物を言う気力がない。
「佐助」
六郎が言った。
「おんしゃ、忍者なら気付け薬ぐらい所持しておろう？　のませてやってくれい」
「そうだな」
口では言ったが、ためらったのは大膳の憔悴ぶりに、なまじ奇効の有る気付け薬をのませては、一時的には正気にもどるにしても、あと、かならずバッタリ逝くのを惧れたからだろう。
「何をしておる……のませてやってくれ」
何日に紀州を発したかはわからない。が、これほど生死をかえりみず江戸へ駆けつけてくるのは、余程の大事を報らせたるために違いないのである。
ようやく佐助も決意した。
腰の印籠からすばやく丸薬をとり出すと、手のひらに三粒のせ、みずから口にふくんで、接吻するごとく大膳の口中に移した。
馬が、背後でまた、ひづめで路面を掻き尻尾を左右にふっている……

ぶるん、と鼻を鳴らし白い息を吐いている。
空は東方から少しずつ白み、紀州邸門の結構はその見事な偉容を現わしはじめたころ、
「おおッ」
「気がついたか」
佐助と六郎が同時に叫んだ。
抱かれていた大膳がむっくり起きなおって、
「お手前がたは？」
つい先程とは別人のように、きびしく面を引緊め、つよい眼で二人を見た。
「おぬしが紀州より早駆けでまかり越されたと察し出迎えに参った者」
「われらは海野六郎……おんしゃ、この名を呼んだように思うたが」
「お手前が海野どの？　……まことか？」
「まことも何も……」
「ならば匂い袋を所持めされるかな？」
「もっておる」
いそいで懐中をまさぐり、
「この通り――」
「わたしも念のため披露しよう」
佐助も出した。
望月大膳はワナワナとふるえる手で、自身もふかく懐中をさぐると佐助たちのとは括り紐の色のちがう袋を出した。そうしてわれとわが鼻先へそれを寄せて匂いを嗅いで、佐助ら二人の袋へ

顔を寄せ、慎重に嗅いでから、
「相違ござらぬ」
いちだんと眼が光った。大膳はじかに大地へ坐りなおった。そうして言ったのである。将軍家より看病のため板倉内膳正重昌が頼宣の枕頭に差し遣わされたとき、随行した安田玄庵なる典医の身許を至急あらためる必要があること。
もし調べて不審のすじあらばこの十一日久能山集結の計画は直ちに中止し不日を期すべきこと。さもないと『太陽の使者』ら一網打尽になりかねないことを。
「一網打尽？……なぜじゃい、誰がわれらにさようなことをする。お上か？……それとも老中土井利勝か？」
わずかに大膳は首をふって、
「確とはわかりかね申すが、おそらく御公儀かと」
「それで玄庵なる典医は？」
佐助がきいた。
「身もとを何のために？……」
「殿に毒を盛った疑いがござる」
「なに？」
「たしかなことは不明なれど、殿が仰せには、わが病いの平癒おくれたる理由他に思いあたらず、もし玄庵が巧妙に毒を盛ったるものなれば久能山に集結するとも事は早や破れたも同然……さればば次の手段を講じるまで各々が行方はくらますが得策ならんと……」
「――」

「申すまでもなくわが殿は大御所様ご実子……生前は膝下におかれご鍾愛あった御方にござる。たとえ公儀にそむき参らせ給うとて、よも毒を盛られようとはわれわれは毛頭思惟つかまつらぬが、それにしては、御病気の平癒なきは不審……よってこの儀、すみやかに吟味の上、万一、玄庵に疑いの余地あるようなればひと先ず、久能山集結の儀は」
「わかった」
佐助が言った。
「それで玄庵の住居は？」
「八代洲河岸とか」
聞くなり、
「六郎」
佐助はもうヒラリと馬の鞍上にとび乗っていた。
「医者のことはわたしが調べる……おぬし、とりあえずその仁を」
「おおッ」

無惨

一

当時、柳生宗矩は八代洲河岸に居宅を構えていた。

御殿医安田玄庵の住居とはものの三丁とは離れぬ場所である。

「鶏鳴一声にして目覚め、二声にして媾合すればそのとき孕みたる子、聡明なり」

と、中国の古書にあるそうで、用務に支障のないかぎり男女のコトでは宗矩はこれを実行していた。

嫡男十兵衛三厳もそうして生まれた子だったという。

その十兵衛はこの時分はまだ七郎といって十五歳。前髪の少年で、後世、人のいう隻眼ではなかった。十兵衛の生母は国もと柳生の里にいて、のちの刑部少輔友矩や飛騨守宗冬を生んだ側室お藤というのが、もっぱら江戸で宗矩の身辺の世話にあたり、むろん枕席にも侍った。

そのお藤を宗矩は抱いていた。

しっとり汗ばんで、彼女が喜悦のすすり泣きをもらして間なしに、宗矩また満足し、快い疲労感で爾後のうたたねをしていたら、地底の彼方をかすかな蹄の音が駆けすぎた。

その気配に夜具の中で目をさました。

すぐまた目をとじ、しばらく、じっとしていた。

お藤は発明な女だった。

宗矩の目ざめたのを察し、いち早く夜具をそっと起き立って隣室へ消えると、そこで着替をすませ、鏡台の前で髪を撫でつけてしのび足に廊下へ出、雨戸を一枚、二枚と繰った。

座敷に朝のさわやかな冷気と明るさが射し込んだ。

そう宏い屋敷ではない。

内弟子何人かが、雨戸のあく音に早くも宗矩の居室の雨戸をあけ、手分けして庭の掃除をはじめている。木刀の素振りの音を立て出した兄弟子もいる。

「――多門」

「はっ」

「申しつけることがある。これへ来てくれよ」

桜井多門が稽古着に木綿袴のまま、いそいで寝所にあてられた別棟の座敷へ馳せつけ、木刀をわきに、大地へひざまずくと、お藤の雨戸を開けた廊下へ宗矩が姿を出した。すでに不断着に帯をしめていた。

「七郎は？」

「ゆんべ竹千代君様のお相手を仰せつけられ、お城にあがられたきりまだ戻っておられませんが」

「やはりさようか……よい、ならばおぬしがひと走り出向いてくれんか」

「どこへでございます？」

「人ひとりを斬りにじゃ」
「！」
「こわいか？」
「い、いえ……」
桜井多門は弱冠二十になったばかりである。大和桜井の郷士の倅で、十六のころから宗矩の内弟子になって剣を修業してきたが、まだ真剣はつかったことがないのだ。
緊張に青ざめた面で、いっ時、いきをのんでから、
「だれを斬るのでございますか」
「蹄の音を聴かなんだか？」
「いつ、でございます？」
「きかなんだか？」
「――は」
「玄庵のところへ、ではまかり越すがよい」
「？……」
「行けばわかる。支度は何もせずそのままでよかろう……これを、使うのじゃ」
手に提げていた刀を無造作に、さし出し、
「これで斬って参るがよい」
「あの、……」
ゴクンと又、つばをのみ、その口がヒクヒクけいれんしていた。
「馬を斬るのでございますか」

「馬か……」
つぶやいて、ふっと宗矩はわらい、
「なるほど……泣いて馬しょくを斬ると申すことばがあったな」
「……」
「じゃが馬ではない。奥医、玄庵じゃ」
「？」
「行けばわかる。さ、これで早う――」
刀を把った手を、伸ばした。
多門はまだ半信半疑で、それでも膝行して両の手に刀を受取りながらじっと師の顔を仰ぎ見たら宗矩の目はまるで釣竿でも渡すようにわらっていたそうである。
その目のわらい方が、でも、かえって真実なのを多門に語りかけていたのだ。
多門は緊張と、怖ろしさに武者ぶるいした。しかし空唾をのんで、言った。
「たしかに。……このいのちに代えても多門、必ず玄庵どのを斬って参ります……」

二

桜井多門が悲壮な面持ちで出かけたあと、宗矩は庭に出て弟子どもに袋竹刀で、
わざ一本
の朝稽古をつけた後、縁側に坐して、月代を剃らせ髪を結わせた。
それから朝食の膳を居室に運ばせた。給仕は藤がした。しばらくして、騎馬の疾走し去る蹄の音が路上を駆けていった。宗矩はふだんと少しも変らぬ口調で、

「利三郎を呼んでまいるがよい」

藤にいいつけて、サラサラと茶漬を口中に流しこんだ。

「すぐにでございますか」

藤がきいた。

大和一円では朝は茶粥である。宗矩もはじめはそうしていたが、近ごろ、江戸の生活に馴れて茶漬を食するようになった。茶漬は、朝、かるく三杯と宗矩はきめている。まだ二杯目をお代りしたばかりで食事はおわっていないので、直ぐ呼ぶのかと問いなおしたのである。

「すぐじゃ」

宗矩は言って、大根の漬けたのをカリカリと奥歯で嚙んだ。

藤は座敷を出ていった。

少時して、

「お呼びでございますか」

庭さきに利三郎が跪坐した。彼もまた大和柳生村から宗矩を慕って剣の修業に来ている若者である。多門より年少で十八歳になる。

「玄庵の屋敷へ至急出向いて参れ。誰ぞ、力のつよそうなのを連れて行くがよい」

「くすし（医者）の玄庵どのへでございますか？」

「さよう」

「それなら先程、多門どのが出向きましたが」

「その多門の死体を引取りに参る」

「何と申されます？」

「藤」

「はい」

「代りを呉れよ」

無造作に茶碗をさし出した。

もどったばかりの藤が、丁寧に傍らに坐って素手で茶碗を受取ると、おひつ（飯櫃）のふたを両手であけ、茶碗へ、かるく三杯目を盛り、おぶ（茶）をかけて黙ってさし出す。

さらさら箸を鳴らし、うまそうに宗矩は食しつづけた。二度と利三郎へ口はきかなかったのだ。

利三郎は、思わずハッと面色を変え、それから黙って一礼すると庭をさがった。相弟子の又之丞という者を語らい即刻、玄庵宅に駆けつけてみたら果して桜井多門は玄関先に血に染まってコト切れていた。稽古着のままだった。片手に抜身をにぎっていた。

利三郎らには見おぼえある師の宗矩の差し替えである。

その場にいた玄庵の草履取りが、後刻、狼狽気味に説明するところによれば、多門を斬ったのは裸馬でその前に駆けつけた猿飛小天狗と名乗る浪人風体の者で、多門が玄関先で、

「柳生又右衛門が名代桜井多門、玄庵どのに所用あって推参した、出ませい」

大音に呼ばわったら奥座敷であるじ玄庵と、何やら密談する様子だった小天狗が、

「あぶない、出てはならん。出るとお手前斬られますぞ。わたしにまかせて頂こう」

言って玄庵の代り玄関先に来て、

「柳生が名代と？」

「そ、そうじゃ」

「まだ若いに……死に急ぐか？」

「何」
多門はまなじりを決し、
「ワレは何者じゃい？」
「猿飛小天狗……もどって宗矩につたえてもらおう。医師玄庵まだ口を割らぬが、おめおめその方ごときに斬らせてなろうか、とな」
聞くなり、多門は周章して二、三歩後にさがった。そこで刀を抜くと、
「止めだてするンならワレから斬ってやる。覚悟せい」
真っ向上段から撃ってかかった。
途端。
ヒラリと式台から小天狗の身が空へ躍ったと見る間もなく、丁と空中に白刃が鳴って、小天狗は多門の後方に降り立ち多門は背頸から血を吹いてドウと前へ倒れたという。
多門は即死だった。
いつの間に、どうして項を斬ったものやら、まるで白昼夢を見る心地が草履取りはしたそうだ。
小天狗は頸すじからなおも血を流しつづけて死んでゆく多門には目もくれず、再び座敷に入ると、
「見られた通り。これでもまだシラをきるおつもりか？……お手前くちを割らずとも柳生より次の刺客は必ず来る。そのときウロたえてももう遅すぎ申すぞ」
言って、
「さ、ありのままをお話しあれい」
膝詰め談判におよんだ――

三

玄庵は、それでも、かたくなに口を緘し、
「いくら問われようとも知らぬものは、知らぬ」
突っぱねたようだった。
それで遂に小天狗もあきらめ、
「強情なものよ。今にほえづら掻くなよ」
捨てぜりふで座を蹴起ち、再び裸馬で何処へともなく駆け去った――
そう、草履取りは利三郎に語って、多門の遺骸を戸板にのせるのを手伝ってくれた上に、
「今さきまではあんなに元気なお人であったに……お気の毒にのう」
しきりに同情して、利三郎と又之丞が遺体を戸板で担ぎ去るのを門の外に立っていつまでも見送ってくれた……利三郎は帰ってそう宗矩に報告したのだ。
「さようか……やはりな」
宗矩はかるく、うなずくと、念のため多門の遺体のそばに寄って、創口を検べた。その周囲には変り果てた多門の無惨な姿を、まだ信じかねる表情で相弟子たちが取り巻いていた。
きず口をしらべる宗矩の眼は鋭かった。検死はただが直ぐにおわり、
「ねんごろに弔うてやれ」
利三郎に言って、
「登城いたすぞ、支度を」
居間のお藤に命じた。

肩衣半袴の登城姿となり、さて刀を腰に差す段になって、
「そうじゃな」
何やら独りごとを言うと急に、常用の差料ではなく、多門が死ぬまでにぎっていた差し替えの方を、差した。
藤がけげんそうに傍でそれを見ていたら、
「七郎がもどってもこのことは申すなよ」
「アノ……お城へ登られるのではないのでございますか？」
「登城いたす」
「それで、お城の七郎どのにお会いなさいませぬの？」
「七郎は竹千代君さまがお相手、われらは別儀の登城じゃ」
言って、屋敷を出た。草履取りの弥助なる中間がお供についた。
すぐには江戸城へ向かわなかった。
寄り道してツカツカと玄庵宅の玄関先へ立ち寄り、
応対に出た玄庵の若い弟子が、
「柳生又右衛門お礼を述べにまかり越した。よくぞ秘事を明かさずにいて下された、かたじけない、そう申しのべて頂きたい」
「暫時お待ちをねがいます」
言って奥の玄庵にこのことを取次ぐと、
「そうか」
ホッと安堵の顔になって、喜色を目にあふらせ、

「よい、わしがご挨拶しよう」
みずから玄関に姿を見せた。安田玄庵この時四十五歳という。背は低かったそうである。
「これはこれは柳生どのか」
嬉しそうな笑顔で、
「さきほどはお弟子がとんだ災難にあわれ申したにもかかわらず、わざわざのお出まし痛み入ります。此処にては余りに失礼……ご多用の御身ではござろうが、先ずは、奥へ」
「しからばお言葉に甘える」
宗矩は玄庵についてあがり、座敷に通された。
そこで改めて双方かんたんな挨拶のあと、宗矩はすぐ、多門を斬った者の人相骨柄などをたずねた。
見たままを玄庵は告げて、
「それにいたしても執拗な男でございましてな、紀州様に毒を盛ったであろうなどと……毒を盛るのを誰が命じたか、などと……いやもう飛んでもない難題を、ハ、ハ、ハ」
「それで何とお答えなされた？」
「きまっておりますわい、知らぬ存ぜぬの一点ばり」
「そこへ多門がまかり越したので？」
「さ、さよう」
「うそをついておられるな」
「な、なんですと？」
「多門が傷は背後よりの抜討ちを、申すなれば不意を襲われておる。しかも刀にまだ手はかけて

おらなんだはず、なるほど死体は刀をにぎっており申したが、斬られる前ににぎったか、後でのそれかぐらい見破れぬこの柳生とお思いか？」

「！……」

「何故しからば、多門は背後より抜討ちにあわねばならなんだか。つまりは玄庵、そこもとが秘事を明かしたを多門にさとられ、その口を封じるため」

「な、なんという出鱈目を」

「黙れ、先刻、騎馬にて去った者の蹄の音のはげしさ、意気ごみよう……あれが秘事を知らされずに立ち帰る無念者の駆けざまと思うほどこの宗矩、うつけ者ではないわ。あれはまさしく、すべてを聴き出した意気軒昂の疾駆……よくも公儀の秘密を明かしたわ。不らち者、お上にかわり成敗してくれる」

言い果てぬうち、宗矩の手に白刃が閃いて玄庵は袈裟がけにバッサリ斬られていた。

これ又、即死だった。

四

柳生宗矩の、ここらが兵法者たるゆえんだろうか？

玄庵は、本当に秘事を明かしたかどうか実は不明なのである。

袈裟がけに左肩より心臓まで、一刀に斬りさげられ即死した彼の死相は、まことに心外そうに、カッと両眼を見ひらき、無念の憾みを口もとにあらわしていたそうだ。多分は宗矩の理不尽な抜討ちをうらんで見はった忿怒のまなこだったろうと後々まで遺族は柳生をにくんだという。

宗矩にすれば、だが、その辺の逆恨みは百も承知のことだったにちがいない。

もともと生かしておけぬ人物だったのである。駿府にて百万石をと生前、家康が言ったのを楯に、紀州に移されてからも頼宣はそれとなく幕府へ不満をもらし、

「この上は大坂城をたまわるべし。亡き大御所さま御遺志もあれば知行は百万石」

と、かげで主張してはばからぬ風聞は江戸にもつたわっていた。

この主張に、もっとも耳の痛いのは百万石の件で駿府まで祝儀を述べに往った土井大炊頭利勝にちがいないが、しかし大坂城は今、なお天下無双の堅城である。異図ある頼宣をたとえ東照神君の御実子なればとて、そこへ移すわけには参らない。それこそ悔いを千載に残す事態になるだろう。

といって、日増しに頼宣の壮図はふくらむばかりなら、禍根は未然に断っておくにしくはなかった。

かくて典医玄庵は密に意のあるところを老中より明かされたのである。将軍秀忠のむろん知らぬことである。

看病にと紀州へつかわされた板倉重昌とて、つゆ知らぬことだったろう。となれば、非情と恨まれようとも始末をつけておくほかはなかった。——これが一つ。

もう一つは、桜井多門を差しむけることで、幕府に、頼宣掣肘の意のあるところを猿飛佐助らにさとらしめ、以て久能山集結の挙を中止させる——集結を未然に防ごうという深慮も宗矩にはあったのだ。だから敢て多門を死なせにやったとも考えられる。天下を治めることこそ剣の奥儀——そう信じた宗矩のここらが真骨頂、でもあろうが本当は多門が背後から抜討ちを浴びたかどうか。案外これも玄庵を討つ口実だったかも知れない。

さて玄庵の斬られたのを知って大騒ぎする家人らを尻目に、刀を鞘におさめると矢の如く玄関

に宗矩は引き返した。

式台わきにひかえる弥助が草履を揃えるのへ、

「待たせたの。参ろうか」

足を挿し入れる挙措にふだんとまるで変るところはなかったので、まさか玄庵を斬って来たお人とは夢、弥助は思わなんだと後で驚いている。宗矩の肩衣半袴には一滴の返り血もついていなかった。袈裟がけに人を斬殺して、返り血の一滴も浴びないのは余程腕の冴えがなくてはかなわぬことである。

その足で城へ登ると、御用部屋で土井利勝に対面した。

「ふびんとは存じ申してござるが……ほかに」

宗矩は言葉みじかにそう言った。

さすがに利勝の顔色が一瞬、曇った。

「さようか……やむをえまいの。してその裸馬にて玄庵方へ乗りつけたと申す者、心当りはあるのか？」

「おそらく、真田の残党が一人かと存ぜられまするが」

「真田の？……もうずいぶん始末いたしたように聴いておったに……まだ生残りがおるのか？」

「は。あと四名ばかり――」

「斬れ。委細は問わぬ。全部、斬れよ」

「――は」

そのまま宗矩が退出しようとしたら、

「又右衛門」

利勝が呼びとめて、

「その方が申す久能山集結とやら、いったい、総勢いかほどの見込みじゃ？」

「内偵いたしましたところでは、およそ二十名――」

「二十？……」

「いずれも手練の浪人者か、怪力無双の豪傑のよしにござる」

「それで成敗いたせるか？」

「この宗矩、柳生一門の名にかけても、かならず」

「頼むぞ」

同じころ。

紀伊藩邸では佐助の還るのを待ちきれず海野六郎が中間らに手伝わせて、望月大膳を邸内にはこび込み、座敷に横たえて兎角の手当てをほどこしたが遂に佐助の還るまでに、大膳は絶命した。

おもえば和歌山から江戸まで、いのちをすりへらしての長駆であったが、なにぶん、国許詰めなれば若輩でもあり大膳を知る者は江戸詰めの家士には少なく、佐助が立ち帰ったとき枕もとには、ひっそり、海野ひとりが線香を立てて冥福を祈っていた。

どんな大任を望月大膳は果たしたかをさえ、江戸邸の家士たちは知らなかったのである。――

五

「おお、もどったか……」

結構贅美をきわめた大玄関に近いとはいえ、客待ちにも使用されぬ廊下わきの、陰気な部屋の

杉戸をカラリと開け佐助が姿を見せると、ホッとした面持ちで海野六郎は、
「この通りよ……御者ひと足おそかった……」
言われなくとも横たわった姿と枕もとの線香を見れば、他界した望月大膳の有様はわかる。
紺足袋に野袴、わらじこそ脱がせてあるが足袋には所々どろが付着し、袴の汚点にも馬もろとも河川に躍りこんで渡河した跡が歴然と感じとれる。袂にはほころびがある。
そんな扮身で、おのが羽織を面に蔽われ合掌してコト切れた様子は忠臣の最期というには余りにも哀れであった。
「……」
枕のわきには、わずかに故人の人がらを偲ばす拵えの立派な大小が並べて置かれてあった。
佐助は、黙って枕もとに坐ると、羽織を持ちあげ、死相をながめた。
死期を早めたのが佐助ののませた気つけの丸薬であることは明らかだった。
一瞬、瞑目して元通り羽織でかおをかくすと佐助は坐りなおり、掌を合わせた。部屋には小さな武者窓があり、冷気とともに晴れた冬空の陽光が斜に射し込んでいた。
それへゆるく線香の煙りがたゆたっていた。
「気の毒なことをしたが……今となっては詮ないこと。この大膳が死を無駄にせぬためにも、のう、かんじんのこと……典医の様子はどうであった？」
「やはり故人の申した通りらしい」
「ぬ。すりゃ紀州公に、毒を？」
「告白はいたさなんだ、最後まで。ただ、言葉のはしばしで察するに、おいのちを落さん意図で盛ったのではないらしい」

「何じゃと？」
「くだいて申すなら、お体を徐々に衰弱させ頼宣公に不羈な野心のおこらぬよう……ま、気力のおとろえを策したかと思える」
「ならば同じではないかい」
「まあな……しかし」
「どうした？」
佐助が腕組みするので、
「久能山集結、やはり中止せねば一網打尽か？」
「それが……わたしには解せん」
「？」
「宗矩め、わざわざ門弟を差し向けよった。典医の口を封じるためとはわかるが、わたしが既に玄庵に対面しておるのを承知で、何でさような真似をする？……口を封じようとは、つまり毒殺の企てが事実あったと明かすも同様ではないか。それほどのことを、あのキレ者の宗矩が気づかぬわけはない……それを思うとな、どうも解せん」
「なるほど、言われてみればそうじゃな……ふーん」
六郎も腕を拱いて、
「やはり中止とあいなるか？」
「それよ……わざと宗矩のやつ、わたしらに集結をあきらめさせるため弟子を差し向けたとも考えられる……とすれば、一網打尽の機会をなぜ故意に放棄いたすのか……ここで集結されては困る何ぞ裏の理由があるのか？　あるいはこう疑わせることこそが真の狙いか」

「ふーん」

「いずれにせよ、三好清海入道はすでに今ごろ駿府城下を徘徊いたしておろう……われら真田遺臣は全部揃うてもわずか四名、一網打尽というにはチト数が少なすぎる……果して、他にも匂い袋を持つ太陽の使者は居るのか、そもそも久能山に集結の真意は何か……こうなれば今一度頼宣どのにじかに確かめるほかはない、さすれば宗矩の肚の底も」

「佐助」

六郎がさえぎって、

「なるほどおん者の言うも一理ある。じゃがの、集結の日まであと五日ないのじゃぞ。いかにおんしゃが忍びの達者なればとて」

「やってみる」

「何？」

「ほかの得心のまいる手だては見当るまい。ともかくおぬしは、こうなれば今日にも久能山に向って出立してくれぬか。集結の場所は久能寺境内石段下と、使者には定められて居ったが、念のため、十一日巳ノ刻を期して久能山より二十町手前、江尻の宿駅はずれで落ち合うことにいたそう。もし、その時までにわたしが行かなんだら、久能山にのぼるのは中止し、すみやかに四散すること……よいな。どんなことがあっても境内へ登ってはならん」

「おん者が来たら？」

「百万の敵が立ちふさがろうとも、のぼるのよ」

「よーし。ならばそう決めよう、何としてでもこの六郎、それまでに三好清海を見つけようが……今ひとりの霧隠じゃ、佐助、あの才女はどうする？　そもそもあれは今、どこにおる？」

六

宗矩の、江戸城をさがってからの態度は、これ又ふだんと変るところはなかった。

十一日といえば、あと五日。

それまでに、猿飛佐助ら『太陽の使者』と称される面々を、できるなら久能山集結以前に、ことごとく斬らねばならない。

しかも太陽の使者たるもの正確には何名か、宗矩には実はまだわかっていない――

公儀大目付となり、いわゆる柳生直門の高弟を諸藩の武芸指南役として諸所に散らせ、そのひそかに提供する情報で隠密裏に天下の動きを察知して、大目付たる任務を宗矩が果たすのは寛永年間――三代将軍家光の代になってからである。しかも公儀隠密で最も活躍したのは実子柳生十兵衛だった。

いまその十兵衛は、七郎とて十五歳の少年にすぎない。いわゆる柳生直門の高弟も、多くはまだ未熟の内弟子、とても指南役などつとまる腕前ではない。

つまり太陽の使者たちをことごとく斬るには宗矩みずから、単身、これにあたらねばならなかった。わずかに片腕ともなってくれる人物は、尾張の兵法師範役となった柳生兵庫介ただ一人――

城からまっすぐ八代洲河岸の居宅にかえると、天は宗矩に幸いしてくれたのだろうか？――玄関に、長途の旅を来たものとおぼしい草鞋が脱がれてあった。

「だれぞ参っておるのか？」

玄関番の内弟子にきくと、

「ハイ。尾張より兵庫介どのまかり越されてございます」

「――来たか」

この時の宗矩の一瞬うれしそうな顔。

あんな勢いこんで、声に元気のみなぎった「来たか」は生涯きいたことがないと、後年の高弟馬木家六は述懐している。家六はつまりこの時の玄関番だったのである。

庭にのぞんだ別棟の奥の一室で、兵庫介はお藤と雑談しながら宗矩の帰宅を待っていた。子供も従えず、兵庫介は単身江戸へ来ていた。当時、兵庫介は宗矩より五歳年少の四十五歳。

「おお、もどられたか――」

お藤より早く兵庫介が廊下の足音で、ゆっくり、ふり返った。旅やつれもみせず、その面貌は色浅黒く眼に光あり、あの宮本武蔵が路上で行きちがって、

「久々に生きた人を見た」

と洩らした逸話にある通り、まことに堂々たる偉丈夫だった。

「よい時に着いてくれた」

宗矩は対坐すると肩衣のまま、

「藤、ちと二人で談じたい話がある。座をはずしてくれよ。それから、声をかけるまで誰も入れてはならん。よいな」

「ハイ……」

お藤が素直に廊下にさがり、

「兵庫さま……それではごゆるりと――」

挨拶して障子を閉め、衣ずれの音を曳いて立去ると、

「いやな役目を果たさねばならぬ時がいよいよ参った――」

宗矩から切り出した。

「あのことで？」

「さよう」

「何人？」

「確とした人数はわからぬが……狭川古弥太の申すところでは、およそ十五、六名かと――」

「新太郎はどうしておるのです？」

あらましの事情は兵庫介もすでに知っているらしい。

ついでながら、柳生石舟斎の第六男（末っ子）が又右衛門宗矩で、次男を新次郎厳勝といい、ちんばだった。

その新次郎の嫡男が兵庫介利厳である。したがって宗矩は兵庫介の叔父にあたる。

新陰流の道統はどういうわけか、石舟斎から新次郎を経てこの柳生兵庫介につたえられ、石舟斎には庶子ながら第一子たる新太郎にも宗矩にも授けられなかった。

宗矩はともかく、長男新太郎にはこれが不満で、何か石舟斎の激怒をかう行動に出たらしい。家譜の上では、新太郎の名は抹消されどんな剣道史にもその名をとどめていないのは、早くに石舟斎に斬られたか、勘当されたためだろうと思われる。

本篇に登場する新太郎は、したがってそんな長男新太郎の忘れ形見である。つまり宗矩には甥、兵庫介とは従兄弟の間柄になる――

「やっかいなはその新太郎じゃ」

宗矩は言った。

「古弥太の申すところでは、何としてもわれらの忠告に同意せず、そればかりか太陽の使者らと謀り天下をくつがえしてみせると、意気まいておるそうな――」
「天下をくつがえす？……ほう、するとあの気性はいまだにあらたまっておらんようですな。それで彼はいま、どこに？」
「それじゃ」
宗矩はふと眉をくもらせた。

七

尾張の柳生兵庫介は、晩年には、あまり但馬守宗矩と仲がよくなかった。
宗矩が大目付となり、万石以上の大名となるに及んで、ほとんど交際を断ったともいわれる。
その理由は、不明である。
一説には兵庫介の姉が、朱馬なる韓国人の妻になったのをいたく宗矩が差別したことを、兵庫介は悪んだからだと、これは大和柳生の古老たちが昭和のはじめまで言い伝えたことであるが、真相は今となってはわからない。
わかっているのは、元和のこの当時には双方に感情の行き違いはなかったこと、むしろ柳生一門の結束に燃え力をあわせて太陽の使者らに立ちむかったことである。
これには兵庫介の側にもう一つの事情もあった。
兵庫介は、一時、加藤清正に召抱えられた時代がある。若いころの兵庫介は激情家で、圭角、はなはだしく、つむじを曲げると手のつけられぬ横着者にもなったらしい。
それで清正に仕官の決まったとき、石舟斎は、三度まで不らちの所業ありとも死を賜わること

はお赦しあるようにと、誓紙を交した上で、仕官をゆるした。それでずいぶん目にあまる行ないはあったが清正は大目に見て、敢て兵庫介を咎めなかった。
兵庫介は内心これに感謝し、清正が亡くなると肥後熊本を浪人したが、そんな彼を福島正則が高禄で召抱えようとした時も、
「士は二君に見えざること」を口実に謝辞している。のちに尾張の筆頭家老（犬山城主でもあった）成瀬隼人正の強っての推挙で尾張藩の兵法師範となったが、おりあるごとに肥後守清正の度量の大きさをなつかしみ、名古屋城の天守の美麗さ、濠の石垣を眺めては、
「肥後守どのの築城になる此の城に再び主君を戴くも不思議な縁かな」
と述懐したという。
そんな兵庫介だから、清正の息女が紀州頼宣に嫁しているのに無関心ではいられなかった。
元来、尾張の徳川義直と紀州の頼宣は仲がわるかった。これには同じ兄弟でありながら、幼少時分より家康は頼宣のみを熱愛し、義直をうとんじたので義直の生母が頼宣の母養珠院をにくんだことも原因しているが、そういう義直に仕え、頼宣の安泰をはかる兵庫介の胸中はかなり複雑だったにちがいない。しかし太陽の使者を斬り、頼宣の野望を挫くのはつまりは清正の息女を安んじたてまつることになると考えて、いわば旧主への恩義に今むくゆるために宗矩を扶けようとしたものだろう。
――が、ひと口に宗矩を扶けるといっても、果して猿飛佐助らをことごとく成敗できるかどうか。まして異端者新太郎が使者の側にはいる。その人数さえ不明なのにこちらは宗矩、兵庫介のただ二人。他はせいぜい古陰流の狭山古弥太がいるばかりであり、その古弥太もじつは古陰流柳生新太郎に心情的には与している。

太陽の使者をめぐる闘いはそういう意味では、同じ柳生一族で新陰流と古陰流の優劣を決する暗闘でもあるわけだった。

新太郎の所在を、先ず兵庫介がたずねたわけである。

「残念ながら、それが今、どこにおるのやら……」

「わからぬと申されるので？」

「古弥太にたずねたところいっこう存じ寄らぬとばかり」

「叔父貴」

兵庫介が語気を変えて、

「集結は十一日でしたな？」

「さよう……九ツ半が目途とはおもうが」

「ではもう日数もござるまい。早う支度をなされては？」

「よいのか？」

せっかく江戸に着いたばかりである。それをすぐ又、旅立たせるのはさすがに宗矩にはためらわれたのだ。

兵庫介は苦笑した。

「たかが尾張からの往復……この身さほどなまくらにできておるとお思いか」

言って、ふと、こうつぶやいたそうだ。

「今更、この身をいたわればとて長生きいたせるかどうか——」

さりげない言いざまだけに、かえって、悲壮な気魄がこもっていた。

「そうだの」

宗矩もかるく受けて、目と目を二人は見交した。

「では支度をいたす」

すっと宗矩は座をたつと、

「藤」

廊下に出てお藤を呼び、

「七郎はまだか？」

「はい……まだ戻ってではございませんけれど」

「旅に出る。身支度の用意は、してあろうな」

「あなた」

「支度じゃ。そもじはこれへ参り兵庫介の話し相手なりと——」

言いながらお藤とすれ違いに廊下を居間へ消えた。

晴天だった空が、いつの間にかどんより暗雲に蔽われ今にも雪でもチラつきそうな気配。——どこかの部屋で、低く、桜井多門を弔う読経の声がしていた……

八

ふつう、東海道をのぼる者は、朝、江戸をたって品川で休息し、心親しい者あれば大森辺まで見送りについてくる。

ここで酒など酌み交して別れてから、六郷川を渡り金川の台に入り、程ヶ谷で第一夜のわらじの紐を解くのがねらいだ。

翌日は戸塚、藤沢、平塚、大磯をすぎて小田原泊り。翌日、箱根を越え三島もしくは沼津泊り。

そして次の日の夕景、江尻か駿府（静岡）へ着くとしたものだった。都合四日の旅程である。
　宗矩と兵庫介は十一月六日八ッ半（午後三時）すぎに八代洲河岸の柳生邸を発った。
　冬は日が短い。午後五時大森を過ぎる時分にはもうとっぷり日は暮れ、旅籠へ足をいそがせる旅人が、まばらに道を行き交う程度である。
「おぬしには酷かろうがせめて金川へはいっておらんと」
「何の、身共が疲労への斟酌は無用。夜中のほうがいっそ道はいそぎやすい」
「それもそうじゃの」
　二人ながらぶっ裂き羽織に道中袴。宗矩はやや大き目の朧ろ富士の大編笠に、干餉の網袋を腰へ結びつけ、兵庫介は藺笠に同様のいでたちだった。
　背丈は兵庫介のほうが高く、体軀も頑健、大跨に悠然歩をはこんだ。
　宗矩はきわめて軽やかにすー、すーと歩いたそうだが、ゆっくり歩くと見えてたちまち他の旅人を追いぬいていたという。
　ちなみに言えば、兵庫介と宗矩が六郷の渡しを特に船をやとって過ぎたころ、同じ東海道程ヶ谷の宿駅を通過して、武蔵相模の国境にある焼餅坂を下っている屈強の浪人がいた。頭を丸め、矢立と弓を携えていた。海野六郎だった。
　更に同じころ、はや箱根をすぎ、三島の宿で女郎と戯れている破戒坊主さながらな豪傑はいわずと知れた三好清海入道である。清海入道には三人、戦場生き残りであると一目でわかる牢人者が行動を偕にしていた。いずれも匂い袋を持つ面々だったが、このことは別の機会で述べよう――
　金川本牧のかたえに弁天の森あり。そこを過ぎて入山川の橋を渡ると、浦島観世音の常燈が石

燈籠のうちでほのかな明かりを夜道に洩らしている。
　その常燈の十数歩、手前に来た時、期せずして宗矩と兵庫介は同時に歩を停めた。
　両者は笠の頭を揺らして相互にかおを見合った。
「古弥太ではあるまいかの？」
　兵庫介が言った。落着いた声だった。
「さようではあるまい」
　低く応えながら宗矩はこのとき鯉口を切った。
「……なるほど」
　以心伝心、にやっと藺笠の中で白い歯を兵庫介は見せてこれまた刀の反りを返していた。
　二人は再び、肩を並べ、やや間隔をひらいて歩きはじめた。
　常燈の寸前に来たときだった。
　街道わきの暗闇から、黒い影が二人、現われて、
「チト物をたずねる」
　一人が言った。仄かな明かりにうかんだ彼等も同じぶっ裂き羽織にたっつけ袴、旅装の侍である。ただ笠はかぶらず、一人は兵法者ふうな総髪。今一人は月代ののびるにまかせた頭髪を束ねて、背へ垂らしていた。旅装でなくば山賊かと見紛う異様な風体である。
「お手前ら」
　言葉づかいは丁寧だった。
「かかる夜中に道中をいそがれるには仔細がござろう、よろしくばその仔細、明かしてはいただけまいかの？」

「いとやすきこと――」

宗矩が言った。笑いをふくんだ声にきこえた。

「お手前がた同様、久能山へまかり越すためにござる」

「われらと同様と？」

「さよう」

「――ならば姓名をお明かしあれ」

「そう問われる貴公らは！」

「……」

「なぜお答えにならん。さきに返答あるが順序とおもうが」

「――」

「兵庫」

「ん？」

「かような唖者を相手では夜が明ける……参ろうか」

「そうよな」

笠でうなずき合って、立ちはだかる両名の中央を、

「ごめん」

声をかけ通り抜けようとしたら、

「待った――」

彼方の闇にもう一人、大手をひろげて立ちはだかった影がある。

「姓名をうけたまわろう……さなくては通すことまかりならず――」

九

「どう致す？」

兵庫介がきいた。

「通るほかはあるまい」

と宗矩。

常燈の他に灯はなく、大手をひろげて立つ武士の容姿は、暗がりに透かし見るよりないが、前にいた両人とはちがってもとは名の知れた武士らしいのは、その言葉づかいからうかがえた。

「姓名を名乗っていただこう」

と又いった。両手はひろげたままであった。

「柳生又右衛門」

宗矩はこたえたのである。

「柳生？……もといずれの家中におわす？」

「もとじゃと？　ふざけたことを申す……太閤秀吉に隠田の罪を問われ、大和柳生を追放されて以来われら柳生一門、兵法を以て天下をこそ相手にいたせ、いずれの大名にも仕えたおぼえは、ないぞ」

これは本当だ。兵庫介が加藤清正に仕官したのもあくまで客分としてであり、扈従の家来ではない。そもそも奈良春日の神職をつとめて以来、柳生氏そのものが大和の豪族であり、一個の大名だった。

相手は一瞬、黙りこんでから、

「ならばその編笠を、とって頂こうか」
「これは笑止。姓名を名乗らせたうえかぶり物をとれ？……汝、道中役人か？」
「――」
「その方こそ、名乗れ」
「もと蒲生氏郷が家来日下新兵衛」
朗々と言って、
「かぶり物をとってもらおう」
さかやきを見れば浪人か然らざるか、髷のかたちで歴然である。
「取らぬと申したら？」
「通すこと相成らん」
「通ると申したら？」
「……斬る」
「匂い袋を所持いたしてもか？」
「ぬ？」
ひろげていた手が、おりた。いぶかしそうに、
「ならばお手前がたも、駿府へ？」
「駿府ではない、久能山へまいる」
聞いて、ホッと背後にいる二人が緊張をとき、安堵する気配が感じられた。
「それならはじめにそう申していただければよろしいものを」
つぶやきながら馴れ馴れしく近づいてくる一人へ、

「何故かような場所で詮議を？」
兵庫介が問いかけた。
「警戒のためにせよ、久能山へはずんとまだ隔りのあるものを」
「さよう、われらもさよう存じてござるが、公儀取締りの者われらを一網打尽にせんとて久能山にまかり入るとの報らせあり、よって、ここで監視せよと」
「だれが監視を命じ申した？」
「それは……」
ちょっと言いよどんでから、
「お手前がたを久能山へ召されたと、恐らくは同一人かと――」
「般若面でござるな？」
宗矩が言った。
「おォ……」
すっかり、これで彼らは安心したらしい。
「まさに般若の武士にござった」
「――武士？」
「さよう、この春われらを召されたみぎりは、同じ般若にても女人でござったが此度は――」
言いながらツカツカと宗矩のそばに来て、
「初めて御意を得ます。拙者もと大野修理大夫が家中にて管原勘右衛門」
「身共は藤島喜兵衛――」
もう一人も名乗った。

宗矩と兵庫介は笠の中でかおを見合った。クルッと、宗矩はもとの蒲生氏郷の家来へむきなおり、

「念のためお手前の匂い袋を……」

言ううしろで、兵庫介は、

「申しおくれてござるが、拙者尾張に住居いたす柳生新介……」

どちらも話し方はいかにも穏和だったしみじんも殺意のごときものはこもっていなかった。しかし、言いおわらぬうちに背中を合わせて宗矩と兵庫介、同時に、それぞれ相手へ居合い斬りを仕懸けていた。

バサッ、

バサッ

濡れ手拭いを叩きつけるような音が夜陰に谺した。

「おのれ」

「や」

「何を」

めいめい一言、短い叫びをもらしたそうだ。パチンとその時にはもう兵庫介もどちらも鞘に刀をおさめていて、

「まいろうか」

「よかろう」

まだ倒れきっていない三人をその場に残し、あるき出していた。

「叔父貴」

しばらくして兵庫介が言った。

「思ったより手ごたえのない奴らですな」

「さよう……しかし、これからはわかるまい」

「まだ、出ますか？」

「多分な」

十

「それに致しても」

しばらくして又、兵庫介が言った。

「さいぜん、叔父貴がハッキリ柳生と名乗られたときは肝をひやし申したが、とんと怪しむそぶりのなかったのは、不可解」

「まこと永の浪々いたしおる証拠であろう……身共はそう見た、誰が将軍家兵法師範であろうと流浪の身にとっては」

「さような意味で拙者申しておるのではないので」

「？……」

「新太郎でござるよ。柳生と申さばあの三人の誰ぞは新太郎がことを口にいたすかと存じたに」

「なるほど。すると、般若面の武士というが新太郎かの」

「多分は――」

程ヶ谷の宿は街道に沿うて民家が建並んでいる。ほとんどの家に灯は消えている。

野良犬が二、三匹、歩行のそば近くまで胡散臭そうに寄って来て、しばらく、前後を一緒に進

んだが、兵庫介が無言のうちに気合をかけると、跳びさがり、尻尾を巻いて忽ち退散していった。
「ここでは出ぬようですな」
宿場の集落を出はずれたが待ち受ける者の気配はなかったのだ。
しばらく往くと農家の集まった村落があった。そこから道は左へ折れ、坂になっている。権太坂と土地の者は呼んでいる。その坂道を登るとやがて松の林に入り、鼻をつまれてもわからぬ漆黒の闇。幾分、二人の歩度はゆるくなったが停止することなく林をぬけた。
星のきらめく夜空が再び頭上にひらけた。
「兵庫」
宗矩が言った。
「いま歩きながら思うたが、尾張どのはこんどのことはいささかもご存じないのか？」
「紀州どのの企みを？」
「さよう」
「多分な」
ふっと嗤って、
「ご存じならばわれらに暇は下されまいかと」
「どういう意味じゃ？」
「いっそ、陰謀挫折して紀州公の失脚あるをお望みではないかと……」
「それほどお二人は仲がわるいか」
「見受けたところではの」
彼方の暗がりに黒く地蔵堂の影の浮かぶ手前にさしかかった。どちらからともなく歩度をゆるめた。

「出ましたな」
兵庫介が言った。
「こんどはチト手ごわそうな……」
「ひとりらしい」
宗矩が言った。
その眼にくるいはなかった。
地蔵堂の前をまさに過ぎようとするとき、意外や地蔵堂とは街道の反対側から、一つの影がのっそりと現われ出た。
虚無僧姿である。
「——お待ち申しておった」
行く手にゆるりと立って、
「新陰流柳生又右衛門どのと見受ける」
手に提げたのは尺八一本。ふくさに包んだ脇差は抜こうともしない。
「お手前は？」
宗矩の語気にも自ずから気魄がこもっていた。
「それにおわすはどなたかは存じあげぬが——」
兵庫介へ、天蓋をゆらして、
「それがし鹿島念流卜部主水正と申す。かねて柳生又右衛門どのへ一手、手合わせ所望でござった……お手前にはかかわりないこと、お怪我があってはならん、お退りねがおう」

ずいぶん沈着な口上である。
「さようか」
あっさり兵庫介は首肯した。
「いかにもこれにて見物いたすが、ひとつ――」
「？……」
「なぜわれらがこれへまかり越すをご存じあったの？」
「夜中とてここは天下の大道……人は通り申すわ」
「身共らの前に人が通った？」
「お手前――」
虚無僧の声は苦笑していた。
「かかわりない仁でござろう……それがしの用あるはこの又右衛門どの一人、おさがりねがおう」
「彼の申す通りよ兵庫」
宗矩は言った。
「おぬしは退っておれ」
鹿島念流卜部主水正といえば、当時、一刀流小野治郎左衛門（宗矩と同じ将軍秀忠の兵法師範）さえ三本に二本は取られたといわれる希世の剣術者である。むろん兵庫介もその勇名は聞いている。でもまさかと怪しみ、あえて正体をただそうとしたのだ。
どうやら宗矩の様子で、卜部主水正その人にちがいないと察しがついた。兵庫介は黙って、数歩後退し、それから、わきへ移動した。

宗矩は抜刀した。
われから宗矩が刀を抜くなど、兵庫介ははじめて見ることである……

十一

「ひとつたずねる」
宗矩は星眼につけながら、
「おぬしも太陽の使者か？」
「ハテ何のことかの」
天蓋をとるでなく、周囲は暗闇。おそらく心眼によらねば宗矩の剣尖は見えないだろうが相変らず尺八だけを左手に、静止する卜部主水正の容姿からは、わきで見ている兵庫介さえ、背すじの一瞬さむくなる妖気がただよっていた。
剣の立合いには、互角の別れというものがある。
敵の死命を制するばかりが勝負ではない。剣を交え、程よいところで双方が刃をひけば、第三者には互角と見えよう。じつは一方がその剣の妙技、気魄に圧倒され手も足も出ないのを見越して、心理的に勝った側が太刀をひけば、
（参った）
心で叫びながら相手も太刀を斂める。
第三者にはこれも互角と見える。
精神的にはだがズタズタに斬られたも同然の敗北なのを当人は知っていよう。そういう現実には無傷で、心理的にはまったき敗北を達人ほど相手にさとらせて刀をひくものだ。これはだが、

いうところの『互角の別れ』ではない。
真の互角は、もう一歩を踏みこめば双方とも血をふいて倒れる——寸前に、互いが互いを譲り、いたわり合うものである。勝負のむなしさを真に悟り合ったものの、それは別れだ。
だが、断じて互角の別れではひきさがれぬ場合が、武士にはある。主命によって闘う——上意討ちがそうである。これはもう何としても斬らねばならぬ。生かしてはならぬ。この「ねばならぬ」で闘うときほど、人間、凄絶なものはない。
卜部主水正は太陽の使者の一人かと念をおされて、何のことかと、とぼけた。とぼけるのは使者たることを明かしたも同然で、つまり鹿島念流と新陰流の手合わせを名目に、その実、公儀師範役柳生宗矩を、主水正は斬るためここに待機していたと見るべきである。
——となれば、互角の別れはあり得ない。
宗矩がそうであるように主水正もまた、宗矩を斬らねばならない……
ようやくそう察して、傍観の立場にいながら我が事のように兵庫介は緊張した。いかな宗矩にも卜部主水正に勝る予想は立てられなかったからである。
卜部は、鹿島の太刀の名門である。あの剣聖塚原卜伝も卜部の出だった。
（鹿島神宮の座主卜部覚賢が卜伝の父である）
主水正はそんな卜部一族の中でもすこぶる性温和で、和歌をたしなみ、風流を友として世を捨てた剣人ながら、刀槍の妙を得、とくに槍をつかわせれば天下一と称された達人である。ただこの人の難は、弟子を取ることを嫌った——というより、当時、名誉と利益のためには人をえらばず教える兵法者の多いのを憾んでか、たとえ将軍、大名でも辞を低うして教えを乞わねば教授しようとしなかったし、
「そもそも武技は教えて身につくものにあらず。本人がその気で苦心鍛錬せねばただの手なぐさみにすぎぬ」
と言い、将軍家に対しては、
「天下の将軍職たるもの小手先の技など学んで何になろう。自らは剣を把らずとも能き家来を持てばよい」
と笑い、その招聘をことわってしまった。為に柳生宗矩と一刀流の小野治郎左衛門が師範になったと迄いわれている。
浮世を捨てたとうわさされたのはこの頃からで、捨てるも何も、もともと、世の毀誉褒貶など当初から眼中にない剣術者だったのだ。
それだけに、
「ならばその方将軍ご師範役にも勝てるか？　勝ってさよう申すのか」
と或る人物に問われたとき、
「先方にて相手仕るとあらば当方はいつにても」
立合ってごらんにいれようと嗤った。
そこで、一日、幔幕をめぐらした吹上の庭で治郎左衛門との御前試合を行なった。結果、三本のうち二本までを卜部主水正が取り、治郎左衛門はこの敗北が因で、気が触れ、ついに狂乱に及んだという。
それほどの主水正である。
彼にすれば、吹上のお庭での試合のとき、一刀流に勝ったあと新陰流の宗矩との立合いを所望

したのに、治郎左衛門の敗北に気色を損じた秀忠が中座(ちゅうざ)したのでこれを果たさなかった。

今あらためて、あの時の決着をつけてみようか――そんな思惑もあって主水正は此(こ)の場に現われたともおもえる。だから敢て尺八で立ちむかうのであろう。自信もあるのだろう。

が、宗矩の立場は、今は新陰流の名誉のためではない。天下のために何としても主水正を斬らねばならない。

問題は、それが出来るか、どうか……

十二

「どうした？……なぜ打ちこんで参らぬ？」

天蓋の声が、宗矩をあざ笑うように、

「おぬしの新陰流……ずいぶんと用心深いが、それでは生きた人は斬れまい」

「――」

「ほう、逃げるか」

「逃げは、せん」

「ならば何故ふみ込まん？」

「――抜け」

「尺八では不満か」

「抜け。尋常の勝負をいたしたい」

暗くて、虚無僧姿さえぼうと黒ずんでしか見えぬのは、いっそ底気味のわるいもので、斬るなり退くなり、いっさいを心眼にたよらねばならぬことでは宗矩とて主水正と変りないわけだが、この場合、いっそ真剣を突きつけられる方が殺意を感知しやすく、相手の動きも的確に心眼で捉(とら)え得る。

なまじ刀を抜かぬ方が、つまり賢明なので、宗矩をあなどって尺八を構えているわけではないことを、ようやく兵庫介はさとった。

してみれば、この勝負、早や主水正は優位に立っている。一枚、役者は上とわかる。

星眼の構えをとったままで、心なし、じりじり宗矩の後退しているわけが、兵庫介にも読めてきた。

兵庫介は決意した。

暗くて定かには判じ得ぬにせよ、このままでは宗矩に勝ち目のないのを察したからだ。

方法は他にない。

「叔父貴」

路傍の暗がりで兵庫介は抜刀して、

「わしが手伝う」

「ぬ」

「このままで叔父貴、死ぬるぞ。手伝う」

「ほ、……二人同時に懸ってくると？……おもしろい」

わらう余裕さえト部主水正にはあった。

「よろしかろう、どこからなりと斬りこんで参るがよい」

言いながら、はじめて、右手(めて)で腰刀の袋を解く。

「今じゃ」

兵庫介は叫んだ。
「懸れ叔父貴」
宗矩はだが微動だにせずにいた。
星眼で停止のまま、大編笠の中で眼を、閉じただけだった。
凄惨な勝負はかくて開始された。
兵庫介は主水正の側にまわったのである。主水正の殺気を写し、それを刀にあらわして宗矩へ迫ったのである。こうすることで、主水正の動きは宗矩の心眼にうつる。むろん、へたをすれば殺気によって宗矩は兵庫介を斬ることになるかも知れぬ。大きな賭けだ。いのちを張った賭けであるが、これ以外に、宗矩の主水正に勝つ手だては、少なくとも兵庫介には見出せなかったのである。
さすがは主水正だった。
「これは」
愕然と、路傍の闇に兵庫介を透し見て、
「おぬし、死ぬる気で来るか」
と詰った。
刹那。
宗矩の星眼が大上段にかわり呼吸も溜めずに足は大地を蹴っていた。
「たっ」
裂帛の気合が兵庫介の口唇をほとばしった。
第三者には、斬り結んだのは兵庫介と宗矩と見えたにちがいない。それほど両者の気魄はすさ

まじく、宗矩は兵庫介を、兵庫介は宗矩だけを狙って斬りつけたと見えていた。
妙技は、ここに発揮された。
兵庫介めがけて撃ちこんだ刃を半ばでヒタ、と止めるや一閃、身をひるがえし斜に飛んで宗矩は天蓋へ斬りつけていた。兵庫介はその宗矩の大編笠を、顔面スレスレに二つに切り裂いて、ピタ、咽喉もとで剣尖を止めスーッと手前に太刀を引いていた。
どうしようが主水正にあったろう。
はじめから二人が主水正に挑んだのなら、いかようにもあしらい方はあったかも知れぬ。だが敵同士相討ちせんとする殺気を、いかに鹿島念流の奥儀を以てしても適切に看破しようはない。ハッと心を立てなおした時にはもう、新陰流秘伝——天狗抄飛切りの術が天蓋の頭上から、打ちおろされていた。
頭の頂上より鼻すじを通ってのど仏まで宗矩の刀は届いていたそうである。
主水正は右手に抜刀し、左手は尺八を握って少時、大地に突っ立っていた。ずいぶん経ってから、どうと後へ倒れたそうだ。
倒れてはじめて、天蓋は、双つの笊を合わせてあったのが離れるように、コロリと、左右に分れていた。

十三

勝った宗矩も、兵庫介もすぐには声が出なかった。
どちらも太刀をひっさげたまま、呆けたように、少時、立ちつくし、長い溜め息を吐いてホッと顔を見合わせた。

「怪我はおぬし、ないか？」
問う宗矩の大編笠が無惨に裂けている。
「身共は無事じゃが……叔父貴は？」
「どうにか」
ようやく我に返って足下に横たわる死体を見おろし、
「……惜しい兵法者を、死なせたか……」
「そうかも知れん、しかし尋常では叔父貴に勝ち目はなかったぞ」
「――そうよの」
宗矩はまだ刀を鞘におさめず、片手で背に立ててうずくまり、主水正の死相を覗きこんだ。星空に鎌のような弦月が懸っていた。
おぼろなその月明りに、天蓋の割れた下で蠟人形のごときれいな老人の死顔だった。眼は半眼にあいていた。脳天からあごまで一条、真紅の線がはしっている。口辺に無精ひげをたくわえ、わずかに口を開いた前歯が、一本、欠けているのは白刃に切り下げられたとき飛んだのか。旧からのものか……
忿怒の形相ではなかった。むしろ死を観念した死相なのが宗矩には救いであった。尋常の立合いではなく、兵庫介の必死の、或意味では卑劣な撹乱作戦によりながら、直前、死を悟るとはさすがはト部主水正というべきである。宗矩は片手拝みに、瞑目して、
「兵庫介」
「？」
「手をかしてくれよ」

さすがにこの寒夜、屍体を放置するにしのびなんだ。宗矩は刀をおさめ、兵庫介と二人して亡骸を地蔵堂の傍方に安置し、手さぐりで四辺の落葉を掻き集めてその亡骸を蔽った。右手ににぎられていた脇差を、もぎ取り、袋の鞘におさめたのは無論である。尺八はにぎらせたままでおいた。
なお半分に割られた天蓋は、あらためて顔へかぶせ落葉を蔽ったのである。
そうして、ひざまずくと今一度、瞑目合掌した。兵庫介は背後に突っ立ち黙ってそんな宗矩の様子を見つめていた。
「参ろうか」
「叔父貴」
「む？」
「ずいぶんと、こたえたようじゃが……よいのかあれで？」
再び歩き出してから兵庫介が言ったのは武蔵相模のあの国境の焼餅坂を下りはじめたときである。
「よいとは？」
宗矩は前方の裂けた大編笠をまだかぶっている。
「主水正のあつかいよ」
兵庫介の声にはありあり不満の色があった。
「叔父貴にも似合わぬ……新陰流があれでは哭きはせぬか」
「？――」
「人を斬って目ばたきするようでは、仏になれぬ……日ごろそう申していたは誰でござったか

な」

　剣はしょせん非情なもので、非情に徹しきらずなまじ剣を遣ってはならぬ、人を斬るからには斬って目ばたき一つせぬくらいな冷徹さを保つべし、それで斬れれば相手も浮かばれようというのが宗矩の――いや新陰流の剣理で、かねてこれを宗矩は持論ともしていたのである。

　それがあんなに情にもろい振舞いでは……兵庫介はそう言いたかったのだろう。

　宗矩は応じなかった。黙々と歩いた。

　兵庫介もおのれに自問するごとく何やら口中でボソボソ言っていたがそのうち、黙りこんだ。左肘に兵庫介は傷を受けていた。主水正にか、宗矩のかすめた一閃によるのかはわからない。だがいずれにせよ、兵庫介も生死の境をあの刹那に越えたのである。その興奮がある。落葉を掻き集め、瞑目合掌する宗矩の方がその意味ではもう冷静だったことを、焼餅坂を下りきるあたりで兵庫介も悟ったので、口中のつぶやきになったのだろう。

「のう兵庫」

　しばらくして宗矩が、

「ふしぎとは思わぬか」

「？……」

「卜部の待ち伏せよ。いかにわれらとの立合いを所望いたさばとて、あの時われらがあの道へさしかかるをどうして存じておったかの」

「ぬ。……すりゃ叔父貴」

　ハッと兵庫介は我に返った口調で、

「誰ぞが、身共らのあの道へさしかかるを爾前に主水正へ報らせたとでも？」

「さものうて、この寒夜に誰が立つ」

「では、何者か身共らの動静を監視しつづける者が居ると？」

「そう思わねば、得心が参るまい」

「誰で、それは？」

「わからぬ」

　言いながら、急に、宗矩は立ちどまった。

十四

　道は坂を下りきり、左手に御堂が見えていた。尼将軍の御本尊の安置された正観音堂である。

「また、出よったか……」

　兵庫介がつぶやくのへ、

「ちがう」

「？」

「刺客ではないようじゃ」

　なるほど、言われれば路傍を徘徊する気配はなくて、観音堂の屋根の上に、梟でもうずくまったような影ひとつ。

　影はゆっくり、屋上で立ちあがる様子である。

「忍び者らしいぞ」

「――猿飛佐助とやらでは？」

兵庫介がささやくのへ、
「ちがうな」
「？」
「猿飛佐助なら、あの卜部主水正をわれらに斬らせてはおるまい」
「主水正に助勢した？」
「おそらくな」
「では一体――」
兵庫介は闇に瞳をこらしつつ笠のひさしを持ちあげた――そのとき。
ゆるく、虚空を影は屋根の上から躍り、音もなく街道のかなり前方に、沈んで、少時――
「よう来たの御両人――」
柳生新太郎である。
宗矩と兵庫介が立ちどまる処にツカツカと近寄って来て、
「卜部に勝ったとは、見事……さすがは将軍家師範――じゃがの」
いつもの忍び装束。暗いせいか背丈は兵庫介より更に長身と見えた。
「二人がかりとは柳生の風上にもおけぬ卑劣さよ」
「あと何人この先に待ち伏せておる？」
宗矩の声は冷やかだった。
「何人かの……いずれ、無事に駿府までは往けまいが」
「――」
「兵庫介」

「何じゃ」
同じ一族として二十代の青年に呼び捨てにされ、兵庫介は失笑していた。
「おぬしが助勢せねば又右衛門、卜部に斬られておったろうに……さすればおぬしが将軍家師範にもなれたものを……馬鹿じゃの」
「異なことを聞く。――すると何か、その方の陰謀しょせんは成らぬと今から覚悟の上か？……そうであろう、陰謀成就いたすなら身共が将軍家師範になるも何も」
「だからおぬしは人がよいのよ。あたら腕は又右衛門に勝るに、たかが尾張家指南番などで」
「たかが、か。ふ、ふ、……欲に目のくらむやからは心まで下衆になり果てると見える……よいか新太郎、この兵庫介、尾張どのの器量に惚れたればこそ仕官した。汝のような小童天狗に……」
「天狗といえばな」
新太郎は兵庫介から宗矩へ覆面を向けて、
「猿飛小天狗、おぬしらに挨拶しようと待ち受けておるぞ」
「――何処に？」
「いままでとはちがう……やつは伊賀の忍者よ、卜部より手ごわいぞ」
「どこにおる」
兵庫介が今度はたずねた。
聞こえぬふりで、
「おぬしらどこへ泊るつもりよ。夜を徹して駿府へまさか……たッ、な、何をする！」
宗矩の居合い斬りを間一髪、かわしてうしろへ新太郎は跳んでいた。

「卑、卑怯（ひきょう）者。おのれ……」

宗矩は無言だ。刀を取りなおす隙間（すきま）も見せずダッと大地を蹴（け）り、二の太刀、更に三の太刀を。

ぱっ、ぱっとその度に跳躍して新太郎は後退した。しながら八方手裏剣を投げた。だが距離が近すぎた。

そのため加速度がつかず、編笠（あみがさ）をかすめ羽織の袂（たもと）を裂き一本は袴（はかま）の襞（ひだ）へ、一本は腿（もも）へ刺さったが浅かった。

他の一本は兵庫介の胸先へそれたのを脇差（わきざし）の柄で丁と兵庫介は叩（たた）き落していた。

「待たぬか」

宗矩が雄叫（おたけ）んだが新太郎は風を巻いて遙（はる）かの夜道に走り去っていた。

抜き合わそうとはしないのだ。こう言った。

「ここでは惜しいわ、又右衛門、いずれおぬしの高慢の鼻、切り削（そ）いでやる……かならず。久能山で会うまでにな」

「――」

「用心をせいよ。卜部主水正ほどの使い手、まだわれらの使者に何人もおるわ。よいか、かならず事は成し遂げてみせる……おぬしを、斬る……五日以内に……」

太陽昇る

一

東海道を旅して、富士山を正面に眺めるのは富士郡江尻村のあたりである。

冬十一月九日の朝霧晴れて、白雪に蔽（おお）われた霊峰はまさしく、あざやかにその山容を道往く旅人の眼前に現わしていた。

雲ひとつない、空は晴天だった。

「うーん……さすがは不二の高嶺（たかね）よ。日の本に生まれた我が身のさいわいなる哉（かな）……のう六郎、そうは思わんか」

鉄棒をトンと松並木のわきへ置いて、三好清海入道なんとも晴れ晴れした表情で両手をひろげ胸をそらし深呼吸を、二度、三度……

並んで海野六郎も重籐（しげどう）の弓を小脇（こわき）に、富士山の朝陽に映える美しさを仰ぎ見てしばし、声もなかった。

言語に絶するそれは美しい偉容だった。二人は今朝早く沼津の宿を出たのである。

沼津を出れば右に浅間の社あり、富士の頂きが眺望できる。でもその前に愛鷹山（あしたかやま）が横たわって

いて全貌はうかがいようがなかったのだ。

　道は平らかだった。

　箱根の昨日までの嶮所がまるで嘘のように右に諏訪社、八幡宮、栄昌寺などあり、この付近の村々には葦の檜垣多く、社の鳥居はほとんどが石。

「……かような英峰を眺めておると」

　三好清海入道が言った。

「われらのいたすこと、どうなっても神州は不滅……さような気がするが、おぬしはどうじゃい」

「そうじゃの」

　海野六郎は翳のある笑い方で、

「心のうちに持ちたいものよ」

「なにを？……富士の山をかい？」

「富士も富士なれど、神州不滅の心ばえ——誇りを、な」

「誇りか……ふーん、それはそうじゃな」

　見飽きぬ其処をやがて西へ歩き出して、泉宿をすぎ、柏原の立場にさしかかると、この辺うなぎが名物らしくて茶店にもそれらしいのれんがさがっている。

　早朝、宿をたったこととて、大食漢の清海入道、鼻をうごめかせ、

「ここまで来れば江尻へは夜にも着こう……どうじゃい？　一献」

「ゆんべも御者、ずいぶんご機嫌で飲んだようじゃぞ」

「なんの」

　首をふりながらもう、とある一軒の床几へ近づき、

「あるじ、休むぞ」

　巨体を、すえた。

　しかたなく六郎もそのわきへ腰をおろす。

　早速うなぎを注文する。それと、お酒。

　やがて出されたのは江戸前とは調理の仕方が変っていて、わずか一寸四方ばかりに切り、串に刺して束ねた藁に挿し止めてある。たてにさいた蒲焼ではないのである。

でも清海入道頓着なかった。

「うまい」

　串を藁の束から抜き取っては、パクリ。むしゃむしゃ……片手では自酌し、チュッと口先で吸ってから、あとは一気に呑みほす。

　茶碗酒である。

「のう六郎」

　程よく酔いのまわったところで、

「いよいよあと二日じゃが、どういうことに相成るかのう」

「？」

「いやさ、久能山集結がことばかりではない。そのあとじゃ、おぬしはいけん口ゆえ所在がなさそうじゃが、こうして旨い酒をくろうておると世の中、いまのままでよいような気がして参る。いや何も怯気づいて申すんではない、ことに臨まばわれらとて真田の遺臣、おぬしが弓矢にまけぬ働きはしてみしょう、ただの」

「――」
「どうした？」
「あの二人よ」
「？」
「気にならんか？　あの足はこび、腰構え、編笠で顔は見えんが尋常の者ではない……」
酒をたしなまぬ海野六郎、渋茶の冷めた碗を手にして、じいっと、街道をやってくる旅装の武士二人づれに目をすえていた。
「なるほど」
人を見る眼は清海入道にもある。
「したたか者のようじゃな……」
つぶやきながらふと茶碗をおいて、
「もしかいたすと、われら同様の使者ではあるまいかの」
言って、
「そうじゃ、あたってみよう」
「どうする？」
「見ておれ。試してみるわ」
言いながら傍らの鉄棒を持ち、やおら腰をあげると、のっし、のっし、道路中央へ進み出た……

二

「ご両所――」
清海入道は道路中央に立つと、鉄棒をドンと左手に突っ立て、
「お見受け申すご両人の人品骨柄ただ人とも思われず、よろしくばお名乗りあれ。かく申すわれらは――」
まだ時刻は昼前なのに、酔いに面を赤らめ四辺はばからぬ大音声。
道往く旅人ら思わず立ちどまり、或る者はあわてて伴の婦人の手をつかみながら道をよけている。
二人連れの武士のうち、一人は背はそう高くない。編笠に面をかくしているので風貌はわからぬが、体つきで、六十ちかい老人と見えた。
いま一人は体軀頑健、丈は巨漢の清海入道に肩を並べるくらいで、それが藺笠のひさしを持ちあげ、眼光鋭く清海入道を凝視して、
「わざわざのご挨拶いたみ入る。三好清海と申されたが？」
「さよう、清海入道にござるわ」
「されば過ぐる大坂合戦のころ真田幸村どの家中にて大力無双と評判あった――」
「いかにも。その三好清海にござる」
小鼻をうごめかせたら、
「これはこれは」
藺笠の中で口もとがほころびた。
「初に御意を得申す。拙者もと越後少将どの家来岡田孫太夫……これにあるは叔父同苗外記にござる」

清海入道には耳新しい姓名だが、自分のことを知っていてくれたからすこぶるご機嫌で、
「袖ふれ合うも他生の縁と申すたとえもあること。先ずはお近づきのしるしに」
一献さしあげたいと言った。
二人連れは、ちょっと顔を見合わせる様子だったが、
「ならばお言葉に甘え申す」
老人の方がこたえ、それから打ち連れて海野六郎の案じ顔で待っている茶店へ。
——途中、
「や。おみ足がわるうござるんかい」
びっこをひき気味なのに清海入道が問いかけた。
「なに。馴れぬ旅路とてチト脚をくじき申したまでのこと。これしきの痛み……ハ、ハ、ハ」
老人はかわいた声で笑った。
ふっと、それを疑わしそうに六郎は見ていた。さいぜん清海入道と床几にいて眺めたときは、二人連れのどちらもおよそ脚を痛めた歩行ぶりではなかったからである。でも海野六郎の性格で、それを口には出さずにいる。
あらためて、清海入道が二人を六郎に引き合わせ、
「亭主、酒を追加してくれよ」
いつぞや宇都宮城下でわけられた黄金の残金をまだかなり持っているから清海入道、気が大きい。
「さ、さ、遠慮のうどうぞ」
はこぼれた徳利の口を二人へ向ける。串刺しの名産のうなぎも追加した。

「ならばご好意に甘えて——」
二人はそれぞれに茶碗を取って、酌をうける。
「江戸から参られたので？」
海野六郎が訊いた。
「さよう」
「江戸はいずれに住居めされてござった？」
「八代洲河岸にちかい侘び住居にござる……お手前は？」
「われらは鎌倉で」
「卒爾ながら」
注がれた茶碗酒を、岡田孫太夫と名乗る武士がためらわず一気に呑み干したのを見まもって、六郎は自身で手もとに残っている徳利を持ちあげ、孫太夫へ注ぎながら、
「越後少将どのご家来なれば久しく流浪のお身かと愚考つかまつるが」
「さよう」
「それにいたしては月代をきれいにお剃りなされておるようで」
「さよう」
周章の様子もなく藺笠の中で破顔一笑すると、
「此度、仕官がかない申すよしなれば叔父ともども浪人髷にては見苦しかろうと存じ、江戸を発ちますおりに」
「いずれへ仕官めされるんで？」
これは三好清海がきいた。

「紀州家にござる」

老人の方が言った。

清海入道はチラと六郎をかえり見てから、いよいよ我が意を得たりと言わんばかりに、

「やはり、のう……何をかくし申そう、われらもの、実はさるやんごとなき御方に推挙をたまわり近く仕官いたすやも……のう六郎」

六郎はかるく受け流しておいて、

「今日はいずれまで足をのばしめされる？」

「できれば今日中に駿府へと存じたが、この足ゆえ江尻あたりに」

「さればお急ぎめされることもござあるまい……そのかぶり物、お脱ぎなされては？　せっかくこうしてお近づきに相成りながら編笠などで篤とお顔を拝見いたせんのも」

「なるほど。では」

老人は、となりの武士とうなずき合うと、おもむろにあご紐を解いた――。

三

それぞれに笠を脱ぐと、或る種の威厳がそなわり、二人とも尋常ならぬ人物とわかる。

とくに岡田外記と名乗る年嵩のほうは、色白で、ゆで卵の白味に目鼻をつけたようで永年、貧苦の流浪生活に苦しんでいたようには見えない。

むろん岡田外記――まことは柳生宗矩である。ただ一昨日来、ほとんど旅籠にも泊まらず、くたびれると路傍の草に臥して仮眠する程度で、箱根の嶮を越え、ここまで歩きつづけて来たので疲労の色はかくせない。ことに目のふちが黒ずみ、頬はそげているのが浪人暮らしの名残りらし

く思えるのだ。

一方の兵庫介また、尾張を発って江戸へ到着するや直ちに東海道を引き返している身であれば、口辺に無精ひげをたくわえ、さかやきも多少伸びて浪人者の風貌になっている。それが六郎の疑念を幾分はらさせたようである。

それでも念のためか、

「御者、越後少将どのがもとにて何役をおつとめなされた？」

などとたずね、適当に宗矩が答えたあとで、

「今どき珍しく古風な、でも良い弓を所持めされますな。重藤の、応暦ものでござるか？」

「ほう……応暦をご存じとは……お手前も斯の道をおたしなみあるので？」

好きなこととてすっかり六郎も気持を和ませたらしく、にわかに打ちとけた。

それから小一刻ばかり。

差しつ差されつ――酒量はやはり清海入道がきわ立って多かったが――快くうなぎの串焼きなどを賞味して、さて、こんどは四人うちつれて東海道を西へむかう。

匂い袋のことは双方とも口外しなかったが、

「駿府から直ちに紀州へ向かいなされるおつもりか？」

六郎が訊き、

「いや、久能寺に途次、詣でて参ろうかと」

宗矩が答えると、いよいよ酔いのまわった清海入道上機嫌で、

「じつはわれらもな、久能山に詣でる心づもりでおり申した。イヤ愉快々々……ふしぎな縁とは申せ、久能山へまかり越すのまで同じでござるとはのう」

ドンと、ひときわ鉄棒を突く力に弾みがついていた。

吉原の宿駅ちかく松林の中を行くと、しばらく、富士山は左手に見える。道が曲っているからである。

吉原宿は人家そう多くなく、ひっそりした村落のたたずまいに似ていた。吉原からは富士山を後に、また右に眺めつつ往く。うるい川なる橋を渡れば富士の白酒とて濁酒をひさぐ民家あり、富士山の稚拙な絵図も並べて売っている。

富士沼のほとりを行くに浦風高く松の梢にむせび、かの水鳥の羽音に驚いた平家のことなど話題になった。

富士川は海道一早い瀬である。船頭らは岸に舟をつらね、駕籠のまま舁き乗せられて渡って来る婦人の旅客の姿も見られた。このときばかりは清海入道、酔眼をすえ、

「のう六郎」

ふと言った。

「霧隠はどういたしておるかのう……ずいぶんとわれら逢わんが」

「霧隠とは、女人で？」

「さ、さよう……ちとわれら昵懇の女でござって……」

岩淵の宿場にさしかかると立札あり。

庄屋弥兵衛なるものが屋敷の庭に大なる蘇鉄あり、当地の名物なりと記されてあるが、今の四人に蘇鉄は何の興味もない。それよりこの付近の家々で『栗の子餅』なる美味そうな餅を売っていることの方が、清海入道、気になる様子だ。いかな兵庫介も苦笑し、

「お手前、重い鉄棒を携行いたされるだけに人一倍、食欲もさかんと見えますな」

「さ、さよう、食うことにかけては憚りながら人後に落ちん、ハ、ハ、ハ、ハ」

蒲原から由比までは家つづきである。

みな海人を業としているらしく、この寒空に白布一枚をまとった乙女が三人ばかり浜をあがって来た。手に手に桶を抱えているが、見るからに健康で長閑な海辺風景である。浜は田子の浦へとつづき、藻しお焼く煙りの立ち昇る景色と併せ、いわばこの前後が三好清海入道の最後の、もっともなごやかな道中だったのである。

四

薩埵峠の茶店に憩ったのは、そろそろ日が西に傾こうという頃である。

薩埵峠は由比と興津の中ほどにある。

ここから眺める富士は東海道ずい一の景観といわれ、なるほど、夕映えにそびえたつ霊峰の茜色に染まった美しさ、愛鷹山から伊豆の岬までがはるか眼下に見渡され、かすかに波の打寄せる海浜に小さな鳥の群れ飛ぶ有様など、おもわず世俗のわずらわしさをはなれ仙界に棲んでいるような気宇壮大の懐いにひたれる。

「よい眺めではござらんかい、神州無辺際……のう、こうして立っておると天下を取るの何のと、小賢しげなことほざく輩がいっそあわれに想えてまいるワ」

寒風に酔いの髯づらを快げになぶらせて清海入道、金棒片手に、目を細めている。

並んで兵庫介も立ち、いっ時、複雑な感慨をその藺笠の眼に湛えた。

なんとも底ぬけに人の好い清海入道を見ていると、この豪傑を斬らねばならぬおのれの剣にふ

っとわびしいものを感じたのだ。

　できることなら、この男だけでもいっそ薩埵峠のようなこんな場所で、生涯ひっそりと茶店の亭主でもさせてやれぬものか。この好人物まで叔父宗矩は斬れというのか？……

　その宗矩は、何事もないように六郎と床几に並んで渋茶をすすって何か話し合っている。

　目深かに再編笠をかぶっているので表情は見えないが、ときどき白い歯を見せ、一方の六郎が目尻を細めているのは弓の話でも又はじめているらしい。殺意のいささかも感じられぬ、それは同族の兵法者ながらフト背すじのさむくなる、欺瞞の親密さでもあるわけで兵庫介はあらためて剣術遣いの何たるかをそこに見るおもいがしていた。

「のう孫太夫どの」

　清海入道がなおも立ちつづけ、景観に目を楽しませながら言った。

「縁あってこうして近づきになれ申したが、もし、……若しでござるぞ、今後とも同じ主君に奉公いたすんであれば、功を競うは武士の面目なれども死ぬる時は一緒――そうありたいものと……」

「！……」

「この三好清海、おぬしには何故か断ちがたい親情をおぼえてならんので……実は、海野には固く口どめされておるんでござるがの、われらこの十一日を期し、久能山にて同志と落ち合う手はずにあい成っておって……おぬしもわれらとこころざし同じなら、いかばかり嬉しいであろうかと……」

「同志と申されたが、幾人くらい？」

「それがようわからんのじゃ。でもな、お手前越後少将どのが旧家来と申されたで……もしや、

われらの一味ではないかと」

「！」

「いや何、……違うておってもようござる。ただそうあればと願うたまで。ワハ、ハ、ハ」

　雲助がこの寒空を全身汗して、婦人を乗せた輿をワッショ、ワッショ、掛け声しながら四人で舁いて坂をのぼり来ると、休息もせず一気に、東の方へ駆け降りていった。

　輿にはむろん若党らしい従者が二人ばかり付いていたが、女の身で早駕籠とは、余程、急用にせかれた武家の妻だろう。

「われらもそろそろ参ろうか」

　思わず輿を見送った目で、ゆるりと宗矩が起ちあがり兵庫介へ声をかけた。かけながら刀の下緒を、ことさら宗矩は帯へ巻きなおしていた。

　これが合図なのを清海入道が知るわけはない。

　峠をくだりはじめるとこれが一番坂、二番坂、山神平、中房坂、つづら坂、めようと坂、切通し坂などいう九折の坂道で、意外と時間がかかる。

　しかし日はまだ暮れきらず、この時刻にも薩埵峠へ登る旅客がチラホラ見受けられた。海野六郎と宗矩が先を、少しおくれて兵庫介は清海入道と歩いていった。

　坂をくだりきれば西村の立場。

　目の前を興津川が流れている。この川は輿の場合は蓮台というものに舁きすえられて渡るが、徒歩の旅人は人足に肩車されねばならない。

　しだいに黄昏が迫っていた。

「すまんのう」

金棒だけで五十貫あるのだから、つまりは二人分の体重をかつがせることになり、清海入道すっかり恐縮して、
「酒代はぐんとはずもうで、こらえてくれ。……のう」
渡し人足の肩車になって、更に金棒をわが肩にかつぎ、ゆらゆら瀬を渡っていた。そのうしろを兵庫介が同じ肩車でついていた。
「人足」
ふと兵庫介はおのが股間にある人足の耳へ背をかがめて言ったのだ。
「そちに頼みがある。きき届けてくれるなら存分に礼はいたすぞ」

五

「何でごぜえますだお武家さま」
見るからに体は頑健だが、人の好さそうな人足である。兵庫介の体重を首すじと肩に支えて、この寒さに、むろん褌一丁の裸身である。
「前を往くあの仁じゃ、金棒をかついでおる……その方、あの人足を転がすことはできんか」
「何でごぜえますだと？」
「大きな声を出すな。よいか、無情なことをいたせと申しておるのではない。むしろ人足をあわれと思えばこそ申す」
「？……」
「まだ川は渡り初めたばかり……中ほどへ行かばおのずと水嵩も増し流れも早う相成ろう……あの鉄棒はの、八十貫目はある。加えるにあの巨漢、屈強の壮者なればとて川のなかばにかかるころには疲弊いたし、立っておるが精いっぱいであろうが万一よろめき倒れたら何といたす？　その方ら人足稼業の面目は立つまい？　かつがれた当人とて迷惑至極よ。よいか、迷惑いたすだけならばよい、怒ってあの人足を斬るやも知れぬぞ。かく申す身共とて友を川に投げ落とされて黙っておるほど寛容ではないわ。しだいによっては一刀両断にいたす」
「お、お武家さまあ……」
「大きな声を出すなと言うに。さればじゃ、よいか、同じ川に落ちるにせよその方が突き当ったはずみのように見せるなれば、これはそちの方がわるい。な、その方をいそがせた身共の所為にも相成ることとなれば、身共が代って謝罪いたして進ぜよう……さすればあれなる人足もその方も共に無事。どうじゃ、しょせん転落いたさずにはコト済まぬ理ならばいっそ、その方が当ってやるがあの者を救う手だてにもあい成るぞ。——む？　追いかけてそれとのう倒してみんか？」
しだいに夕もやが立ちこめ、あたりは暗くなり初めている。興津川の水嵩は深いところで膝を没する程度。はじめに宗矩が肩車で往き、次を弓をかざした海野六郎。そのうしろを鉄棒の重さのためか徐々におくれて清海入道を肩にした人足が往き、はじめから含むところがあって、しんがりを兵庫介は渡っていた。
「お武家さま」
人足は亀が恐る怖る首を擡げるようにふり仰いで、
「ほんとうにおら達をおとがめにはならんのけ？」
「武士に二言はないわ。安堵いたせ。かならずその方らの立場が立つようにしてくれる。……渡し賃もはずむぞ」
ようやく人足は決心したようだった。

「わかりましたわい……んだら、少々揺れてもこらえて下されのう」
言って、勢いをつけ、にわかに歩度を早めてザブ、ザブ前へ追いついた。
その水音に何気なく清海入道がふり返った。といっても、肩の金棒をうごかしては人足が歩きにくかろうと察し、首だけ、ねじ向けたのである。
兵庫介は破顔し、
「肩車などに乗り申すと、なにやら、子供時分にかえった心地がし、お手前と並んでみとうなり申してな、ハ、ハ、ハ」
「なるほどなるほど。並べばひときわ楽しゅうござろうて。ハ、ハ……さ、早う来られい」
清海入道を肩車した人足は、満面紅潮、たしかに歯をくいしばり渾身の力でふんばっては、一歩、一歩、瀬を渡っていた。前方の六郎らとはどうしても間隔が開いていた。
向う岸ではチラ、チラ焚き火が燃え、客を渡した人足らが手をかざし冷めた体をあたためている。
兵庫介の人足は清海入道のに肩を並べた。でも八十貫目の金棒と聞かされたので、そいつがもろに落ちて来てはと怖れてか、上眼づかいにチラチラとなりの様子を見ながら、なかなか体当りしようとしない。
「のう清海どの」
やむを得なかった。
「お手前、虫の居所がわるくばその金棒にて雑兵の五人や十人、ひと潰しでござろう」
言いながら人足の耳を、片側へとグイ、グイ引っぱったから堪らない。
合図につられて人足は清海入道の側へ寄り、ついに肩車した壮者にドンと体当りした。

「あっ」
よろめくのを、
「危い」
兵庫介は猿臂を伸ばし清海入道を抱きとめると見せて実はしたたかに突きとばした。
「ウアハ……」
何とも奇妙な声をあげつつ清海入道、肩車された尻からザンブ、と河中へ。

六

金棒が、運わるく清海入道を肩車していた人足の頭にあたったようだった。
「ぎゃっ」
と叫び、人足は清海入道もろとも一度河底に尻餅をつき、そこへ頭上に金棒をくらって、
「ウーン」
仰向けざまに失神してしまった。
清海入道は好人物だった。河に身を没し、わが身は濡れねずみであるのも忘れて金棒を川中へ投げ出し、
「こりゃ、しっかりせんかい」
気を失った人足を川の中で抱きおこしていた。
人足が失神するのまでは兵庫介も予想しなかったろう。
「おろせ」
自分の人足に言い、いそいで川中に降り立つと、膝まで没する瀬を渡り寄って、

「怪我はないか三好どの」
「われらはかまい申さんがこの者に痛い目をあわせてござるわ……コリャ、気をたしかに持て。コリャ」
肩をゆするがひたいから血を流して人足は死んだようにのびている。
「どうした？」
騒ぎに、ほとんどもう早瀬を向う岸へ渡りかけていた海野六郎が、人足を督励し、なかばまで引き返して問いかけてきた。
「心配はござらん」
兵庫介は言った。
「せっかく渡られたもの……お手前は向う岸にて休息あれ。この場はこの孫太夫が引受け申す」
と言って、
「叔父貴」
大音に宗矩へ叫びかけた。
「人足が不憫なれば手当てをいたす。日も暮れて参ること、何なら海野どのと一足さきにまかり越していただこう」
すると宗矩が遙かな肩車の上で、
「かく川の中では手のほどこしようもなし……そこもとに万事まかせる。われらは江尻まで足をのばす。よいな今宵は江尻の宿泊りじゃ」
言ってから、
「海野どの、あとはまかせおいたがようござろう……さ、参ろう」

それでも海野六郎は、
「清海、だいじょうぶか」
夕やみのせまる河中で問いかけてきた。
「われらがことなれば斟酌無用……おぬし、先に行ってくれい」
答えるのも上の空で、
「コリャ……気を確かに持て。ヤイ」
むなしく肩をゆすりつづけている。
「その方」
兵庫介は傍らで事の意外ななりゆきに驚愕し、わなわな顫えている人足へ、
「その方はもうよい。そばにおっても無駄じゃ」
「でもお武家さまあ……おらがために」
「よいと言うに。気づかわずとも程なく正気にかえるわ。急所ははずれておった。安堵いたせ」
「でもおら、放っておくわけにいかねえだお武家さま」
「さようか。ならば」
兵庫介は清海入道のかたわらに寄ると、
「身共におまかせあれ」
素早く腰の手拭をぬき取り、いったん川の水に浸して、片手ににぎってしぼりながら水滴を人足の鼻孔にしたたらせた。そうして手拭ごと半死人の口辺に蔽い、うなじに片手をまわして首すじをグイと二本の指で抑えた。
ヒクヒクと睫毛がうごき、それから急に息苦しそうに顔を左右にふって蔽われた手拭から口を

はずそうと藻掻いた。
　正気に返ったのである。
「おお気がついたか」
嬉しや……清海入道は喜色を溢らせ、背すじと腰に両腕をさし入れると、
ザーッ……
墨染めの両の袖から水をしたたらせ、いとも軽々人足の体を横抱きして川瀬に立ちあがった。
人足はかおをしかめた。それからパッチリ目をあいて、
「これは」
あわてて降り立とうとし、激痛にまた眉をしかめる。
「じっといたしておれ。気がついてくれて何よりじゃ。岸まで運んでやるぞ。のう」
もうすっかりあたりは暗くなっている。
「孫太夫どの……向う岸と、引き返すのとどちらが近うござるかい」
「それはもう」
言下に兵庫介は言った。
「引っ返すまでのこと。それにこの者が住まいは元の岸でござろう」
「お、お武家さま」
「黙れ。その方たしかにそう申したではないか。そうであろう？　もとの岸へ引き返すがこの者の為であろうが。――む？」
「ハ、ハイ……お武家さま」

七

あたりはもう暗夜にちかかった。
今様にいえば脳震盪をおこし、気を失った褌ひとつの人足を横抱きしてあがった岸は、もとの西村の立場である。
向う岸にチラチラ焚き火が不知火のように見えている。
「吾作や……気をしっかりもてや」
兵庫介をかついでいた人足が一緒について来て、恐る怖る、わきから呼びかけるのへ、
「心配いたさずともよい」
たしなめてから、
「清海どの」
「？」
「お手前の金棒、河中へ放り出したままでござるが、この者に取りに行かせ申したら？」
清海入道は一瞬、われに返るように目をあげたが、
「よい……それよりこの者の手当……」
岸には道路に面して、土地の名産という鶏冠海苔をひさぐ家がさいぜんまで賑々しく並んでいたのに、早や戸をおろして窓にわずかな灯がもれるばかり。
清海入道にすれば、もともと金棒が原因で起きた騒ぎなので、そんなものに未練を見せるわけにはゆかなんだのであろう。
「その方――」

兵庫介はだが、人足へ言った。

「金棒を拾いもどって参れ。清海どのにはあれは武士の差料も同然……これなる者の手当はわれらがいたす。——さ、この通り酒代ははずむ。金棒を沈めた場所、その方なれば暗がりとて見当はつこう。さ、早う」

佐渡印銀五匁をにぎらせた。暗がりにてのひらで確かめ見て人足は目を輝かせた。米一斗五升が買える金額である。

「あ、ありがとうごぜえますだ……んだら、かならず見つけて戻って来ますで」

勢いよく、ザブザブと再、瀬の中へふみこんで行った。

「清海どの」

ひと先ず、あの民家の軒下へその者をおろしめされよ……言いながら兵庫介は背後に立って、鯉口を切った。恩讐のきずなを切っていたのだ。

斬るときは非情でなければならない。それが武士である。

「この方がよいかのう」

天心らんまん。川岸から堤を道へあがった民家の軒下に、床几がひとつ、表へ出したままになっている。わきに藁を積んだ荷車がある。

いっそ藁に寝かせた方が……そんな意味で無心に、清海入道はふり向こうとした。

——刹那。

白刃が一閃していた。

「たっ。……おぬし、気が触れたかっ」

人足を抱えた片肘の肉片を削ぎ落されていた。

兵庫介は無言だった。

返す刃でサッと今度は耳を削いだ。

「ぬっ。……お、おのれ、何を」

ようやく激怒の形相凄まじくハッタと兵庫介をにらみつけるのへ、

「——」

パチン、兵庫介は刀をおさめ、

「天っ晴れの心底よ三好清海」

「！」

「肘を斬られてまだ人足を抱いてはなさぬその性根にめんじ、これにて当方刀を引く」

「お、おのれ……」

「よっく聞け清海、おぬしが善意謀叛に与するには美しすぎる……戦国乱世なれば知らず、今はもはやおぬしがような人物の勇武をふるう時世ではない。このことわり、おぬしにはしょせん理解はゆくまいが、義に殉ずるのみが士の生きる道にはあらず……おぬしは野に在ってこそみのり多い花を咲かせる仁。よって謀叛に与させぬため自慢の怪力を、きった」

「おのれ……おのれが」

「よいか。利き腕の筋切られておぬしはもはや赤子同然、金棒はふり回せまい。されば真田十勇士の一人三好清海入道もはや此の世にはないも同じ……このことわりをおもんぱかり、今より武士の意地を捨てるのじゃ。おぬしもさいぜん薩埵峠で申したではないか。天然自然のうつろいに身をまかせ生きるがまことの賢者ではあるまいかと……おぬしこそはそう在るがふさわしい仁よ。闘争はおぬしの器量にはあわぬ。——よいな、人里はなれて暮らすも峠の茶屋のあるじになるも

自由、ただおぬしは天寿をまっとう致さばよい、陰謀などに加わらずとも、あるがままに天寿を生きるだけでどれほど、世のため人のためにおぬしはなることか……ここのところを、とくと考えて」

「い、いやじゃ」

八

清海入道は片肘と耳から、夜目にもおびただしい鮮血をしたたらせながらなおも人足を抱きつづけ、根が生えたように其所に突っ立って眦を決して兵庫介をにらみつけ、

「こざかしきことを申す……おのれ、何者じゃ、正体を明かせい」

「尾張藩兵法師範柳生兵庫介」

「――ぬ」

「今ひとつ申しておこうか。お手前らが太陽の使者と称し集結いたす久能山には、じつは誰ひとり集いはいたさぬ」

「なに?!」

「うそではない。お手前らは謀られておる。それも知らずに」

「だ、だれに謀られたと申すんじゃい」

「老中土井大炊頭よ」

「?……」

「お手前ら浪人は何も知るまいがの。おぬしら大坂の陣に敗れた者らがおもうほど磐石ではないのよ。なるほど天下は治まった、おさめたはだが神君家康公にして将軍秀忠どのではない。家康公に仕えた年寄（老中）らではあろうが土井大炊どのではない。ここに幕閣の悩みがある……おぬしがような善人にはわかるまいが、天下を平定すればとて、今一度、こんどは秀忠公とその側近が幕府という枠の中で天下を戦い取らねばならぬ。それが統率者たる者の宿命よ。血で血をあらう骨肉のあらそいに勝たずしてはただの幕府『継承者』にとどまり『統率者』ではないのよ。政務はそれでは執れぬ。意のままに天下は治め得ぬ。治め得ぬものが征夷大将軍である道理はない。よって、幕府という名の天下を掌握するために敢て本多正純に、宇都宮城へ釣天井を造らせた、陰謀をおこさせた。これはすべて土井大炊どのの胸三寸に出たはかりごとであった――」

「な、何じゃと?」

さすがに清海入道、目をみはり抱えている人足を思わず胸から落しそうになった。

「すりゃわれらに匂い袋をくれたあの女人も、土、土井大炊がまわし者というのかい?」

「気がついたか」

「黙れ」

怒髪天を衝くとはまさに此の時の三好清海入道だったろう。血のしたたる肘で、そろりと床几へ人足をおろすと顔半面、耳から流れる血にいろどられた赤鬼さながらの形相で眼をむき、

「おのれがような卑劣者の言うこと信じられようか。海野はの、あの般若面の女人をつかわせし仁こそ紀伊頼宣公と申したわ。されば紀伊公は幕府さしまわしの典医に毒を盛られなされたとも聞いた。海野六郎はうそを申す男ではない。よいか、おのれなんぞが何を言おうと……よしおのれが言うがまことであろうとこの三好清海、六郎の言うを信じるわ。信じて死ぬるとも何の悔いがあろう。――抜け。今いちど抜いて懸って来い。三好清海、伊達に戦場を駆けめぐって参った

んではないぞ。おのれがごとき素肌の剣法に、われら戦場生残りの勇士が斬れると思うか。目にもの見せてくれるワ。来い」

血にぬれた墨染の袖をまくりあげ、徒手空拳、両足をふんばって立って、

「ここじゃ、この胸を刺せい。さものうておのれごときに、この三好清海……」

「やむを得まい」

低く兵庫介は言った。ふたたび彼の手は刀の柄にかかっていた。ざわざわと兵庫介の背後で水音がし、

「見つけましたぞォ、お武家さまァ……えらい重い棒じゃ、こんな重い鉄棒をよう持って……」

肩にかついでいるらしい、重さに時によろめく気配まで、その水音で感じられた。

清海入道は狂喜した。何という人の好さ。棒を受取らんとツカツカと兵庫介の立つ目の前へ接近した。

瞬丁。その頭上へ、峯打ちが疾った。

戛

と、にぶい音がしたそうである。

石頭である。

生涯、あんな固い頭を見たことも聞いたこともないと、後年、苦笑まじりに兵庫介は述懐している。たいがいの者は、極意のこの峯打ちに脳震盪を起こすのだが。

清海入道、蛙が水をぶっかけられたほどにも驚かなかった。

つるりと頭を撫でて、

「おのれ、いたぶりよったの……もう、ゆるさんゾ」

鷲づかみに兵庫介へつかみかかろうとした。

二の太刀が閃めいた。

九

「どうしたのでござろうな」

海野六郎は焚き火のそばで煙りに顔をしかめながら、暗い対岸へ目をやった。

やはり、清海入道のことが気がかりで、六郎を肩車してきた人足に今一度、対岸の様子を見に川を渡らせたのだ。

それがなかなかもどってこない。

「案じめされずとも」

同じように宗矩は焚き火に手をかざし、編笠を俯し目にして、

「行く先は彼らとて存知のこと、今宵は興津泊りにいたす心つもりではござるまいかな」

「……」

「いかがじゃ、われらでひと足先へ参っては？」

六郎はこたえない。対岸へあげていた目を、足もとの炎に注いで凝乎と火をみつめている。

「人足」

「へい」

河原で彼方、此方、枯れ木や枝をかき集めているもう一人の——宗矩をかついできた男へ、

「江尻までここから、いか程じゃ」

宗矩が問いかけた。

「一里三丁でごぜえますだ……お武家さま」
「？」
「何ならおらがもう一度、渡って」
「それには及ばぬ。その方、住居は興津か？……西村か？」
「川向こうの烏渡の浜ちゅう所でごぜえますだヨ」
「ならばそろそろ帰りたいであろう……よい。この場にもう構わずと、行け」
「よいのでごぜえますか？」
　酒代はすでに充分もらってあるらしい。パッと喜びを面にあふらせ、六郎の足もとへ来て顔を見上げながら、
「お武家さま」
　抱えた木片の何本かを火に焚べると、残りを傍へ置き、
「んだら、おらはこれで……」
「――」
「よいのでごぜえますだな？」
「行くがよい」
　静かに六郎が言った。
「へ、へい」
　バッタのように何度もお辞儀をして、人足は、たちまち瀬へざぶざぶ飛沫を散らして走りこみ、うす闇から大声で、
「途中で若し権助に逢うたら、お武家さまがたは、しばらく其処で待っておいでじゃと言います

でのう」
　薩埵山のはずれに、月が懸っているのに気づいたのはそれからどれ位たってであろうか。
　このあたり、昔より月の名所で知られ、興津から清見浜にかけ須磨明石にもまさる景勝といわれ、

　　浦風のかすみもはてず清見潟
　　　なみに波しく三ほの松原
　　名にめでて今宵は月を清見がた
　　　うら波とおくよし霞とも

など秀歌が多い。
「来ぬようでござるな」
　宗矩が言った。
　火はもうすっかり燃えつき、チラチラ小さな炎が灰の中でゆれているばかり。
「御者、越後少将どの家来と申されたが」
「？」
「三好はいざ知らず、この海野六郎にうそは通用いたさん」
「身共がうそを申しておると？」
「わけを明かしていただこう……御者の真意は、何じゃ？」
　焚き火のそばへ弓を近づけぬのは弓術家の心得だから、河原を岸にあがった木のかたえにその弓は置いてある。
　宗矩は少時、編笠のうちで六郎の残り火に映えるかおを見まもって、

「お手前久能山へ、どうあっても結集いたされるつもりか？」
「そのため鎌倉を発ってまいった」
「柳生新太郎とは何処で会われる？」
「柳生？……ふ、ふ、ふ、やはりそうであったのか」
「思いちがいをいたされては困る。新太郎を斬るために身共はこれへまかり越した」
「何と？」
「よろしいか。新太郎はお手前らが思惟めさるような人物にはあらず。つまり紀伊公が内意で動く者にては無し。まことは般若面の女人と、匂い袋をあやつりお手前ら豊臣恩顧の残党をかり集めた上、一挙に召し捕えんため幕府の策に乗じて動く申すなれば公儀の走狗。されば久能山への集結はあたら公儀の網にかかりに参るがようなもの」
「まことか」
「うそは申さぬ、そのために紀伊公が内意にてこの岡田外記」
「まだ外記と名乗られるか？」
「いかにも、もって生まれた姓名なればわれらこれ以外に――」
言ったとき、カンラ、カンラと岸の彼方で哄笑がわいて、暗やみから声あり、
「だまされてはならんぞ六郎、そやつこそは公儀の狗柳生又右衛門宗矩よ」

十

興津の清見寺の境内に日がさし出した。
十一月十日の太陽は昇りはじめたのだ。

清見寺は正確には、巨鼇山清見興国禅寺求王院という。
開山は関聖禅師である。世にこの禅師を蛸和尚という。
むかし、清見浦の漁師たちが丈余の大蛸を捕え、海浜でまさに煮ようとしているところへ、一人の雲水が来あわせ、代価を与えて蛸を買い取り、法語を授け給うと、それまで死んだようだった蛸はたちまち生気をとりもどし、頭をふり立て光を放って海府へ游ぎかえった。
清見の長者某は、この奇特を見て、雲水こそは凡庸の人にあらず、菩薩の化身なりと財宝を多く抛ってここに建立したのが清見寺だという。いにしえは天台宗だったがいまは禅宗済家、京都妙心寺の末寺である。
境内には客殿の前に、有名な臥竜梅あり、枝の流れは丈余尺。かたわらには垂糸梅もあって、早春なら、匂い芬々として羅浮の夢に雪かんばしゅうして、払えども去らず、寿陽公主の粧いを詠めるところであろうが、今は霜月、観梅の季節には早すぎる。
それでも「清見寺の鐘を聞きし」と三井の狂女が謳う鐘楼も庫裏の前にあり、別に書院の庭中を流れる飛泉あり、山門を出て三曲がりの石坂を下れば、則ちそこは東海道。卿相の雲客万国の諸侯、多くここに駕を停め、詩を賦し、歌を詠むことだから、ようやく朝の日の輝き出した境内にはもう、夜明けとともに旅舎を出発したらしい旅人がチラホラ、寒気のきびしいのもいとわず白い息を吐いて参禅している。
月の名所であるとともに、此所からの海の眺めは、右に三穂の松原さしいで、田子の浦遠く、海浜には、潮汲み、塩竈の烟り寂々としてまことに風流だからである。
さて庫裏を出て、そんな参詣人にまじるように、ぶらぶら、朝の散歩を楽しんでいるのは客僧と、海野六郎だった。

「よう眠りなされたかの」
僧がきいた。白髯(はくぜん)をたくわえ、かなり老齢のようながら筋骨は太くたくましく、身の丈も六郎を抜きんでてまことにカクシャクたる老僧である。
「おかげさまで」
六郎は左手首に包帯を巻き、それを肩から吊っていた。
「きずは痛みなさらんか」
「は。手当てをたまわったが効き申したようで。もうすっかり」
「それは何より……したが、だいじな左手(ゆんで)がそれではもう弓は引け申(も)さんの」
「……」
「それでもおぬし、久能山へ？」
「は。猿飛佐助との口約もござれば、何はともあれ江尻までは出向き申さぬと」
「佐助か……ふ、ふ、なつかしい名を聞くものよ」
寺院の庭には、牛石、虎(とら)石、亀(かめ)石とその形で名づけられた石が在る。老僧はそんな石の一つの傍らに立って、
「いまのおぬしには止めだていたしても効はあるまいがの、できることなら久能山へはのぼらぬがよい……あの柳生は、心ざまおそろしい兵法者よ。まことは忍びの術にも長(た)けておる……おぬしは気づかなんだであろうが、昨夜のことにしたところで、対岸の委細、あの男には見えておったはず」
「？……」
「つまり、夜でも目は見えると申すのよ。それがああして、拙僧が声をかけたらとっさにおぬし

の手首を斬った……忌憚(きたん)なく申すなれば、あのときおぬしの一命を斬り捨てるも宗矩なれば容易(たや)すかったであろう……それをわざと手首の筋を切るにとどめたは、おぬしを内心、久能山へおもむかせる意図ではあるまいか……それぐらいの腹芸は演(や)ってみせるあれは男よ。それをおもうとの、かえって、往かせとうない気が拙僧はいたす」
「──」
「ま、おぬしにも考えはあろうこと、強(た)って止めはいたさぬが、裏を掻(か)かれるかも知れぬことだけは、心しておかれいよ」
「──は」
「集結は十一日であったの」
「さようで」
「ではまだ一日の猶予はあるが」
庭をひと回りして書院への沓脱石(くつぬぎいし)へ老僧はあがった。
「おぬしの依頼もあったことゆえ、念のため当寺にたのんで人を走らせてはおいたがの、おそらく、三好清海とやら五体無事では済むまい」
「何故でござる鉄閑(てっかん)どの」
「夜目のきくあの時の宗矩が様子でじゃ……それより、おぬし」
言いながら老僧は六郎へ向きなおった。

十一

「集結のしるしとやら申すその匂い袋、いちど見せてもらえまいかの」

老僧は言った。

「いえ、われらは所持つかまつらず」

「は。猿飛や三好なれば所持いたしてござるが」

自分は宇都宮城下の騒ぎさえ知らず鎌倉で天秀院さまに仕えており申したのでと、海野六郎は言ったら、

「ふむ」

チラと、心なしかその白眉を老人はしかめた。

老僧鉄閑――

出家遁世していまは風流を友とし、久しく清見潟の景観を愛でてここに居候していると本人が昨夜明かしたが、もとは槍の本多平八郎忠勝と驍名を競った勇将――田中清左衛門尉長世の世を捨てた姿であった。

清見寺の僧らは、鉄閑こそ関ヶ原合戦のとき石田三成を捕えし人ぞとささやいている。

「おぬし、匂い袋も所持せずと――」

ゆっくり庭下駄を脱いで鉄閑は縁へあがった。

「久能山に出向いてもし、太陽の使者とやらの仲間入りがかなわなんだら？」

「それはそれでよろしいので」

海野六郎もつづけてあがった。

縁にはうらうら冬の日差があたっていた。片腕を吊っているので、脇差を差しただけの軽装でも何となく物腰が不自由そうである。

書院にはすでに朝食の膳が据えられていた。

小僧が熱い汁椀をお盆に捧げ持って廊下をやって来た。

二人は朝食の箸を採った。あまりどちらも口はきかなかった。

書院からでも、遠く、海面に陽光の映えるのが眺められる。

食事がおわると、

「それでは」

一揖して六郎は身支度にかかった。老僧はもうとめなかった。

寺男が庭前に走りこんで来たのはそんな身支度がととのったところであった。

「申上げますだ、おたずねの力のつよい坊さまは西村の川岸でゆんべ斬られなされたそうで……ハア、いのちに別条はないとかでごぜえますだが」

「それで清海はいま何処に？」

「それがはあ、里の者らがなんぼ止め立てしても肯きなさらずと、朝早うに人足を傭うて興津川を渡りなされたそうで」

「なに？」

「おらが向う岸へ渡りますとき、そう言えば頭から顔に包帯を巻いた奇体なお人が人足に背負われ、すれ違いなされたでごぜえますだが、百姓みたいな借り着をしておいでで、今からおもうと衣服に血が付いて穢れたのを着替えなされたんでごぜえましょうが、おらは金棒を持った坊さまと聞いていたで、そのまま……」

「それはいつごろ？」

「もう一刻前になりますだかのう」

「斬った相手は？」

鉄閑がこれは問うた。

「はあ、ゆんべのうちに何処へやら姿を消されたと」

「川を渡った様子は、ないのか？」

寺男は、わからねえだ……不安そうに首をふった。

「傷の程度は？」

せきこんで六郎が聞いた。六郎は片膝立ちで弓を引寄せ、むなしいながら矢立を首から、肩へつり下げていた。

「耳を半分、削ぎ落されなされたちゅうことで……それに肘に深手と、片手の指を三本、ばらりんずんと斬って落されなされたちゅうことでごぜえます」

「鉄閑どの」

いちど坐りなおった。

「ご厚情のかずかず、いのちあればあらためてわれらお礼に参上つかまつるが、今はこれにて」

鉄閑はもう制止しなかった。なぜか目をとじたまま、

「心して参られい……お手前の脚なら、江尻までには」

かたじけない、そんな意味の一礼のあとパッと広縁に出て、不自由な片手で草鞋のひもを結ぶのへ、

「くれぐれも、道中は脇道に気をつけられいよ。柳生のことじゃ、お手前は故意に久能山へ行かせると拙僧は見ておるが、いま一人三好清海を痛めた者がどう出るか……用心いたされるに越したことは」

「心得ており申す。――では、ご免」

陽光の明るい庭へとび出した。

十二

清見寺から江尻宿へ一里一丁。

寺を出たあたりがちょうど古の清見の関で、今は名代の膏薬店がならび、茶店ではつねに麵類を食わせる。

海野六郎は片手を布で首からさげ、もう一方の手に弓を携えてそんな茶店の前を小走りに走った。道は海辺に沿っていた。

『貞応海道記』にいう――

清見が関を見れば、西南は天と海と高低ひとつに眼をまどわし、東北は山と磯と嶮難同じく足をつま立つ。磐の下には波の風花ひらく春のさだめなく、峰のうえには松の色みどりをふくみて秋をおそれず。浮天の波は雲を汀にて、月のみふねは夜出でて漕ぐ。沈陸の磯は磐を道にて風の使脚あしたに吹き過ぐ。名を得たる所（名所）かならずしも興を得ず、耳に耽るところかならずしも目にふけられず、さりながら耳目の感ふたつながら得るは此の浦にあり。波に洗いてぬれぬれやに道を問えば、松風むなしく応え……

と。以てこの付近の景観を想像するに足るだろうか？

六郎は道をいそいだ。

路傍を警戒せよと鉄閑はおしえたが省みるゆとりは六郎にはなかった。――というより、再び柳生宗矩があらわれるなら、それも又よしと覚悟を決めていたのである。

江尻の宿に近づいた。

冬空はさわやかに晴れていた。

宿駅のにぎわいが彼方に見えて間なしに、手前の路傍で黒山の人だかりがしているのに、ふと、六郎は歩を停め、もしや無理が祟って清海入道でも行き倒れたのではあるまいかと駆け寄ってみると、倒れているのは若い女である。

それも裾前をまくりあげられ、むっちり白い脚をひろげ、黒髪の後れ毛を口にかんで、目は、とろんと空をにらんでいる。

怨念の死相である。

身なりは百姓の娘らしいが、それにしては、はだけた襦袢の衿が絹であった。蹴出しの色も百姓娘にしてはなまめかしく、武家の婦人の変装ともおもえる。

死因は外見ではわからない。

血を流した様子もない。

髪は結わず、黒髪をほしいままに背へ垂らし、つくづく見ればなかなかの美人ゆえ何者かに凌辱されて果てたとも思えるが、大地に爪を立て、あたりを引っ掻く様子で死んでいるので見れば、何か、急病に苦しみぬいての頓死かも知れない。

「土地の娘ではないのか？」

六郎はとなりの野良着の老人にたずねてみた。

老百姓は首をふり、

「知りませんだ……おらは近在の者ですがのう……見たこともねえおなごでごぜえますだ」

「いつごろここに倒れておった？」

「朝早うに馬子が見つけたちゅうことですがのう」

すると雲助らしい別の男が、

「おらは日の出に此所をいっぺん通ったただが、そん時は死んどらなんだで」

「倒れてはおったのか？」

「うん。しゃくが起きた言うて、腹をおさえとりましただがの、もう一人、妙な男がついておりましたで、おら……」

「妙な男？」

「山伏みたいな、こわい顔をした男でのう、年は四十くらいで、苦しむ女の前で念珠をふりまわして祈禱みたいなことしとりましただ」

旅の道中で持病のしゃくに苦しんだのか？　それにしては手甲脚絆をつけていないのが不審であり、所持品はおろか、杖ひとつ携えないのもおかしい。

別の漁師が言った。

「その山伏なら、おれも見たの、何やら逃げるように東へ走って行きよった」

「いつごろじゃいの？」

「もう一刻になるかいのう」

清見寺を出て此所まで、六郎はそんな山伏とは行き逢わなかった。とすれば、寺を出たとき既に女はここで死んでいたと見るべきであるが、ふと、それなら、女性に対してとりわけ関心を示さずにおかぬあの三好清海が、ここを通過するに際し、あられもない姿態のままこの女を見捨て立去るわけのないことに、六郎は気がついた。

六郎は面色が変った。

つまり清海入道はまだここを通っていないことになる。

（まさか？……）

にわかに、不安にかられ、念のため老百姓にたずねてみたところ、

「ああ、申されるようなお人ならさいぜんここへ来られましたがの」

「参ったか？」

「はい。頭に包帯を巻いておいでしたわい……でものう、もう一人、編笠のお武家がこられてそのお人を……」

「何としたッ？」

天女の舞い

一

「あ、あの辺で、お武家さまが……」

老百姓は、六郎の気迫に圧倒されてか、急にしどろもどろになり、編笠の武士が清海入道らしい人物を、江尻の宿駅の手前――いま鶏が群れているあたりまで無理に拉致して行き、そこで何やら激しく言い争っていたが、とうとう編笠の武士が勝って、清海入道の巨体を地面にねじ伏せ、二言三言、叱りつけるようすで折檻をした。

「うるさい、うぬの指図は受けんわい」

うしろ手にねじあげられながらも、清海入道はそう大声に喚いて、

「武士の情けじゃ、いっそこの身を斬れ」

と叫ぶのがきこえた。武士はしかし斬る様子はなくて、そのうち、こぶしで脾腹に当て身をくれて、清海入道を失神させ、懐中をさぐって何か袋みたいなものを奪い取るとこれをわがふところにおさめて後、駕籠をやとい清海入道を舁かせて府中の方向へ急ぎ去った。ちょうど小半刻前ごろだった――

老百姓はそんな意味のあらましを告げたのである。
「編笠の武士じゃな？」
「はい、おらばかりではねえ、ここにいる何人もが見ていたことでごぜえますだ……のう、弥吉」
「んだ、おらも見ていましただよ」
合点する者もあり、どうやら事実に間違いないと見当がついた。六郎は人だかりを離れた。
編笠の武士は柳生兵庫介であろう。奪い取ったのは匂い袋であろう。とすれば、匂い袋を証しに自らも太陽の使者と称え久能山に出向くにちがいない。何としてもそれは阻止せねばならない。
六郎は歯をくいしばって道をいそいだ。こんなとき猿飛佐助がいてくれたら、心でそう歯ぎしりしていた。
江尻の宿をはずれ、巴川なる川を渡ってしばらく行くと、左に七面の社がある。そこで街道は久能山への道と、清水港への道とに別れる。この岐路に立って六郎はハタと迷ったのである。
久能山が目的地である。だが集結は明日である。三好清海入道の身を案じるなら、今からそんな久能山に兵庫介が出向くわけがなく、当然、清水経由で駿府へ向ったにちがいない。すなわち清海入道のためには清水道を追跡すべきである。それは又、紀州から引返してくるであろう猿飛佐助と出逢う道でもある。
海野六郎は少時、ためらった。しかし直ぐ腹をきめた。三穂の松原を経て久能山に行く道を彼はとった。清水道なら、自分でなくとも佐助がやって来て三好清海に行き逢うだろう、清海入道を助けるため佐助が兵庫介と対決するだろう、だがもし久能山への道を兵庫介が進んでおれば、一体だれが清海入道を救うのか、そう判断したからである。

三穂の松原――
吾嬬路において古来名だたる勝地である。駿府城下から二里ばかり東にあたり、ここから陸地つづきで清水へも出られる。故人は誌している。
「この三穂の松原は久能の宇度浜より東に連りたる出島なり。そのあいだ一里余にして、洲浜の長きあり短きあり、広きあり狭きあり、中は数百千本の松の緑こまやかに、枝葉潮風に吹きたわめられ、高きあり低きあり、直なるあり曲れるあり、その気色窈窕として三千の美人紅粉を粧いて一度に笑るが如し。
はるかに東北の方を見渡せば名にしおう富士の高嶺、愛鷹の翠巒、前には浮島ヶ原、吉原、蒲原の駅、薩埵山、興津川の流れ、清見ヶ関、清見寺の鐘の声は悠揚として月にすみ霜に冴えたり、田子の浦端を漕ぐ舟は松の梢を走るかと疑れる、北には清水の港にぎわしく、入船あり出船あり、漁の家軒をならべて魚売る声かまびすし。南は滄海洋々として大鵬三千里の羽をうつおもかげあり、荒磯浪に藻を刈る童、あわび捕る海士、潮汲む海女、みな世をわたる業くれのさまざま、いずれかあわれならざるはなし」
と。
更に洲浜の中には三穂神社があり、羽衣の松もある。
羽衣の松はむかし天女が空より舞い降り、この松に羽衣を懸けたのを村民らが奪い取った時、一人の漁夫あってこれを天女に返した。すると天女は喜悦して天空に舞いあがったが、お礼に七宝充満の宝を降らせたと伝説にある羽衣である。
六郎が、ちょうどそんな松樹の下にさしかかった時だった。彼方の松かげから、姿をあらわした人物がいた。

二

松樹のかげからあらわれたのは虚無僧だった。
天蓋をかぶっているので、顔はわからないが六郎は緊張で屹乎と身構え、右手の弓を小脇に把ったら、
「なつかしや六郎どの」
「？」
「わたしがおわかりにならぬかえ？……この声が」
あきらかに女声である。
「や、そもじ？……」
寄せた眉をパッとひらき、
「霧隠か？……」
「おぼえていて下されたか」
明るい声が応えると白い指で、やおら天蓋を脱いだ貌は、六郎には八年ぶりの再会ながらあの猿飛佐助の時と同じく、意外と年を取らず、昔のままの美眸に笑みをうかべている。
「なつかしや……ここで、御者に逢えるとは」
六郎は喜色満面、抱きつかんばかりに馳せ寄って「うっ」と顔をしかめた。手首を吊ってあるのを忘れていたのである。
再会のよろこびは才の方もかわりはなかったろう。
いっ時、感慨をこめた眸差で海野六郎の丸刈の頭をながめやったのが、

「その腕は？……怪我でもなされたの？」
「いや何……それより御者、どうしてここに？」
「六郎どのを、待っていたのよ」
「――何と？」
「ホ、ホ……それはうそ」
本当は猿飛佐助と謀り合って、ひそかにこの松林で、久能山に向う太陽の使者は実数どれほどの人数かを計っていた、と明かした。
「すりゃおんしゃ、猿飛に逢うたのか？」
「ええ」
「何処で？」
「――駿府」
「おっ、ならばもう駿府へもどって来てはおるんじゃな」
ありがたや……思わずそうつぶやいてから、あらためてしげしげと彼女を見直し、
「相も変らずそもじ……美しいのう」
「冗談を……おなごは年を取るのが」
「いいや、われらが目には過ぐる大坂合戦のみぎりと、ちっとも変っておらん……いやまことじゃ、むしろ、今の御者の方が……」
虚無僧の男装ながら、天蓋をぬげば、黒髪は巻きあげにして後頭部へ束ねたのを笄で挿し止め、白いえり足を見せたあでやかさは目をみはるばかり。たしかに八年前より、体つきもいちだんと爛熟して、いっそ妖艶なくらいである。

才は、しげしげ見つめられて面映ゆいか、女忍者とは見えぬ羞じらいで瞬くと、
「集結の刻限にはまだずいぶん間があるのに……」
「そのことよ、じつは一番にたずねようと存じておった……これへ、三好が来はいたさなんだか？」
「清海入道が？……いいえ」
くびをふり、
「清海に何か？」
「さればよ、話せば長うあいなるが、これへの途次そもそもは興津川が渡しにて――」
もと越後少将の家来といつわった柳生宗矩、および兵庫介の奸計にたぶらかされ、こうして自分は手首を切られる始末、さいわい救いの手が入ってこの程度で自分は済んだが、三好清海の方は……と、江尻宿で老百姓に聞いたままを六郎は告げたのである。
駕籠で何処かに拉致されたらしいこと、その清海入道を案じて敢てこうして久能山への道を来たのであると。
聞いているうちに、明るかった彼女の面が見る見る曇り、
「しまった」
小さく叫んだ。
「な、なんとした？」
「それでわかったわ……あの編笠の武士」
「ぬ？」
「そうと知らず通してしまった……」

「す、すりゃ柳生兵庫めは、ここを？」
「半刻ほど前……匂い袋を持っていたから、てっきり使者の一人かと……」
「それで、清、清海入道は？」
くびをふった。
「いなかった……」
それはそうだろう。いればムザと兵庫介を太陽の使者に思いちがえるわけがなかった。才は言った。兵庫介が目深かな編笠で、この羽衣の松のあたりに来たのは使者として、ちょうど四人目。それまでの三人もいずれおとらぬ勇士と見えたが、体格といい歩はこびの隙のなさといい、きわ立って武芸の達者と思えたから、頼母しく感じつつも念のため呼びとめ、姓名をただしたら、
「もと越後少将どの家臣岡田孫太夫――」
きっぱり言った。更に匂い袋を確かめたら、
「これに所持つかまつる……この通り」
懐中からとり出して見せたので気をゆるし、
「明日あらためて」
再会つかまつらんと男声をつかい、天蓋をかぶったまま才は別れたというのだ。
「知らなかった……あれが兵庫介とわかっていたら……」

三

風が出てきて、数百千の松の枝が一斉にざわめきだした。
羽衣の松というのは古樹の一株で、下に石造の祠あり、今は弁財天が祀られているという。

潮風が海浜の砂ぼこりとともに虚無僧着の裾をまくりあげる。
「いずれにもいたせ」
海野六郎が言った。
「兵庫がひとりでこれへまかりこしたのであれば、清海入道まさか斬られての上でもあるまい。駕籠を傭うたと申すゆえ、あるいは駿府城下へ運ばれて参ったのかも……気を失うておったと申すが、駕籠にゆられて我に返るやも知れず……何にせよ、ここでそもじと出逢うたは不幸中のさいわい」
言って、
「立話ばかりもいたしておれまい……われらは念のため、いちど久能山の様子を見て参ろうと思うが、そもじはどうする？？　まだここにいて使者らしい者の来るのを？」
すると才は、
「そうね……」
少時、海の遠くへ目をやって、
「あたしは佐助との約束があるから……」
「残るか？」
「ええ。……でも」
六郎へ目をもどすと、
「兵庫介がもし斬っていたら」
「？」
「はじめにここを通った三人――」

匂い袋を証しに太陽の使者をよそおって前の三人に近づき、隙を見て兵庫介なら斬りかねない。もしそんな事態になれば、むざと彼を通した自分の責任になる、それが気にかかると彼女は言った。
言われてみればその懸念は大いにある、だが今となっては手のほどこしようがあるまい。それに、集結は明日。今日はただ様子をさぐるだけで引きかえすつもりではなかろうか？　そんな気もすると六郎はわざと明るく言って、
「気に病んで埒のあくことでもなし……のう、何なら、一緒にそもじも」
「そうね」
道は一すじである。しだいによっては久能山から又ここへ引き返せば、やって来る者と行き会うはずで、人数を確認するのに不都合とはならないだろう……ようやく、そう彼女も意を決めたらしかった。
「往くわ、一緒に」
天蓋をかおにかぶった。
二人は歩き出した。
久能山は駿府の東南三里。東海道からは一里ばかり海ぎわへ寄った海岸孤絶の山である。補陀落山ともいう、山頂に一寺あり、久能寺という。
むかし、推古天皇の御宇、久能忠仁なるもの駿河の国守に任ぜられこの国に下って、一日、田猟をして深山に入った。そこに老杉の株から発する金色の光あり、あやしんでこれを探り見るに金色の長さ五寸ばかりの千手観世音が置かれていたので、奇特におもい恐懼して仏院を営んで安置し奉って百町の田園を喜捨した。

ある夜、八十ばかりの老僧が香染めの袈裟をまとって久能忠仁の枕辺に立ち、我は補陀落山の浄土より衆生済度のためここに永く影現せん、そう告げたと見るや忽ちに夢がさめた。忠仁はいよいよ仏縁を感じて山号を補陀落山とさだめ、本願の名をもって久能寺と名づけたが、その後、百四十年を経た養老七年に、行基菩薩が海内巡国のみぎりにここに立寄り、金蔵を胸中におさめてみずから千手大悲の像を彫刻して安んじた。いまの本尊これなりと寺記にいう。

駿河風土記によれば、

『当寺は風景の地、士峰鮮かにして、愛鷹、箱根、双子山、近くは薩埵の行人、田子浦の塩釜、清見ヶ関、清水の港、入江を走る真帆片帆、漁の舟、所々にちいさく、三穂の松原真妙にしてこれよりの眺望ずい一なり』

と。

松並木を行くうちに、しだいにその遙か高い山容の樹木のあいだに寺の屋根が見えてきた。あたりには士民の人影もなく、風だけが強く枝を騒がせて吹きぬけた。

「そもじ」

この八年余の歳月、互いの身辺に起きたことどもを交々語り合ったあとで、ふと六郎が天蓋のうちをすかし見るようにして、

「佐助が話ではそもじ一人は、宇都宮城下より皆と別れておったそうじゃが」

「そうよ。柳生にいたわ」

「柳生？」

「そう、新太郎という男と一緒に暮らしていた……」

「な、なんと？」

四

そのころ――

老中土井大炊頭利勝は微びで、ひそかに駿府城内本丸にいた。

駿府はすなわち今の静岡だが、当時、城は殿舎に銅瓦をふき、七重の天守閣、空にそびえて、鴟尾は純金、破風や釘隠しはすべて銀で造られ、本丸の石垣百二十間、高さ八間、曲輪八百五十間、周囲千間のまさに大御所家康の居城たるにふさわしい偉容を誇る城だった。

家康薨去ののち、前にも述べたように紀伊頼宣が百万石でこの城を譲られるはずだったのを、にわかに五十万石で紀州和歌山に封され、駿府には甲府忠長（のちの三代将軍家光の弟・駿河大納言忠長）が入ることになった。でも忠長は当年十七歳、まだ江戸城にいて駿府で留守をあずかるのは家臣どもである。

そこへ、わずかな供を随えて微行で将軍秀忠の補佐役――それも幕閣にあって権勢ずい一の大炊頭利勝が突如、乗込んできたから、城代三枝土佐守などは血相を変え、

「スワ忠長君に越度でもありしか」

と愕いた。

「案じるでない、微行よ」

利勝は言うなり、

「土佐どの、この大炊に対面を願い出る者あらば直ちにこれへまかり通すよう、番士らに触れおいてもらえまいかの」

「さようの儀なれば、いと容易うござるが……一体、この城に勤仕いたす何者が？」

「甲府どの家士ではない、対面に参るは江戸よりの面々じゃ」
「江戸？……」
「まあよい、いずれ事を明かすおりも参ろう」
言って上機嫌の顔で、
「早馬で駆けて参ったれば少々咽喉がかわき申す……実を申すと腹の方もな、ハ、ハ、ハ、ハ……われら同様、供の者らにも茶づけなどたまわるも有難いが、ハ、ハ、ハ」
土井利勝この時五十歳。
七歳で秀忠の生まれるやそのお付きとなってより常に秀忠の側近にあり、智略縦横、家康亡きあと徳川氏が天下安泰たるを得たのは利勝の秘計策謀によるところ大とまで史家に評されている。家光の初世にあってもそうである。
もし利勝と柳生宗矩、それに知恵伊豆こと松平伊豆守信綱がいなければ、三代将軍家光の治世が全かったかどうかは怪しい。ちょうど家康の幕府創世に知恵袋本多正信、正純父子が柱石であったように、利勝と宗矩および信綱は秀忠から家光にかけ、幕府を磐石たらしめた功臣といえる。
さてその一人——松平長七郎が駿府城本丸の広座敷に、利勝への対面を望んであらわれたのは土佐守馳走の茶漬を、従士らと利勝の食べている最中だった。
「おお来たか、足労……して様子は？」
「は。あらまし当方の按配いたしましたる通り——」
「そうか。いや、大儀々々」
サラサラ旨そうに茶づけをかきこんで、

「長七郎、どうじゃ、おぬしも一膳」
いよいよ利勝は上機嫌だった。
「は。遠慮のう頂だい致します」
松平長七郎このとき二十七歳。
家光の近侍で知行わずか五百石の旗本ながら、のちに七万五千石の老中職にのぼった才気とその智略の片鱗は、すでに白皙の眉宇にあらわれていた。
茶坊主が、そんな長七郎の前にも直ぐ膳部を運んでくる。あらかじめ利勝が申し出ておいたのであろう。
駿府城はもと、言うまでもなく本多正純が大御所家康の名代で政務いっさいを執りしきった場所である。同じその城に今は正純とは犬猿の間柄でその失脚をねらい、ほぼこれを成功させた利勝が、旅装のいでたちで随行の士ともども、裃を着けず、でんとあぐらになって茶漬をくらう。正純の家臣が見たらさぞ切歯扼腕したことだろう。
茶漬といっても、当時、茶はまだ貴重品で、武士でも大方は白湯しかかけなかった。うつわも、木椀だった。それが利勝は三枝土佐守の心づかいで、塗りの臭いなどのせぬ陶器のすがすがしい茶碗に、宇治のいい茶をふんだんに淹れての香りよい茶づけである。
満足そうなのも当然だが、ひとつにはこのとき、本多正純は正式に秀忠の勘気をこうむって出羽国由利に流され、宇都宮十五万石を没収されることが閣議で決していた。宿年の意趣をはらしたその満足もあったに違いない。
「のう長七郎」
御飯のおかわりをお茶坊主に注いでもらっている長七郎へ、利勝はふと、声をかけた。

「宗矩は姿を見せんが……逢うたか？」

五

「その儀につきまして」
松平長七郎は、才気煥発な人物ににず態度はのんびりし、いつも落着いている。
お茶坊主が山盛りに飯をもるのを、
「も少し、すくな目にして頂きたい……その代り、お茶はたっぷりと」
五百石ではふだん、宇治の茶を口にすることもないためだろう。
「これでよろしゅうござりまするか？」
茶坊主が飯を減らし、土びんの茶をどっぷりと注ぐのへ、
「いや結構……かたじけない」
目を細めてうなずいて、両手に茶碗を受取ると、膝もとにひいて箸を手にし、
「まことに、甘露とはよく申したものでござる、ハ、ハ」
おいしそうに、箸で新香をはさんで口中に入れ白い歯でカリカリ嚙むと茶漬をサラサラ。見ている利勝までが呆れるくらい、平気と、健啖ぶりを発揮した。
「柳生又右衛門の儀にござりまするが」
きり出したのは、食後の茶を更においしそうに服しおわって、膳部を茶坊主が持ち去ったあとであった。
「ご老中」
今までとは別人のような、あらたまった表情になると、

「お人払いを願わしゅう存じまする」
「——む？」
「壁に耳ありとか……何卒」
駿府城内広座敷である。廊下に立って利き耳を立てる者などいるはずもないのに長七郎の眼はじっと利勝を見つめ入った。
秘策縦横の老中と後の知恵伊豆。口に出しては言わずとも以心伝心、いち早く利勝は長七郎の意を汲んだ。
「その方ら、退っておれ」
江戸から随ってきた家来に、あごをしゃくる。広座敷の四方に立って、外部から人が入って来ぬようにと、目で命じたのである。
「——は」
傍らにひかえていた家来らは、はじめてその意を察して、互いにうなずき合いいそいで、人の来そうな所へ散っていった。
「もうよいぞ長七郎」
利勝が言った。
「申してみよ。何があった？」
「——火薬にござります」
「なに？」
「柳生又右衛門どのの申されるには、久能山へ集結の者ら、ひそかに駿府城下の町家にそれとなく火薬を配置いたしおり申すとか」

「配置じゃと？　た、誰がさようなことを致せる？……長七郎、よいか、太陽の使者を詐って当地に集結させたはその方も知る通りこの利勝、それが」
「ご老中」
長七郎の顔は真剣だった。
「申上げ難きことながら、太陽の使者を募り申せし般若面の女人、じつはご老中差図の者の他に今一人おりましたので」
「な、なんじゃと」
さすがのキレ者土井利勝も目をみはった。
「誰じゃそれは？」
「……」
「申してみよ。人払いはいたしてある。誰じゃ？」
「上野介さまで」
「なに本多？……」
「いえ、本多正純どのではござらぬ。当駿府のあるじにて左中将参議——上野介忠長君で」
「な、なんと?!」
青天のへきれきとはまさにこのことだろう。将軍秀忠の第二子たる甲府忠長その人が、あろうことか幕府へ謀叛の黒幕——むしろ張本人かも知れないというのである。
「長七郎」
みるみる利勝は苦渋の表情になり、
「宗矩が確とそう申したのか？」

「は」
「しかと？」
「何条以てかようなことに嘘いつわりを……」
「証拠は？　証拠はあるのか」
「——は」
「何じゃ」
「されば、城下にバラまかれおる火薬」
「？……」
まだその数いかほどの量かは判明つかまつらず、よって火薬を配布せし真意のほども未だ確認はかない申さざる由、さりながら、久能山に集結と見せてまことは当駿府城内にこそ集結の本拠を置き謀叛の意図だけはもはや間違いはござるまいと」
「誰がさようなことを？　首謀は常陸介（紀伊頼宣）ぎみでは、ないのか?」

六

「長七郎」
利勝の面に、ありありと苦悩の色がうかんできた。
紀伊頼宣ではなく、将軍秀忠の第二子たる甲府忠長が、陰謀の真の黒幕——一見、奇異のようながらあり得ることだったのである。
すなわち、次代の将軍たるべき家光に比し、忠長は幼少より利発聡明、三河以来の直参の旗本、譜代大名らの信望もことにあつく、いっそ、甲府様が天下をお継ぎあそばすなればそれこそ幕府

は安泰と、露骨に口にし、ひそかに忠長公こそお世嗣たること然るべしと、運動をおこす者さえいた。

加えるに御台所（将軍秀忠夫人にして忠長の生母でもある）が、同じ腹を痛めた子ながら家光より忠長を溺愛して、まるで家光を継子あつかいしたのだから、旗本の中には未来の栄進をもねがって忠長に忠誠を誓う者が多かったのも無理はない。

それが、大御所家康の鶴の一声で、惣領の家光こそ次代の将軍たるべしと決まった。まだ家光、忠長ともに幼少時代——竹千代、国松と呼ばれていたころである。これには家光の乳母たる春日局の奔走があずかって力のあったことも知られているが、何にせよ、表むき、こうして次期将軍の継承問題は解決していた。

だがあくまでも表向きで、内実はまだ、事ある毎に忠長の聡明を慕い、ひそかに家光の暗愚をうとんじる者のあるのを利勝も知らぬではない。しかしまさか、弱年まだ十七歳の当の忠長が陰謀の真の黒幕とは。

「一体どういうことに相成る、長七郎——」

利勝は脇息をひきよせ、それを抱えこんで、

「考えてもみよ。あざむいて太陽の使者らを久能山に集結せしめ、幕府に異心ある不逞の浪人共を、一網打尽にせんと計ったは、このわれらじゃ。常陸介（頼宣）どのがかねての野望をこの機会に併せて摘み取るなれば、一挙両得……そう存じて隠密裡にことをここまで運んで参ったに、それが、あろうことか、忠長君まで一枚嚙んでおられるとあっては……」

「老中」

松平長七郎は一膝のり出すと、

「その御心痛もさりながら今は一刻をあらそい申す。何故なら真に危いはこの駿府にあらず、江戸の動静でござれば」

「なんじゃと。——江戸？」

「は」

長七郎は言ったのである。

宗矩をはじめ、ひそか久能山に集結の者らを成敗のため土井利勝みずから陣頭に立って、今は駿府に来ているが、こうした老中の裏をかいて、じつは陰謀の影の黒幕——忠長とこれに与した大名らのあいだに恐るべき計画あり、その計画とは、駿府城下の賑わい繁多な町々で一斉に火薬を炸裂させる。この刻限は明日九ツ半（午後一時）頃らしいが、そんな火薬が炸裂すれば駿府は東海道で一、二をあらそう城下町、且つは神君家康公の往年の居城なれば、人々の周章狼狽、その騒ぎは想像に余りあり、たちまち幕府に異変が生じたと、うわさは全国津々浦々に知れ渡るだろう。それは何よりも幕府の威信失墜につながるだろう。

そのとき、幕府執政の要職にある老中が江戸を離れ、あまっさえ騒ぎのあった駿府にいたとなれば、老中土井大炊こそ火薬を炸裂させた騒ぎの張本人と人は見るだろう。たちまち利勝の面目は立たず幕閣の地位すら逐われることになろう。——これが利勝の裏をかいた第一。

次に、駿府城下での火薬の炸裂と時を同じゅうして、江戸の町々でも一斉に諸所に火をつけ、かねて仕掛けた火薬を炸裂させる、これで、民家の半分は焼失してもやむを得ず、むしろ市民の狼狽を煽動して江戸市中を混乱におとしいれ、このとき無断で江戸をぬけ出していた利勝をいっそう印象づけることでその失脚をはかる。利勝さえ失脚すれば、おのずと家光擁立派の面々も立場を失し、そこで御台所の熱望と発言をまって、家光は病弱と称して身をひき、次期将軍家に忠

長公を幕臣一統の推挙と輿望によって確立させる——これが忠長一派の真の意図であるらしいとわかった。
　つまり般若面の女人をつかって異心ある浪人共を集めたのは紀伊公や利勝の謀らいながら、それを巧みに利用したもう一つの動きが実はあることがわかった——そう長七郎は言ったのである。
「まことか？　まことに江戸も火が出るのか？」
「御意、されば一刻も早う、今はその火を止める手だてを講じあそばさぬとそれこそ天下の一大事に……」

七

「どうすればよい？」
　ややあって利勝が重い口をひらいた。
「されば、柳生どの申されるには、今日とあいなっては早馬を走らせようとも明日午までに江戸への到着はおぼつかず、——と申して、ことを傍観いたせるわけもなし。方法はひとつ、忍者をお使いあるようにと」
「忍者？　今さようなものが」
「ご老中」
　松平長七郎の白皙のひたいに、心なしか興奮の赤味がさし、
「おりまするぞ二人」
「？」

「ひとりは女、ひとりは伊賀者、いずれも真田の残党にてすなわち太陽の使者——」
「な、何と？」
「されば、彼らに因果をふくめ、この大役果たしてくれるなればと」
「だ、だれがそれを申しつける？　また申しつけて承知いたすような手合いか」
「ほかに手段はござりますまい？　この駿府においてすら火薬の炸裂をすべて阻止いたす手だては、もはやないのでござりまするぞ。ましてやお膝もと江戸表にて陰謀の裏をかくには」
「……」
「ご老中、柳生どのとこの長七郎に事の始末いっさい、おまかせを願えませぬか」
「どう処置いたす？」
「女に、天人の舞いを舞わせまする……羽衣の松のほとりにて。天女が空より舞いおりると駿府城下にうわさをひろめ、城下の者どもを三穂の松原に群衆いたさせるなれば、たとえ城下に火薬が炸裂いたすとも町民どもの数少なく、騒ぎは大きゅうはなりますまい、あまつさえ、天女が黄金の雨を降らすと吹聴させますれば人はあらそって松原に集合いたすは必定。されば城下に少少火薬の騒ぎを見るとも」
「だれがさような舞いをいたす、天人のじゃ」
「霧隠才蔵と申す忍び者——まことは女人にて、太陽の使者が一人」
「！……」
　利勝は絶句した。
　本来なら搦め捕るべき不逞のやからなのである。
「承引いたすか、本人が？」

「させるほかはござりますまい」
「江戸の方は？……だれが走る？」
「猿飛佐助。同じく真田残党の一人にござる」
「承知いたさずば？」
「何としてもさせませぬと」
「説得は誰(たれ)がする？」
「はばかりながら拙者が。身命にかえましても」
しばらく利勝は沈黙した。
城主不在の城なれば勤番の士も少なく、城内は森閑として広間の四辺に見張りに立った利勝の供侍の他に、近づく者の足音もない。
尾張名古屋の金のしゃちほこに比肩するといわれた純金の鴟尾(しび)を輝かせて、天守は多分、何事もなげに今も冬空にそびえ立っているだろう。城をあずかる三枝土佐守さえ、様子で見れば主君忠長が陰謀の張本人とは、知らぬようだ。それだけに余計、利勝の秘策の裏をかいたその陰謀の底知れぬ不気味さが感じとれる。
いうまでもなく利勝は、幕閣でもっとも重きをなす存在であり、将軍秀忠の治世万全をねがえばこそ、本多正純の専横――何かといえば大御所さま御遺訓を鼻にかけ、秀忠の威光すらおびやかす――を挫折させ、失脚に逐(お)いやった。その利勝を、陥れようというのだ。御台所が一枚かまずになせることではないのである。
それをおもうと、ふと、婦女子と何やらは度し難し――そんな賢人の古訓が脳裏を横切る。
利勝のかおは曇った。

といって、放置できることではない。
「よいであろう」
しばらくして、脇息(わきづき)をわきへ押しやると利勝はむきなおり、
「いっさいは長七郎その方にまかす」
「はッ……」
「金はどういたす」
「？」
「黄金じゃ。いかに忍者なればとて枯葉を降らせて黄金に見せることはかなうまい。……小判、いかほどあればよいの？」
「おそれながら……三千枚ほどこれ有るなれば――」
「三千両……それでよいのか？」
「――は」
「遠慮はいらぬぞ、天下がつつがなく治まるかどうかの瀬戸際」
「ならば、五千両」
「よし」
うなずくと利勝は頭をめぐらして、
「主膳」
供侍の一人へ呼びかけた。
「三枝土佐守をこれへ。この大炊頭、至急、所用ありと申せ――」

八

こうして、当初は想いもしない事態となった。

駿府城本丸を出た松平長七郎は、飛ぶように城下梅屋町の旅籠へ走った。日ごろ思慮ぶかく、沈着な長七郎にはめずらしいことである。

駿府城下は籠細工を売る店が多く、梅屋町の旅籠万屋もそんな籠をひさぐ店の並びにある。

街道に面したその万屋の二階に、猿飛佐助と柳生宗矩がもう一刻以上もにらみ合うように、対坐して、長七郎のもどってくるのを待っていた。隣室には長七郎同様、江戸から来た旗本の精鋭ともいうべき数名がひかえている。猿飛佐助のうしろには三好清海入道が巨体を横たえ昏々と眠っている。

階を飛ぶように長七郎はかけあがり、カラッと障子を開けるや、

「待たせ申した……話は委細、ついてござるぞ」

腰の差料をはずしながら右手に持って、

「柳生どの」

ぴたっと宗矩のわきへ着坐し、

「ご老中ことごとくわれらの申し分をお聴き入れなされた。真田の残党たりとも、たとえ太陽の使者たるもこの場の急を救える者他になし、されば枉げて猿飛佐助らが尽力を乞うと――」

「聞かれたか？」

宗矩が佐助に言った。宗矩の表情には、愁眉をひらく懐いと、たちまち十年の知己に語りかけるような親密の色があった。

「今われらが諍いをいたさばとてお手前らの思うがような天下になるわけもなし……いたずらに人心を騒擾させるばかり。どうであろう、恩讐を超えて、ここは無辜の民のために働いてはもらえまいか？　さすればこと落着のあかつきにはお手前ら真田の残党のこらず、思うがままの余生を送れるように」

「何をせよと言われる？」

佐助が訊いた。彼はまだ警戒の目でうさん臭そうに宗矩をにらんでいた。

「拙者から申そう」

長七郎が膝をすすめ、

「おぬしに江戸へ走っていただくことがひとつ。霧隠才蔵どのには三穂の松原にて天女の舞いを舞うてもらう……そのみぎり、舞いながら黄金五千枚を空より降らせることが一つ」

「黄金？……何のために？」

「当城下の町民どもを火災の混乱にまきこまぬため」

「？」

「おぬしには明かしてなかったが――」

宗矩がわざと、おだやかな口調で、

「太陽の使者と称する者、じつはおぬしらのみではない、他にも」

「そのことなれば紀伊公に聞いて参った」

「火薬のことも？」

「――火薬？」

「よいか、当駿府城下には知っての通り竹細工をあきないいたす民家が多い、そこに目をつけ明

十一日九ツ半を期して、おぬしらとは別に陰謀をたくらむ者らひそかに町々に仕掛けおいたる火薬に一斉に点火いたす。何としても、われら極力この点火を阻止いたす存念ながら何処に仕掛けあるやは、未だ分明せず。よって、たとえ一、二個所にせよ、阻止かなわず火薬炸裂するなれば火災の起るは必定――そのとき、人心の動揺混乱を避けるために三穂の松原にて明日、天女が舞いおり黄金の雨をふらすと言い触れるなれば、人々あらそって松原に蝟集いたそう。さすれば城下の混乱は防げようと」

「待っていただこう」

いよいよ佐助は疑い深い目に、嘲笑さえうかべ、

「空中に人が舞いあがるさえ容易な業ではござるまいに、まして黄金五千枚など……そもそも五千両がいか程の重さか見当がつきますか」

「むろん存じておる。しかしほかに手だてはない。霧隠才蔵は女、忍びの秘術をつくして空中に舞うがごとく見せるくらいは才なればやり了せてくれよう……その、天空に舞う如く千本松原の枝より枝へ飛び交う隙に、海野六郎が強弓を以て空中へ黄金を射あげるなれば」

「何と言われる？」

「佐助どの」

長七郎が向きなおった。

「ほかに手段はござらんのじゃ、何としてもお手前らにこのこと」

「海野や霧隠が、それを承知しましたか」

「本人らにはまだ何も申しておらん」

「な、何と？」

「この通りじゃ佐助どの、頼む」

ピタッと両手をつき、赤心をおもてに表わして松平長七郎は猿飛佐助の前に、低頭した。

「天下のために、何卒、……たのむ」

九

「くわしく聞かせていただこう」

しばらくして、猿飛佐助が窓の外へあげていた目を長七郎へもどした。この時隣室で聞き耳を立てていた旗本五名が、境のふすまを押しあけ、すでに座敷へなだれこんでいた。中には刀に手をかける者もいた。佐助の返答如何ではこの場で『太陽の使者』を斬る決意がその面上にあふれている。

彼等にはだが目もくれず、佐助は言ったのである。

「霧隠を説得するも何も、今となっては誰が陰謀を策し一体だれが真に謀叛の張本人か……それさえわかりかねる身で」

「いかにも申されるところは道理。こうなれば、では何もかもを明かし申そう」

言って長七郎が坐りなおり打ち明けたところは佐助らの想像をはるかに越えたものだった。

先ず謀叛の全貌――その計画の概要を長七郎は明かした。

「何人がこれを策謀せしかその名を明かす儀は、ひらにご容赦ねがいたいが」

じつは兼ねて江戸城本丸は修復工事がなされ、昨日、ようやくこれが完成して今日――つまり元和八年十一月十日、将軍秀忠は仮住居の西の丸から落成した本丸へ移られ、今まで本多美濃守の屋敷に寄寓中の大納言（家光）は西の丸にもどられることになったが、これを機会に本丸の殿

舎落成を祝して明け一日昼さがりより夜陰にかけ、江戸城内では挙げて賀宴の催される手はずがととのっている。

しかるに、この機をとらえたのが陰謀の一味である。彼等は、水道――玉川の上流に毒を流し、お堀の内にも毒を流入して城内にある番士らの警備を弱める一方、江戸市中にて火災を発生させる。その方法は、挟箱の下に懸子を仕込み、この中に火薬を詰めてかけごの上には衣類を入れ、いったん火が移れば何人の手際をもってしても消えぬよう、また水に入れても消えざるよう秘法をつくしたものを、能き所々の質屋に風の模様によって預け置き、当日七ツ下りを期して燃えあがるように仕掛けおく。そうして時を同じゅうして、江戸城内の焔硝蔵に別の一味は火をつけ、その騒動にまぎれて葵の御紋の提灯をかざし城内を通過して賀宴の席に乱入、

「江戸市中おびただしき出火と相見え候えば先ずは上様、紅葉山にご避難あってしかるべし」

と喚きつつ宴席をも混乱におとし入れた隙に、あろうことか、大納言家光を拉致してこれを暗殺しようというのである。

さらには江戸市中で火を起こさせる徒党の者らは、くさりかたびらか畳具足を着用し、火を出したあと道灌山に集合して事の成否をまつ。万一、大納言暗殺のことが失敗におわれば家光擁立派とみられる幕府老臣および大名を殺戮し、以て老中土井大炊頭らの引責辞職を余儀なくさせる

「これだけ申せば、おぬしにはもうおわかりであろうが、かねてこの陰謀に加担したとおぼしき伊達政宗はいち早く騒ぎをのがれ、去る十月十七日、仙台に向け江戸を発足いたした。また紀伊公は知っての通り病いと称し和歌山の城にあり、越後少将、越前忠直卿また似たようなもの……政宗どのを除いてはこれすべて、病気あるいはお咎めをこうむる身をよそおいながら江戸と駿府

にての騒ぎの結果を見ており申す」

「……」

「ま、有体に申すなら、次代将軍家に誰がなろうとおぬしには憎い徳川の相続争い……いっそ紛糾の大となることこそは痛快とも存じられよう……だが、そのために罪もない市民の混乱狼狽を招いてよいものか、政（まつりごと）は仁を以てとうとしとなす……土井大炊頭どのは仁を第一義といたすなれば江戸市中の出火をおさえることこそ急務、それには忍び者のおぬしに江戸へ急行いたしてもらうほかに、もはや為す術はないと……」

「明日七ツ半を合図の火事と申された……」

「さよう」

「今はもう七ツ前……いかにわたしが忍びの達者とて……」

これから江戸へは薩埵峠、箱根の嶮所を越えねばならぬ。川幅八十間の興津川、由比川、流れの早きこと海道ずい一の富士川。さらには酒匂川や六郷川をそれも夜中に渡らねばならない、明日午前中にそうして江戸へ到着せよとは、鬼神でもないかぎり、到底、人間わざでは……言って佐助が苦笑したら、

「おぬしなら走れるはず」

傍で黙っていた宗矩が、口をはさみ、

「それともおぬし、新太郎の邪魔いたすが、こわいか？」

帰去来

一

どれほどか過ぎて。

西向きの窓に夕陽が映え、ようやく日は暮れようとしていた。松平長七郎はふすまを閉め立てた隣室で、いらいらし、

「柳生どの」

いかに猿飛佐助が忍びの達人でも、早く出発せねば、明日朝までに江戸へ着けるかと焦慮の目をあげ、

「だいじょうぶでござろうか？」

宗矩は腕ぐみで目をとじて静坐しつづけ、となりには柳生兵庫介が、匂い袋を三つばかり手にとって見くらべながら、黙っている。声は小さくとも隣室の気配は、兵法者だけに察しがつくのだろう。

隣室には、猿飛佐助を囲んで海野六郎、霧隠才、それに激痛の麻酔から目のさめた三好清海入道がいた。

六郎はまだ手首を布で首から吊っている。

清海入道は兵庫介に切り落された耳の傷にもめげず久能山へ向かおうとした無理がたたり、とくに肘の傷が化膿して激痛にあえぎながらも人足の背に負われて江尻の宿はずれまで来たところを、あの路傍の女の変死人のかたわらで再び兵庫介に追跡され、当て身をくらって失神した。何やら痛めつけられたように老百姓は海野六郎にあの時語ったが、実は兵庫介は清海入道を救急のため気を失わせ、駕籠で駿府へ運ばせたのである。そうしないと化膿で清海入道は一命を落とすところだった。はじめから、三好を消すつもりなら一刀両断に兵庫介はしている。人間的に三好の人の好さを兵庫介は抹殺するにしのびなかったから、何とか長生きさせたいと立場を忘れてむしろ苦慮したのだ。

駿府城下で、そんな清海入道を早駕籠に舁かせた兵庫介と行き会ったとき、互いは初対面ながら猿飛佐助はいっさいを明察した。清海入道の処置は一刻をあらそうものだった。

傷口を切開して膿を抉出せねばならない。それには血止めが必要であり、栄養の補給も同時に行なわねばならぬ。そうした要求をみたすには忍者の常用する丸薬こそふさわしい。

兵庫介は城下町のはたご（本陣）小倉屋平兵衛方で宗矩と落合う手はずになっていた。しかし宗矩には清海入道を生きのびさせる手術をほどこすとは言いづらい。そこで佐助と出会ったのを好便に、ちょうど目の前にあった旅籠万屋へ清海入道をかつぎこむことにした。

清海入道は駕籠の動揺で失神からさめていて、激痛に耐えながらも佐助を見るや、

「おお、猿飛……助けてくれい。こ、こやつは柳生兵庫……公儀の刺客にしてわ、われらの敵じゃ。われら太陽の使者をなきものにせんために……」

言いながら必死に駕籠から降りようとして、クラクラと目まいし、再び失神せんばかりだった。

佐助はだが紀州で頼宣公に直に対面して、久能山の集結が実は別な陰謀一派の囮(おとり)に利用されそうなのをすでに知っていた。太陽の使者の集結は、もとは確かに紀伊公の方寸に出たことではあったが、今やそれは公儀取締りによって一網打尽になるどころか、むしろ別な不満分子の政変の具に供されることを。

そこで、同志を犬死させないために夜の目もねむらず、急遽(きゅうきょ)和歌山から、ひた走りに山野を疾駆して駿府まで戻って来た。そうして城下で清海入道らしい者が早駕籠に昇かれてくるのと行き会ったわけだった。

駕籠わきにいた柳生兵庫介を、ただ人ならずと一目で佐助は見ぬいた。兵庫介も猿飛佐助の正体を看破した。

「そこもとが真田の残党——伊賀流の猿飛佐助か？」

最初に声をかけたのは兵庫介の方だった。佐助はこのとき、行商人に変装していたのに。

「ありがたや……そこもとに此処(ここ)で逢(お)うたは三好清海にとって正に天佑(てんゆう)」

言って、

「一刻をあらそい申すぞ、早う化膿の処置をいたさぬことには……そこもと所持の忍び者の血止めと、さ、丸薬を早う——」

佐助は「こやつ公儀の刺客ぞ」と喚く清海入道の憔悴(しょうすい)しきって、とろんと濁る眼を見て、すべてを察した。ただちに兵庫介と力をあわせ、万屋の二階一室をかりきり麻酔の丸薬を呑(の)ませて耳と肘の化膿の抉出手術を施すかたわら、

「おぬし」

兵庫介に言ったのだ。太陽の使者を斬ればとて事が済むと思われるか？　別の一派の動きがあるのを承知か、と。

「別の一派？……」

兵庫介はこのときはまだ知らなかったのだ。ひたいに汗して、小柄(こづか)を手に化膿の傷口を抉(えぐ)っていたのだ……。

二

「どうする？」

清海入道が元気のない声できいた。くびから頭に幾重にも包帯を巻き、化膿を切開した血が赤黒く耳のあたりににじんでいる。肘にも三角布(ふ)をあてがって首から吊っている。海野六郎より、よほど重態な様子だ。

「どうと申して……わたしより才、そなた、どうする？　引受けるか？」

才はまだあの虚無僧のいでたちでいた。

「仕方がないでしょう」

才はもう観念した面持ちで、

「ここへの途中、もう人はうわさをしていたもの」

「天女が舞いおりると？」

「ええ……小判が降ることも」

「すりゃ、天女の舞いは見せずとも、もはやこと済むのではないかい？　城下の者らが競って松原に出向くであろうゆえ」

「そうもなるまい……舞いもさることながら小判を目当てに出向くが人情の常、それが無うて

は」
「おぬし、そ、その肘で矢を射れるんかいの？」
六郎へ清海入道が不安そうな顔を向けた。
「われらがことより、猿飛こそ気がかりよ、不眠不休で御者、紀州より駆けて参ったのであろう？……このままそれが又江戸までとは……身が、もつか？」
「もたすしかあるまい」
佐助は苦笑して、
「才」
「？」
「そなた、では舞うてくれるな？」
才は白いおとがいでコックリをした。障子の夕映えがそのふっくらした頬に映え、男装していても爛熟しきった女の艶冶な美しさをにじませている。半裸でこれが天空に舞えば、まさに羽衣の天女であろう。
「六郎。おぬしも引受けてくれるか？」
「やってみよう」
六郎はチラと肘に目を落として、
「この腕がたとえくさっても、飛ばしてみるが……小判五千枚となるとのう」
「どうして飛ばすんじゃい？」
「二十枚以上の小判は所持いたしたこともないゆえ、重さの見当がつきかねるが、矢羽根の代りに挿んで、放つなれば……」

「佐助」
憔悴していても清海入道の関心がそこにあることに変りはないらしい。
「小判五千両……どうして入手いたすんじゃ？」
「ほどなくこれへ届けられるはずよ」
「駿府城から？」
「さよう、松平長七郎の申すこと、うそはあるまい」
すると隣室からふすま越しに、
「さよう、間もなく到着いたし申す」
「す、すりゃ、われらも手伝おう六郎……小判十枚と申せば重いぞ……よほど矢先を重ういたしておかぬといかにおぬしの弓術を以てしても、飛ぶかどうか」
「そうよの」
「それにじゃ、矢が要る。一矢に小判三十枚を飛ばせばとて、百数十本の矢が要る勘定よ、今宵のうちに小判をその矢に挿んでおかいではなるまい」
「――」
「わかってくれい……わしは何も小判に執心して申しておるんではないぞ。この非常の際に、佐助は眠りもならず江戸へ走る。才は天空を舞いおぬしは深手のその腕で矢を放とうというに、われら独り、坐視せいではならん……つらいんじゃ、のう、じっとしてはおれぬ心地じゃ……手伝わせてくれい。せめて矢の準備ぐらいにこの清海入道が片腕を……怪我さえせんでおったら百人力を誇った、せめてこの腕を……」
しめっぽい言いぐさだが何か、悲痛な真情がこもっていた。

「いかにも手伝うてもらうわ」
目をしばたたいて六郎が言った。
「御者の手をかりぬことにはわれら一個では到底」
「そ、そうかい。そうかい」
嬉しそうな清海入道の声がやまぬうちに唐紙が開いた。
「ならば猿飛どの」
長七郎が喜色をあふらせて、
「そうときまればことは一刻をあらそい申す……早う……小判を矢にはさむことなれば、われらも力をあわせ申そう、他にまた入用の品あらば何なりと都合つかまつる、当地がことは安堵めされて、さ、早う江戸へ」
言われなくても佐助はそのつもりでいた。今から十八里の道を走り暗夜に箱根の嶮を越える……駿府より江戸へすべて四十四里二十六丁。紀州からの道程をふくめれば百四十余里を一睡もせず疾駆することになるわけだ。尋常の決意で果たせることではなかったろうが、案外、平然と佐助は起ちあがると、
「では、わたしは、出掛けよう――」
あらためて六郎、才、清海ひとり一人の顔を感慨をこめて見まわした。今生の、これが別れになるかも知れなかった……

三

いよいよ座敷を出るとき、

「才」
佐助は廊下の障子ぎわに立って、
「あとは、たのんだぞ」
やはり女である。彼女は双眸をうるませ、万感の懐いをこめて見上げながら、無言で、うなずき、
「佐助も気をつけて」
ピタッと後ろ手に障子を閉めた。もう伊賀流の忍者猿飛佐助の、生死を賭けた疾駆にのぞむきびしい顔になっていた。
隣室の障子が開いて長七郎と兵庫介が姿を見せた。なぜか宗矩は室内にのこっていた。長七郎は廊下に跪坐すると、あらためて佐助を見上げ、
「何分ともに……この通りにござる」
其処に両手をついていた。
佐助はわらった。
「心配なさらずとも、夜明けには江戸へ着いており申すわ」
「かたじけない……」
兵庫介は一緒に階段の下までついて来た。
「そこもとのことゆえだいじょうぶとは思うが」
兵庫介は言ったのである。
「馬を用意いたさせてある……せめて沼津か三島あたりまで、騎馬で」
「それではかえって」

佐助は苦笑した。
「手間がかかり申すわ」
「しかしそこもと食事も満足に採っておられんが」
「走るには食わぬ方が……ハ、ハ」
それでもそばを離れようとしない。土間で草鞋（わらじ）の緒を締めるのに並んで兵庫介も出発の身支度になっていた。万屋は街道に南面していて、軒（ひさし）に傾いた夕日が土間まで差しこんでいる。急ぎ足に表を往反する旅人の影が目の前を動いてゆく。
「おぬし――？」
佐助は笠（かさ）などはもうかぶらない。ねずみ色無地の忍び装束に刀を背に負い、火打ち袋などを腰にさげているだけ。この旅籠に入って来た時は商人風だったのがいつの間にか忍者装束に変っているので、宿の下女など土間の奥であっけにとられて見まもっていた。
兵庫介は、佐助のおもわくには介意せず上り框（がまち）を起つと携えていた藺笠（いがさ）を、かぶった。
「何故ついて来られる？」
佐助が表に出て、とがめる口調になったら、
「ついて参るのではない」
「？」
「待伏せいたす者を、斬る」
「わたしを待伏せる者がいる？……」
「叔父貴に頼まれ申した、新太郎が、かならずやそこもとの江戸入りを妨害いたすであろうと」
「しかし兵庫さん――」

佐助はもう歩き出していた。
「わたしの足について来られますか？……それに柳生新太郎もたしか古陰流忍びの達者」
「心得ており申すわ」
兵庫介は、後れまいと大跨（また）に歩（あし）をはこんで、
「今少し参らば馬を用意いたしてある。身共はそれに乗って参る」
「わたしは、本街道を行くとはかぎりませんぞ」
「いかさま、承知いたす」
駿府城下の賑（にぎ）わいは日没とともに帰路につく者、投宿先へわらじを解かんと急ぐ旅人で、ひときわ雑踏していたが、所々で、そんな人々が黒山をなしているのは城の番士の説明を聞いているのだ。
「明日朝、羽衣の松付近にて天女の舞いあり、そのみぎり小判がふるよしなれば遠慮のう拾い取るがよろしかろう、武士たる者が斯（か）く申すこと、誓って虚言ではないッ……」
無関心にそんな人だかりのわきを佐助は通過した。おくれず兵庫介も歩をいそがせた。
やがて城下町の賑わいはうしろになり、久能山みちと江尻への本街道にわかれる所に来た。
太陽はまさに沈まんとしていた。
そこに馬が二頭待たせてあった。手綱を把（と）って待っているのは軽輩ながら、武士であった。
「兵庫さん」
すかさず佐助は言った。
「無駄だ、あなたの手には、負えん」
「？――」

「新太郎は、さいぜんからわたし共と一緒に歩いている」
「な、なに？」
「見えぬようでは斬りようはありますまい。彼とは、わたしが決着をつける。——では、ご免」
言うとパッと佐助の姿は目の前から消えていた。
烟りのような消えようだった。

四

兵庫介は、しばらくまだ四辺をうかがい見て、その場を動かず、
「小林」
手綱をもつ若侍に言った。
「はっ？」
「おぬし誰ぞ人の通るのを、見たか」
「いえ」
「——やはり、そうか……」
あたりはしだいに暗くなろうとしている。
季節おくれの百舌が何処かの梢でこの時、
キッ
と鋭く啼いた。
兵庫介は小林又五郎のそばへ寄っていった。彼はもう疑わなかった。柳生新太郎などどこにも通りがかってはいなかったことを。

兵庫介をまくための、いわば猿飛佐助の芝居と見たのである。
手綱を受取るとヒラリと兵庫介は馬上にまたがった。
「身共はこれより江戸に往く。おぬしはその一頭で駿府へもどれ。万屋なる旅籠に叔父貴はまだおるはずじゃ、逢うてこう伝えてくれよ、刻限におくれるともこの兵庫介かならず江戸に入って大納言（家光）どのを守護つかまつる、江戸にある尾張藩士ことごとくを率いても——とな。猿飛佐助は頼母しい男。彼なれば明朝には江戸に入り、焔硝蔵の出火を阻止いたしてくれよう、が彼とて神にはあらず、徹宵、この東海道を駆けるのではもはや生命はもつまい。その骨を拾うてやるも兵庫一代の面目と心得る、とな」
「——」
「こうも申すのじゃ、よいか、されば江戸表はわれらにまかせ、駿府が始末は叔父貴の才覚に頼み入れると。駿府が火の海となってはせっかく江戸を鎮めるとも、陰謀は半ば成ったも同然。火薬の炸裂のこと、ならびに松原にての天女が舞い、万遺漏なきよう頼み申すぞと、そう伝えてくれよ」
言って馬首を東へ向けると、
「さらばじゃ」
一鞭あて夕闇に駆け去った。
そのころ佐助はもう江尻の手前、草なぎ村にさしかかっていた。天馬まさに空を行く捷さだった。兵庫介の眼に狂いはなかった。柳生新太郎はまだ現われていなかった。
六ツ半（午後七時）前に薩埵峠を越えていた。五ツには甲州身延山へ岐れる道を横切った。そして夜更には三島の七面大明神境内裏を疾風のごとく通過していた。

新太郎は現われなかった。

箱根権現を過ぎたのは午前三時ごろである。草も道も凍っていた。処々に淡く雪が積もり夜空には皎々と月が光っていた。

さいかち坂にさしかかったあたりで、いちど、佐助はうずくまり、手に小柄をにぎった。踝のわきと、ふくらはぎにプスッと小柄を刺しこみ、うっけつした悪血をしぼりとった。それから又走った。

この荒治療では今後、忍びの疾駆は不可能になるおそれがある。

「わしも弱いな……」

ふと自嘲めいて、走りながら佐助はつぶやき、

「才はいまごろどうして居るか……ふ、ふ、どこぞの神社で天女に紛う巫女の衣裳を盗んでおるか……あれも弱い女子よ、空に舞うには《禁の呪い》を唱えねばなるまいに……死ぬるぞ。いっそ死ぬなら真田十勇士霧隠才蔵でありたかったろうに……」

湯本にさしかかっていた。はるかな空に東雲の仄明さがひろがりはじめていた。鬢をなびかせ、ひたいに汗して疾る佐助の顔面はだが蒼白だった。目のふちは黝ずみ死相のごときものがしだいに浮んでいた。

だが彼は走った。

江戸へあと約二十里余。

太陽の使者とはけっきょく何者であったのか。だれのための使者か。

知らず、彼はただ走る。

それは一つの歴史から次の歴史への使者であることだけを彼は知っていた。

五

「出たか新太郎……退け。何としてでも、わたしは通るぞ!……」

走りながら佐助は叫んだ。

小田原を過ぎようとした。足柄山へわけ入る道が行く手に見えてきた。

にわかに、佐助の歩度はゆるんだ。呼吸をととのえつつ彼は背に負うた刀に手をかけ、いつでも抜き合わせる用意で減速しながら走っていた。

行く手に、忍び装束の武士が二人、ゆっくり、立ち現われた。一人は大手をひろげて立ちはだかった。

猿飛佐助ははしった。

「待て」

大手をひろげた柳生新太郎は、意外にもその目に微笑をうかべていた。

覆面はせず、月代もきれいに剃って仕官した武士の風貌である。

となりにいるのは狭川古弥太。これまた青々とさかやきを剃りあげ、下げ髪の元結が気のせいか真新しい。

気負った佐助には、だがそんなものは目に入らなかった。

「どけ」

近よりつつ背の刀を半ば抜いて、

「邪魔立てするなら、斬るぞ」

「いいや、どかぬ」

新太郎は豪胆にも白い歯を見せた。

「江戸に入ることもはや無用よ。おぬしほどの伊賀流使いを、むざと死なせとうはない……どうじゃ、われらに与（くみ）して仕官をせぬか」

「――仕官？」

「おぬしにはお万阿さまを通じなば主筋とも相成るはず。仙台伊達政宗公よ」

「？……」

「うそではないぞ。申しておこう、焔硝（えんしょう）蔵をあずかる塩谷金兵衛なる者にわかに心を変え、何もかも公儀に直訴して陰謀ことごとく露顕いたした。昨夜のことじゃ。よって江戸市中にばらまかれた火薬仕込みの挟み箱も、玉川に投入の毒薬がことも幕府役人の知るところとなり、夜半より今朝方にかけ厳重取締りがなされておるはず。されば本日本丸落成の賀宴も予定通りこれを取り行なわせられ、大納言どの又」

「待て。おぬしいま伊達公に仕官というたが、伊達政宗こそ陰謀に加担の大名、それがなぜ」

「塩谷金兵衛に直訴をうながされたは伊達公よ」

「？」

「わからぬか、つまりはこの新太郎が政宗公に陰謀しょせんは成就し難きを進言し、謀叛（むほん）のこと翻意あるようすすめ奉った。この功によって斯（か）くは仕官かない……」

「まことか？」

声をつまらせて佐助は一歩、詰め寄った。

「おぬしも疑い深いの」

新太郎は頰（ほお）をゆがめ、

「あらましは言わずとも察しておったと思うが、もとはわれらも紀伊公が手先となり、久能山に蹶起（けっき）せんとおぬしら物の用に立つ丈夫（つわもの）を募った、これは事実よ、ありようを申すなら、わしの憎いは又右衛門宗矩ただひとり。われら古陰流、宗矩が新陰流にまさること天下に知らせたいと、その一念で紀伊公にも取入ればおぬしらの敵にもなった。だがの、何の、駿河にて百万石の欲求どころか、将軍家ひざもとで丸ごと天下そのものを乗っ取ろうなどという、それも将軍家の次子がよ、大野心をおこしているとわかっては、何もかも馬鹿（ばか）らしゅうなった……斬った張ったの諍（いさか）いがじゃ。それで」

「伊達公を動かし、すべての陰謀露顕にもっていった――そう言うのか？」

「ありようは、そうよ」

「おそい」

激怒で猿飛佐助は喚（おめ）いた。

「おぬしが言うとおり、それで陰謀はおさまるかも知れん。江戸市民は毒水をのまず、火事にもあわずに済むかも知れん……だが、おそいわ」

「――何が？」

「才はどうなる？　もう朝が来たのじゃぞ。太陽はやがて昇るわ。日が昇ればあれは天女に化けて松の梢（こずえ）に舞う……禁の呪術（じゅじゅつ）をおかしてよ。されば死ぬるぞ。才ばかりではない、筧十蔵、穴山小介、由利鎌之助……みな太陽の使者たらんとして死んだ……それを今になって」

「いかさま、それを申されると心苦しい……がの、過ぎたことよ。それより今、おぬし、妙なことを申したな、才が天女に化ける？……どういうことじゃ」

「駿府城下の市民を騒擾（そうじょう）させぬために三穂の松原へ誘い出す秘策――」

聞くなり新太郎が愕然と表情を変え、一瞬、古弥太と目を見合わした。古弥太は忽ち駿府へ向け走り出す気配を見せた。

「おのれそうかッ」

佐助は絶叫したのである。

「うそじゃな。江戸表にて陰謀もはや無しというも、さては、わしの江戸入りを止める謀略かッ。卑怯。新太郎、卑怯……」

叫びながら必死の勇をふるって左手に古弥太目懸けて手裏剣を投げ、右手で新太郎の肩口を斬っていた。目にも止まらぬ早業、鬼神の二刀使いだった。

天は佐助に与し給うた。

狭川古弥太は片目を刺しぬかれアッと叫んで面をおおい、新太郎は頸動脈から血をふいて、

「お、おのれ……」

むなしく佐助に斬りつけていた。その時には佐助はもう二人のそばから半丁あまり離れて走っていた。

あたりはすっかり朝になっていた。燦然と空には太陽が昇り初めていた。

太陽に向って、必死で、一人の忍者は走って行った……。

解　説

真鍋呉夫

こうして梅雨冷えの深夜、ミニホカロンで腰の疼痛をなだめながら五味康祐君の奇想天外な遺作を読みかえしていると、その命終の夜の玄関先にしんと咲き鎮もっていた桜桃の花冠のかすかな光の暈や、三十五日の忌明けの日が来てもやはり玄関わきの廊下にうずくまって主の帰りを待ちわびていた巨大なシベリア犬「玄」の哀切な姿などとダブって、あの底ぬけに人なつこい笑いをたたえた五味君の特異な風貌がまざまざと蘇ってくる。

だから私には、その迅速な帰幽からもう七年もの歳月が流れさったとはとても思えないが、五味君の生前の言行はそれほど奔放で、自分でもくりかえし書いているように、一見傍若無人にさえみえかねない場合もないではなかった。いや、すくなくとも直情径行であった。耳が聞こえなかったせいもあったかもしれないが、短気でもあれば、狷介でもあった。私なども、いつかは殴りあいになるにちがいない、とひそかに覚悟していたくらいである。

しかしその実、五味君は青年時代以来、一見傍若無人なその言動の根源に、無類に純真な初心を持久して渝ることがなかった。ひとたびなにかが魂の琴線に触れれば、たとえ世間の評価がどうであろうとも、一途にその対象を敬重して憚ることがなかった。というよりは、傍で見ているだけでもはらはらせずにはいられぬほど素純でもあれば真率でもあったが、その生涯の師であった保田與重郎氏への敬愛や檀一雄氏への親近、あるいは同君のいわゆる「西方の音」への独自な

傾倒などは、そのもっとも生粋で顕著なあらわれであったろう。

しかも、五味君は上京以来なかば強いられて世捨人同然の生活に甘んじていた私に対しても、ほとんど手ばなしとしか思えぬような好意を示してくれた。たとえば、私が柄にもなく内灘や筑豊をうろうろしていた昭和三十一年には『指さしていふ』という中篇の中で「私の好きな真鍋呉夫を実に大切にしてくれる人として、檀さんを私は信じ、いつかは会いたいと思っていた」と書いている。また、檀さん歿後の五十一年には『檀さん、太郎はいいよ』という回想記の中で「終戦後の私の文学青年的出発は、九州の同人雑誌『午前』に載った真鍋呉夫クンの作品に啓発された所が大きい」「以来、真鍋君は心の私の友であり、真鍋君の師事する檀さんへの敬慕を私のうちに育てた」「しかし私を覚醒させてくれたのは真鍋君の文章であった」などと書いているが、五味君のこれらの記述をここに紹介するのは、必ずしも私の自己顕示欲のためではない。むしろ、こういう場合の五味君の一途でとめどない志向を理解してもらいたい、と思ったからである。

にもかかわらず、当時の私がこれらの記述に接して一種の当惑と忸怩たる思いを禁じえなかったのは、どんなに点を甘くしてみても自分が五味君の鼓舞に価いするとは思えなかったせいだけではない。そのとめどない好意の来由と経緯にもうひとつ、はっきり納得しにくいところがあったからであるが、ここでかりにこの一節が五味君の眼に触れたと仮定すれば、五味君はきっと伊東静雄の、

かく誘ふものの何であらうとも
私たちの内の
誘はるる清らかさを私は信ずる
――「わがひとに与ふる哀歌」

という鍾愛の一聯を援用しながら「なにをアホな……人が人を好きになるのに、なんで理屈がいりまっかいな」とそう言って笑いだすにちがいない。いや、事実、五味君の率直な好意の表現には、さながら男女間のやむにやまれぬ求愛の言葉を彷彿させるものがあった、といっても過言ではない。まただからこそ、私はそのたびに激しく震撼されて、自分の卑小な性向を嘆かずにはいられなかったのである。

ただ、五味君のそういう一途な志向は、それがほとんど無私に近い信実によって増幅されていただけに、その対象や世間に不本意な反応を惹きおこすことが少なくなかった。げんに、S社の菅原国隆さんの話によれば、五味君はある日、愛車で小林秀雄氏を自宅から鎌倉へ送っていく途中、スピード違反で警官から停車を命じられると、激昂して車から飛びだし、やにわにその胸倉を摑んで揉みあいはじめた。そのはずみで、警官の上着のボタンが全部ちぎれてしまい、

「おかげで、交通違反だけでは済まなくなりましてねえ。大変だったんですよ」

という。五味君はまた、保田さんが胃を病んで苦しんでいた頃、その特効薬だと称して保田さんが思わずぎょっとせずにはいられなかったほど大きなナメクジを届けている。檀さんが『火宅の人』のいわゆる「矢島恵子」と目白のおんぼろアパートに同棲していた時にも、二人を眼の前において、

「この際、奥さんともこのひととも別れはるんですな」

と直言したことがある。いずれの場合も、敬愛惜くあたわざる師や先輩を思うあまりの妄動にほかならないが、そんな哀切な動機は、檀さんや保田さんや小林さんには通じても、計量や効率を基準とする市民社会に容認されるはずがない。ところが、やんちゃな幼童のような五味君の初心は、こういう場合にも施すに俗な道を知らないのである。即ち、これが五味君のいわゆる傍若

無人な言行の本質であり、それゆえ五味君が「良識的な市民」の側から受けねばならなかった誤解の数々は、そのほとんど無私に近い真情に由来する妄動の結果ではあっても、その逆ではない。

もっとも、五味君の「内なる詩人」と現実とのこういう甚だしい乖離がなかったら、われわれはおそらく、戦後の一時期を画したあのめざましい新風に接することができなかったであろう。なぜなら、五味君は好むと好まざるとにかかわらず、むしろその異常な才能に強いられて、ほかならぬ自分と現実との甚だしい乖離を柔軟屈撓なイロニーに昇華するという、不退転の道を選ばざるをえなかったからである。

そういえば、芥川賞受賞の出世作『喪神』のなかに、次のような記述がある。多武峯山中に隠棲する夢想剣の開祖瀬名波幻雲斎が、自分を親の仇とねらう若者稲葉哲郎太にその奥儀を伝授する場面である。「夢想剣を修めるには、世の修業の考えを先ず捨てねばならぬ……肝要なのは、人間本然の性に戻ることである。即ち、食する時は美味を欲し、不快あらば露わに眉を寄せ、時に淫美し、斯くの如く、凡そ本能の赴くところを歪めてはならぬ。世に邪念というものはない」

ここには芭蕉の「夏炉冬扇」や本居宣長の人性論、あるいは明恵上人の次のような「遺訓」と響きあうような究竟の意想が披瀝されている、と言ってもいい。「我れ常に志ある人に対していふ。仏になりても何かせん。道を成じても何かせん。一切求め心を捨てはてて、徒者に成り還りて、ともかくも私にあてがふことなくして、飢ゑ来たれば食し、寒来たれば被るばかりにて、一生はて給はば、大地を打ちはづすとも、道を打ちはづすことは有るまじき」

それかあらぬか、こういう究竟の意想はひとり『喪神』という、近代小説の意識を以てしては容易に分析しがたいこの混沌たる小宇宙を貫く主題であるだけではない。その実、「秋山の樹の下がくりゆく水」のように、五味君の厖大な全作品を貫き流れているこのひと筋の主題でもある

のである。

したがって、五味君の剣豪小説の主人公は、在来の時代小説における意味での求道的な剣豪や忍者ではない。その実、前近代における苛烈な暴力装置の坩堝にほうりこまれた生粋の詩人なのである。いや、生粋の詩人というよりは、すでに武道や忍法や歌道や宗教などという特殊な範疇から超出した「徒者」にほかならないが、戦後、はたして五味君以外の誰が、こういう人性の自然とデモーニッシュな空観を骨格とした大衆的な作品を生みだしえたか。私は寡聞にして、わずかに檀さんの「石川五右衛門」に代表される一連の戦国物を想起しうるにすぎない。

これを要するに、五味君の発想の発端には、必ず無垢で無稽ではあるが、それだけに傷つきやすく移ろいやすい赤裸の生命がいきづいている。しかも、その赤裸の生命を取り巻く闇は深く、形骸化した規範や制度としての現実との乖離は甚だしい。

しかし、終生夫婦間の息づまるような葛藤を剔抉して倦むことのなかったあの北欧の哲人ストリンドベルヒでさえ「ひとがその実存の孤独な真相に徹すれば、空気も芽を吹く」と喝破しているではないか。まして、勝者も敗者も共に須臾にして滅びるというこの生命の決戦の「必敗の戦士」として戦うことほどめざましい生甲斐がいったいどこにあろう。

すると「よどみにうかぶうたかた」のように、この型破りの快作『真田残党奔る』の随所に活写されているような奇想天外な光景が——人性の自然に即して巨大な虚無に立ち向う果敢な徒者たちの姿が、ひょっこり作者の頭に浮かんでくる。あとには、机に向ってその発端の生命と「必敗の戦士」としての主人公たちとの間の乖離を埋めるという気の遠くなるような作業が残っているだけであるが、この場合は実生活の場合とは違って、両者の間の乖離は甚だしければ甚だしいほどよい。それは馬琴的というよりは西鶴的な感性によって——つまりは「わやく」や「てんご

う」精神によって培われた作者の豊饒な才能にとって、よりいっそう斬新な創意をこらし、よりいっそう奇抜な工夫を生みだすための、もっとも効果的な弾機の役割をはたすにすぎないからである。

（作家）

初出　「報知新聞」昭和49年7月25日～50年1月31日
原題「太陽の使者」

文春文庫

335—4

真田残党奔る

定価はカバーに表示してあります

1987年9月10日　第1刷

著者　五味康祐
発行者　西永達夫
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL　03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-733504-2

文春文庫　最新刊

寝台急行「銀河」殺人事件　西村京太郎
今度は誰か？　乗り合わせた客が次々と狙われる。容疑者は十津川警部の同級生（解説・新保博久）

こちら殺人現場ですが　山村美紗
編集者・由紀子の愛する作家が殺された。犯人はきっと彼女の知人の中にいる！（解説・郷原宏）

旅芝居殺人事件　皆川博子
奈落の壁に塗り込められた死んだ役者の憎悪と悲哀。日本推理作家協会賞受賞作（解説・井上ひさし）

真田残党奔る　五味康祐
突然現れた真田十勇士の残党。剣豪、忍者、幕閣の要人らが織り成す非情の謀略（解説・真鍋呉夫）

骨よ笑え　有明夏夫
明治初年、おかしな男どもが骨を相手に悪戦苦闘の末、墓場を繁華街に…。ユーモア巨篇

女の幕ノ内弁当　田辺聖子
いま、最もウケているエッセイ。浮世のさまざまな味つけをどうぞご味読下さい（解説・辻和子）

ショージ君の南国たまご騒動　東海林さだお
こんどはフィジー、沖縄と南の方角を回ってみました。ヤシの木陰で昼寝してみませんか。

不思議の国のエリコ　楠田枝里子
神話や文学、歴史のエピソードを集めたファンタスティックなサイエンストーク（解説・柳瀬尚紀）

歴史のなかの愛　―万葉・戦国の女たち　田中澄江
額田王、持統天皇、淀君、細川ガラシア夫人など…いのちの焔を激しく燃やした女人たち

がん病棟の隣人　中島みち
死の淵に臨んだ人間の刻々の心の動きを追ったノンフィクション・ノベルの力作（解説・柳田邦男）

レッド・ストーム作戦発動（ライジング）　上・下　T・クランシー　井坂清訳
石油危機に見舞われたソ連の第三次大戦も辞さぬ先制攻撃に、西側はいかに対応するか？

決定版　**沖縄の誘惑**　文藝春秋編
独特の文化に裏打ちされたオキナワの素顔とその心、魅力を紹介する徹底ガイドの決定版